

STUDIA TIBETICA No.43

西藏仏教宗義研究

第八卷

——トウカン『一切宗義』序章「インドの思想と仏教」——

༄༅། །ཐུང་བཀའ་གྲུབ་མཐའ་རྒྱ་གར་གྱི་སྐབས། །

川崎信定 著
吉水千鶴子

財団法人 東洋文庫

2007

STUDIA TIBETICA No.43

**A STUDY OF THE GRUB MTHA' OF
TIBETAN BUDDHISM**

VOLUME 8

**The Chapter on the Philosophical Systems and Buddhism
in India (rGya gar)
of Thu'u bkwan's *Grub mtha' shel gyi me long***

**Shinjo Kawasaki
Chizuko Yoshimizu**

**The Toyo Bunko
Tokyo 2007**

まえがき

本研究出版は、昭和36(1961)年以来、東洋文庫において行われてきた「チベット人との協同によるチベットの言語・宗教・社会の総合的研究」の成果の一部である。

トゥカン(Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma 土観)『一切宗義』はインド・中国・チベットにおける仏教諸派の歴史と教理をまとめたものであるが、このように広範囲な領域にまたがって歴史と教理を簡潔・的確に概説した著作は、膨大な量が存するチベットの典籍の中でも数少なく、それだけに価値あるものである。

本書は、このトゥカン『一切宗義』の中で、今日まで成果刊行がなされていなかった序章「インド思想と仏教——その教理と教派——」篇に関する論説・和訳・訳註・原典対照校訂テキスト・チベット語彙索引・文献一覧からなる。この序章研究のこれまでの経緯については、「あとがき」に記した。

先行する本研究の諸巻では、ゴンルン寺版の影印テキストを付すことが多かったが、本書では、東洋文庫チベット研究員ガワン・ウースン(Ngag dbang 'od srungs)氏が作成したゴンルン寺版・シヨル寺版・デルゲ(ウラガ)寺版の3版対照校訂ローマ字テキストを底本として依用し、和訳・各版ページ対照表と合わせて、序章のローマ字テキストを添付した。また、この際に、前東洋文庫研究員ゲシェー・テンパゲルツェン(Rev. bsTan pa rgyal mtshan)師が作成した章節番号[1]~[61]および科段タイトルを挿入して、研究者が検索する際の利便を図った。

ガワン研究員作成のテキストを基盤にして川崎が論説と和訳を担当し、第1節に関しては川崎、第2節に関しては吉水がそれぞれが専門とする領域から訳註を主として執筆し、その他の担当者の場合は訳註末尾に執筆者名を略記した。語彙索引作成にはガワン研究員の指導のもとに、早稲田大学院大学院在学の飛田康裕・三代舞の両名が協力し、文献表作成および一連の校正作業も担当した。

はなはだ拙い作業成果の結実ではあるが、協力の諸兄姉の誠意ある尽力に対しては、ここに記して心から感謝の意を表したい。

平成19年3月

川崎 信定

吉水 千鶴子

目 次

まえがき

目 次 i

凡 例 ii

第1部：論説 トウカン：『一切宗義』序章の内容と

その研究意義 1

第2部：和訳および訳註 トウカン『一切宗義』序章

「インドの思想と仏教」

章節・科段目次 22

和 訳 28

訳 註 69

第3部：チベット語原典対照校訂テキスト

トウカン『一切宗義』序章 115

使用に際しての注意事項 116

チベット語原典3版ページ対照表 117

チベット語原典3版対照校訂テキスト 121

チベット語彙索引 169

文献一覧（略語表を含む） 184

あとがき 201

凡 例

- [Z] = TGS-Z: ショル Zhol 寺版、ガワン・ゲレ刊行本: *Thu'u bkwan grub mtha', Zhol ed. in Collected Works of Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma*(CWT), Edited and Reprinted by Ngawang Gelek Demo, (Geden sungrab minyam Series 2, (Delhi, 1969), (IASWR. No.R-1224).
- [G] = TGS-G: 東大所蔵本 (ゴンルン寺版): *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad zhel gyi me long, dGong klung ed.*, Tokyo Univ., No.107.
- [D] = TGS-D: ウラガ・デルゲ寺版: *Thu'u bkwan grub mtha'*, sDe-dge ed. (甘肅民族出版社, 1984).
- [1] ~ [61] テンパギェルツェン師 (前東洋文庫研究協力員) が、[D] (ウラガ・デルゲ寺) 版 (甘肅民族出版社刊本) にもとづいて付した章節通し番号。巻末の語彙索引においても、[1] ~ [61] を採録して記載した。
- 章節・科段内容 ボールド・ローマ字体の章節番号と内容 (例: [1] **mchod brjod dang rtsom par dam bca' ba /** など) は、テンパ師が [D] 版 (甘肅民族出版社刊本) の編集者記載を参考に作成したものである。各章節・科段の下に記載した [Z7(2a1)] などは、写本3版において対応する箇所のある最初の葉数と行数を記したものである。
- 原典照合 チベット語原典3版および章節・科段番号との照合は、以下に掲載の「各版ページ対照表 Concordance of the Three Tibetan Texts」を参照されたい。この際に、初めの [Z7] は、ガワン・ゲレ氏刊行本の葉の欄外左側に記された洋式ページ・ナンバーを示し、[Z7(2a1)] は、Zhol 寺版の版枠内左隅に記されたチベット字による葉数と、表 a・裏 b の別、および行数を示す。

(なお、この他、略号の詳細に関しては、巻末文献一覧の一次文献の欄を参照のこと)

第 1 部

論 説

トゥカン：『一切宗義』序章の内容と
その研究意義

論 説

トゥカン：『一切宗義・善説水晶鏡』序章の内容とその研究意義

本書 *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long* は、17世紀後半に活躍したチベット仏教のゲルク派学僧トゥカン・ロサンチューキニーマ *Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma*、土観（1737-1802）の著作であって、インド・チベット・中国に展開した諸種の哲学・宗教・文化思想（ヒンドゥー教・ボン教・道教・儒教を含む）の歴史・教理と学派・宗派を、仏教を核として、概観したものである。

東洋文庫チベット研究委員会では、本書のチベット仏教を論ずる部分の研究を1961年から多年にわたって継続し、これまでに『西藏仏教宗義研究』として（本書の章立て順に記すならば）、ニンマ派（平松敏雄担当，1982）、カギユ派（立川武蔵担当，1987）、シチュエ派（西岡祖秀担当，1978）、サキャ派（立川武蔵担当，1974）、チョナン派（谷口富士夫担当，1993）、ゲルク派（立川武蔵・福田洋一・石濱裕美子担当，1995）、これに加えて同書モンゴル仏教の章（福田洋一・石濱裕美子担当，1986）の和訳・注解・原典テキストの研究と成果刊行を行ってきた。トゥカンの本書テキストの全体構成については、既に先行の研究において繰り返し提示されている（Gene Smith 1969, pp.2-3; 立川 1974, pp.156; 西岡 1978, p.1; 平松 1982, p.124; 福田 1995, pp.9-10.）ので、ここでは記さない。

今回、刊行する研究は、本書の序章に相当する先頭の部分で「インド哲学諸派と仏教の思想・歴史」と題せられる箇所に関するものである。

トゥカンは、この序章第1節において先ず、インドにおけるバラモン（婆羅門）とリシ（聖仙）の起源から書き起こし、以後にサーンキヤ学派をはじめに、ヴァイシェーシカ学派・ニヤーヤ学派・ヴェーダーンタ学派・ミーマーンサー学派、さらにはローカーヤタ（唯物論）、ジャイナ教と、仏教以外の諸教の成立経緯・教義を論じた上で、第2節において、仏教思想を声聞乗の毘婆沙師・経量部、大乘仏教の唯識瑜伽行派・中観自立論証派・帰謬論証派の展開に辿り、さらに詳細な内部分派について言及する。チベット仏教ゲルク派に属した学僧トゥカンにとっては、宗祖ツォンカパの教義を頂点に据えて、ツォンカパの示した価値基準に従うのが当然の前提とされている。これに則ってインドの地に存在した宗派・教派の宗義・教説の解説、そしてこれらに対する批判と意義付けが明解・簡潔に進められている。後述するように、インド思想に関して、トゥカンが彼の時代のチベットにおいて入手可能な最高の知識・文献情報を縦横に駆使して展開する論述は、その誤解と限界をも含めて、東洋思想史の貴重な資料を提供するものとなっている。

ここでは、本書が、西欧においても、東洋思想史研究において関心と呼んできた状況を跡づけて、その理由と本書の意義、そして特に序章「インド思想と仏教」の占める地位について考えてみたい。（以下、敬称記載省略）

Gene Smith による『一切宗義・善説水晶鏡』の紹介・評価

今を遡る丁度 40 年前に、*Thu'u bkwan* 全集 (Lhasa Zhol ed.1969, Delhi) が刊行された際に、Gene Smith がこれに付した Introduction to Vol.II (Kha) は、今日でもその活き活きとした貴重な情報と、文献を扱う際の広汎で正確な知識と慎重で的確な配慮への指針をわれわれに与えてくれている。スミスを引用しよう。

『一切宗義・善説水晶鏡』は、……トゥカンが学匠として送った長い生涯の最頂点を代表するものである。

この宗義書に注目した最初の人物は 1858 年にワシリエフであった。(V.P.Vasil'ev: "O nekotorykh knigakh, odnosyashchikhsya k istorii buddhizma, v biblioteke Kazanskovo universiteta," *Uchenye Zapiski Akademii Nauk*, 1855, v.III, pt.1). それからおよそ 30 年を経過してから、サラット・チャンドラ・ダースが本書の第 9・10・11・12 章と第 2 巻の一部を英訳した。(Sarat Chandra Das, *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 1881 & 1882).

ヘルムート・ホフマン教授は第 9 章の独訳を彼のボン教研究書に組み入れた。(Helmut Hoffman *Quellen zur Geschichte der tibetischen Bon-Religion*, Wiesbaden, 1950).

中国仏教に関する第 11 章は (部分的に) 呂澂によって編集された。(Lu Cheng: *Studia Serica*, Series B, No.I, (成都, 1942).

近年、ルエッグ教授がチヨナン派を扱った第 7 章の素晴らしい英訳を注記付きで出版している。(David S. Ruegg: *Journal of American Oriental Society*, Vol.83, pp.73-91).

本書全訳がローマの I.S.M.E.O. の研究者たちによって企画されてから長年月が既に経過している。この (原典) テキストは、永らくソヴィエトおよびローマのチベット研究者以外には入手は困難であった。1962 年になって Cho rjhe Lama がヴァラナシーで組み活字版で (本書テキストを) 刊行した。将来、複数の版本が入手されることがもっと容易になれば、批判校訂テキストと翻訳がやがては出現することが期待できるであろう。」

Gene Smith (p.1, footnote 1)

本全集の最終巻 (Tha) のカタログ (dkar chag) の記載によると、本全集の開板は、Rwa sgreng の要職にあった Thub bstan 'jam dpal ye shes rgyal mtshan (1912-47) および Glang mdun srid blon の Kun dga' dbang phyug の命によるものであった。この事実から (本全集版木の) 開板は西暦 1934-38 年であることが推定される。

Dr.Lokesh Chandra (*MHTL.*, Vol.I, p.52) は、dGong lung, Peking, Labrang,

Aga に *Thu'u bkwan* 全集の別の開板のあったと記している。また Vostrikov は、Urga の Dga' ldan 僧院の bKra shis chos gling grwa tshang に別の版の存在することを記している。これらの諸版の中の少なくとも一つの版は、十七巻立て (Ka 巻から Ma 巻までに補足 rtsis skor を含む) であり、それは (今回刊行の) ラサ版と比して小さく、異なった章立てであったと思われる。

Gene Smith (p.2, footnote 7)

この (チョジェ・ラマの) 刊本には、伝統的な経本スタイルと洋本スタイルとの、2つの異なった体裁のものが存するが、おそらく印刷の版下は同一であろう。

(*Grub mthaḥ thams chad kyi khuṅs daṅ ḥdod tshul ston pa*. Edited and printed by Chos je Lama, Sarnath, Vanarasi, 1963. (Cf. Tachikawa, 1987, p.216). のことであろう。) (川崎補記)

Gene Smith (p.2, footnote 8)

『水晶鏡』シヨル寺版は、これ以前 (に開板された) 版本ほどには信頼を置くことのできるものでは恐らくないであろう。上述の諸版本の情報に加えて、ヴォストリコフは『水晶鏡』デルゲ寺版本の葉数を ff.209 として挙げている。Lokesh Chandra (*MHTL.*, Vol. I, p.53) では、Stein を引用して、164 葉としている。

Gene Smith (p.2, footnote 9)

Lokesh Chandra は、Sarat Chandra が示した『水晶鏡』全 12 章の章立てが他と異なる理由について、Sarat Chandra がどれか 1 章を見落としたか、あるいはゲルクパ章を最終尾に置く異なった版本を依用したのではないかと示唆している。しかし、この (ゲルクパ章最終尾) 説の可能性は恐らくないであろう。それよりも、Sarat Chandra がインドを扱った最初の部分を欠いた版本を用いて作業を進めたのではないかとと思われる。この部分でジャムヤンシェパおよびチャンキヤロールペエドルジェの宗義書に存しない記述は存在しないからである。トゥカン全集 *Thu'u bkwang gsung 'bum* の版木が 1937 年頃に開刻される以前には、中央チベットにはこの宗義書の如何なる版も存在しなかった事実を記憶に留めておくべきである。

さらにスミスは、補説 (Appendix I, p.12) の中で、ロシアのチベット研究者ヴォストリコフが 1930 年代に行なったチベット歴史資料の科学的分類法の試みの斬新さに言及している。

A.I.Vostrikov (1904-37) : *Tibetskaia Istoriceskaia Literatura (Bibliotheca Buddhica, vol.XXXII, Moscow, 1962).*

そして「ヴォストリコフが、U.S.S.R. の図書館・博物館で入手できる、東チベットやモンゴルからの、主としてゲルクパ派関係の文献に依拠したという限界を考慮しても、彼の研究は今日まで長年月を経過してもなお権威ある業績である」と、口を極めて称賛する。

ヴォストリコフは、三十三歳の若さで他界している。碩学スチエルバトスコイ Shcherbatskoi の薫陶を受けて、ダルマキールティの思想研究を 1931 年に手掛け、その傍ら Shcherbatskoi, Ol'denburg, Obermiller, B. V. Semichov など、当時ロシアの名だたるインド思想研究者と協同して、『カウティリヤ実利論』の梵語からの翻訳と語彙集作成 (1933) を行なう、幅の広い学問姿勢を身につけている。続いて 1934 年には「ヴァスバンドウ (世親) の論理思想書」、1935 年には「ウディヨータカラの『ニヤーヤ・ヴァールティカ』とダルマキールティ (法称) の『ヴァーダ・ニヤーヤ』」を *Indian Historical Quarterly* に発表し、同時に、密教のカーラチャクラ (時輪) のミナイエフ将来写本研究も続けている。このようにインド思想全般に文献研究を展開した一方で、ヴォストリコフがもっとも心血を注いだのが、チベット歴史文献資料のビブリオグラフィー作成作業であった (1934-36)。1937 年にロシアで刊行され、1958 年に英訳され、カルカッタで出版されたヴォストリコフの研究における金字塔とも言うべき *Tibetan Historical Literature* の巻末にはチベット暦六拾年干支による年号と西暦との対応表が添付されている。チベット暦と中国暦とのズレについては山口瑞鳳の研究 (1973)、さらにはコンピュータを駆使した Dieter Schuh の研究 (1973) によって最近のチベット暦法研究が格段の進展を示していることは言をまたないが、ヴォストリコフの研究眼の確かさを例証するものであろう。その彼が、トゥカンをどのように読んでいたのであろうか。

ヴォストリコフの『善説水晶鏡』紹介と評価

以下にヴォストリコフ Vostrikov の Thu'u bkwan に関する評価を彼の著書の英訳 Harish Chandra Gupta tr.: *Tibetan Historical Literature, Indian Studies Past and Present, Soviet Indology Series, No.4, (Calcutta, 1970), p.154* より引用する。

チベット歴史に関する分析的書物の中でも、特別な位置を占めるものが、*Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long* (略称 *Grub mtha' shel gyi me long*) であり、これはインド・チベットを含む中国・他の国々における種々の哲学・宗教の諸教理の起源と歴史、および、それらの教理の主な主張内容を物語るものである。この分野における特異な著作でもある本書の著者は、Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma (1737-1802) である。彼は Amdo 地方のゴンルン僧院 dGon lung (dGon lung byams pa gling) の活仏で僧院長であった。本「宗義書」は、彼六十五歳の年始めに完成された。そし

て、彼は死を迎える僅か二日前まで本書に修正の筆を加えた。その死はモンゴル暦第八周目の壬戌（1802）年の六月十日のことであった。

（Vostrikov, p.154, 注記 449）

Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma の詳細な伝記は、*Rigs dang dkyil 'khor rgya mtsho'i mnga' bdag rje btsun blo bzang chos kyi nyi ma'i gsung gsum rmad du byung ba'i rtags brjod padma dkar po* に存在する。同伝記は、1815年にラタン Blabrang 出身の僧侶 Gung thang dKon mchog bstan pa'i sgron me (1762-1823) によって著述されている。この伝記は、グンタン僧院から刊行された『トゥカン全書』に2巻本として付せられている。Vol.xv (ba), 400 fols; & Vol.xvi (ma), 350 fols.

この他にも、彼の伝記は、ラタンから刊行された伝記編者であるコンチョクテンベエゴンメエ自身の全書にも2巻本で納められている。Vol.vi (cha), 351 fols.; & vol.vii (ja), 315 fols. また、トゥカンの伝記資料は、*Deb ther rgya mtsho* (vol.i, fols.77a1~78a3) にも散見される。

……以下 略（12章別内容の説明）……

（Vostrikov, p.155）

『善説水晶鏡』は、チベットおよび周辺諸国の歴史に留まらず、哲学・宗教の種々なる潮流を扱った、チベット文献の中での最初の試みであるとして、高い評価を受け、またそれだけに値するものであった。3種の木版刊行がなされている。

もっとも早期の版本は、ゴンルン僧院から刊行され、ここで『トゥカン全書』の版木が揃えられている。この（ゴンルン寺）版では、この『善説水晶鏡』は12部に分冊されており、各章が1冊ずつに、そしてそれぞれ葉の番号が新しく始められている。

（Vostrikov, p.155 注記 451）

（ゴンルン寺版では）、本書は16巻からなる『トゥカン全書』の第4巻 (nga) に収められており、レニングラード州立大学図書館に同全書のコピー1部 (xyl.Q344) が収蔵されている。ゴンルン寺では、『善説水晶鏡』は単独の別刷りもなされた。

（Vostrikov, p.156）

第二の版本は、209葉の1巻本で、デルゲ僧院から刊行されている。

第三の版本は、——第一の版本に似たもので——ウラガ（現在のモンゴル・ウランバートル）のガンデン僧院の bKra shis chos 'phel datsan で完成された。

既に B.Ya.Vladimirtsov (1926) によって報告されているように、本書のモンゴル仏教に関する部分は、モンゴル語に翻訳されて、別の版木で刊行がなされている。

西欧における学術研究においては、ワシリエフ (V.P.Vasil'v: "O nekotorykh krigakh,...") (On Some Books Relating to the History of Buddhism in the Library of the University of Kazan), —*Uchenye Zapiski Akademii nauk*, (1855), vol.iii, No.1, p.7) が、『善説水晶鏡』に注目した最初であった。彼が『ターラナータ・インド仏教史』の翻訳に際して付した序論で、ターラナータについての彼の記した記事は、すべて『善説水晶鏡』(第7章・第12章)から採ったものであった。

次に、サラット・チャンドラ・ダース (S.C.Das: "Contributions on the Religion, History etc. of Tibet", *Journal of Asiatic Society of Bengal*, (Calcutta, 1881), pp.187-205; (1882), pp.58-73; pp.87-114.) が、ワシリエフとは別個に、英訳を付して第9章のボン教歴史と第12章のモンゴル仏教に関する部分を出版している。……(以下、ダースの翻訳の章名の1章分のズレがあることについて詳説が続く。この章のズレの問題は上述の Gene Smith の指摘した点でもあった。川崎補記) ……

〈宗義書〉というジャンル

上述するところで既に、「宗義」あるいは「宗義書」の語が繰り返し使用されてきたが、この語の意味内容の確認をしておきたい。

「宗義」と漢訳されてきたチベット語の *grub mtha'* は、*grub pa* 〈論証され、成立し、確定された = Skt. *siddha*〉に対応する語と、これに *mtha'* 〈終局、極限、終点、結論 = Skt. *anta*〉を付した2語から構成された合成語で、サンスクリット語で、*siddhānta* に相当する。意味するところは、「思想」・「教理」・「教え」・「定説」・「宗派教理」・「思想文献」・「学説綱要」・「学派」・「教派」・「宗派」と、実に多義であって、文脈によりこのいずれかを取捨しなければ、内容との齟齬が生じかねない。

さらにまた、以上の「教理」・「学説」に関して論じた「書籍」・「文献」・「卷子本」という意味で、〈*grub mtha'*〉と称せられる一連の文献を総括する分類名称としてチベットで一般に使用されており、特にチベット僧院内では僧侶が研修する学習カリキュラム上の1項目・1科目名、または教科書名をも意味している。このジャンルに属する文献に対して、近年において漢字を用いて「宗義書」と命名されてきたが、元来この呼称は古い漢訳経論には存在せず、劉宋の求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』では「宗通」(大正16巻503a)、唐代の実叉難陀訳『大乘入楞伽經』では「宗趣」(大正16巻609a)と翻ぜられており、「宗義」も文献的・歴史的に遡りうる一般的漢訳名称ではない。

日本仏教においては、眞言宗高野山の宥快（1345-1416）が、根来の頼瑜の新義唱導に對抗して、『釋摩訶衍論』および『大日經』住心品の教相解釈に関連して著した、『宗義決擇集』二十二巻があり、この他に〈宗義〉を冠した書名は小品数点が知られているに留まる。

因みに、橋本光寶は『ジクメナムカ・蒙古喇嘛教史』（1940）で「悉地究竟」（p.352）、『蒙古の喇嘛教』（1942）では「ドムター・成就究竟」（p.235）と翻訳している。ただし、橋本は「宗義」の語も、「学説」の語に混じて、三度ほど（p.47, p.59, p.63）使用している。長尾雅人は『蒙古學問寺』（1947）で「成究竟」（p.82）と翻訳している。同じく長尾雅人著の『西藏佛教研究』（1954）は、我が国におけるツォンカパ（宗喀巴）『ラムリム（菩提道次第論）』の本格的研究の嚆矢であると同時に金字塔とも言うべき労作であるが、その巻末索引に従って検索すると、siddhānta 対応の訳語として「成究竟」（p.169; p.177）・「成究竟 = 学説」（p.156; p.165; p.174; p.286）・「成究竟 = 学理」（p.158; p.175）・「成究竟 = 理論」（p.281）・「学解」（p.117; p.124）、また siddhānta-vādin の対応の訳語としては「学者」（p.159）・「極成論者」（p.219）・「成究竟論者」（p.195）・「成究竟（=学理）を語る者」（p.273）と、実に多様に翻訳がなされており、一方、「宗義学」（p.24; p.34）の語が『ラムリム』研究において綜合統一されるチベット仏教に特有の「教義学」を指す呼称として長尾により使用されている。以上は、「siddhānta = grub mtha' = 宗義」の訳語決定の流動的経緯と流れを示す苦心の作業事例として、失礼を顧みず、掲げさせていただくこととした。

本翻訳作業においても、grub mtha' に対して、teachings, doctrines, systems, doxographies, traditions, schools, master-disciple-lineages の多様な意味における使用を行ない、しかも、それがいずれの領域と主として関連するかで、哲学的 philosophical、文化的 cultural、宗教的 religious、他の複数の使い分けを余儀なくされた。ただし、この事実は、マイナス要因ということとはできない。むしろ、チベットに存在する、これら一連文献の特異性・特別の価値を浮き彫りにする問題意識として、その重要性を絶えず研究者の脳裏に刻みつけながら明確化への作業を進めることが肝要といえよう。

インドにおけるシッターンタと〈世界観〉学

サンスクリット語において、siddhānta とは、仏教を含めての論理学における術語としては、主張（*宗）・理由（*因）・実例（*喩）・適用（*合）・結論（*結 siddhānta）の五分作法における〈結論〉を意味するし、また、古くは医学書『チャラカ・サンヒター *Caraka-saṃhitā*』（「(8) 宗」・「(16) 定説」）や、論理書『正理経 *Nyāya-sūtra*』（1.1.28~31）には、学者・学派間に或る特定の学説に関する認証・否認の論証手続きを巡っての議論の存したことが伝えられている。パーニニ文法への注釈書として *Siddhānta-kaumudī*, *Laghū-siddhāntakaumudī* はインド研究者には語学分野で馴染みの深い書名である。さらに、こ

れもまたインド研究者には大きな関連のある必携文書として、1930年代にアメリカ合衆国所在の図書館が所有するインド関係の印刷刊行された文献の目録で M.B. Emeneau が編纂した『ユニオン・リスト A Union List of Printed Indic Texts and Translations in American Libraries, (American Oriental Society, 1935)』には、Siddhānta- で頭書される書名だけでも 22 件の多くを挙げている。Siddhāntacandrikā; Siddhāntatattvaviveka; Siddhāntadarśana; Siddhāntadarpaṇa; Siddhāntabindunīyāratnāvalī; Siddhāntamuktāvalī; Siddhāntaleśasamgraha; Siddhāntaśiromani; Siddhāntasāra; etc.etc... その内容は哲学・宗教のみならず、法律・数学・医学・天文学の多岐にわたっている。また、以上は頭書されるものの例だけに限られるので、シャンカラに帰せられている『全定説綱要 Sarvasiddhāntasamgraha』などは当然含まれておらず、またその後、近年に至るインドにおける活発な出版刊行の状況においては、例えば Sarvasiddhāntapraveśaka (Muni Jambuvijayaji ed., Bombay, 1964) なども付加されることとなる。こうした書名までも蒐集すれば、〈シッダーンタ〉の名を冠する書名の数は膨大なものとなるであろうことは容易に想像できる。さらにインドでは、これから述べるマダーヴァ (Mādhava) の著書で知られるように、上述の学問領域に関連する文献は〈シッダーンタ〉よりも〈ダルシャナ (darśana= 見, Itā ba)〉と称せられることの方が一般的であったということが出来る。

そして、これらの書名は、哲学学派の系統を辿るならばヴェーダーンタ哲学のアドヴァイタ (Advaita 不二一元論) 派に属するものが圧倒的に多数であり、宗教宗派的にはジャイナ教の著作に多く見られる命名である。

ジャイナ教の祖師ニガンタ (Nigaṇṭha) が、ものごとの判断において絶対的・一方的になることを排除しようと努めて、「ものごとの観察の仕方 (ナヤ naya)」に基づく相対的判断・相対的価値観を「スヤード・ヴァーダ (syād-vāda 不定主義・相対主義)」として提唱したことは良く知られている。

またアドヴァイタに関しては、今を遡ること六十年前の昭和 22 (1947) 年『哲学雑誌』で、「異なった哲学的世界観の対立と宥和」を論じた中村元は、資料として 15 世紀インドの不二一元論派マダーヴァの著『全哲学綱要 Sarvadarśanasamgraha (=SDS)』に主として依拠しながら、さらにシャンカラ (Śaṅkara, 8 世紀前半)、ヴァーチャスパティミシュラ (Vācaspatimiśra, 841 年頃)、マドウスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana-Sarasvatī, 15 世紀後半)、サダーナンダ (Sadānanda, 15 世紀)、ジャイナ教のハリバドラ (Haribhadra, 9 世紀)、ラージャシェーカラ (Rājaśekhara, 14 世紀) たちが著した諸々の哲学体系を通観する綱要書の特異性・意義について論じている。彼ら不二一元論派は、諸々の学説・学派の対立を容認する。そしてこれら相対立する哲学体系を冷静に客観的に研究した。一切の学説をそれぞれの学派の典籍に基づいて、公平に客観的に論述し、それらを「偏執を遥かに除去した心をもって聞け」と教え、そのようになした時、「美しい花をもって造られた華鬘は、何に人に喜びとならないことがあろうか？」(SDS 序文) と説いた。中村は指摘する。

「ヴェーダーンタ哲学においては、哲学乃至歴史的生成の観念が無い。ヴェーダーンタ哲学は、諸哲学体系の歴史的変遷を捨象して、ただ種々の哲学の類型の対立のみに注意したのである。そうして、この類型なるものは、歴史性を捨象したものである。近代西洋における世界観学なるものは、深い歴史性の意識に基づき、歴史的発展ないし歴史的変遷に留意しつつ構成されている。ところがインドの哲学ないし世界観学は各哲学体系の歴史性を捨象して、それぞれ一定の哲学的類型のもとに要約し叙述する。従って、西洋の哲学者が、諸哲学思想の歴史的継起ないし発展に哲学的意義を看取したのに対して、インドの哲学者は、種々なる哲学的類型の空間的併在（あるいは同時的対立）の事実の認識に一つの哲学を認めたのである。」中村元：『インド思想の諸問題』（春秋社、1967）、p.254。収録。（初出『哲学雑誌』第62巻第698号、1947）

そして中村は、自身で近年刊行したマードヴァ『全哲学綱要』の翻訳『インドの哲学体系Ⅰ』（春秋社、1994）の序（p.4）において「昭和十一年四月から昭和十四年三月にかけて、宇井伯寿先生が東京帝國大学印度哲学研究室において、有志の研究者たちのために、非公式に演習を開かれて、みなでこの書的全篇を読了した。」と記す。

確かに、中村元の恩師・宇井伯寿は、彼の良きライバル木村泰賢と競って、我が国の学界に先駆けてインドの「六派哲学」の考究に努め、我が国では井上哲次郎の唱導と同時に、当時の西欧学界における Moritz Winternitz, Paul Deussen 他の影響下に早くから「勝論正理両学派と吠陀並びに声常住論との関係」（1924）・「六十二見論」（1912）・「種々なる道（Madhusūdana-Sarasvatī: *Prasthānabheda* 翻訳並びに訳注）」（1927）・「真理の宝環（Advayavajra: *Tattvaratnāvalī* の翻訳ならびに訳注）」（1953）などによって、いわゆる「ダルシャナ」あるいは「シッダーンタ」の語によって表現されるインド思想界における世界観・学説・定説・学派の特質の分析・考究に早くから関心を寄せている。

中村元は、また〈学派〉という呼称のインド思想に関しての使用には早くから次のような留保と注意を喚起している。

「インドでは古代から〈なになに学派〉〈なになに派〉という表現がない。"-school" という表現もない。インド哲学史を書いた西洋人または日本人の書にそのような表現がしばしば用いられているが、それは西洋的思惟または日本的思惟をインドにもちこんだものにすぎない。具体的にいうと、シャンカラを代表とする不二一元論派とは、Advaitin あるいは Advaitavādin の複数形をもって表現する。つまり〈不二一元の哲学説をいだく人々〉ということである。単位は個人なのである。Advaita あるいは Advaitavāda という表現はあるが、それはどこまでも抽象的なある特定の理論のことであり、その社会性・集団性は捨象して考えられている。」『インド人の思惟方法』（p.87）

チベット語の *grub mtha'* に対応するサンスクリット語の〈シッダーンタ〉あるいは〈ダルシャナ〉を考察する際に注意すべきコメントであろう。

シャンカラの不二一元論派の思想は前田專學の和訳『ウパデーシャ・サーハスリー Upadeśa-sāhasrī — 真実の自己の探求』(岩波文庫、1988)によって、これを把握することができる。さらに丸井浩は、近年インドの〈六派哲学〉の〈六〉の数が〈一切を包含する〉とする世界観について注目すべき発表を続行している。丸井は、不二一元論派に特徴的な思想として、階層的存在観と段階的真理観があることを指摘し、これによって、日常世界に通用する真理(主観客観の区別、苦楽の経験、因果関係など)は究極的真理の立場においては否定されるが、なんらかの意味で究極的真理へと導く媒介的な機能があると意味づけられていると彼らの立場を解説する。丸井が啓発された論文として Wilhelm Halbfass の研究がある。Halbfass は、〈インド思想における宗義〉を the Sanskrit Doxographies として示しながら、そこにみられる特色を "samanvaya (harmonizing, 会通)" と "adhikāra-bheda (differentiation of qualification, 局所対応)" の二語で捉えて、仏教の〈空〉と〈善巧方便〉にも言及しながら、論じている。

辛嶋静志からは、ダルシヤナ研究グループの活動について最新の情報が寄せられた (<http://www.darsana.org/experts.html/>)。これにより Karl Potter, Johannes Bronkhorst ほか多数のインド思想研究者の最近の活発な研究状況に接することができる。

インドにおける 8～14 世紀にかけて発達した〈シッダーンタ〉あるいは〈ダルシヤナ〉研究なり、それらの特定の論書から、チベット仏教における〈宗義 grub mtha', lta ba〉が直接の影響を受けたとするのは早計であろう。しかし、以下のような顕著な類似点があることは明らかである。

- 1) シッダーンタの数を数え上げる場合の 6・8・16 などの数の取り上げ方
- 2) 学説を取り上げる際に、ローカーヤタ (チャールヴァーカ) 派を最下位に定めて、それ以上に展開する配置図
- 3) その際の判断の基準尺度を何とするか、「輪廻」・「我」・「解脱」・「道果」
- 4) 仏教学説を毘婆沙師・経量部・唯識派・中観派の 4 部とする
- 5) 論書の題名が「寶 ratna」・「寶鬘 ratnāvalī」・「鏡 darpana」・「月光・睡蓮 kaumudī」・「髮飾 śiro 'laṃkāra」・「掌華 kusumāñjalī」・「如意樹 kalpataru」などと類似

以上は、チベット宗義思想を検討する際にも、貴重なパラレルを提供しており、今後 to 個々の文献を取り上げての精査がさらに求められる。

中国・日本仏教の〈教相判釈〉とチベット宗義

インドにおいて歴史的に展開され、発達した仏教思想の経論が、羅什・法顯・玄奘・義浄などの渡天竺僧によって中国本土に夥しい数で持ち帰られ、わずかの期間中に大量に漢訳されるといふ状況が存在した。こうした中で、中国仏教者にとっては、これらの経論を

それぞれ自らの価値基準に則って配列・体系化して示し、自らの立場を明確に提示した上で、その選択の理由付けを自他に対して宣説することが必須要件であった。こうして西暦5世紀から8世紀にかけての「南三・北七」と総称される多数の教相判釈が成立した。中国仏教の本質が教判にあるとされ、宗派が必然的に発生するとされた原因となっている。

教判には、釈尊一代の説法の時期や方式の違いに基づく三時・三法輪・五時の教判や、教相の違いに基づく三種教相や四宗判、聴衆の機根に対応させる四教、などなどがあり、中でも広く行なわれたものに天台宗智顛（538-597）の五時八教、慈恩大師基の三教八宗がある。そして中国仏教における教判の到達点として、華嚴宗法藏（643-712）は、従来の十家の教判を挙げて、これらを批判した上で自ら五教十宗の教判を提示する。五教とは、小乗教・大乘始教・大乘終教・頓教・円教であり、十宗とは、我法俱有宗・法有無我宗・法無去來宗・現通仮実宗・俗妄真実宗・諸法但名宗・一切皆空宗・真徳不空宗・相想俱絶宗・円明具徳宗である。

我が国では、眞言宗の空海（774-835）の『秘密曼荼羅十住心論』（824-834）における第一の異生羝羊心から第十秘密莊嚴住心までの教判や、上述したインドのマードヴァとほぼ同時代に生きた華嚴宗の凝然（1240-1321）の『八宗綱要』が知られる。これらはいずれも自らが立脚する教派・教理を（これが即ち〈宗義〉であるが、）他者を含めた全体系の中で、価値付け・意義付けを行なうものであった。これらをインドの〈シッダーンタ〉あるいは〈ダルシャナ〉の体系と比較するとき、その異質性・相違点には明白なものがある。他方、これをチベットの〈宗義書〉の体系と比する時には、同質性・類似平行する要素は多く看取できる。

問題として考慮すべきことは、チベットの〈宗義書〉の成立が、（ジャムヤンシェパ、スムパケンポ、チャンキヤロルペドルジェ、ジクメエワンポ、トゥカン等による多くの著作の成立年代が、）我が国の江戸時代の豊山派の戒定や法住とほぼ同時代にまで降るものであるという時代的隔たりにある。となると、唐・宋代以後の、元・明・清朝の時代とともに深化していった中国・西藏関係から考えれば、中国仏教の既にかなり以前に成立していた教判思想は、当然チベット仏教の〈宗義書〉にその反映なり、影響が予測されるのである。ところがこの予期し予測するところに反して、実際にはトゥカンの『一切宗義』第9章〈中国仏教〉篇に見られるごとく、相互の影響は、少なくとも表面上は、まったくといってよいほどに、希薄である。これをどのように解釈すべきであろうか。今後、チベット語原典の側からの情報とともに、呂澂『西藏佛教原論』（1933、上海）・橋本光寶『蒙古の喇嘛教』（1942）・同『モンゴル冬の旅』（1999、ノンブル社）・長尾雅人『蒙古學問寺』（1947）・釈東初『中国仏教近代史』（1999、静岡）、あるいは法尊の著述などを手がかりに精査し、考究すべき問題であろう。

宗義文献間の関係

かつて御牧克己は、「Blo gsal grub mtha'」, *Zinbun*, (Kyoto, 1982, pp.7-8), および「チベットに於ける宗義文献（学説綱要書）の問題」（1982）と題する論文の中で「現存する宗義文献の全貌」と章名を付して、敦煌チベット文書からボン教までの諸派を6分類し、総数40点の宗義書名を列挙している。この中には、

Ye shes sde (9th c.): *lTa ba'i khyad par*

Klong chen rab 'byams pa: *Grub mtha' mdzod*

Sa skya Pañḍita Kun dga' rgyal mtshan (1182-1251): *gZhung lugs legs par bshad pa*

Bu ston rin chen grub: *Bu ston chos 'byung* (1322)

Tsong kha pa (1357-1419): *Lam rim chen mo*, (1402),

ditto.: *Drang nges legs bshad snying po* (1408)

dBus pa blo gsal (14th c.): *Blo gsal grub mtha'*

Se ra rje btsun pa Chos kyi rgyal mtshan (1469-1544): *Grub mtha' rnam gzhang*

など既に著名な宗義文献が挙げられている。これら40宗義書の中で、トゥカンとの同時代の宗義書を挙げるならば以下の五人の著作となろう。

- (a) 'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus (1648-1722): *Grub mtha' chen mo* (1699)
- (b) Sum pa mkhan po ye shes dpal 'byor (1704-1788): *Dpag bsam ljon bdzang* (1748); *Grub mtha'i rnam bzhag nyung 'dus*
- (c) lCang skya ye shes bstan pa'i sgron me rol pa'i rdo rje (1717-1786): *Grub mtha'i rnam par bzhag pa gsal bar bshad pa thub bstan lhun po'i mdzes rgyan* (1736-46)
- (d) dKon mchog 'jigs med dbang po (1728-1791): *Grub mtha' rnam bzhag rin chen phreng ba* (1773) = *GTRPT*
- (e) Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma (1737-1802): *Grub mtha'i shel gyi me long* (1801)

御牧克己が著した dKon mchog 'jigs med dbang po の宗義書 *Grub mtha' rnam bzhag rin chen phreng ba* の翻訳研究 (1977) には、彼（以下、略号 dKon mchog とする）と 'Jam dbyangs bzhad pa（以下、略号 'Jam dbyangs とする）と、lCang skya rol pa'i rdo rje（以下、略号 lCang skya とする）と、Thu'u bkwan chos kyi nyi ma（以下、略号 Thu'u bkwan とする）との四者の複雑で緊密な関係が正確に記述されている。そしてこれら四者の緊密な関係は、福田洋一によって、チベット史書文献に基づいて「青海グンルン寺を巡る交友関係」（『西藏仏教宗義研究』第四卷モンゴルの章、東洋文庫、1986, pp.12-20）において確認され、この四者に Sum pa mkhan po ye shes dpal 'byor が加えられている。

彼らの間の緊密な関係を年代順に列挙すれば、取り敢えずは以下のようにまとめことが

可能であろう。（この際、準拠する資料の異なりによる矛盾点が看取できるが、取り敢えず列挙する。）

dKon mchog は 1743 年に Bla brang bkra shis 'khyil 僧院で 'Jam dbyangs 第 2 代を継承した。

Sum pa は dGon lung byams pa gling 第 32 代座主（1746-49）であった。

dKon mchog は ICang skya から 1749 年に具足戒を受け、正式の法名を名乗った。

Thu'u bkwan は ICang skya から 1749 年に沙弥戒を受けた。

dKon mchog は中央チベット sGo mang 僧院に入り、ここで 1755 年に Thu'u bkwan を指導した。

Thu'u bkwan は Sum pa から 1755 年に具足戒を受けた。

Sum pa は dGon lung byams pa gling の第 35 代座主（1756-61）であった。

dKon mchog と Thu'u bkwan 両者は 1757 年、北京から戻った ICang skya と再会し、伝授を受けた。

ICang skya は 1760 年に Thu'u bkwan を北京に招いた。

Thu'u bkwan は dGon lung byams pa gling の第 36 代座主（1761-63）であった。

dKon mchog は dGon lung byams pa gling の第 37 代座主（1763）であった。

dKon mchog は Thu'u bkwan を 1763 年に dGon lung 寺の座主に任命した。

dKon mchog は 1765 年に Thu'u bkwan の座所に隣接する sKu 'bum byams pa gling の座主に着任した。

ICang skya は dGon lung byams pa gling の第 38 代座主（1764-70）であった。

Thu'u bkwan は dGon lung byams pa gling の第 40 代座主（1771）であった。

さらに付加するならば、

dKon mchog は *rRin chen phreng ba*（1773）冒頭（S.1b3）に 'Jam dbyangs を名指し、後者の著作 *Grub mtha' chen mo*（1699）を引用する（S.15a6）。

Thu'u bkwan は ICang skya の伝記を 1794 年に著している。

Thu'u bkwan の本書の献辞 [1]・[11]に ICang skya と dKon mchog を「恩寵ある師」として名指している。

Thu'u bkwan の本書の [45]には「吾が師・一切智者」として ICang skya の見解を引用している。

このように、ほぼ一世代前に先行する 'Jam dbyangs を別格として、Sum pa, ICang skya, dKon mchog, Thu'u bkwan の四者は、青海ゴンルン寺（佑寧寺）を巡って、ごく緊密な関係にあった。このアムド・西寧の北東に位置し、当時は活仏をはじめとする二千人近くの僧が起居していたという、ゴンルン寺の歴史についても、『ザムリン・ゲエーシェー』、『ヴァイドウーリヤ・セルポ』、『パクサムジョンサン』、『トゥカン著：ゴンルン寺目録』、『アムド仏教史』を用いて、福田洋一がゴンルン寺座主系譜を作成し、詳細に論じている。（福田、*op.cit.* p.12）なお Georg Huth によって 1892 年に公刊された甘肅ラプラン寺の

'Jigs med nam mkha' の *Rin po che gsal bar byed pa'i sgron me* は、ジクメ・ナムカ著・外務省調査部（橋本光寶）訳『増訂蒙古喇嘛教史』（生活社、1940）として精確に和訳されているが、この中に既に世宗雍正帝および乾隆帝時代における曼殊微笑金剛・章嘉一切尊者・土觀リンポチェの活動の詳細と交流が記されていることは、太平洋戦争開戦以前の国家情報収集活動の一環であるとしても、驚きである。

注目すべき事柄の一つとして、コンチョクジクメエワンポの〈宗義書 *Rin chen phreng ba*〉の *grub mtha'* の定義がある。彼は、この書の冒頭に、

「宗義というのはわたしの造語ではない。仏陀の聖言の中にお説きになっておられるからである。（すなわち）『入楞伽經』に、〈吾が教法には二種類あつて、教説と宗義とである。嚧童たちには教説で説き明かし、修道者には宗義である。〉とおっしゃられておられるがごとくにである。（*GTRPT. Mimaki, S.2b2*）」

と説き、さらに *grub mtha'* の語義解釈として、ハリバドラ（獅子賢）の『現觀莊嚴論語義釈 '*Grel bshad tshig gsal*』を用いて、

「〈*grub pa'i* (*siddhasya*) の *mtha'* (*antam*) と（いう *Tatpuruṣa-Compound* なの）であつて、自らの主張が論理と聖教とによって完全に説かれており、確立しているもの *grub pa* (*siddha*) であり、これの外へは更に超えて行かないことから終局 *mtha'* (*anta*) なのである。〉と述べられているように、聖教と論理とのどちらかに依拠して判定をなして、確立できた（ことがら、すなわち）主張命題の内容そのものを自らの知のあり方として（受持して）それ以外に移ることがないならば、それが宗義 *grub mtha'* (*Siddhānta*) なのである。（*GTRPT. Ibid., S.2b5*）」

と明記している。また *ICang skya* には、"*siddhi grub pa dang / anta mtha' yin no*" という *Karmadhāraya-Compound* 同格並列複合語とする、語義解釈を掲げる箇所 *ICang skya Grub mtha'* (9b1-3) が存する。他の類書における定義との照合未確認であるが、少なくともチベットにおける「宗義 *Siddhānta*」解釈・定義の一典型として、掲げておきたい。

今回のトゥカン『善説水晶鏡』の「インド思想と仏教」篇訳出研究に当たって、見出された事実の一つとして、トゥカンが行なった、同時代の先行宗義文献からのあからさまなまでに顕著な引用・借文・要約がある。（それら個々の事例については、該当個所の注記において記述した。）勿論、これほどに密接で信頼に満ちた師弟の間での教義の伝承は、真理の伝達と共有が主目的であったのであり、そこには、現代社会におけるような、引用・借文のマイナス意識が希薄であろうことは想像に難くない。まして、チベット僧院における僧侶の学習教育においては、過去から現代に至るまで、膨大な量の暗記・暗誦が重視されている。したがって、著作においても、このようにして記憶された知識が半ば自然に反映されてくるのは当然であろう。以上の状況は、トゥカン自身によるインド原典資料の参照・点検・読解の可能性を含めて、本研究のそれぞれの箇所において関連する注記に記載することに努めた。また、このような精査作業を今後も継続したいと望んでいる。

以上の作業は、チベットにおけるインド思想の忠実で正確な理解の進展と情報の是正を計測する目的のものではない。むしろ、チベット人が、自らの思想形成を〈インド思想・仏教思想の理解〉という形で行なってきた過程を、トゥカンがその師チャンキヤおよびコンチョクジクメの長文の中から、無意識的または意識的に引き出す執筆の具体例で看取することができると思えた上での試みである。

トゥカンの執筆姿勢

では、トゥカン自身は、彼の宗義書執筆の目的と意義をどのように捉えていたのであるか？これには、2つの矛盾し、対立した面が現われている。

(A) 彼の宗義書は、彼の絶筆となったが、彼の死後、直弟子が書き加えた後書きには、以下のように記されている。

「一切知者ジェーツン・ロサンチューニンマ・ペルサンポこの御方は、初めこの宗義書を新たに著作なさった時、これまでチベットの宗義を解説した者がいなかったので非常に困難であったが、それぞれの主張などを詳しく書き、認められるところ、認められないところの肯定と否定とをそれぞれを混乱せずに提示した。ゲデン派（すなわちゲルク派）の見 *lta*・修 *sgom*・定 *sbyor* の三つと経 *mdo*・呪 *rgyud* のいずれの要諦に収めるかということと、その上で（ゲルク派の主張には他と）異なる殊勝なる法がどのようにあるかということと、それによって宗義の設定をよく知り、優劣の違いを分けることが重要であること、そして他（の学派の主張）についても、それぞれの真義となっているところを、好悪や非難の適切でないところを詳しく提示しなければならない、と何度も何度も仰っておられた。」（福田 [1986]p.1, GSM 21b1-22a2 訳による）

上の文に読みとることが可能なのは、以下のようなトゥカンの鮮明な自覚である。

- (A-1) チベットにおける宗義の解説を初めて行なうという自覚
- (A-2) チベットにおける宗義それぞれの主張の詳細を叙述
- (A-3) チベットにおける宗義それぞれについて（好悪を離れた）肯定点と否定点を提示
- (A-4) ゲルク派の教理と修行法と瞑想法との対比による検討
- (A-5) 仏教の顕教経典と密教経典の文献的照合による検討
- (A-6) ゲルク派の宗義の、他より勝れた特色・優秀性の確認
- (A-7) 他派を劣宗として排除しないことの確認

ここには、インドの〈ダルシャナ〉・〈シッターンタ〉解釈とは異なった、むしろ中国仏教における〈教相判釈〉と軌を同じくする姿勢が見られる。

- (B) これに対して、以上の直弟子による後書きとは好対照を提供するのが、本章第

1 節の第 3 項を構成する [27] 「外教の主張内容検討の必要性の説示 mu stegs pa bshad pa'i dgos pa bstan pa」の箇所である。この箇所において、トゥカンは、仏教以外の外教・外道の思想を取り上げる意義を次のように説き明かす。

「これら他派のものたちによる常住論と断滅論を説示する仕方と、これを論破する理論は、大乘諸典籍に多く存する。よく（これらを）知るならば、自派（= 大乘仏教）の教理と教師を過誤なく理解する道により導き出される不退の信頼心が生起するであろう。

（そこで以上のことが）、『殊勝聖讚 *Viśeṣastava*』によれば、

「他の外教の聖典の有り様に

考察をなせばなす程、

それ程に、汝・導師に

この我が心は信を増す。」と説かれているのである。

また、さらに

(イ) 〈苦には原因がないと（執着する）〉・〈(苦は) いろいろな原因より生ずると執着する〉・〈道ではないものを道であると執着する〉・〈解脱ではないものをそれであると執着する〉などなどの誤った理解を遮断するようにすること

(ロ) (前世の) 別の生涯 (*前生) においてローカーヤタなどの悪い宗派の聖典内容を聴聞した影響力によって設置されてしまった習気の種子を弱体化させること

(ハ) 数々の後の生涯 (*後生) においては誤った見解すべてから退転して、正しい見解を速やかに心相続 *saṃtāna* に生み出す習気を設置すること

(ニ) これに留まらずに、チベットに広まった様々な（以下に説く仏教）宗義の中で若干のものの見解の主張内容は外教の意趣とも合致するとも思われるので、これらの相違をよく知った上で、自派の見解に関して、他に引き込まれることがないような堅固な決意を生み出すこと

(以上のような) (イ)~(ニ) 等々の大きな必要性が存在するので、これら（他派のものたちによる常住論と断滅論を説示する仕方と、これを論破する理論）は、外教との論争が生じた時に、〈(相手方の主張は) 退りぞけるのみであって、決して受持し希求するものではない。〉とは考えずに〈学習しておく必要があり、その上で、正しい解脱を求めるものたちは、大乘仏教の根本聖典と聖父子の善説された諸（教示）に対しての聴聞と思量と攝受をなす（べきなのである。以上が）知らなければならない、きわめて重要な事柄である。

とて、(以上の内容を) 頌にして曰く。

およそ何であれ、この（世）において、思慮ある人たちが

心と行為において努めるべき主要なことは、

迷いの状態 (*有) からの脱却する方策を摸索することであって、

もしもそうでないならば、畜獸と如何なる異なりがあるだろうか。
この世には、尊師であると自認し、

束縛からの脱却の仕方を説くものは多数存するが、
迷いの在り方の根幹を堅固にする方策が寂靜の道であると教えるに留まっている。

その教説が解脱を望む人たちにとって欺くことのない最勝の渡し場 (*津梁
tīra) であるものは、善逝・釈尊の教説のみであるが故に、
仏陀お独りだけが正しい判断の拠り所たる御方 *pramāṇa-bhūta* なのである。
他派が主張する仕方を少しも知ることなく、

自派の教理と尊師を〈誤るところ無し〉と如何に述べようとも、
鸚鵡の口唱のごとく、文句のみに終わるもので、確知に導くことはできないの
である。

この故に、〈悪見の境域 *mu* に座を占めている *stegs 'cha' pa*、外道の教義の在り
様を良く知った上で (これらを) 捨離することが、
解脱の都に入るための階段に他ならない〉と賢者たちは仰っておられる。

長文の引用となったが、ここに読み取ることができるのは、以下の諸項であろう。

- (B-1) 聖地インドでの諸教主要部分の略説
- (B-2) チベットにおける諸宗派の教義と外教の意趣との合致・相異点の理解
- (B-3) 常住論・断滅論と中道思想との対比
- (B-4) 誤った教法からの退転・その棄却と、正しい解脱方法の受持・それへの希求
- (B-5) 大乘仏教根本聖典と聖父子善説の聴聞・思量・攝受
- (B-6) 釈尊教説の真理性とそれに対する信解・渴仰の確認
- (B-7) 外教教理の、方便・階梯としての存在意義の確認

ここには、Halbfass がインドの〈ダルシャナ〉・〈シッターンタ〉の特徴として提示した
"samanvaya (harmonizing, 会通)" と "adhikāra-bheda (differentiation of qualification, 局所対応)" の二つと共通する要素を、まさに明瞭に看取することができる。

そして、トゥカンによる (B) の立場選択は、序章第2節最後尾の [61] 「宗義の優劣および前後の、方便としての活用意義」における一切智者ゲドンギャムツォの頌およびジェ大師ツォンカパの『善説心髓』からの引用からも確認できる。他者の宗義を無碍に排除することではなく、理論と知性に基づいて、低次のものたちも〈低次である〉との認識・理解の上に立てば、これらは次第を追って、より高次の教えへと導き入れる働きを示す。ここには外教・他者の宗義の存在意義を冷静に認める姿勢が確認できる。これは宗義文献一般を研究する際に常に伴ってくる、真理と接する際の姿勢の問題である。思想と信仰の関わりと異なりとを認識し、その峻別・確認の上に立って、自らの姿勢を決定づけ、宣説す

ることが求められる。

従来の研究において、宗義書には、インドの諸学派の歴史・教理を論述する宗義書とチベットに発達した諸仏教学派の歴史・教理を解説する宗義書との二種の範疇・特性があるとされ、トゥカンによる本書は後者の代表と見なされてきた。しかし、トゥカンの本書においても今回取り上げて考察を加える序章：「インドの思想と仏教」においては、当然の事ながら、先ず序章前半の第1節において、先行する外教思想の知識と評価・位置づけの作業が示され、その上で序章後半の第2節において、自宗ゲルク派祖ジェ大師ツォンカパの教理思想を至上とし、究極に据えた尺度によってインド仏教各部派教理思想に対する教判が展開されている。そして、それを基盤とし、スタート・ラインとして、次章以後にチベットにおける仏教各宗の教義展開が、ボン教・中国・モンゴルその他の周辺諸国の状況も含めて、叙述される。その意味では、トゥカンの本書における序章は、宗義書に見られる二種の範疇の間の架け橋とも言うべき特性を、彼の著作の中で保有しており、その特別の意義と価値とを評価できるのである。

第2部

和訳および訳註

トゥカン：『一切宗義』序章

インドの思想と仏教

序章 「インドの思想と仏教」 章節・科段目次

- [1] 献辞と著述要約
mchod brjod dang rtsom par dam bca' ba
[Z6 (1a1)]; [G (1a1)]; [D1. 2]28
- [2] 本著作の概要
brtsams chos spyir bshad pa
[Z11 (4a2)]; [G (4a6)]; [D4. 2]31
- 第1節** [3] 聖なるインドの地における宗義成立の経緯
rgya gar 'phags pa'i yul du grub mtha' byung tshul
[Z11 (4a6)]; [G (4b5)]; [D4. 14]31
- [4] 外教成立の経緯
phyi pa mu stegs pa'i byung tshul
[Z11 (4a6)]; [G (4b5)]; [D4. 15]31
- [5] 外教成立の因縁譚
mu stegs pa ji ltar byung ba'i lo rgyus bshad pa
[Z12 (4b1)]; [G (4a6)]; [D5. 5]32
- [6] バラモン（婆羅門）とリシ（聖仙）の誕生
bram ze dang drang song byung tshul
[Z12 (4b3)]; [G (5a3)]; [D5. 12]32
- [7] 外教宗義流布の状況
mu stegs byed kyi grub mtha' dar tshul
[Z12 (4b4)]; [G (5a5)]; [D6. 2]32
- (1-1-1) [8] サーンキヤ（数論）学派の成立経緯
thams cad kyi thog mar grangs can pa byung tshul
[Z12 (4b5)]; [G (5a6)]; [D6. 6]32
- (1-1-2) [9] 裸形派成立の経緯
gcer bu ba byung tshul
[Z13 (5a1)]; [G (5b2)]; [D6. 11]33
- [10] 断見思想・ローカーヤタ派の成立経緯
chad smra rgyang 'phen pa byung tshul
[Z13 (5a1)]; [G (5b2)]; [D6. 12]33

| | | |
|---------------|--|----|
| (1-1-3) | [11] ニヤーヤ（正理）学派の成立経緯 rig pa can pa byung tshul [Z13 (5a3)]; [G (5b4)]; [D6. 17] | 33 |
| (1-1-4) | [12] ヴァイシェーシカ（勝論）学派の成立経緯 bye brag pa byung tshul [Z13 (5a4)]; [G (5b6)]; [D7. 3] | 33 |
| (1-2) | [13] 外教主張内容の概説 mu stegs pa'i 'dod tshul mdo tsam bshad pa [Z13 (5a5)]; [G (6a1)]; [D7. 8] | 34 |
| | [14] 常見と断見：両者の主張内容 rtag par smra ba dang chad par smra ba gnyis su 'dod tshul [Z14 (5b2)]; [G (6a5)]; [D7. 17] | 34 |
| (1-1-2-1) | [15] 断見説：ローカーヤタ派の分派と主張内容 rgyang 'phen pa'i dbye ba dang 'dod tshul [Z14 (5b3)]; [G (6a6)]; [D8. 3] | 34 |
| (1-1-2-2-1) | [16] (以下、常見説) サーンキヤ学派の主張内容概説 grang can gyi dbye ba dang 'dod tshul [Z15 (6a6)]; [G (7a6)]; [D9. 15] | 35 |
| | [17] サーンキヤ学派の説く、繫縛からの離脱方法 bcing grol gyi 'dod tshul [Z16 (6b4)]; [G (7b5)]; [D10. 11] | 36 |
| (1-1-2-2-2) | [18] 梵天派の内部分派と主張内容 tshangs pa ba rnam ky'i dbye ba dang 'dod tshul [Z17 (7a5)]; [G (8a6)]; [D11. 11] | 37 |
| (1-1-2-2-2-1) | [19] 文法学派の主張内容 brda sprod pa'i 'dod tshul [Z18 (7b1)]; [G (8b1)]; [D11. 17] | 37 |
| (1-1-2-2-2-2) | [20] ヴェーダーンタ学派の主張内容 rig byed mtha' pa'i 'dod tshul [Z18 (7b3)]; [G (8b6)]; [D12. 6] | 37 |
| (1-1-2-2-3-1) | [21] ヴィシシュヌ派の主張内容 khyab 'jug pa'i 'dod tshul [Z19 (8a2)]; [G (9a5)]; [D12. 20] | 38 |
| (1-1-2-2-3-2) | [22] ミーマンサー学派の主張内容 dpyod pa pa'i 'dod tshul [Z19 (Z8a5)]; [G (9b2)]; [D13. 9] | 38 |

| | | | |
|---------------|------|--|----|
| (1-1-2-2-3-3) | [23] | シヴァ派・ヴァイシェーシカ学派・ニヤーヤ学派の主張内容 dbang phyug pa / bye brag pa / rig pa can pa gsum gyi 'dod tshul [Z20 (Z8b3)]; [G (9b6)]; [D14. 2] | 39 |
| | [24] | (上の諸学派による) 解脱道の主張の仕方 thar lam 'dod tshul [Z21 (9a3)]; [G (10b2)]; [D15. 5] | 40 |
| (1-1-2-2-4) | [25] | ジャイナ教の主張内容 gcer bu pa'i 'dod tshul [Z22 (9b1)]; [G (10b6)]; [D15. 17] | 40 |
| | [26] | 外教の主張を破析する理論 mu stegs kyi 'dod tshul 'gog pa'i rig pa [Z22 (9b4)]; [G (11a4)]; [D16. 8] | 40 |
| (1-1-3) | [27] | 外教の主張検討の必要性 mu stegs pa bshad pa'i dgos pa bstan pa [Z22 (9b6)]; [G (11b6)]; [D16. 15] | 41 |

第2節 [28] 内道・仏教の成立経緯

| | | | |
|-------------|------|--|----|
| | | nang pa sangs rgyas pa'i byung tshul [Z24 (10b5)]; [G (12b2)]; [D18. 14] | 43 |
| (2-1-1) | [29] | 仏教四部派の成立経緯 grub mtha' smra ba bzhi'i byung tshul [Z24 (10b6)]; [G (12b3)]; [D18. 18] | 43 |
| (2-1-1-1) | [30] | 声聞二部派の中の毘婆沙師 nyan thos sde gnyis las bye brag smra ba [Z25 (11a3)]; [G (12b6)]; [D19. 9] | 43 |
| (2-1-1-2) | [31] | 声聞二部派の中の経量部 nyan thos sde gnyis las mdo sde pa [Z27 (12a1)]; [G (14a1)]; [D21. 7] | 45 |
| (2-1-2-1) | [32] | 大乘仏教の宗義成立の経緯 theg chen gyi grub mtha' byung tshul [Z27 (12a3)]; [G (14a3)]; [D21. 14] | 45 |
| (2-1-2-1-1) | [33] | 龍樹についての予言と『十万頌般若』請来の経緯他 klu sgrub lung bstan dang sher phyin 'bum pa spyang drangs tshul sogs [Z28 (12b2)]; [G (14b3)]; [D22. 9] | 46 |

| | | | |
|---------------|------|---|----|
| (2-1-2-1-2) | [34] | アーリヤデーヴァ (聖提婆) 'phags pa lha [Z30 (13b4)]; [G (16a2)]; [D24. 15] …………… | 47 |
| (2-1-2-1-3-1) | [35] | 帰謬論証派と自立論証派成立の経緯 thal 'gyur ba dang rang rgyud pa'i byung tshul [Z30 (13b6)]; [G (16a4)]; [D24. 20] …………… | 47 |
| (2-1-2-1-3-2) | [36] | 中観派内の帰謬論証派・自立論証派が意味するもの dbu ma pa dang thal rang so so'i don bshad pa [Z32 (14b2)]; [G (17a1)]; [D26. 7] …………… | 48 |
| (2-1-2-2) | [37] | 大乘仏教唯識思想の生起経緯とアサンガ予言 sems tsam pa'i grub mtha' byung tshul dang 'phags pa thogs med lung bstan tshul [Z32 (14b4)]; [G (17a3)]; [D26. 15] …………… | 49 |
| (2-1-2-2-1) | [38] | 兄アサンガの慈悲成就のありさま gcen thogs med kyis byams pa bsgrubs tshul [Z33 (15a3)]; [G (17b3)]; [D27. 11] …………… | 49 |
| (2-1-2-2-2) | [39] | 阿闍梨ヴァスバンドゥ slob dpon dbyig gnyen [Z34 (15b6)]; [G (18b3)]; [D28. 20] …………… | 50 |
| (2-1-2-3-1) | [40] | 唯識という意味 sems tsam zhes pa'i don [Z35 (16a4)]; [G (19a1)]; [D29. 11] …………… | 51 |
| (2-1-2-3-2) | [41] | 唯識派の分派 sems tsam pa'i dbye ba [Z35 (16a5)]; [G (19a2)]; [D29. 14] …………… | 51 |
| (2-2-1) | | (仏教内の四派の教理の相異) | |
| (2-2-1-1) | [42] | 仏教四派の教理設定の概要 grub mtha' smra ba bzhi'i lta ba'i bzhed tshul mdo tsam bstan pa [Z36 (16b4)]; [G (19b1)]; [D30. 12] …………… | 52 |
| | [43] | 仏教四派それぞれが否定する内容の相異 grub mtha' smra ba bzhi'i so so'i lugs kyi dgag bya'i 'dod tshul [Z36 (16b6)]; [G (19b4)]; [D31. 3] …………… | 52 |
| (2-2-1-2) | [44] | 毘婆沙師による事物成立に関する解釈方法 bye smras rdzas btags 'jog tshul [Z38 (17b1)]; [G (20a6)]; [D32. 7] …………… | 53 |

- (2-2-1-2-1) [45] 経量部による事物成立に関する解釈方法
 mdo sde pas rang mtshan dang spyi mtshan 'dod tshul
 [Z38 (17b4)]; [G (20b3)]; [D32. 16]53
- (2-2-1-2-2) [46] 唯識派による自他の区別と外界非存在の主張
 sems tsam pas rang spyi'i khyad par dang phyi don med par 'dod tshul
 [Z38 (17b6)]; [G (20b6)]; [D33. 4]54
- (2-2-1-2-3) [47] 中観自立論証派の「粗・密の我執」と「自然発生的人我遍計」の区別
 rang rgyud pa'i lugs la bdag 'dzin phra rags dang lhan skyes kun btags
 kyi khyad par
 [Z40 (18b2)]; [G (21b2)]; [D34. 8]55
- (2-2-1-2-4-1) [48] 帰謬論証派による「我」主張の仕方
 thal 'gyur bas bdag 'dod tshul
 [Z41 (19a6)]; [G (22b1)]; [D35. 18]56
- (2-2-1-2-4-2-1) [49] 自立論証派による「勝義性審察の境界」
 rang rgyud pas don dam dpyod pa'i mtshams
 [Z42 (19b5)]; [G (23a1)]; [D36. 16]57
- (2-2-1-2-4-2-2) [50] 自立論証派による「密なる真実執着」と「自然発生的遍計」の主張
 rang rgyud pas bden 'dzin phra mo dang lhan skyes kun btags 'dod tshul
 [Z43 (20a3)]; [G (23a4)]; [D37. 7]57
- (2-2-1-2-4-3) [51] 中観派における、否定対象遮棄の仕方とその否定のための理論
 dbu ma'i lugs la dgag bya khegs tshul dang dgag bya de 'gog pa'i rigs pa
 [Z43 (20a6)]; [G (23b2)]; [D37. 17]58
- (2-2-1-2-4-3-1) [52] 帰謬論証派における「密なる我執」2種の区別とプトガラ設定の仕方
 thal 'gyur ba'i lugs la bdag 'dzin phra mo gnyis kyi khyad par dang gang
 zag 'jog tshul
 [Z44 (20b6)]; [G (24a3)]; [D38. 19]59
- (2-2-1-2-4-3-2) [53] 帰謬論証派による真実性審察の限界
 thal 'gyur bas de kho na nyid la dpyod pa'i mtshams
 [Z45 (21a5)]; [G (24b2)]; [D39. 15]59
- (2-2-1-2-4-3-3) [54] 帰謬論証派による「知垢」の主張、その破棄方法と実在執着の様相
 thal 'gyur ba'i lugs kyi shes sgrib 'dod tshul / de spong tshul / rdzad
 yod du 'dzin tshul
 [Z46 (21b5)]; [G (25a2)]; [D40. 13]60

- (2-2-2-1) [55] 仏教四派の各派における「粗・密の無我」設定の仕方
 grub mtha' smra ba bzhi so sos bdag med phra rags kyi 'jog tshul
 [Z47 (22a5)]; [G (25b2)]; [D41. 12]61
- (2-2-2-2) [56] 唯識派説における「粗・密の無我」設定の仕方
 sems tsam lugs la bdag med phra rags 'jog tshul
 [Z49 (23a5)]; [G (26b4)]; [D43. 12]62
- (2-2-2-3-1) [57] 瑜伽行中観派説における「粗・密の無我」設定の仕方
 rnal 'byor spyod pa'i dbu ma pa'i lugs la bdag med phra rags 'jog tshul
 [Z50 (23b1)]; [G (27a1)]; [D43. 20]63
- (2-2-2-3-2) [58] 経量行中観自立論証派説における「粗・密の無我」設定の仕方
 mdo sde spyod pa'i dbu ma rang rgyud pas bdag med phra rags 'jog tshul
 [Z50 (23b4)]; [G (27a4)]; [D44. 9]63
- (2-2-2-4) [59] 帰謬論証派説における「粗・密の無我」設定の仕方
 thal 'gyur ba'i lugs la bdag med phra rags 'jog tshul
 [Z50 (23b6)]; [G (27a6)]; [D44. 15]64

(結びとして)

- (2-2-3) [60] 仏教四部派による、常見・断見の両極論破棄の仕方
 grub mtha' smra ba bzhis rtag chad kyi mtha' spong tshul
 [Z51 (24a3)]; [G (27b4)]; [D45. 6]64
- (2-2-4) [61] 宗義における優劣・前後を方便として活用する仕方
 grub mtha' la mchog dman dang snga ma phyi ma'i thabs su 'gro tshul
 [Z52 (24b3)]; [G (28a4)]; [D46. 3]65

(章末の結頌)

序章 「インドの思想と仏教」 和訳

すべての宗義の淵源と主張趣旨を説示する
『善説水晶鏡』と呼ばれるものが（以下に）存する

[1] mchod brjod dang rtsom par dam bca' ba

献辞と著述要約

[Z6 (1a1)]; [G (1a1)]; [D1. 2]

果てしない宗義の相異を見そなわされて、
悪しく説かれた宗義の主張を破析され、
清浄なる宗義の真相（実義）を告げることをなしたもうた、
聖者の主領たるもの・宗義の最上なるものに対して、稽首したてまつる。//1//

勝者（釈尊）の御ことばの秘密の蔵をすべて護持して
無数の国土に種々の化身をなすことによって、
甚深にして、広大なる¹ 仏法の祝宴を開催することをなされた、
弥勒（Ajita-Maitreya）と文殊（Mañjuśrī）（両菩薩）に礼拝供養したてまつる。//2//

「百弁の（蓮華）とクムタ（白睡蓮）の二種の伝統（＝中観・唯識）の花園を
それぞれ見事に開設するような、
日と月とが一对となって昇るであろう」と
勝者（釈尊）御自身が預言をなされた、そのとおりに
未了義（neya）・了義（nīta）の教説を見事に弁別されて²、
中観と唯識の二つの大きな馬車（轍・伝統）を明瞭ならしめることをなされた
龍樹（Nāgārjuna）³ と無著（Asaṅga）⁴ と呼ばれる、
「世界の二つの眼」に勝利あれかし。//3//

聖提婆（Āryadeva）⁵ ・ 聖猛（Āryaśūra）⁶ ・ 清弁（Bhāviveka）⁷ ・ 仏護（Buddhapālita）⁸
月称（Candrakīrti）⁹ ・ 寂天（Śāntideva）¹⁰ ・ 世親（Vasubandhu）¹¹ ・ 獅子賢（Haribhadra）¹²
安慧（Sthiramati）¹³ ・ 陳那（Dignāga）¹⁴ ・ 法称（Dharmakīrti）¹⁵ ・ 徳光（Guṇaprabha）¹⁶
釈迦光（Śākyaprabha）¹⁷ などなど、
世界を飾る宝飾（にも譬えられる御方）たちに敬礼・供養したてまつる。//4//

比べるものなき最上乘の良き屋敷において
楽・空の酒によってすっかり酩酊して大秘密（の歌）を歌い
賢劫（bhadra-kalpa）の最上悉地の喜宴に連なった
瑜伽自在者の群に対しても敬礼すべし。//5//

雪山によって囲まれたばかりでなく、無知の闇が覆っているところの
この谷間（チベットの地）に（仏教という）正法の太陽の大光明を
御発（菩提）心という（太陽宮殿内に住む）黄緑色馬（harita-asva）の力に
よって導入なされた、
翻訳僧・バンディタ・護法王（の）御恩恵を想起して敬礼す。//6//

別々に流れてきても大海においては一つに混ざる河川のごとくに
様々に説かれていても究極においては一つの意趣に見事に納まるころの、
種々なる宗義の轍を、多くの雪を懐いたこの谷間（=チベット）に広められた、
多様に現れてはいるが本質は同一である最高の丈夫たちに遍く敬礼す。//7//

多くの困難を超えて、黄金の島（Suvarṇa-dvīpa）から
親しく受け取ってこられた菩提心の教戒という、力の極致を
チベットの地の所化に対する慈愛から惜しみなくお与えになられた
大師ディーパンカラ（Dīpaṅkara-Atiśa）¹⁸と
完全円満なる釈尊のお教えを自らのものとして打ち立てられて、
善く説かれた逸話物語と清浄なる伝記説話の驚嘆すべきものをもって
すべてにまして際だって尊いガンデン寺の轍（伝統）を設立された、
第二のブツァ（= Tsong kha pa）¹⁹ および御一緒の
御子とも言うべき（後継二大弟子 rGyal tshab rje²⁰ と mKhas sgrub rje²¹）
に対して衷心より敬礼申し上げる。//8//

この祖師（= Tsong kha pa）の宗風という無垢の摩尼宝珠である
教説と修法の幟旗を頂上に打ち飾って、
尽きることない善き幸せの願望の集まり沢山の雨を雨降らせる、
ガンデン寺の法統を護る諸師方に頂礼をなそうではないか。//9//

無量光（=阿弥陀）と観自在の二（尊の）
袈裟の舞により、釈尊の御教えの精髓の極致を、
有を尽くした（世の）果てにまで損することなく広めることをなされた、
勝者の首長である聖父子（Paṅ chen および Dalai bla ma）という、宝冠の王者たるもの、//10//

(六) 趣に対して (吾が) 子に対するがごとき慈愛が優先された (結果)、
限りない秘密の御心の法蔵 (の) 扉を開かれ、

「善説」という金剛石の精髓を望むがままにお与えになりたもう伝承摂持者
の方々、および、とりわけて

一切仏の本体たる、遊戯金剛 (ICang skya rol pa'i rdo rje)²² (と)
マイトリーの御足 (マイトリーの語が名前の最後につくお方、

すなわち rJe btsun ngag dbang byams pa)²³ と

ラトナの御名をお持ちの方 (dKon mchog 'jigs med dbang po)²⁴ と、
比類ない恩寵 (に満ちた) 三通りの師匠方は、

菩提に至るまで (わたくしの) 心臓の中央におわします。//11//

かくのごとく、御教えの大師 (すなわち)
御子と御弟子を伴える聖者 (= Tsong kha pa) をば
信心の掌中に握りしめている、
讚嘆の言辞 (の) 花をもって供養をなした (後で)、//12//

今ここ (この世) ではいろいろな宗義のことを、
それぞれの違いを知ることないままに、
他者の教義と人物に対しては
怒りの火に駆られて誹謗をなし、//13//

己れの宗義がとりわけて勝れているとの
理由が何一つとして確実でないのに
迷妄 (の) 偏執のみによって、最高であると執してしまっているもの
(すなわち)、四種の (避) 去²⁵ に支配されている多くのものたちを、//14//

彼らを、不放逸 (apramāda 自制) に導く目的で、
聖地インド・チベット・中国の (諸) 域に生じた
宗義の淵源と主張内容とともに、
いささか、ここで叙述することとしよう。//15//

一辺に偏倒するという眼翳から離れた
公正なる眼を具した人が一人でも誰か居られるならば
「善説である白水晶の鏡」に
色とりどりの驚異が現出するこれ (以下を) 御覧になってほしいものである。//16//

[2] brtsams chos spyir bshad pa

本著作の概要

[Z11 (4a2)]; [G (4a6)]; [D4. 2]

さてまた、虚空にも似て測りしれない世界の諸域において、論理好きの凡夫たちがそれぞれおのれの思量によって設定した宗義の限りない現状と、これと同様に、牟尼・仏・諸世尊の御発心と恩寵から生まれた清浄なる宗義もまた、数え切れないほどあることから、これらの起源したありさますべてを一体誰が語ることができようか。(不可能である。)今ここでは世界のそれぞれ異なった地帯において、種々様々な宗義がいかにして生じたかと、これら各々の一致しない主張内容がいささかなりとも述べられるであろう。

さてそこで、以下(本書)に5(章)ある。

- (1) 聖なるインドの地における成立の経緯
- (2) 雪を懐いた谷間・チベットにおける成立の経緯
- (3) 大中国の地における成立の経緯
- (4) 若干のその他の地における成立の経緯
- (5) 教義内容の解説で結論とする。

[3] le' u dang po / rgya gar 'phags pa' i yul du grub mtha' byung tshul (第1節) 聖なるインドの地における宗義成立の経緯

[Z11 (4a6)]; [G (4b5)]; [D4. 14]

第1章には2節ある。

- (第1節) 仏教外の外教の成立の経緯、および
- (第2節) 内道である仏教の成立の経緯

とである。

[4] phyi pa mu stegs pa'i byung tshul 外教成立の経緯

[Z11 (4a6)]; [G (4b5)]; [D4. 15]

第1節には3項ある。

- (1-1: 第1項) 外教がどのように生じたかの経緯物語と
- (1-2: 第2項) 彼らの主張内容を少しばかり解説することと
- (1-3: 第3項) これを説くことの必要性を示すこと

とである。

[5] mu stegs pa ji ltar byung ba'i lo rgyus bshad pa

(1-1) 外教成立の因縁譚

[Z12 (4b1)]; [G (4a6)]; [D5. 5]

この世界が最初に創成されてから長い時間が経過した時に、この地球 (Jambudvīpa, *閻浮提) において人間たちは野生の穀物を (渉獵して) 食べていたのであったが、この時に、怠惰な人が貯蔵したことによって (食料に不足が生じて) 農耕を行なう必要が生じた。この結果、我欲をもったものが、与えられないのに受け取ってしまったので、お互いに (利害が) 一致せず、決着をつける裁判官を任命する必要性が生じた (ことから決められた) はじめての役人が、「多くの人たちによって選ばれた王 (Mahāsammata-rāja)」²⁶ と呼ばれたものなのである。

[6] bram ze dang drang song byung tshul

バラモン (婆羅門) とリシ (聖仙) の誕生

[Z12 (4b3)]; [G (5a3)]; [D5. 12]

この時代に王によって、と或る罪人が刑罰によって消滅 (= 刑死) させられているのを見て心を傷めて、或る一人のものが深い森の隠所に赴いて住したことによってブラーフマナ (brāhmaṇa 婆羅門) となった。

その後また、或るものは隠所において少慾知足を実行して独居することによって、身心孤高にあることに基づいて、シャマタ (śamatha 寂靜) を得た。

この結果、神通 (abhijñā) と神足 (ṛddhi) を有するものが生まれ、リシ (聖仙 ṛṣi) と名付けられた。

[7] mu stegs byed kyi grub mtha' dar tshul

外教宗義流布の状況

[Z12 (4b4)]; [G (5a5)]; [D6. 2]

彼らの中から、神通を獲得したものと論理に修練したもの多く (が出てそのものたち) によって各々の知力を振るって解脱 (mokṣa) と天界 (svarga) に到達するための道 (mārga) の設定とそれを証明する論証の学識を開陳している種々の論書 (grantha) が編述されたことに基づいて、外教を行ずるものの宗風 (= 思想) が広まったのであった。

[8] thams cad kyi thog mar grangs can pa byung tshul

(1-1-1) サーンキヤ (数論) 学派の成立経緯

[Z12 (4b5)]; [G (5a6)]; [D6. 6]

そしてまた、すべての (外教宗義の) 最初に生じたものはサーンキヤ (Sāṃkhya* 数論) 学派であって²⁷、(人) 寿無限歳の時代に、カピラ仙 (Kapila) と呼ばれる、黄髪をした五

神通を具えたものが現われ出て、彼によって自然本来の力により備わった智慧に基づいて数多くの根本書が編述された。彼に従うものたちに対して、「数論派 (grangs can pa)」とか「カピラの徒 (ser skya pa)」と(いう名が)付せられた。

[9] gcer bu ba byung tshul

(1-1-2) 裸形派成立の経緯

[Z13 (5a1)]; [G (5b2)]; [D6. 11]

(人) 寿二万歳の時に、ヴィヤーサ仙 (Vyāsa) というものが出て²⁸、彼に追隨するものたちは、「ヴィヤーサの徒 (rgyas pa)」とか「裸形派 (gcer bu pa = Kṣapaṇaka, Nagna)」と呼ばれた。

[10] chad smra rgyang 'phen pa byung tshul

断見：ローカーヤタ派の成立経緯

[Z13 (5a1)]; [G (5b2)]; [D6. 12]

また「世間眼 (Lokacakṣus, Lokāyata) 仙人」という、論理にきわめて修達したものが一人現われ、彼は、自分の娘に愛欲を行なったことから「前生・後生が存在せず」と述べて、「善なるものに(善い)果報(ありとも)、罪あるものに(悪果である)過患あることなし」と説く根本書十萬部を編纂した²⁹。彼の追隨者たちに「順世外道 (Lokāyata, Cārvāka)」と呼ばれる、かの、きわめて下賤なるものが出た。

[11] rig pa can pa byung tshul

(1-1-3) ニヤーヤ (正理) 学派の成立経緯

[Z13 (5a3)]; [G (5b4)]; [D6. 17]

スンドラ (Sundara) 仙人というものは、マハーデーヴァ (Mahādeva 大神 = シヴァ Śiva) によって(神妃)ウマー (Umā) の警護に任命された。ウマーがスンドラ仙人に色情を懐いて、前に居して多くの媚態を示したが、この仙人は足下に眼を落として誓戒を護ったので、大神は喜んで根本書を著述する許可を与えたことから「足目仙 (Akṣapāda)」と称せられた³⁰。彼に追隨するものたちは「足目の徒 (Ākṣapāda)」または「正理学派 (Naiyāyika)」と呼ばれる。

[12] bye brag pa byung tshul

(1-1-4) ヴァイシェーシカ (勝論) 学派の成立経緯

[Z13 (5a4)]; [G (5b6)]; [D7. 3]

梟を神と間違えて六句義を得たと自慢したウルーカ (梟仙 Ulūka) 仙人と、他人が捨てた食べ物を食べながら誓戒を実践したカナダ (大仙食屑 Kaṇabhuj; Kaṇāḍa) 仙人の、両者の追隨者(たち)を「勝論派 (Vaiśeṣika)」と呼ぶ。

[13] mu stegs pa'i 'dod tshul mdo tsam bshad pa

(1-2) 外教主張内容の概説

[Z13 (5a5)]; [G (6a1)]; [D7. 8]

（『梵網經 (*Brahma-jāla-sutta*)』・『楞伽經 (*Lankāvatāra-sūtra*)』などの) 経典によると、奇異なる (*vismaya*) 見解九十六³¹と、十四の無記 (*avyākṛta*) の見解³² (および) 六十二悪見³³と、二十八の正しくない見解³⁴、二十悪見³⁵、などが説かれており、『思釈炎 (*Tarkajvālā*)』によると、見解の区別は百十があり³⁶、また『中観宝灯論 (*Madhyamakaratna-pradīpa*)』によれば、見解の区別は三百いくつ (等) が存するとの有様を説いている³⁷。

知自在者 (*Vidyēśvara* = ダルマキールティ・法称)³⁸が、「誤った道は無辺際であるが故に」とおっしゃっておられるように、道と道ならざるものを見分ける知恵を備えていないものたちは悪見に対して「これは良い」とか「これは良くない」との判定をくることが困難である。そこで、悪見の宗義の数を確実に捉えることは不可能であることから、ここでは、よく知られている若干の主張内容をいささか述べよう。

[14] rtag par smra ba dang chad par smra ba gnyis su 'dod tshul

常見と断見：両者の主張内容

[Z14 (5b2)]; [G (6a5)]; [D7. 17]

外教 (*phyi rol pa*) の諸宗義は、見解の相違によって、常住であると説くもの (常見) と断滅であると説くもの (断見) との二つにまとめられる。

断見説は順世派 (*Lokāyata, Cārvāka*) であり、(一方) 常見説はサーンキヤ (数論) 学派と梵天派とヴィシュヌ派 (*Vaiṣṇava*) とミーマーンサー (*Mīmāṃsā* 弥曼蹉) 学派、シヴァ (イーシュヴァラ：自在天) 派、ヴァイシェーシカ (勝論) 学派、ニヤーヤ (正理) 学派、ディガンバラ (*Digambara* 裸形) 派の八つからなると仰られている³⁹。

[15] rgyang 'phen pa'i dbye ba dang 'dod tshul

(1-1-2-1) 断見説：ローカーヤタ派の分派と主張内容

[Z14 (5b3)]; [G (6a6)]; [D8. 3]

ローカーヤタ (順世) 派には、禅定 (を重視する) 派と論理 (を重視する) 派の二つがあり、そのそれぞれにまた前生と後生は認めるが業の果は認めない一種の断見と、前生・後生も業の果もまったく認めない種類の断見との、二つずつがある。

彼らによって誤って説かれる内容とは云えば、「太陽は昇る。」・「水は低きに流れる。」・「茨には棘がある。」・「孔雀の羽は美しい。」等々で、いずれかの (人の) 努力によって出来上がったもの (人為) とは認められないのであるから、これらの事象はそのもの

自体から生じたのであり、原因を有しない。)として⁴⁰、因果をないがしろにするものであった⁴¹。

〈意とは、肉体との間に特に三つ（の関係）によって依存しているのである。（1）すなわち酒と酔わせる力の如くに、肉体を支配する主であるものであり、（2）灯明とその明かりの如くに、肉体の結果としてあるものであり、（3）壁とそ（れに描かれた）絵画の如くに、肉体の属性となっているものであるという点で、（意とは肉体に）依存しているものなのである⁴²。そこで、忽然たる（＝無因 *ākāsmika*）灯明から忽然と明かりが生まれるように、忽然たる肉体から忽然と心が成立するのであって、前生から今（生）に来たものではないのである。死の時に於いて、身体は四大に（帰し）、そして（諸）根は虚空の隙間で僅少となって滅するのであり、肉体と心とは一体であるので、壁が滅すれば（そこに描かれた）画も滅するがごとくに、肉体が滅すれば心もまた、滅することになろうから、今生から後生に赴くこともまた存在しない〉と言って、〈前生・後生が存在しないのだ。〉と主張する。

その結果、多くの生涯に亘って道を修習することがなくなるので、〈一切智者なるものは存在しない。〉とし、そしてまた、〈苦悩などには原因が存在しないのであるから、これ（苦悩）から脱出させる道も、解脱なるものも存在しない。〉と（主張して）解脱を軽んずる。

さらにまた、〈禅定を重視するものたち（*snnyoms 'jug pa dag, samāpattika*）が三昧（の境地に達し、）そして無色（定）等に到達すれば「自分は阿羅漢となった」と思っているが、死んでしまうと三昧より退転して低い生まれに誕生することが観察されている。〉この理由に基づいて、（ローカーヤタ派の禅定に関する主張としては、）〈世に阿羅漢が存在せず。〉と述べるのである⁴³。

そしてまた、（ローカーヤタ派の禅定に関する主張として、）〈或るものが通力によって分別を行なって見ると、今生において布施を贈った人の中の誰かが、次の生において困窮しているのが観察される。このことから、（善因善果の）業果は存在せず。〉と言って、そして、自分の通力によって通察できない事々を無視するのである。

（ローカーヤタ派の、論理に関する主張としては、）〈認識根拠（*量）としては直接知覚（*現量）だけで充分であると認めて、普遍（*総相）と推論（*比量）などを容認しない。〉

以上の結果として、彼（ローカーヤタ派の者）は、前生・後生も、業果も、解脱も、また一切智者などに至るすべてを否定するのであり、外教の中でもっとも下卑たものなのである。

[16] *grang can gyi dbye ba dang 'dod tshul*

(1-1-2-2-1) (以下、8種の常見説) サーンキヤ学派の内部分派と主張内容

[Z15 (6a6)]; [G (7a6)]; [D9. 15]

サーンキヤ (*数論) 学派またの名をカピラの徒は、〈諸々の結果とは因の状態で (既に) 存在するのであるが、縁によって顕現する〉と (因中有果論を) 主張する。さらにこれ (サーンキヤ学派) にまた 〈根本原質のみから生起する〉と説く無神サーンキヤ派と、〈因果は一つの自性のものであるが、様々な様相となるのは、大自在天によって加持されてである〉と説く有神サーンキヤ派の二つが存する⁴⁴。

(彼ら双方において)、〈所知はすべてで二十五に数が確定している〉と主張され、プラクリティ (prakṛti) とマハット (mahat, *大) とアハンカーラ (ahaṅkāra 自我意識、*我慢) と五唯 (pañca-tanmātra) と五元素 (pañca-mahābhūta) と十一根 (ekadaśa-indriya) と、我 (ātman) であり、認識主体 (jñātṛ) である人我 (puruṣa) とで、(総計) 二十五となる。

これらの中で、人我 (puruṣa) が、知る主体であり、残る二十四は集積したものであるので非精神的物体であると主張され、根本原質 (prakṛti) と非変異 (avyaya) と首長なるもの (pradhāna) とは同一であって、六つの特異性を有する一つの所知 (対象) に関して述べられている。精神原理 (puruṣa) と、我 (ātman) と、認識主体 (jñātṛ) と、理性 (vid) とは同一であり、慧 (buddhi) と大 (mahat) とは同義語 (nāma-paryāya) であって、これは 〈外からは対象物を、内からはプルシャの姿を映出する (一枚の) 鏡の両面のごときものである〉と主張される⁴⁵。〈ブッディ (慧) は物質原理 (dravya) によって覆われ、知 (jñāna) には一つのアートマンが必要とされる〉と述べられている。

[17] bcing grol gyi 'dod tshul

サーンキヤ学派の説く、繫縛からの離脱方法

[Z16 (6b4)]; [G (7b5)]; [D10. 11]

束縛からの離脱に関する主張の仕方は (といえ、) いずれの時であれ、かかるプルシャが対象に対して「享受したい」との願望を生じた時には、プラクリティ (根本原質) によって音声などの化現が現出される。さらに、プラダーナ (首長なるもの) からマハット (*大) が、そしてこれからは三種のアハンカーラ (*我慢) が生起することによって、タマス (*翳質) (のアハンカーラ) が他の二つのアハンカーラを動かす。ラジャス (*激質) のアハンカーラからは色・声・香・味・所触という五つのタンマートラ (*五唯) が (生じ)、サットヴァ (*純質) のアハンカーラからは五心根と五身根と意根との十一根が (生ずる)⁴⁶。

さらに、眼は持たないが足を有するものに喩えられるプラクリティと、眼を有するが足を持たないものに喩えられるプルシャの二者を一つと見間違えてしまい⁴⁷、〈様々な様相がムーラ・プラクリティ (mūla-prakṛti 根本原質) によって現出されているのだ〉とは判らないことが原因となって、輪廻を輪廻するのであると主張するのである。

或る折に、(すなわち) ラマ師匠が親しく説かれた教説を聴聞することに依りて 〈これらの変容せるものたちはプラクリティによって化現されただけに過ぎない〉との確知が格

別に生じるならば、次第を追って対象物への執着を離れたものとなり、その時に、禅定に基づいて天眼という神通力が生じ、神通智によってプラダーナを観察する時には、このプラダーナは、他人の妻のように恥じらいをもって恥ずかしがり、様々な変容（諸事象）を集大成し、プラクリティは独存状態（kaivalya）に住して、この時にヨーガ行者の心胸中には世俗のすべての現われは消え失せて、プルシャ（puruṣa）は対象物を享受することなく、無所作の境地に住する。（この時に解脱が達成されたのである。）と主張する⁴⁸。

[18] tshangs pa ba rnam kyī dbye ba dang 'dod tshul

(1-1-2-2-2) 梵天派の内部分派と主張内容

[Z17 (7a5)]; [G (8a6)]; [D11. 11]

梵天（ブラフマン）派（Brahma-vādin）とは、〈教師はブラフマー神である〉と述べており、内部分派に、文法学派（Vaiyākaraṇa）と、ヴェーダーンタ学派（Vedānta）と、秘密派（Guhyaka, Tāntrika, Upaniṣadika）が存するが、〈有情世間・器世間一切は梵天によって創造された。〉とか、〈ヴェーダのみが知識根拠（*権証）である。〉と主張して、〈ヴェーダのことばとは、人間によって作られたことが否定されるものである（apauruṣeyatva）ので、真理のみを説く（唯一の）ものである〉と述べる。〈天界（svarga）と梵（Brahman）（の存在）を立証する方法は、ヴェーダの根本聖典に説かれているアシュヴァメーダ（馬祠祭）⁴⁹である〉と主張する。

[19] brda sprod pa'i 'dod tshul

(1-1-2-2-2-1) 文法学派の主張内容

[Z18 (7b1)]; [G (8b3)]; [D11. 17]

文法学派（Vaiyākaraṇa）のものたちは、〈器世間・有情世間の種々なるものを産出する基体であり、これらの本質となっているブラフマン（梵）とはオームという字音であり、（これは）生滅なきものであるから常住であって、時空の隔てを持たず、内外の対象領域に真理として入っているものである。（これは）勝義には（究極の本質としては）唯一の自性を持つだけであるが、無知により汚染された人々にとっては様々な姿の所取・能取として顕現して見える。〉と言う。チベットのチョナン派（jo nang pa）の主張するところと近似しているように思われる。

解脱を達成させる道は、外的には獣畜（paśu）の供犠護摩であり、内的（秘密）には婦女のバガ（bhaga）の焔に精液を放出する護摩を行わずにことにあると主張し、解脱とは、かかる折の空・朗・楽にあると主張する。

[20] rig byed mtha' pa'i 'dod tshul

(1-1-2-2-2-2) ヴェーダーンタ学派の主張内容

[Z18 (7b3)]; [G (8b6)]; [D12. 6]

ヴェーダーンタ学派、またの名はバラモン至上主義派たちは、〈知識根拠であるヴェーダに説かれるプルシャ (skyes bu, puruṣa) と称せられる唯一者、絶対に帰滅することがない故に常住なるもの、苦患を超脱しているが故に清浄であるもの、すべての生類に遍充せるもの、始終なきものであるが故に不死であり、太陽の色彩を有し、暗闇の輪郭から超脱せるものであり、巨大なるものであり、惰眠とは異質のものである、プルシャと呼ばれる唯一者が存在する。彼は諸々の神々の本体であり、大自在天の実体をなすものでもある。このプルシャのみが三界のすべてと、苦と楽・束縛と解放の諸事を作成するが、それでも彼自体は変化することも滅尽することもない。(われわれが) 精神集中 (三昧) に依拠して、天眼をもってこのプルシャを観察する時、このプルシャそのものが黄金の色彩を備えたものとして見えるならば、(われわれは) 善も悪も、輪廻も解脱も (すべて分け隔てない) 平等性に達して、解放に至る。〉と言う⁵⁰。

秘密派 (Guhya) たちは、大体がこれ (ヴェーダーンタ学派) と類似しており、ヴェーダに基づいて、〈アートマンであり、智慧 (shes rig) である、常住にして不共なる唯一者が存在する〉と主張する⁵¹。

[21] khyab 'jug pa'i 'dod tshul

(1-1-2-2-3-1) ヴィシュヌ派の主張内容

[Z19 (8a2)]; [G (9a5)]; [D12. 20]

ヴィシュヌ派 (Vaiṣṇava) は、ヴィシュヌ (Viṣṇu) 神を尊師として執する。ヴィシュヌ神に寂靜なる本性のものと非寂靜なる本性のもの二者がある中で、寂靜なるものとは神の実体が〈有にあらざ無にあらざ〉という自性であり、不死の本性となっている。これ (神) を観想することによって解脱が達成されると言う。非寂靜なるものとしては、魚などの、ヴィシュヌ神の権化 (avatāra) 十種が説かれるが⁵²、常住で不共なるアートマンを認め、輪廻に終局があり、解脱させる道には、字音オーム (om) を観想することや、止息クムバカ⁵³を修習することなどが存すると教えている。この流派では、輪廻が尽きる終局があると主張しており、ヴェーダーンタなど多くの学派がこれに追随していると説いている⁵⁴。

[22] dpyod pa pa'i 'dod tshul

(1-1-2-2-3-2) ミーマンサー学派の主張内容

[Z19 (8a5)]; [G (9b2)]; [D13. 9]

ミーマンサー学派は、ジャイミニ (Jaimini) に追随しているものであることから、〈ジャイミニの徒〉とも称せられるが、〈アートマンとは、思考の本質である心を持つものであって、無心なるもの (bem po) ではなく、意識という自性・常住なる本体・独存の実有性を有し、部分を持たず一体のものである。〉と主張する。

ヴェーダを知識根拠 (*量) として主張する仕方は前述の (他派たち) と似ている。祭

儀（の施行）などだけで、ブラフマンの如くに天界の境域に到達することがあり得ると主張しているが、これは悪趣からの脱出ではあるから解脱であることには他ならないが、苦難を良く鎮めた解脱ではないのである。染汚が心の自性に存在しつづけているが故に。一切智者もまた存在しない。（知る対象である）所知に限りがないが故に。この結果、〈真理のことはもまた存在しえないのである〉と述べている。六種の知識根拠（*六量）を主張するが、ジャイミニの徒の分派であるチャーラカ（Cāraka）派では〈知識根拠が十一種ある〉と主張する⁵⁵。また四十八浄法（saṃskāra）の有様も述べているが、ここでは今、列挙しないこととしよう⁵⁶。

[23] dbang phyug pa / bye brag pa / rig pa can pa gsum gyi 'dod tshul (1-1-2-2-3-3) シヴァ派・ヴァイシェーシカ学派・ニヤーヤ学派 の主張内容

[Z20 (8b3)]; [G (9b6)]; [D14. 2]

シヴァ教徒（Śaiva）、ヴァイシェーシカ派（Vaiśeṣika, 勝論学派）、ニヤーヤ学派（Naiyāyika, 正理学派）の三者は、シヴァ神を尊師として執しているが、ヴァイシェーシカ派とニヤーヤ学派の二者には、ブラフマー神やヴィシュヌ神を尊師とするものもあるので、これら双方には「ブラフマー教徒」および「ヴィシュヌ教徒」との名称で呼ぶこともまた存する。

ヴァイシェーシカ派に関しては、前述したように梟（ulūka）を神と取り間違えたことや、穀物を食べる（kaṇāda）仙人の追随者であることから、「ウールーカ派」とか「カーナーダ派」とも呼ぶことがある。

ニヤーヤ学派もまた前述したように、アクシャパーダ仙（足目仙）に追随するものであることから、「足目の徒」とも呼ばれる。クムバカ（kumbhaka 止息）の生気念想を行なうことや、シヴァ神のリンガ（男根）の先端から灌頂を行なうことや、婦女と交媾して精を放出する楽などが道であると説き、精を放出する楽から交媾の楽の智慧が生まれることが解脱であると主張する。

ヴァイシェーシカ学派とニヤーヤ学派は、六句義の同異の区別（viśeṣa）を多く述べていることから「ヴァイシェーシカ学派」であり、アクシャパーダ仙によって作られた論理学（nyāya）に従うことから「ニヤーヤ（正理）学派」と称せられた。

ヴァイシェーシカ学派によれば、直接知覚（*現量）・推論（*比量）・経典（*聖言量）の三者が、ニヤーヤ学派によればこれら三者と、譬喩をまさに検討する知識根拠（*譬喩量）との四者が、（主張され、）両学派ともに推論（*比量）に三種ありとし、（さらに）それらが依拠する理由概念（*証因 hetu）に三種の正しい理由概念（*正因）と三種の正しく似て非なる理由（*似因 hetv-ābhāsa）があると主張する⁵⁷。

論理の十六根本原理（*十六句義 padārtha）および八句義を主張する仕方についてはここには記さない⁵⁸。

[24] thar lam 'dod tshul

(1-1-2-2-3-4) (上の諸学派による) 解脱道の主張の仕方

[Z21 (9a3)]; [G (10b2)]; [D15. 5]

解脱を達成する道は、沐浴 (snāta) と、灌頂を行なうこと (abhiṣiṅca) と、断食と、師匠の家に居住して梵行 (brahmacaryā) を実践すること、森に棲むこと (vana-prastha) と、供犠 (yajña) と、布施 (dhāna) などなどであって、しばらく師匠の教誡に従って修習し、〈アートマンを諸根などのものたちとは別異なるものである〉と知り、アートマンの真実なる本質を悟って、六句義の自性を了解したならば、アートマンはすべてに遍く充滿する性質のものではあるが作るものではないと判明する。法と非法の行為いずれをもすべて積集することなく、新しい業を積集せずに古い (業) を尽滅することによって、以前から受持している身体 (kāya) と諸根 (indriya) と意 (manas) と、楽を求め苦を厭う (氣持) などなどがアートマンから乖離して、新しい身体と諸根を受けることがなくなるので、薪木が途絶えた焚火の如くに生の連続が途絶えて、アートマンだけが独り存続することになったならば、解脱が達成したのであると言う⁵⁹。

[25] gcer bu pa'i 'dod tshul

(1-1-2-2-4) ジャイナ教の主張内容

[Z22 (9b1)]; [G (10b6)]; [D15. 17]

裸形派 (gcer bu pa) は、ジナ・マハーヴィーラ (Jina, Mahāvīra) 等の追随者であることから「ジャイナ教徒」として知られているが、〈所知一切は九句義に集約される〉と主張して⁶⁰ 〈樹木などが有心である〉とか⁶¹、〈尊師・仏陀は一切智者ではない〉⁶² を証明する理論などを述べる。〈解脱は、裸形と、無言と、五火⁶³ 供養などの苦行の実践に基づいて⁶⁴、以前に行なった行為の業すべてを断尽し、新たな業を積集しないことによって、全世界の上に位置する「ローカサングラハ (jig rten 'dus pa)」と呼ばれる⁶⁵、白傘蓋を上に向け直立させたような、母乳またはクムタ (白睡蓮) のように白い居所に、量が四百五十万由旬尺に昇る (場所) を持つものとして、生命ある物体となっており、輪廻から超脱していることから物質性を持たないものでもある、かかる所に赴く。かかる居所を解脱と言う。〉と述べている⁶⁶。

[26] mu stegs kyi 'dod tshul 'gog pa'i rig pa

外教の主張を破析する理論

[Z22 (9b4)]; [G (11a4)]; [D16. 8]

外教のこのような主張内容の数々を破析する理論は、『入中論 (Madhyamakāvatāra)』・『中観心論 (Madhyamaka-hṛdaya-kārikā)』頌と註釈である『思釈炎 (Tarkajvālā)』⁶⁷・『量評釈 (Pramāṇa-vārttika)』・『量決釈 (Pramāṇa-viniścaya)』などに広範に論述されている。

外教の宗義（＝学派）の中でもサーンキヤ学派・ヴァイシェーシカ学派・ニヤーヤ学派の三者の主張内容はいささか堅固であるので、(ダルマキールティの)『七部論理学書』⁶⁸などに基づいてこれを論破する理論が多く論述されており、今ここでこれらを列記するのはあまりに多量となるので、記さない。

[27] mu stegs pa bshad pa'i dgos pa bstan pa (1-1-3) 外教の主張を検討する必要性

[Z22 (9b6)]; [G (11b6)]; [D16. 15]

第三（項）としては、これら他派のものたちによる常住論と断滅論を説示する仕方と、これを論破する理論は、大乘諸典籍に多く存する。よく（これらを）知るならば、自派（＝大乘仏教）の教理と教師を過誤なく理解する道により導き出される不退の信頼心が生起するであろう。

（そこで以上のことが）、『殊勝聖讚 (Viśeṣastava)』によれば、

「他の外教の聖典の有様に

考察をなせばなす程、

それ程に、汝・導師に

この我が心は信を増す。」と説かれているのである⁶⁹。

また、さらに

- (イ) 〈苦には原因がないと（執着する）〉・〈(苦は) いろいろな原因より生ずると執着する〉・〈道ではないものを道であると執着する〉・〈解脱ではないものをそれであると執着する〉などなどの誤った理解を遮断するようにすること
- (ロ) (前世の) 別の生涯 (*前生) においてローカーヤタなどの悪い宗派の聖典内容を聴聞した影響力によって設置されてしまった習気の種子を弱体化させること
- (ハ) 数々の後の生涯 (*後生) においては誤った見解すべてから退転して、正しい見解を速やかに心相続 (citta-saṃtāna) に生み出す習気を設置すること
- (ニ) これに留まらずに、チベットに広まった様々な（以下に説く仏教）宗義の中で若干のものの見解の主張内容は外教の意趣とも合致するとも思われるので、これらの相違をよく知った上で、自派の見解に関して、他に引き込まれることがないような堅固な決意を生み出すこと

(以上のような) (イ) ～ (ニ) 等々の大きな必要性が存在するので、これら（他派のものたちによる常住論と断滅論を説示する仕方と、これを論破する理論）は、外教との論争が生じた時に、〈(相手方の主張は) 退りぞけるのみであって、決して受持し希求するものではない。〉とは考えずに（学習しておく必要があり、その上で、正しい）解脱を求めるものたちは、大乘仏教の根本聖典と聖父子の善説された諸（教示）に対しての聴聞と思量と攝受をなす（べきなのである。以上が）知らなければならない、きわめて重要な事柄である。

とて、(以上の内容を)頌にして曰く。

およそ何であれ、この(世)において、思慮ある人たちが
心と行為において努めるべき主要なことは、
迷いの状態(*有)からの脱却する方策を摸索することであって、
もしもそうでないならば、畜獣と如何なる異なりがあるだろうか。

この世には、〈尊師である〉と自認し、
束縛からの脱却の仕方を説くものは多数存するが、
迷いの在り方の根幹を堅固にする方策が寂靜の道であると教えるに留まってい
る。

その教説が解脱を望む人たちにとって欺くことのない最勝の渡し場(*津梁
tīra)であるものは、善逝・釈尊の教説のみであるが故に、
仏陀お独りだけが正しい判断の拠り所たる御方(pramāṇa-bhūta)なのである。

他派が主張する仕方を少しも知ることなく、
自派の教理と尊師を〈誤るところ無し〉と如何に述べようとも、
鸚鵡の口唱のごとく、文句のみに終わるもので、確知に導くことはできないの
である。

この故に、〈悪見の境域(mu)に座を占めている(stegs 'cha' ba)、外道の教義
の在り様を良く知った上で(これらを)捨離することが、
解脱の都に入るための階段に他ならない〉と賢者たちは仰っておられる。⁷⁰

以上が、第1節を終了するまとめの偈頌である。

[28] nang pa sangs rgyas pa'i byung tshul
(第2節) 内道・仏教の成立経緯

[Z24 (10b5)]; [G (12b2)]; [D18. 14]

内道である仏教徒の成立経緯（由来）には2項あって、

(2-1：第1項) 教義を説くもの四者（部派）の生起次第と、

(2-2：第2項) それらの見解の建立の仕方を略述するもの

とである。

[29] grub mtha' smra ba bzhi'i byung tshul

(2-1-1) 仏教四部派の成立経緯

[Z24 (10b6)]; [G (12b3)]; [D18. 18]

今劫において、大乘（の見解）によるならば（始めに）千仏が（出現し）、小乗（の見解）によるならば五百（羅漢）が出現した。

さらにまた、この世界（*閻浮提 Jambudvīpa）の人々の寿命（*人寿）が無量歳から減少してきて（人寿）四万歳に至った時に、カクトスンダ仏（壞輪廻 Kakut-sunda）が来臨された。

（人寿）三万歳の時にカナカ仏（金仙 Kaṇaka-muni）が来臨された。

二万歳の時にカーシュヤパ仏（飲光 Kāśyapa）が来臨された。

人寿百歳の五濁が増大した時に吾が師・シャーキャムニ仏（釈迦牟尼 Śākya-muni）がこの世に来臨されて⁷¹、法輪を三度転じられた⁷²。すなわち初めの教えである四諦の法輪に従って小乗の宗義を説くものが声聞の二部（毘婆沙師・経量部）であり、中間と最終回の（転）法輪に従って大乘の宗義を説くものが、中観・唯識の二部である。

[30] nyan thos sde gnyis las bye brag smra ba

(2-1-1-1) 声聞二部派の中の毘婆沙師

[Z25 (11a3)]; [G (12b6)]; [D19. 9]

声聞二部派の中で、毘婆沙師は、『毘婆沙の海 (Vaibhāṣā-sāra)』とか『大毘婆沙論 (Mahāvibhāṣā-sāstra)』⁷³と称せられる根本聖典に従うものであり、三世を実有の別として説くことから「毘婆沙論師 (Vaibhāṣika)」と呼称される⁷⁴。細分するならば、根本四部と枝末十八部派がある。

根本四部とは、

- (i) 阿羅漢・マハーカーシュヤパ和上（大迦葉 Kāśyapa）に連なる大衆部 (Mahāsaṃghika) と⁷⁵、
- (ii) ラーフラ（羅喉羅 Rāhula）に連なる説一切有部 (Sarvāstivādin) と⁷⁶、
- (iii) カーティヤーヤナ（迦旃延 Kātyāyana）に連なる上座部 (Sthavira) と⁷⁷、

(iv) ウパーリ (近執 Upāli) に連なる一切所貴部 (= 正量部 Ārya-sammatīya) とである⁷⁸。

(これらの根本四部から分派した) 枝末十八部派には⁷⁹、大衆部より分派したものが五部ある。すなわち阿闍梨ヴィニータデーヴァ (調伏天 Vinītadeva) によって、

- 「(i-1) 東山住部 (Pūrvaśaila) ・
 - (i-2) 西山住部 (Aparaśaila) ・
 - (i-3) 雪山住部 (Haimavata) ・
 - (i-4) 説出世部 (Lokottara) ・
 - (i-5) 説仮部 (Prajñaptivādin)
- たちが、五つの大衆部の部派である。』⁸⁰

と言われているが如きものである。

説一切有部から分派したものが七部あって、

- 「(ii-1) 説一切有部 ([Mūla-]sarvāstivādin) と、
- (ii-2) 護光 (飲光) 部 (Kāśyapīya) と、
- (ii-3) 化地部 (Mahīśāsaka) と、
- (ii-4) 法蔵部 (Dharmagupta) と、
- (ii-5) 多聞部 (Bāhuśrutīya) と、
- (ii-6) 紅衣 (赤鉢) 弟子部 (Tāmra-śāṭīya) と、
- (ii-7) 分別説部 (Vibhajyavādin) とが、説一切有部である。』⁸¹

と言われている。

上座部より分派したものは三部あって、

- 「(iii-1) ジェータヴァナ住派 (Jetavanīya) と
 - (iii-2) アバヤギリ住派 (Abhayagiri-vāsin) と、
 - (iii-3) ヴィハーラ住派 (Mahāvihāra-vāsin) が
- 上座部系 (Sthavira) である。』⁸²

と言われている。

一切所貴部 (Sammatīya, 'phags pa kun gyis bkur ba'i sde) より分派したものは三部あって、

- 「(iv-1) 鶏胤部 (Kaurukullaka; cf. Kaukuttīya; Gaukulika)、
 - (iv-2) 阿槃提迦部 (Avantaka, 守護家)、
 - (iv-3) 犢子部 (Vātsīputrīya) は、
- 一切所貴部である』⁸³

と言われている。

これらは (すべてが) また、誰に追隨するかという阿闍梨と、住する土地と、教義の主張内容の如何によって分派して、十八となったのであって、「住地と内容と阿闍梨の違いによって異なりが出て、十八部となった。」と言われている⁸⁴。

十八部派の分派説明には、異なる別のものも存する。(すなわち以下の通りである。)

〈さらにまた、尊師（=釈迦牟尼）が般涅槃されて百十六年を経過した後に、クスマプラという場所で教団の四長老で、言語・氏族の異なった四人によって、アーガマが誦出されたことに由来して、弟子たちに不一致が生まれてしまい、根本四部に分派した。これらはさらに内部の異なりから十八部となって互いに論争を行なうようになった⁸⁵。

暫くしてある時に、クリクリ王（訖栗枳枳王 Kṛkin）の夢兆により予言された經典を得て読んで見ると、「部派は十八となるが、解脱の得果が減ずることはない」と述べられているのを見て、お互いに和合した⁸⁶。〉

と（記す）異なった別の説明の仕方もある。

毘婆沙師（Vaibhāṣika）の阿闍梨は、世友（Vasumitra）と、法救（Dharmatrāta）と、覺天（Buddhadeva）と、衆賢（Saṃghabhadra）などなどであるとして知られている⁸⁷。

[31] nyan thos sde gnyis las mdo sde pa

(2-1-1-2) 声聞二部派の中の經量部

[Z27 (12a1)]; [G (14a1)]; [D21. 7]

經量部（Sautrāntika）また（の名）は譬喩師（Dṛṣṭānta-vādin）とは、經典（sūtra）に従って教義を建立することから、また一切法を譬喩を用いて説くことに巧みであったことから、このような呼称で知られるようになった⁸⁸。

細別するならば、經典にあるとおり、語句のとおりそのままに受け取って教義を述べることから、聖典随順派（āgama-anusārin）と（称せられるもの）と、『量七部書（七論理学書）』に説かれているような論理に随順する論理随順派（nyāya-anusārin）の二派が存在し⁸⁹、阿闍梨は、クマールラータとシュリーラータとバダンタラータたちであると知られている。

[32] theg chen gyi grub mtha' byung tshul

(2-1-2-1) 大乘仏教の宗義成立の経緯

[Z27 (12a3)]; [G (14a3)]; [D21. 14]

大乘の教義の生起の有り様は、尊師（釈迦牟尼）が般涅槃されて後に、大乘の教えは天および龍の地に良く伝播し、他の島（*洲）にも存したと説かれているが、この閻浮提には、（十地のいずれかの）地に住している（*登地）菩薩とか、秘密瑜伽行者で隠蔽した誓戒を護持するものたちの多くが自分自身で受持（*自誓自戒）しているものとか、賢劫のものたちに教えるとか等々によって、大乘の教えを護持し、伝播するものが若干は存在することは存在していたが、声聞部の伝播が強大であった結果、大乘の経蔵は覆滅されてしまったかのようにになってしまい、長期間が経過した。

或る時に、大バラモン・サラハ（Sarāha）が出て大乘秘密の教えを主として弘通した。その後、勝者（=釈迦牟尼）御自身によって預言（*記莛）がなされた如くに、第二のブッダである龍樹（Nāgārjuna）と無着（Asaṅga）の二人が出て、まさに世尊の御教え

そのものに準拠して、仏典を未了義・了義に区分して、大乘の甚深（中観）・廣大（唯識）の道を受持実践する仕方の完成を真昼間のように明々白々になさったことから、「大きな（乗物の）二轍」と称せられた。

これから始まって、大乘の教えは弘通していったのである。

[33] *klu sgrub lung bstan dang sher phyin 'bum pa spyan drangs tshul sogs* (2-1-2-1-1) 龍樹についての予言と『十万頌般若』招来の経緯他

[Z28 (12b2)]; [G (14b3)]; [D22. 9]

また、規範師ナーガールジュナ（龍樹）は、大乘全般にわたる車の轍を確定された御方であって、『楞伽経 (*Laṅkāvatāra-sūtra*)』によれば、

「南方ヴェーダリー (*Vedālī, Vidarbha*) の地において高貴にして大名声ある比丘が出て、彼は名をナーガと呼ばれる。有・無の二辺を破し、世間において、私の大乘をば無上なるものであるとよく説き、歡喜地を証得し、安樂国に彼は赴くであろう。」⁹⁰

(と述べられている。)

さらにまた、『文殊師利根本タントラ (*Mañjuśrīmūlatantra*)』と『大法鼓経 (*Mahābherīsūtra*)』など多くに勝者 (= 釈尊) 自らがはっきりと予言をなさっておられる⁹¹。仏滅後四百年が経過して南方ヴェーダルの地でバラモンの氏族に誕生した。大バラモン・サラハに引接されて、出家した。寿命が七日であったが、それより延命して、秘密の教誡を多数著した。ナーレンドラの阿闍梨ラーフラバドラより具足戒を受けて大徳シュリーマンと呼ばれた。ナーレンドラの僧団の使用人を勤められて、鍊金術をなし、僧団の飯食を準備した。声聞部の比丘シャンカラというものが『明厳論 (*Rigs pa'i rgyan, *Nyāyālamkāra*)』というものの根本書百二十万 (頌) を製作して、大乘を難じたのに対して、この軌範師は折伏などの法を大音声で三度唱えられた。

龍の国に赴いて多くの龍に対して仏法を説かれて、龍 (の国の) 泥⁹²をたくさんと『十万頌般若 (*Śatasāhasrikāprajñāpāramitā[sūtra]*)』など閻浮提では散逸してしまっている多くの経典を人界に将来したので「龍成就 (*klu sgrub, Nāga-siddhi*)」と称せられた。Puṇḍravardhana とか Paṭaveṣa などの多くの地において有情の饒益をなされた。北の俱盧洲に赴き、神変と説法などにより有情の饒益を限りなく行なわれた。仏塔と寺廟を多数建造されたり、(ブツダガヤーの) 金剛宝座に岩の網目の柵 (*欄循) を巡らされたり、シュリーダニヤカタカの仏塔の莊嚴を造作されるなどをなさり、仏法にとって限りない益となる御業績を積まれた。

殊に甚深なる中観の道・究極的な了義を経証によって論証するのに『経集論 (*Sūtrasamuccaya*)』⁹³を、理論によって論証するのに『根本般若 (中論) (*Prajñā-nāma-Mūlamadhyamakakārikā*)』などの『理論の六群』⁹⁴を、さらには『讚法界頌 (*Dharmadhātustotra-stava*)』⁹⁵など讚類を、『菩提心釈 (*Bodhicittavivaraṇa*)』⁹⁶および『五次第 (*Pañcakrama*)』⁹⁷など秘密部の類など、顕密両部の意趣釈を多数著述されて、論理の力

によって諸々の悪説を破析し、大乘の教説で失われているものを根幹から育て上げられた。勝者 (= 釈尊) の教えに関して勝者御自身と同等にまで恩恵が大きく充満しておられる御方なのである。人間界には六百歳までおわしまして、ウダヤナ王の王子シャクティマンなるものが(龍樹の)頭を乞うたので与え、劔では切れなかったが、「(自分がかつて)クシャ(吉祥)草で昆虫の命を絶った因縁があるから、クシャ草で切れ」と仰ったので、(王子が)切り落とし、頭を持って運んでいたのを、夜叉女が奪い取り、(龍樹の身体から遠く)一ヨージャンも離れたところに放った。別々に離された頭と身体のは、歳々に近づいて、ついには合体して、再び説法を衆生の饒益のためになさったと言われている。

『大法鼓経』によれば、「この軌範師は第七地(に昇られる)御方である」と説かれて⁹⁸。『灯作明(Pradīpoddyotana)』によれば「今生において最高の悉地を達成される」と説く⁹⁹。

弟子にもまたアーリヤデーヴァ(聖提婆)とか、(アーリヤ)スーラとか、バーヴィヴェーカ(=バヴィヤ、清弁)とか、ブッダパーリタ(仏護)とか、チャンドラキールティ(月称)などなど無比の碩学が多数輩出した。『根本般若(中論頌)』を通して、中観の教乗の轍を開いたことに基づいて、龍樹の追隨者たちを「中観派(Madhyamaka)」とか「無自性論者(Niḥsvabhāva-vādin)」と呼ぶ。

[34] 'phags pa lha

(2-1-2-1-2) アーリヤデーヴァ聖提婆

[Z30 (13b4)]; [G (16a2)]; [D24. 15]

アーリヤデーヴァは龍樹の他の(弟子)たちからも、軌範師(龍樹)御自身と同じく権威(*権証 pramāṇa) であると考えられており、まさに彼によって『瑜伽行四百論(Bodhisattva-Yogācāra-catuhśataka)』が著作された。この聖父子(龍樹と聖提婆)二人の意趣は結局のところはプラーサンギカ(帰謬論証)派の流れに位置するものではあるが、根本論典の説示から推測する限りにおいては、プラーサンギカ(帰謬論証)派の独自の立場を明らかにすることがなく、プラーサンギカ(帰謬論証)派とスヴァータートリカ派の双方の主張の総体に位置することから、「根本教説の中観派(gzhung phyi mo'i dbu ma pa)」と呼ばれる¹⁰⁰。

[35] thal 'gyur ba dang rang rgyud pa'i byung tshul

(2-1-2-1-3-1) 帰謬論証派と自立論証派成立の経緯

[Z30 (13b6)]; [G (16a4)]; [D24. 20]

軌範師ブッダパーリタは、『根本中論仏護註(Buddhapālita-mūlamadhyamakavṛtti)』をお作りになられ、『根本般若(中論頌)』に説かれる諸論理の内容に関して帰謬論証を多量に駆使して解説されながらも、自立論証の論理を説くことはなかったのに対して、軌範師バーヴィヴェーカ(清弁)は『般若灯論(Prajñāpradīpa)』において誤謬を多数述べ立てて、

自立論証の論理を樹立する必要があるとの理由を多く説かれて自立論証派の教乗の轍をお開きになられた。

その後、軌範師チャンドラキールティ（月称）が、『入中論（*Madhyamakāvātāra*）』とか根本中論釈『明句論（*Prasannapadā*）』という論書を述作されて、ブツダパーリタ（仏護）に対して上述の誤謬を帰属させることはせずに、自立論証派の論理を受け入れるものには攻撃を加え、受け入れないものに対しては多くの論証を教示して、「聖者の意趣は帰謬論証である」と解釈した。しかしながら、「帰謬論証派の教乗の轍を開いたものは、ブツダパーリタ（仏護）である」と断言するものと、「チャンドラキールティ（月称）である」と断言するものとの二つの見解が現われた。このようにして、聖者の意趣を帰謬論証・自立論証それぞれに解釈するものたちは「（特定の）学説をもつ中観派（*phyogs 'dzin pa'i dbu ma pa*）」として知られる¹⁰¹。

軌範師シャーンタラクシタ（寂護）は『中観莊嚴論（*Madhyamakālamkāra*）』を、軌範師ジュニャーナガルバ（智蔵）は『中観二諦論（*Satyadvayavibhaṅga*）』を、そしてカマラシーラ（蓮華戒）は『中観明（*Madhyamakāloka*）』を著述なされ、これら三部は「自立論証派東方三指針 *rang gnyud shar gsum*」として知られる¹⁰²。

自立論証派を分類すると、基体（=存在）の設定（*gzhi'i rnam bzhag*）を¹⁰³唯識派と共通して（外界の対象は存在せず識のみであると）認める「瑜伽行（中観）派（*rnal 'byor spyod pa*）」と、経量部の如くに極微が集合した外界の対象を認める「経量行中観自立論証派（*mdo sde spyod pa'i dbu ma rang gnyud pa*）」の二者が存し、前者はさらに、「形象真実派（*rnam bden pa*）」と合致するものと、「形象虚偽派（*rnam rdsun pa*）」と合致する二つの中観派が存して、シャーンタラクシタ（725-784 頃）とカマラシーラ（740-797 頃）と聖ヴィムクティセーナ（8世紀）のごとき前者と、軌範師ハリバドラ（8世紀頃）とジターリ（10-11世紀）とラワパ（=カムバラ *Kambala* 700年頃）¹⁰⁴のごとき後者とがある。後者にはさらに「形象虚偽有垢論派（*rnam rdzun dri bcas pa*）」と合致するものと、「（形象虚偽）無垢論派（*dri med pa*）」と合致するものの二つが存する¹⁰⁵。

[36] *dbu ma pa dang thal rang so so'i don bshad pa*

(2-1-2-1-3-2) 中観派内の帰謬論証派・自立論証派が意味するもの

[Z32 (14b2)]; [G (17a1)]; [D26. 7]

中観派（*Madhyamaka*）または無自性論者（*Niḥsvabhāva-vādin*）と称せられるものの意味するところは、（有無の）二辺を離れた中間（*madhya*）を認めるが故に「中間派」であり、諸法には実有としての本質が存在しないと説くことから「無自性論者（*Niḥsvabhāva-vādin*）」と称せられるのである¹⁰⁶。

帰謬論証・自立論証の意味するところは、〈（因の）三相がそれ自身の側から（自立的に）成立している正しい論証因（*liṅga*）に基づき、実有の真实性を否定する〉ところから「自立論証派（*Svātantrika*）」であり、〈破析を行なうだけによって、相手側（*敵者）の心

相続に証明されるべき事柄を理解させる推論が生まれる」と主張するので「帰謬論証派 (Prāsaṅgika)」と称せられるのである¹⁰⁷。

[37] *sems tsam pa'i grub mtha' byung tshul dang 'phags pa thogs med lung bstan tshul*

(2-1-2-1) 大乘仏教唯識思想の生起経緯とアサンガ予言

[Z32 (14b4)]; [G (17a3)]; [D26. 15]

唯識派の教義の生起の有り様は（たとえば）、この流派の教乗の轍は、聖者アサンガ（無着 Asaṅga）によって開かれたものである。

この軌範師（＝アサンガ）御自身については、『文殊師利根本タントラ (*Mañjuśrīmūlakalpa-tantra*)』により

「吾が般涅槃して後、九百歳に至って、アサンガと呼ばれる比丘が、この論書の内容に通達して、経論の了義・未了義の意味、多くの類をよく弁別するであろう。」とか、
「仏法を長期間に亘って存続させる目的で、経の真実の意味を集め、寿百五十歳に至るまで生きながらえよう。」云々と、

はっきりと予言がなされていたのである¹⁰⁸。

仏滅後九百歳に出現と、六百歳に出現との、一致しない説が存在したが¹⁰⁹、いずれの如くであるにしても、インドにおいて明法 (chos mngon pa) に敵対するものが三回出現して、仏法が隠没した。バラモン女・プラカーシャシーラーなるものは、耐えきれずに、「(我が) 身に児を生んで仏法を弘めさせよう」と考えて、王族と契りを結んだことによりアサンガ（無着）が、またバラモンと契ったことによりヴァスバンドウ（世親）が生まれた。二人の子には智慧を鋭くする秘法を授け、成長した時に、「父の職は何か？」と尋ねられて、母は言った。

「汝をそのために生んだのではなく、仏法を弘通するためであるのだから、智慧を磨け。仏法の弘通をなせ。」と（母に）言われたことから、弟のヴァスバンドウはカシュミールのサンガパドラ (Saṃghabhadra 衆賢) の許に赴いた。

[38] *gcen thogs med kyis byams pa bsgrubs tshul*

(2-1-2-2-1) 兄アサンガの慈悲成就のありさま

[Z33 (15a3)]; [G (17b3)]; [D27. 11]

兄（アサンガ・無着）は「慈悲を修して仏法を弘めよう。」と考えると、鷄足山 (*Kukkuṭpādaparvata*) の洞窟に赴いて三年間修行をしたが、いささかの験も見ることができなかったので、嘆いて外に出てきた時に、老翁が綿の布切れで鉄の棒に孔を穿っているのを見て尋ねたところ、「勇気ある丈夫によって、修せられるならば成就しないものは何もない。困難でも努力を放棄しないならば、山々といえども粉と砕けよう。」と言ったので、これが縁となって再び戻り、またまた三年間修行をして外に出てきた時に、水滴によ

って岩が摩滅したのを見て、精進の思いを発して戻り、さらに三年間修行し、外に出てきた時に、羽毛で岩が摩滅したのを見て前と同じように戻った。さらに三年間修行をしたが、験が顕われなかったの、失望して出てきた時に牝犬が下腹を蛆虫によって蝕まれ、上半身でガツガツと食を求めて吠えているのを見て非常に憐憫の情を生じて、自分の身体の肉を切って（牝犬の）蛆を取り去ろうと考えて、金の劔を借り受けて自分の身体の肉を切り取り、「手で受けるならば死ぬかもしれない」と恐れ、目を閉じて舌で受け取ろうと思った途端に、犬は居なくなり、光明を具したマイトレーヤ（弥勒仏）を見て、「わたくしがあれほど修行したけれども何の験もなかった。至尊には慈悲心がほんの少ししかない。」と詰った。至尊は、「わたしは最初から居ただ。おまえ自身の汚染によって見えなかったのだよ。現在は大悲が生まれたので汚染が清められて見えるのだよ。」と仰られた。それで、「大乘が弘まりますように願ひ上げます。」と乞ひ願ったことにより、「吾が法衣に掴まれ。」と仰られた。兜率天に赴き、天の一刹那、すなわち人間の五十年または五十三年の間、住しておられたと知られている。

ここ（兜率天）において、至尊から『仏母（般若）経（*yum kyi mdo = Prajñāpāramitāsūtra*）』と『弥勒五法』¹¹⁰などを聴聞して再び人界に至った。『五部瑜伽師地論』¹¹¹と『二種撰頌』¹¹²などをお作りになられ、唯識派の教乗の轍を開かれた。

『地讚嘆釈（*Sa'i bstod 'grel*）』によれば、「この阿闍梨は、法流三昧を獲得せられたり。」と説く¹¹³。『（現観莊嚴論註釈）語句解明（*Prasphuṭapadā*）』¹¹⁴には「阿闍梨無着は第三發光地を得ておられたが、世親を教化する目的で、唯識として教えられた。」と述べられている。バダンタ・アスヴァバーヴァ（無性）によれば、「（世間の）最勝法（位）に住せられた。」¹¹⁵と説いている。〈御寿百歳であった〉といわれるが、百五十歳になられたのは確実である。

[39] slob dpon dbyig gnyen

(2-1-2-2) 阿闍梨ヴァスバンドウ

[Z34 (15b6)]; [G (18b3)]; [D28. 20]

弟のヴァスバンドウ（世親）は始めは毘婆沙説に帰依しており、大乘には信頼を置かなかったの、兄に関して、「ああ、アサンガは森で、年数で十二年禪定を修行したが、禪定を修了しないものが象の背に乗せて運ぶ（ほど多くの）宗義書を著した。」云々と、嘲弄したが、後に大乘を信ずるようになり、兄から弥勒の法などを聴聞し、『プラカラナ八部』¹¹⁶を著した。このようにして『弥勒五法』・『五部瑜伽師地論』・『二種撰頌』（＝『二部』）・『プラカラナ八部』については、「弥勒と関係する二十部の法」¹¹⁷として知られている。

ヴァスバンドウには、御自身よりも通達した四人の弟子が出た。すなわち、論理学に関して御自身よりも通達していたのは阿闍梨ディグナーガ（陳那）であった。戒律に関して御自身よりも通達していたのはグナプラバ（徳光）であった。般若に関して御自身よりも

通達していたのは聖ヴィムクティセーナ（解脱軍）であった。阿毘達磨に関して御自身よりも通達していたのはステイラマティ（安慧）であった。

[40] *sems tsam zhes pa'i don*

(2-1-2-3-1) 唯識という意味

[Z35 (16a4)]; [G (19a1)]; [D29. 11]

このように、アサンガによって開かれた教乗の轍を護持する追隨者たちを、「唯識派 (*sems tsam pa*)」または「形象論者 (*rnam rig pa*)」と称するのであり、「一切法が意識の本性に過ぎない」と説くことからこのように呼ばれたのである。

[41] *sems tsam pa'i dbye ba*

(2-1-2-3-2) 唯識派の分派

[Z35 (16a5)]; [G (19a2)]; [D29. 14]

細分するならば、感官知 (*根識) に関して、空間的に顕現しているものは、現われているとおりに成立していると主張するものと、そのとおりに成立してはいないと主張するものとの (違いに) 基づき、「形象真実唯識派」と「形象虚偽 (派)」の二派があるが、「真実派」には、所取・能取 (の数) が同数であるとする派と、卵半塊 (の如しとする) 派と、多様不二であるとする派、との三派があった¹¹⁸。

これら三者の違いについては、学者たちが打ち立てる諸説紛々として一致しないのでここでは記さない¹¹⁸。

虚偽派には、心の本質が無明の習気の染汚によって損なわれていると主張することから有垢派とされるものと、損なわれていないと主張することから (形象) 虚偽無垢派とされるものの二派があり¹²⁰、さらにまた唯識派は、聖典随順派と論理随順派の二派にも分派している。この順番で『五部 (瑜伽師) 地論』に随順するもの (が聖典随順派であり)、そして (ダルマキールティの) 『論理書七部』に随順するもの (が論理随順派) たちである¹²¹。

以上のように、軌範師龍樹と聖無着の二師によって中観・唯識の教乗の轍が開かれたことに基づいて、大乘の教えは、夏期の河川の如くに、拡張し増大したのであった。学識と悉地に自在を究めたものが幾千万と輩出して仏の教えを、太陽のごとくに輝けるものとなさったのである。

(第2項) 仏教内の四派の教理の相違

[42] grub mtha' smra ba bzhi'i lta ba'i bzhed tshul mdo tsam bstan pa

(2-2-1) 仏教四派の教理設定の概要

[Z36 (16b4)]; [G (19b1)]; [D30. 12]

第二(項): 自派(仏教内部の) これら(四部派の) 教義の基・道・果の設定主張の仕方には様々な異なりが多量に存するが、それをすべて詳細に列挙すると文全体が膨大になるであろうし、他の宗義論書に多く解説されているので、ここでは記さない。異なる宗義を樹立したのは見解(の相違)に基づくものであるから、ここではそれぞれの見解の主張の仕方がいささかなりとも述べられるべきであろう。

(2-2) これ(第二項)に二つがある。

(2-2-1) それぞれの流派によって否定されるものの主張内容と、

(2-2-2) 無我の(教義の)粗・密(の異なる) 建立の仕方とである。

[43] grub mtha' smra ba bzhi'i so so'i lugs kyi dgag bya'i 'dod tshul

(2-2-1-2) 仏教四派それぞれが否定する内容の相異

[Z36 (16b6)]; [G (19b4)]; [D31. 3]

前者(2-2-1)は(いかなることかと言えば)、これまた、自派(仏教)すべて(の部派)が縁起を認知受容する点では差異は存しないことは確かである。しかし、自立論証派以下(=帰謬論証派以外の諸派)では、外道の主張するような、蘊とは別のものとして成立している我を主張することはないが、〈蘊そのものが我である〉と考えているのである。

毘婆沙師の中の一切所貴部(Sammitīya, mang bkur ba)の或るものは、〈蘊の集合が我である〉と考えている。カシュミールの毘婆沙師と、経量部では、〈識の相続がプトガラ(我)である〉と考えている。唯識派では〈アーラヤ識がプトガラである〉と考える。中観自立論証派では〈意識がプトガラである〉と考える。(これらとは異なって)帰謬論証派では、かかる考え方一切を述べない¹²²。

さらにまた、毘婆沙師より自立論証派に至るものたちが、業果の拠り所としての我を設定する主張の仕方もまた、〈プトガラなどが名目において自分自身の側から(自立的に)成立する〉と認めているものなのである。(すなわち)〈蘊に依拠して「我である」とか、「プトガラである」という呼称が仮託されているに過ぎない。〉というのでは満足しないで、〈このプトガラは、個々の蘊とも、(それらの)集合とも、それとは異なる別の、或る物として存在している。〉と探し求めて、なにか或る適当な物をプトガラとして得たいと思って、これら(上述のもの)を設定したのである。

このように固執するもの(心)が自分自身の側から(自立的に)成立していると執着

し、そして、その対象であるものが自分自身の側から（自立的に）成立していると思いなしてしまい、〈かかる求め方で求めて得られないならば、プトガラを考えることは不可能となるので、虚無論（*断見）に落ち込むという過失となろう。〉と持っているように見える。

この結果、実有論者たちによってもまた、〈真理（satya）として成立するものと、正しく（samyak）成立するものと、勝義（paramārtha）として成立するものと、真実（tattva）として成立するものと、それ自身のあり方（svalakṣaṇa）によって（自ずから）成立するものと、それ自身の本性（svabhāva）によって（自ずから）成立するものと、本質（prakṛti）によって（生来的に）成立するものと、実体（dravya）として成立するものと（いわゆる）諸々のものが、言説として（プトガラとして仮託されて）成立する〉¹²³と承認されている点などについて（帰謬派の主張とは）違うことも知っておく必要がある¹²⁴。

[44] bye smras rdzas btags 'jog tshul

(2-2-1-2) 毘婆沙師による事物成立に関する解釈方法

[Z38 (17b1)]; [G (20a6)]; [D32. 7]

さらにまた毘婆沙師は、〈物質（*色）と精神（*知）などを徹底的に考察することが必要である〉と執し、さらにまた、〈（空間的）究極に不可分のアトム（*極微）と、時間的継続（*相続）の最短極限である不可分の刹那が存在する必然性がある〉と観じて、〈粗（sthūla）なるものものに、構成要素としての不可分な極微と、相続の構成要素としての不可分な刹那がある〉と認める。そして、（毘婆沙師によれば）、〈細分不可能な（極微と刹那）や虚空などなどの、壊したり分析したりすることによっては（それ）自身を把握する認識がなくなるものものは、実有であり、勝義諦であり、勝義有である。壊したり分析することによって（それ）自身を把握する認識がなくなるものは、施設有であり、世俗有であり、世俗諦である。（真俗）二諦の一切諸物は、作用効果（arthakriyā）の能力を持つ事物（vastu）として成立する。〉と主張する¹²⁵。

[45] mdo sde pas rang mtshan dang spyi mtshan 'dod tshul

(2-2-1-2-1) 経量部による事物成立に関する解釈方法

[Z38 (17b4)]; [G (20b3)]; [D32. 16]

経量部は、〈勝義（paramārtha）に結果を生ずる能力あるものというのは、個別相（svalakṣaṇa）と、勝義諦と、それ自身のあり方によって成立したものとである。勝義（paramārtha）に作用効果を生ずる能力のない諸法とは、総相と、それ自身のあり方によっては成立しないものと、世俗諦である。〉と主張するが、〈個別相・総相の双方ともに、自らの側から成立しているのではない場合には、必然的に存在しない。〉と主張する¹²⁶。

（経量部は、）粗・密・不可分などに関しても、毘婆沙師と同じように、承認しているので、吾が師匠・一切智者（＝チャンキヤ・ロールペエドルジェ）の御見解を示した詩では、

「色法 (bem po) は、インド虎の麗しい縞目模様 (に似たり)。」
と仰られている¹²⁷。

[46] **sems tsam pas rang spyi'i khyad par dang phyi don med par 'dod tshul** **(2-2-1-2-2) 唯識派による自他の区別と外界非存在の主張**

[Z38 (17b6)]; [G (20b6)]; [D33. 4]

唯識派のものたちは、〈尋伺 (vitarka) によって構想されただけのものではなくて自分自身の側から成立するものとは、それ自身のあり方によって (自ずから) 成立するものであり、また真実なるものとして成立するものである。尋伺によって構想されただけの法とは、これとは反対のものである。〉と主張して、〈依他起性 (paratantra) と円成実性 (pariṇiṣpanna) の二者が前者であり、遍計所執性 (parikalpita) は後者である。〉と主張している¹²⁸。

その結果、〈遍計所執性の諸法は、唯識派 (本来) 自派にとって、それ自身のあり方によって成立しない。〉と認めるが、〈どんな法でもそれ自身の側から成立していないならば必然的に無である。〉と主張するので、帰謬論証派の (考える) とおりの、「それ自身のあり方 (rang mtshan)」の意味を、遍計所執についても承認しているのである¹²⁹。

『善説心髓 (Legs bshad snying po)』に曰く、「何らかの基体を、前者 (=唯識派) の (考える) とおりには捉えることはできないが、後者 (=帰謬派) の (考える) とおりに捉えることはあるのである。」と¹³⁰。

しかしながら、(唯識派は、) 毘婆沙師と経量部の如くに、〈不可分である (極微を認めること) をもって粗大なるもの (合成物) を許容しない〉ばかりに止まらずに、〈色などの有為 (の諸法) は内なる知という実在の拠り所から生まれ、無為 (の諸法) も自らを捉える認識根拠と我性が一つである〉と主張することをもって、〈所取 (grāhya) ・能取 (grāhaka) は別の実体を持たず、外の対象物としては存在することはない〉と説く。〈前識が基盤となつての能力によって、後識が対象 (*境) の姿を持つものとして生ずるので、対象と対象を所有するものとは同時に同一の実在として生じ、かくのごとき能力が所縁縁 (ālambana-pratyaya) である。〉と主張する。

所縁縁によって識は、境の姿を持つものとして誕生するけれども、「これが境である。」と尋伺により分別するのは、言語活動に依存しているものであるので、〈諸法は自分自身を把握する尋伺の捉える基体に、個別的特性としては成立しない。〉と主張するのであり、外境を説く (毘婆沙師と経量部) に比べて考えるならば、中観派の流儀ときわめて近いものである。

唯識派自身が主張するとおり、〈外境は存在しないもの〉と証明されているので、(経量部と毘婆沙師) 両派の外境を否定はするが、(経量部と毘婆沙師) 両派の外境を否定するのみによつて (外境が) 唯識だと成立するわけではないのであつて、このような区別は、(経量部より) 上 (の中観部二派) および下 (の毘婆沙師・経量部) の学説の各箇所、

すべてにわたって弁えておく必要があるであろう¹³¹。

[47] rang rgyud pa'i lugs la bdag 'dzin phra rags dang lhan skyes kun btags kyī khyad par

(2-2-1-2-3) 中観自立論証派の「粗・密の我執」と 「自然発生的人我遍計」の区別

[Z40 (18b2)]; [G (21b2)]; [D34. 8]

中観自立論証派では、〈それ自身のあり方 (svalakṣaṇa) によって成立することなどの三つ (= rang gi mtshan nyid kyis grub pa, rang bzhin gyis grub pa, ngo bo nyid kyis grub pa) は言語表現 (* 仮設 vyavahāra) として成立しているものだ〉と説くけれども、真実として成立するとするなどの五つ (= bden par grub pa, don dam par grub pa, yang dag par grub pa, de kho na nyid du grub pa, rdzas su grub pa) は、言語表現としても承認しない¹³²。

自立 (論証) 派以下 (すなわち、帰謬論証派以外の、唯識派・経量部・毘婆沙師など) では、〈(仏教徒以外の) 異教徒が主張するがごとき、常住・唯一・独立なるものを我として執しているのは人我 (プトガラ) の粗大な我執である。自然発生的な (* 俱生 sāhaja) プトガラの実体への執着は人我の微細な我執である。〉と主張している。

これまたさらに、この前者 (= 粗我執) は、異教徒による (存在しないものを存在するとする) 増益 (samāropa) の遍計所執性だけのものであり、また、後者 (= 微細我執) については、犢子部 (Vātsīputrīya) によって (その特異な) 教義の影響の下に執せられているような、似比量の論理 (ābhāsānumāna) に依拠して、自然発生的な実有として妥当だと考え、捉えられる諸々のものなど (を指すのであり)、遍計所執のものや、教義によって仮設されたものには依らずに、本来的な力によってできた、すなわち自然発生的なものなのであって、この思念対象を否定された上で残存する微細な無我なるものを、毘婆沙師や経量部の両者は設定することはできないのである。

したがって、〈プトガラと蘊が、師匠と小間使いの如くに、不同の特徴を持って自力で生まれるように見えて、見えるとおりに存在しているのだ〉と執するのが、自 (然) 生の実有に執する執着の仕方なのである。この執着の思念対象である蘊に依存しない、自力誕生のこのプトガラなるものを否定して、〈プトガラは蘊に基づいて仮設された〉とのみ説く点では、一切所貴部 (Sammitiya) 以外の、自立論証派以下 (の、唯識派も含めた三学派) は (互いに) 相似している。

「蘊に依拠して施設されたのみ」の「のみ (tsam)」の語によって、蘊とは異なる別物である我を否定し、プトガラが施設されて存在する (* 仮有) と説く点では (自立論証派以下は) 共通している。

そして、蘊に依拠して施設する仕方 (lugs) と言えば、(自立論証派は) 意識 (manovijñāna)、(唯識派は) アーラヤ識 (ālayavijñāna)、(毘婆沙師と経量部は) 識の相続 (vijñāna-saṃtāna) (というふうに、三者の中) のいずれか一つに依拠してプトガラを施設

(prajñapti) して、さらに〈それぞれの蘊が我である〉と説くのであり、(他方、)一切所貴部の或るものは、五蘊全体に依拠してプトガラを施設するのである¹³³。

自立論証派以下(の帰謬論証派以外の仏教諸派)が、〈プトガラとは蘊に依拠して施設されたのみである〉と主張しているとしても、蘊がプトガラの施設される基盤であるならば、(必然的に)〈蘊はプトガラでなければならない〉と考え、また、〈蘊がプトガラであると仮定(*施設)しているのである〉と考えており、プトガラの設定対象を探し求めて得ることを主張するが故に、*仮有の対象物(意味する内容)もまた決して完全ではないことは明らかである¹³⁴。

[48] thal 'gyur bas bdag 'dod tshul

(2-2-1-2-4-1) 帰謬論証派による「我」主張の仕方

[Z41 (19a6)]; [G (22b1)]; [D35. 18]

帰謬論証派は、蘊に依拠して設定される自然発生的(sāhaja)有身見(satkāyadr̥ṣṭi)の所縁(=対象であるプトガラ)を述べているが、蘊が我ではないばかりでなく、仮設の対象物を探し求めて得られる法を一つすら説くことがない。自立論証派以下(の帰謬論証派論証以外の仏教諸学派のものたちによる、その主張の仕方のおりであるならば、〈縁起を受け入れることは弱体化してしまう(=ほとんど出来なくなるであろう)〉と説いている、その(=帰謬論証派の)立論はきわめて重要であるが、ここでは詳細は記さない¹³⁵。

帰謬論証派・自立論証派両派ともに、〈プトガラの成立は、正理による審察には堪える(vicāra-kṣama)ものではない〉と称している点では共通しているが、どの程度まで正理による審察に堪え・堪えられないかの境界と、勝義性を審察する境界に至るか・至らないか等々に関しては一致していないのである。

帰謬論証派では、〈我がこの業を積集し、この果を味わう〉という言説を付する(thasnyad btags pa)のみでは満足せずに、言説を付する対象内容として、〈個々の蘊それぞれと、(蘊の)集合と、それとは別の、何らかの物として成立した〉と探し求めて、勝義性を審察する境界と、この探し求め方によって探して、かかる審察の基盤を得ることが生じた時には、〈正理による審察に堪えて成立した〉と(我々の師匠方は)承認なさる¹³⁶。

自立論証派では、かくの如き理論は、これは言説(*世俗)の論理権証(vyavahārika-pramāṇa)であって、勝義性を審察する理論(paramārthika-vicāra)ではないのだから、これによって求めて得られたところで、〈正理による審察にも堪えて(vicāra-kṣama)成立したものではない〉と承認する¹³⁷。

これ(のような自立論証派の立場)によって求める時、〈意識(mano-vijñāna)をプトガラである〉として捉える結果として(このように)承認されることになっているようである。

[49] rang rgyud pas don dam dpyod pa'i mtshams

(2-2-1-2-4-2-1) 自立論証派による「勝義性審察の境界」

[Z42 (19b5)]; [G (23a1)]; [D36. 16]

したがって、自立論証派では、〈諸法が、否定されようのない慧 (abādhita-buddhi) に顕現していることによって外に設定される〉のではなく、〈対象それ自体の在り方 (svataḥ-siddha) の側から成立するか・不成立か〉を審察した上で、〈勝義性の審察 (paramārthika-vicāra) の境界 (内に入るかどうか)〉と、そのように求めて、その審察の基盤を得ることが生まれたならば、〈正理による審察に堪えたもの (vicāra-kṣama) として成立している〉と認定するのである¹³⁸。

実論者 (vastuvādin) たちは、これだけではまだ、〈勝義性を審察の境界 (内に入るもの)〉として、そしてまた、〈正理による審察に堪えるものとして成立している〉とは主張しないで、正理によって求める対象内容を、無為 (法 asaṃskṛta) とか、不可分なる極微とか、不可分なる刹那とかのごとく、なんであれともかく、得ることが可能であれば、〈正理によって審察するに堪えるものとして成立している〉と主張する。

そこで、どれだけの宗派の流儀においてであれ、それぞれの法 (dharma) の固有の在り方 (gnas tshul) に審察を加えて、〈世俗である〉とか、〈勝義である〉との考察をなし、〈至った〉とか、〈至らない〉との境界を究め尽くすことはきわめて重要である。

自立論証派が、〈諸法は、否定されようのない慧 (abādhita-buddhi) に顕現することに基づいて外に設定されるだけでなく、対象それ自体の側から成立している〉と執するのは、微細なる真実執着 (sūkṣma-satyagrāhin) である¹³⁹。

これ (の中) には、唯識派の宗義に基づいて執するかのように遍計所執 (parikalpita) のものと、(特定の) 宗義には依拠しない自然発生的 (sāhaja) なものとの、二種が存在する¹⁴⁰。両者の思念対象 (zhen yul) について、〈真理として成立するもの (satya-siddha)〉と、〈正しいとして成立するもの (samyak-siddha)〉と、〈勝義として成立するもの (paramārthataḥ siddha)〉と、〈真実として成立するもの (tattvataḥ siddha)〉といわれる。これら四者として成立するものは、(いずれも) 〈世俗としても存在することはない〉と (自立論証派は) 考えるのである¹⁴¹。

[50] rang rgyud pas bden 'dzin phra mo dang lhan skyes kun btags 'dod tshul

(2-2-1-2-4-2-2) 自立論証派による「密なる真実執着」と「自然発生的遍計」の主張

[Z43 (20a3)]; [G (23a4)]; [D37. 7]

(自立論証派は) 〈それ自身のあり方によって (自ずから) 成立しているもの〉と、〈それ自身の本性によって (自ずから) 成立しているもの〉と、〈本質によって (生来的に)

成立しているもの〉とは、〈言説（*世俗）として成立しているものである〉と説き、そこで成立していないならば、〈断見に赴くであろう〉と主張する。実有論者たちが、これら8種（の在り方）を、〈認識根拠（pramāṇa）によって成立している〉と認めるか・認めないかの違いについては前述したとおりである¹⁴²。

[51] dbu ma'i lugs la dgag bya khegs tshul dang dgag bya de 'gog pa'i rigs pa (2-2-1-2-4-3) 中観派における、否定対象遮棄の仕方と その否定のための理論

[Z43 (20a6)]; [G (23b2)]; [D37. 17]

中観派では、〈諸法が慧に顕現していることに基づいて設定されないような存在状況はない〉と観察されるならば、〈否定されるべきものが否定されたことになるのだ〉と説く。このような否定されるべきものとそれに執着する分別を〈真实執着である〉と主張するのは、帰謬論証派と自立論証派の双方に共通の流儀である。

この否定されるべきものを否定する理論が重要であり、七種類の審察（saptavidha-parīkṣā）、および、これら（七種）を一つに（統合して、あるいは個々に）切り離して（ekāneka-rahitvatva）審察するの二つにまとめて、それを糸口としての審察を加えることは大変によく知られている通りである¹⁴³。

審察の力によって三昧の境地（samāhitāvasthā）においてこの慧により構設されたのではない（それ以外の）存在を否定する点では、帰謬論証派・自立論証派両派に相違は存在しない。しかしながら、*後得（prṣṭha-labdhi 智）に関しては、帰謬論証派・自立論証派で、〈それ自身のあり方によって（自ずから）成立している（svalakṣana-siddha）対象である法が一種の幻化のごときもの（māyā-sādrśya）である〉と（自立論証派が）主張し、（他方、）帰謬論証派では、〈三昧の境地（samāhitāvasthā）においてこのような真実が否定された後には残るものは何一つない〉との見解によって、〈名目だけが残存する。〉と説く。これが（帰謬論証派・自立論証派両派の間で）一致しない相違点である。

このように、〈プトガラ（という）独立自存が可能な実有への自然発生的な執着と、その思念する対象を棄却することに依拠して、輪廻より解脱できる〉と主張する点では、自立論証派以下（すなわち帰謬論証派以外の仏教諸学派）に共通である¹⁴⁴。

自立論証派により、法とプトガラの双方ともが、〈慧に顕現するから〉との理由で設定されるのではなく、〈対象物の本来のあり方の側から成立している〉と執するのは、〈法我への微細なる執着〉であり、〈知の垢（jñeya-āvaraṇa*所知障）である〉と説かれる¹⁴⁵。知の垢に微細な（垢 sūkṣma-āvaraṇa）と粗大な（垢 sthūla-āvaraṇa）の九種があり、（その九種の知垢の）最初のもので最後のものがそれぞれ二つに分けられて（合計で）十一（種の知垢）になり、〈初地（prathama-bhūmi）から連続する最後の（carama-段階）に至るまでの禪定修習道十一によって（法我への微細なる執着が）棄却されることを糸口として、（一切智者の）仏智が獲得される〉と説くのである。

[52] thal 'gyur ba'i lugs la bdag 'dzin phra mo gnyis kyi khyad par dang gang zag 'jog tshul

(2-2-1-2-4-3-1) 帰謬論証派における、密なる我執 2 種の区別と
プトガラ設定の仕方

[Z44 (20b6)]; [G (24a3)]; [D38. 19]

帰謬論証派に独特の否定対象と、否定の仕方と言え、〈名称・言説 (vyavahārika-samjñā) の力によって設定されただけではない存在として捉えることが、すなわち微細なる真実執着 (sūkṣma-satya-graha) である〉、そして〈この執着する (思念) 対象であり、名称・言説の力によって設定された存在が、このものが、プトガラの上に存在している〉と捉えることが〈プトガラの我執 (pudgala-ātma-graha)〉であり、〈法の上に存在している〉と捉えることが〈法の我執 (dharma-ātma-graha)〉である¹⁴⁶。

このような自然発生的 (*俱生 sāhaja) な執着の双方ともが、〈輪廻の根である無明 (avidyā) と煩惱障 (kleśāvaraṇa) に他ならない〉と説いている¹⁴⁷。

このような自然発生的な執着は、「これを確定することは、言説 (vyavahāra) の力によって設定する仕方と、分別 (vikalpa) によって仮託して (parikalpita) 設定する仕方をよく確定することに依存している」と仰せになっておられ、極めて重要なのである¹⁴⁸。

この仕方 (= 言説や分別の力によって仮設する仕方) でのプトガラを設定する作法は、蘊の集合がプトガラを仮設する基盤となっており、そして、このプトガラを設定する法 (= 材料) と、言語表現として〈吾である〉と思う知が、プトガラをあらしめる知であるという確定を糸口にして知る必要がある。

蘊の集合に基づいて〈吾である〉と思う、この知の対象である、単なる吾これだけに対して、〈アートマン (我)〉とか〈プトガラ (人)〉とかと言われるのであって、これは言説として存在するのであり、〈業果の所依となっている我である〉と言われるのである。

[53] thal 'gyur bas de kho na nyid la dpyod pa'i mtshams

(2-2-1-2-4-3-2) 帰謬論証派による真実性審察の限界

[Z45 (21a5)]; [G (24b2)]; [D39. 15]

この流儀 (= 言説として仮設されたプトガラを認める帰謬派の流儀) の真実性の審察 (tattva-vicāra) の実際の範囲はといえば、自立的な〈吾〉なり〈アートマン〉との言語表現を付したことによる設定だけでは満足せずに、〈何として成立しているか〉をこのようにして探し求めることから (始められる) のである。

その仕方は、また〈吾はここに居る〉とか、〈吾は見たり〉とか〈吾は知 (聴・嗅・味・触) 覚せり〉とか、〈吾は記憶せり〉などなどのこの言語表現だけで満足すべきなのであるのに、これだけでは満足しないで審察すると、自分の眼・鼻等などの、各々あるいは (その) 集合のいずれもが、〈吾〉ではないし、また、これより別のものに〈吾〉が存

在するのでもないことから、「これこそ〈吾〉がそれ自身の本性によっては (svabhāvena) 存在しないという、無いことのあり様である」と(帰謬論証派は)説く。

自立論証派以下 (= 帰謬論証派以外の仏教諸派) によっては、このような〈それ自身の本性によっては (svabhāvena) 存在しない〉の意味を絶対無 (atyantābhāva) として執している。(しかし) このように執するならば、断見 (uccheda-vāda) に陥るであろう。

帰謬論証派によっては、〈それ自身の本性によっては (svabhāvena) 存在しない〉ことをもって非存在 (abhāva-rūpa) と(同義と)は理解しないでけれども、言語表現 (= 世俗諦) として存在することをもって存在と理解することから、一切法は〈それ自身の本性によっては (svabhāvena) 存在しない〉が、〈言語表現としては、一切の在り方を認める〉、縁起(の理法)によって、(实在論・虚無論の) 両極端を回避しているのであり、この(帰謬論証派の) 独自の教えは(他派と) 共通しないものである¹⁴⁹。

したがって、帰謬論証派・自立論証派両派においては、否定されるべきもの (niṣedhanīya) の把握理解に(互いに) 異なる相違 (bheda) 点二つとそれによって(生まれる) 真理についての考察の限界 (tattva-cintana) についても相違が二つ存在する。

この限界をよく確定して知ることなしには、帰謬論証派・自立論証派両派の相異を詳細に弁別することは困難であろう。

[54] thal 'gyur ba'i lugs kyi shes sgrib 'dod tshul / de spong tshul / rdzad yod du 'dzin tshul

(2-2-1-2-4-3-3) 帰謬論証派による「知垢」の主張、 その破棄方法と实在執着の仕方

[Z46 (21b5)]; [G (25a2)]; [D40. 13]

帰謬論証派の考え方による、知垢 (jñeya-āvaraṇa) の主張の仕方はといえば、縁 (pratyaya) と結合していても煩惱を実際に生むことのできない煩惱の習気 (kleśa-vāsanā) と、その結果 (phala) である〈(認識主体とその対象という主客) 二者としての顕現〉という迷乱の見せかけだけの真実にすぎないもの (satya-ābhāsa) について〈(知垢である)〉といわれる¹⁵⁰。

これ (= 所知障 jñeya-āvaraṇa) は細・粗三種あるいは四種となるが、(これらを)、清浄なる三地 (śuddha-bhūmi) によって破棄することを糸口として、一切種智者の智慧を獲得できると説かれるのである。

この(帰謬論証派の) 考え方においては、プトガラを〈独立自存 (svatantra) の実体として实在 (dravyasat) する〉と執する〈粗なるプトガラ我執 (sthūla-pudgala-ātma-graha)〉であると主張する点だけでは、自立論証派などと似ている。が、しかし、自立論証派などが〈微細なるプトガラ我執〉を主張する、实在への自然発生的 (*俱生 sāhaja) の執着 (ātma-graha) に関しては、これ (= 帰謬論証派) によっては〈遍計 (parikalpita) である〉と説かれる。

『善説心髓 (Legs bshad snying po)』には、

「この実有なる (=実体として存在する) 我とは、外教徒によって〈蘊とは別のものである〉と想定される内部器官 (antahkaraṇa) である〈プルシャが存在する〉と執せられている対象のことである」とある¹⁵¹。

従って、こちら (=帰謬論証派) の考え方における、〈実有 (dravya-sat) と、自然発生的我執 (sāhaja-ātma-graha)〉とは、蘊と特質 (lakṣaṇa) を異にするものへの執着ではないのである。

〈商隊長〉と言っても商人 (一般) からの枠外に外れるものではないように、(我は) 蘊の枠外に外れることはなく、蘊の自性をもってして蘊を支配して、〈蘊はこちら側 (=内部) では我を必要としているけれども、そちら側 (=外側) の我を必要とはしていないのであり、(我は) 商隊長のごとくに成立している〉という一つの執着に対して「(自然発生的我執と) 設定する」と(我々の師は) お説きになられているのである¹⁵²。

[55] grub mtha' smra ba bzhi so sos bdag med phra rags kyi 'jog tshul

(2-2-2-1) 仏教四派それぞれによる「粗・密の無我」設定の仕方

[Z47 (22a5)]; [G (25b2)]; [D41. 12]

毘婆沙師 (Vaibhāṣika) は、〈基体が成立しているならば、(それは) 法我 (dharma-ātman) であることによって遍充される (=かならず法我である)〉と主張する。そこで、法無我 (dharma-nairātmya) の粗 (sthūla)・密 (sūkṣma) (を区別した) 設定を認めない。〈常住 (nitya)・唯一 (eka)・独立 (svatantra) のプトガラが成立することが欠如している (= *空である)〉とするのが、〈粗なる人無我 (sthūla-pudgala-nairātmya)〉であり、自然発生的 (*俱生) なプトガラが実有であることが欠如 (*空) していることが〈細密なる人無我 (sūkṣma-pudgala-nairātmya)〉であると設定して、〈細密なる無我〉と〈細密なる人無我〉とは同義であると主張する。

十八部派の内的一切所貴部 (Sammitīya) の五派では、独立自存の実有の我を認めるので、これが欠如していることを〈細密なる人無我〉だと主張することはない¹⁵³。

帰謬論証派を除く、自立論証派・唯識派・経量部・毘婆沙師の四派は、細密なる人無我を設定する仕方が類似しており、帰謬論証派・唯識派・経量部の三者の流儀 (=教説) では、〈細密なる人無我は空性である〉と主張している¹⁵⁴。

毘婆沙師の教説においては、三種の相 (trilakṣaṇa) の在り方 (*三性説) を述べることなく、また *空性も主張しないことは、よく知られているが、『俱舍論』第八章 (aṣṭama-kośa-sthāna) に、「無相 (三摩地) (ānimitta-samādhi) に寂靜の相 (śama-ākāra) あり。空 (三摩地) (śūnyatā-samādhi) に空性・無我 (śūnyatā-anātma) の相あり。」云々とあることより推測すれば¹⁵⁵、空・無我の両者に関して、空性の言語表現が存在しているようではある。

経量部による、細密なる人無我を主張する仕方と、法無我を容認しないことは前者 (=

毘婆沙師)と相似している。(経量部は)〈三性の中の依他起性 (paratantra) (だけ)が真理として成立しており、遍計所執性 (parikalpita)・円成実性 (pariniṣpanna)の二者は真理として存在しないものである〉と主張する(が、そうであれば)〈円成実性が真理として存在しないならば、細密なる人無我は円成実性と空性の両者であるので、無間道 (ānantarya-mārga)の顕現対象 (pratibhāsa-viṣaya)としては不適切である。したがって、無間道の直接的な量 (dngos gzhal)を立てることができなくなろう〉と考える(かもしれない)。

(しかし、そうではなくて)この(経量部の)教説においては、〈この細密なる人無我は、三(声聞・縁覚・菩薩)乗の無間道の間接的な(所)量 (shugs gzhal)であり、人我がない(静まった)、かの潜在的影響力 (*行 saṃskāra)が、その(=無間道の)直接的な(所)量であり、顕現対象である〉と主張するので、過誤は存在しないのである¹⁵⁶。

毘婆沙師のように(経量部も)、〈無常性 (*非常 anityatā)〉などの十六(心)所縁 (ālabana)を¹⁵⁷、どれであれ、心の依持である第四静慮 (caturtha-dhyāna)の頂点と結び付けて修習することによって、独覚と菩薩の道の最後の四つを経過する。〈無常性 (*非常 anityatā)の所縁〉など(の中の)いずれかを、無漏 (anāśrava)である九地(の中の)いずれかに依拠して修道することにより、声聞の阿羅漢(果)をかならず獲得するのである¹⁵⁸。

経量部の教説においては、〈三乗(声聞・独覚・菩薩すべての)の最後の四つの道(すべて)が、我が滅却された潜在的影響力 (ātma-vivikta-saṃskāra)だけを所縁として認識することに基づいて、新たに必ず生起するであろうか〉と考えて、審察がなされるべきである。

唯識派・自立論証派・帰謬論証派の三者は、〈無間道の間接的な(所)量はない〉と主張しており、唯識派と帰謬論証派は、〈その(無間道の)直接的な(所)量は微細なる空性によって包括される〉と述べており、自立論証派は、微細なる法無我および微細なる人無我を設定する。

[56] sems tsam lugs la bdag med phra rags 'jog tshul

(2-2-2-2) 唯識派説における「粗・密の無我」設定の仕方

[Z49 (23a5)]; [G (26b4)]; [D43. 12]

唯識派の教説において、微細なるおよび粗なる人無我の設定の仕方は、前二者(=毘婆沙師と経量部)と一致しているが、いささか異なる点は、(唯識派は)〈微細なる人無我を空性である〉と主張している(点である)。

(唯識派においては)法無我に関して、

- 1) (識)自身を捉える分別の思念対象について、それ自身のあり方によって(自ずから)成立しているものが空である(=欠如している)とすることと、
- 2) 所取と能取の二者が空であることと、

3) 外境の空であること（などなど）

を〈微細なる法無我である〉と（設定し）、〈不可分なる極微の集合である外界の境が空であること、これが粗なる法無我である〉と述べて、〈細なる二種の無我（＝人無我と法無我）がともに空性（＝空を本質とするもの）である〉と主張するのである¹⁵⁹。

[57] rnal 'byor spyod pa'i dbu ma pa'i lugs la bdag med phra rags 'jog tshul

(2-2-2-3-1) 瑜伽行中観派説における

「粗・密の無我」設定の仕方

[Z50 (23b1)]; [G (27a1)]; [D43. 20]

瑜伽行中観自立論証派によってもまた、〈人無我に細と粗がある〉と主張する仕方は、毘婆沙師と類似しているが、（瑜伽行中観自立論証派では）法無我に関して、

1) 所取と能取の両者が空である（＝欠如している）こと、

2) 外境が空である（＝欠如している）こと、

3) （識）自身を捉える分別の思念対象について、それ自身のあり方によって（自ずから）成立しているものが空である（＝欠如している）とすること、

（の以上3つ）を〈粗なる法無我である〉とし、真理として成立している（*諦成就）の空と、真理として存在しない（*諦無）と*勝義諦（の以上の3つ）を〈微細なる法無我である〉と主張する¹⁶⁰。

〈一切法は言説表現（*世俗）において、それ自身のあり方によって（自ずから）成立している〉と主張するので、分別によって仮に託されただけのものとか、名前とか協約（saṃketa）によって設定されただけのものとかを受容することなく、〈一切法とは、知あるいは分別に顕現していることをもって設定されているだけにすぎない〉と主張する。

[58] mdo sde spyod pa'i dbu ma rang rgyud pas bdag med phra rags 'jog tshul

(2-2-2-3-2) 経量行中観自立論証派説における

「粗・密の無我」設定の仕方

[Z50 (23b4)]; [G (27a4)]; [D44. 9]

経量行中観自立論証派が、〈微細なる（人無我）と〉、〈粗なる人無我〉の両者と〈微細なる法無我〉を設定する仕方は、上述（＝瑜伽行中観自立論証派）のものと類似しているが、〈粗なる（法無我）〉を設定する仕方は類似せず、不可分なる極微が積集してできた外境が存在しないことを〈粗なる法無我〉と主張するのは、唯識派と共通している。

〈基体として成立（＝認識根拠によって成立）しているならば、自身を捉える分別の思念対象としてはそれ自身のあり方によって（自ずから）成立しているものであり、（これと）外境として成立しているものの両者によって包括される（＝かならずこの両者であ

る))と(経量行中観自立論証派は)主張するのである¹⁶¹。

[59] *thal 'gyur ba'i lugs la bdag med phra rags 'jog tshul*

(2-2-2-4) 帰謬論証派説における「粗・密」の無我設定の仕方

[Z50 (23b6)]; [G (27a6)]; [D44. 15]

帰謬論証派の教説においては、〈プトガラ(人)が、独立自存の実有として成立していることについて空である(=欠如している)〉というのが、〈粗なる人無我〉であり、また、〈プトガラ(人)が本性によって成立すること(svabhāva-siddhi)について空である(=欠如している)〉というのが、〈細密なる人無我〉である。

(帰謬論証派の教説においては、)〈不可分なる極微が積集した粗なるもの、およびこれを把握する認識手段が別の実体として空である(=欠如している)〉というのが、〈粗なる法無我〉であり、〈(我を)施設する基体である蘊が真実には空である(=欠如している)〉というのが〈細密なる法無我〉であるとする。

細密なる無我(人無我と法無我)二つは、否定されるもの(所断)の面からではなく、空の基体の面から区別されるのであって、拠り所(基体)であるプトガラ(人)の上に否定されるべきものである〈真実として成立していること〉を否定するのが〈微細なる人無我〉であり、拠り所(基体)である蘊などの上にこれ(=〈真実として成立していること〉)を否定するのが、〈細密なる法無我〉であるとするからである。

〈細密なる人無我と(細密なる)法無我の両者には細密と粗大の区別は存在せず、究極の在り方である〉と主張される¹⁶²。

(結びとして)

[60] *grub mtha' smra ba bzhis rtag chad kyi mtha' spong tshul*

(2-2-3) 仏教四部派による、常見・断見の両極論破棄の仕方

[Z51 (24a3)]; [G (27b4)]; [D45. 6]

(仏教四部派による教説の説示：)

四宗は、それぞれ独自の仕方、常住論と断滅論の両極論を捨てている。その仕方とは言えば、

毘婆沙師たちは、〈結果が生じた時には原因(の存在)は否定されるから、常住の極論(*常辺)は捨てられる。原因の終尾が失せる(同)時に結果が生じるから断滅の極論(*断辺)を捨てられる。〉と説く。

経量部たちは、〈もろもろの有為が途切れなく起ることで断滅の極論(*断辺)を捨て、一刹那毎に滅することで常住の極論(*常辺)から解放される。〉と主張する。

唯識論者たちは、〈遍計所執（のもの）が真実としては成立していないことを用いて常住の極論（*常辺）を捨てる。依他起（のもの）が真実として成立していることを（理由に）用いて断滅の極論（*断辺）を捨てる。〉と述べている。

中観派のものたちは、〈一切法が言説表現（*世俗）としては存在することを用いて断見（を捨て）、勝義としては存在しないことを（理由に）用いて常住の極論（*常辺）から解放される。〉と考え、お説きになっている。

このように、毘婆沙師と経量部の二派は、〈無常を了知する智慧を、中道の究極として認めるべきである〉（と考える）点では類似している。しかし、それぞれが自派流の仕方で細・粗の無我それぞれに基づいたとしても、どちらの場合でも（常見と断見の）両極端の捨離を確定的にする必要がある。そこで、これ（＝両極端の捨離）を全般的にであれ、あるいは一つの相の基体（＝具体例）だけについてであれ、（それぞれの学派が）考えていることは明白である。

帰謬論証派の尺度からすれば、自立論証派以下の仏教内部の諸派は、常（見）・断（見）の両極端に（実際には）墮ち込みながらも、それぞれ自派の考え方が〈常（見）・断（見）の両極端から離れている中（＝離辺中道）を堅持している〉と誇って、中道派を僭称しているのである。

[61] grub mtha' la mchog dman dang snga ma phyi ma'i thabs su 'gro tshul (2-2-4) 宗義における優劣・前後を方便として活用する仕方

[Z52 (24b3)]; [G (28a4)]; [D46. 3]

したがって、これらの宗派間には、優劣の異なりが存在するのである。にもかかわらず、「大乘の教義が最高である」といって、小乗の教義を軽視しているのは適正ではない。これら（＝小乗仏教）もまたブツダの追隨者たちであるし、そればかりではない。

一切智者ゲドンギャムツォ（ダライラマⅡ世）が、

「より下の低い見解は、さらにより高く上への階梯である。」

と仰っておられるように、（宗派）各々の独自の教理は、一・二の例外は除いて、

〈常住・唯一・独立の我（アートマン）が空である（＝欠如している）こと〉と、

〈自然発生的起（独立自存）の実有が空である（＝欠如している）という無我〉と、

〈所取・能取の双方が空である（＝欠如している）こと〉という（以上の三種の）真理と、

〈一切法はそれ自身のあり方によって（自ずから）存在するが、勝義には自性が存在しないことと、一切法は世俗としてもそれ自身のあり方によって（自ずから）成立していることは、塵ほどにも存しないが、因果・繫縛と解脱に関して所作者・能作者のすべての成立が容認される〉という、〈一連の無我について、（その順番に従って次々と）一つ後続するものから、（その）一つ先行するものを理解することは容易である〉ということ、

〈先行するものは、（それぞれが自分の）後に続くものに入る方便である〉というこ

と。

(以上の諸点は、) 経典と大乘(諸師)たち、それに、ジェ大師(ツォンカパ)御自身の『善説心髓 (Legs bshad snying po)』において仰っておられるとおりなのであって、誰か或る人に低次の宗義の見解を教えて、次第を追って(段々に)高次(の宗義)へと導くならば意味(利益)あることとなろうのに、最初から高度(の教え)を教えるならば、益よりも弊害の方が大きくなることもあろうが故にである。

仏教・外教の個々の宗義それぞれの主張内容とは、詳しくは宗義の論書などに詳細に存するので、今ここでは記さない。

(章末の結頌)

(以上の内容を)頌にして曰く。

(その中の) どれか一つを了解するならば、自派と他派の教義の違いを知ることになるような、

学識者の集う座に驚異の話題の音曲を宣唱する(ことに自在な)力があり、心地好く響く旗印を公平中立なる丈夫が掲げ持つ(ような)

宗義の真理を開示することに、

ああ、一体全体、誰が努力を惜しむであろうか?

このようであるならば、かつて昔の

多くの学識者たちが、まさにこの内容の話題を広く明らかになさり終わっているのであるから、

証明し終わっていることを(さらに今)証拠立てる必要がどこにあるだろうか?

もしも、新しく善説という宝玉の塊を

山積み積み重ねたとしても、富裕な商人が宝の心髓を、貧者の街の

路上に撒き散らしたように、(一体)、誰の益になろうか?

インド・チベットの賢者の善説（の）巻物すべて
財物としての名目だけで、洞窟の
書架の飾りとして休眠している今のような時に
吾人の如く根底から小人・菲才のものに、（書架に）向う意欲（を
発させる）、

以上の目的で、今ここで、記述されるべき総体（残り）が
充実し完成ぶりを示すようにと
聖なる地（インド）の宗義の最高の部分を
僅かばかり説示できたことで満足を知るべきなのであろう。
というのもまた、中休みの偈頌である。

『すべての宗義の淵源と主張趣旨を説示する『善説水晶鏡』より、
聖地インドにおける外教と仏教の宗義の発生の様相を説く（序章）終る。

序章 「インドの思想と仏教」 訳註

¹[1] 〈甚深と廣大〉

チベット仏教教学においては、顕教的伝承として、世尊——弥勒——無着——解脱軍——寂護へと連なる「廣大行派の流れ (rgya chen spyod pa'i rgyud)」の系統と、釈尊——文殊(妙音)——竜樹——提婆——仏護——月称へと連なる「甚深観派の流れ (zab mo lta ba'i rgyud)」の系統があり、前者すなわち廣大 (udāra) 行の系統が主として『現観莊嚴論』の研学に基づく唯識瑜伽行派であり、後者すなわち甚深 (gambhīra) 観の系統が『入中論』を中心とする研学に基づく中観派であって、これらによりインド大乘仏教の二大潮流が形成されていると理解されてきた。そして、これら二者に、密教タントラの伝承としての持金剛 (Vajradhara) ——ルイパ——ドリルパ——ドンビヘルカ——ナロバ等の「加持祈祷の大成就師 (nyams len byin rlabs bla ma)」の系統の密教的伝承が加えられて、「三種相續伝承 (brgyud pa'i chu bo nam gsum)」に統一され、展開したものがツォンカパによるゲルパ (黄教) の宗義学であり、その根本聖典が『ラムリム』に他ならないとされる。長尾雅人：『西藏佛教研究』(岩波書店、1954)、pp.24-34。我が国における本分野研究のパイオニア的成果結実とも云える上掲書には、典拠として Blo bzang bskal bzang rgya mtsho (第七世ダライラマ) : *brGyud pa gsum ldan gyi dngos brgyud bla ma rnams la gsol ba 'debs shing dngos grub zhu ba'i gdung dbyangs dge legs char 'bebs* が記載されている。

²[1] 〈了義 (完成された教え nīta-artha) と未了義 (未完成な教え neya-artha)〉

ツォンカパの『了義未了義善説心髓 (Drang nges legs bshad snying po)』は、『解深密経 (Samdhinirmocana-sūtra)』によって唯識瑜伽行学派の思想を論ずる第1部と、『無尽意経 (Akṣayamati-nirdeśa)』によって中観派の思想を論ずる第2部とから構成されている。了義・未了義に関しては、その第2部冒頭で『無尽意経』・『三昧王論』第7章第5偈・『中観光明論』・『瑜伽師地論』「本地分」・『智慧莊嚴光明論』を典拠としてツォンカパによって詳論されている。御牧克己他：『大乘仏典 15 ツォンカパ』(中央公論社、1996) 訳注に、対応する梵文断片・チベット語原本各版所在箇所への提示がなされ、先行訳書研究：Thurman, 片野、法尊を掲げる。

³[1] ナーガールジュナ Nāgārjuna: klu sgrub 龍樹 (150-250) See[33]Note.

⁴[1] アサンガ Asaṅga: thogs med 無着 (310-390/395-470) See[37]; [38]Notes.

⁵[1] アーリヤデーヴァ Āryadeva: 'phags lha 聖提婆 (170-270) See [34]Note.

⁶[1] アーリヤシューラ Āryasūra: dpa' bo 聖猛 (3c-4c)

⁷[1] バーヴィヴェーカ Bhāviveka: legs ldan (byed), Bhavya 清弁 (490-570)

江島恵教：「Bhāvaviveka / Bhavya / Bhāviveka」、『印度学仏教学研究』28-2 (1990, Tokyo), pp.846-838. の写本報告によって、Bhāviveka が定着してきている。ただし、チベット大蔵経刊本 *MHK* (D.dsa40b6; P.dsa43b6) および *TJ* (D. dsa329b2; 380a4) の奥書では、いずれも "slob dpon (chen po) Bhavya-s mdzad pa rdzogs so" と記されていることにも注意を喚起しておきたい。

⁸[1] ブッダパーリタ Buddhapālita: sangs rgyas bskyangs 仏護 (470-540) See[35].

⁹[1] チャンドラキールティ Candrakīrti: zla grags 月称 (600-650) See[35].

¹⁰[1] シャーンティデーヴァ Śāntideva: zhi lha 寂天 (650-700)

¹¹[1] ヴァスバンドウ Vasubandhu: dbyig gnyen 世親 (380-420/400-480) See[39].

¹²[1] ハリバドラ Haribhadra: seng ge bzang 獅子賢 (800ca.)

¹³[1] スティラマティ Sthiramati: blo brtang 安慧 (510-570)

¹⁴[1] デイグナーガ Dignāga: phyogs glang 陳那、域竜 (480-540)

アサンガ、ヴァスバンドウに続く唯識派の流れに属し、仏教論理学の創始者とされる。チベットでは、「六人の世界の飾り」(‘dzam gling rgyan drug) の一人に数えられる。著作としては義浄の『南海寄帰内法伝』に挙げられる「陳那の八論」が有名であるが、中でも『集量論 (*Pramāṇasamuccaya*)』は、チベットにおいて『量経 (*tshad ma'i mdo*)』として特に重んじられる。ツォンカパによる註釈も残されており、その解釈の経緯についてはトゥカンにも取り上げられる (立川他 [1995: p.8, 11])。また、その伝記については、プトン (Obermiller[pp.149-152])、及びターラナータ (寺本 [pp.198-201]) を参照のこと。ただし、彼がヴァスバンドウの直接の弟子であったという記述については、『集量論』の記述との整合性に問題がある (Hattori, Masaaki, *Dignāga, On Perception*, Harvard University Press, Cambridge 1968, pp.2-3.)。^(三代)

¹⁵[1] ダルマキールティ Dharmakīrti: chos grags 法称 (600-660)

デイグナーガに始まる仏教論理学派の流れに属し、認識論・論理学分野に関して、仏教内外を問わずその影響は看過できない。チベットにおいても「六人の世界の飾り」の一

人に挙げられており（立川他 [1995]）、特に主著である『量評釈』に対しては、ツォンカパの二大弟子であるタルマリンチェンとゲーレクパーサンポなどによる多くの注釈が残される。著作については、後注 68 の [27] 〈七部論理学書〉を参照のこと。また、伝記は、プトン（Obermiller [pp.152-155]）、及びターラナータ（寺本 [pp.247-258]）に見ることができる。ただし、伝記中で言及されるシャンカラ及びクマーリラとの時代的關係については問題がある。（宮坂宥勝「ダルマキールティの生涯と作品（上）（下）」密教文化 93/94, 1970-1971. 戸崎宏正『仏教認識論の研究——法称著『プラマーナ・ヴァールツェイカ』の現量論——』上, 大東出版社, 1975）^(三代)

¹⁶[1] グナプラバ Guṇaprabha: yon tan 'od 徳光 (5c-6c)

5-6 世紀頃のインドの根本説一切有部律に通暁した学者。『プトン仏教史』も『ターラナータ』もともに、〈ヴァスバンドウの弟子〉と記録し、トゥカンの本書においても後述の箇所に〈ヴァスバンドウ御自身よりも戒律に通達している弟子〉(Z35 (16a3)) として言及されている。チベット大蔵経には『律経』（北京版 No.5619）・『律経註』（北京版 No.5619）; (同 No.5624) をはじめとする全 8 点が彼の著作として収録されており、チベット仏教では、戒律の伝統を伝える第一人者として彼の名が筆頭に挙げられるのが常である。玄奘の『大唐西域記』巻 4（大正 51 巻 891a-c）に掲げられる徳光（瞿拏鉢刺婆）と同一人であるかは不明。

¹⁷[1] シャーキヤプラバ Śākyaprabha: shākya 'od 釈迦光

『ターラナータ (Tāranātha)』・『パクサンジョンサン (Pag Sam Jon Zang)』は、彼・釈迦光をシャンティプラバ（寂光）の弟子とし、カシュミールにて衆生の饒益に資したとする。チベット大蔵経には、種々の経疏類や中観部・因明部にわたって全 35 点が彼の訳書または校閲書として収録されている。

なお、以上のインド仏教思想家の生存年代については、特記しないかぎり、三枝充恵編：『インド仏教人名辞典』（法蔵館、1987）の記載に従い、一応の目安を示す概略年代である。

¹⁸[1] Dīpaṃkara-śrī-jñāna = Atīśa (982-1054)

インド・ヴィクラマシラー僧院の学頭で、チベットに入り（1042）、主著『菩提道灯論 (Bodhipathapradīpa)』を著述し、多くの仏典のチベット語訳出にも従事して、のちのカダム派祖ドムトゥンの師となる。チベット後伝期 (phyi dar) に大きな貢献をなし、彼の主著はゲルク派宗祖ツォンカパの『菩提道次第論』の範となっている。羽田野伯猷：「アティーシャおほえ書」、『チベット・インド学集成』第三巻（法蔵館、1987）、pp.255-274 参照。

¹⁹[1] Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357-1419)

ツォンカパ (宗喀巴)。チベット最大の支配的仏教宗派であるゲルク派 (黄帽派) 宗祖・ガンデン寺初代座主。彼の思想・経歴の詳細については、松本史朗：『チベット仏教哲学』(1997)、および『西藏仏教宗義研究』第七巻：「ゲルク派の章」(東洋文庫, 1995), p.xii. およびそこに引用の参考文献：長尾；ツルティムケサン；Schulemann; Kaschewsky; Thurman 他、原典資料を参照。

²⁰[1] rGyal tshab rje Dar ma rin chen (1364-1432)

ツォンカパを継承して第2代ガンデン寺座主。『西藏仏教宗義研究』第7巻 (1995), p. xii; p.53、参照。

²¹[1] mKhas sgrub rje dGe legs dpal bzang (1385-1438)

第3代ガンデン寺座主。『西藏仏教宗義研究』第7巻 (1995), p.xii, p.60-62. 参照。

²²[1] 〈遊戯金剛 (iCang skya rol pa'i rdo rje)〉

チャンキヤ2世・ロールペードルジェ (1717-1786)。Grub mtha'i rnam par bzhag pa gsal bar bzhad pa thub bstan lhun po'i mdzes rgyan (1736-1746) の著者であり、トゥカンの師匠。両者の密な交流については、解説を参照されたい。チャンキヤの伝記としては、Chu bzang ba ngag dbang thub bstan dbang phyug: rDo rje 'chang lcang skya rol pa'i rdo rje ye shes bstan pa'i sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa dad pa'i padma rnam par 'byed pa nyi ma'i 'od zer (1787); Thu' u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma: Kyab bdag rdo rje sems dpa'i ngo bo dpal ldan bla ma dam pa ye shes sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa mdo tsam brjod pa dge ldan bstan pa'i mdzes rgyan (1794) がある。刊本などの詳細については、Vostrikov, *op. cit.*, pp.97-98 et. passim. 『西藏仏教宗義研究』第四巻：「モンゴルの章」(東洋文庫, 1986), p.15, p.143 以下を参照。

²³[1] 〈マイトリーの御足 (rJe btsun ngag dbang byams pa)〉

Skt. Maitrī (弥勒) = 〈Tib. byams pa という語が名前の最後に付く僧侶〉という意味で、rJe btsun ngag dbang byams pa を指す。彼は Byams pa rin po che (1682-1762) とも呼ばれ、チベットで評判の四大寺院 grwa sa chen po bzhi と二密教僧院 rgyud pa stod smad の寺院縁起書 Pad dkar phreng pa の著者として名高い。弟子 Yongs 'dzin ye shes rgyal mtshan が著した彼の伝記の所在については、Vostrikov, *Tibetan Historical Literature*, p.218 参照。

²⁴[1] 〈ラトナ (宝石 Skt. ratna = Tib. dkon mchog) の御名をお持ちの方)

ジャムヤンシェーペードルジェ2世・コンチョクジクメーワンポ (dKon mchog 'jigs med dbang po 1728-1791)。彼の伝記については、Gung thang dkon mchog bstan pa'i sgron me: Dus

gsum rgyal ba'i spyi gzugs rje btsun dkon mchog 'jigs med dbang po'i zhal nga nas kyi nam thar pa rgyal sras rgya mtsho'i 'jug ngogs (1799). *The Collected Works* 他刊本などの詳細については、Vostrikov, *op.cit.*, p.90, および『西藏仏教宗義研究』第四卷（東洋文庫, 1986), p.15, p.143 以下参照。

²⁵[1] 〈四去・四避去 gamaṇa?〉

'gro ba bzhi yi dbang gyur 四種類の避けなければならない状況。律典（毘奈耶經）に説かれる。

- 1) 'dun pas 'gro ba 師匠が弟子の親族・親友である、愛好関係にある場合。
- 2) 'jigs pas 'gro ba 師匠が弟子に怖れを懐いている、怖畏関係にある場合。
- 3) zhe sdang gis 'gro ba 師匠が弟子に怨念を持っている、怨恨関係にある場合。
- 4) rmong pas 'gro ba 師匠が弟子のことを理解できない、非了知の関係がある場合。

秘法伝授の師匠（*屏教師 *gsang ston slob dpon: raho 'nuśāṣaka, Mvyut.*）と受戒の弟子との間に存して、回避（*遮難）されるべき四種類の関係（蔵漢辞典による。Vol. 1, p.518）。なお、平川彰：『原始仏教の研究』、p.467; p.480; antarāyike dhamme :bar chad 'dri bar 'gro ba bzhi; p.496 参照。ただし、文脈上から見て、律典に関する蔵漢辞典の「四避去」をこの箇所適用すべき、はたして妥当な叙述であるかは、疑問の余地がある。

²⁶[5] 〈マハーサンマタ王〉

Mahāsammata-rāja、摩訶三摩多、衆所許、大平等などと漢訳される。劫初の民衆によって選ばれた世界初めての王で、釈迦族の先祖と考えられる。*Jātaka* II, p.311 を始め、『起世経』（大正 1 卷 362c-363a）・『四分律』31（大正 22 卷 779a）・『彰所知論』上（大正 32 卷 231a）他、出典多数。赤沼智善：『印度佛教固有名詞辞典』巻末の対照表参照のこと。

²⁷[8] 〈すべての宗義の最初〉

ICang skya Grub mtha' (14b5) には、"mu stegs kyi lugs byung ba'i rim pa ni khyad par (15a1) 'phags bstod kyi 'grel pa las bskal ba dang po'i dus kyi tshe lo tshad med pa na bram ze ser skya zhes bya ba zhig gyis ..." とあり、本箇所はチャンキヤのこの文に基づく記述と思われる。ただし、チャンキヤは、典拠として Prajñāvarman 著の『殊勝聖讚廣釈 (*Viśeṣastava-nāma-īkā*)』（大谷 No.2002）に依ることを明らかにして、「第一劫 (bskal ba dang po) の人寿無量歳の時において」としている。『殊勝聖讚廣釈』については次の注記 28 を参照。

²⁸[9] 〈リシ（聖仙）の初めを「ヴィヤーサ」とする。〉

"tshe lo nyi khri pa'i dus su drang srong rgyas pa", *Mvyut.* No.3467, Lokesh Chandra Dic.(24) に "Vyāsa" の訳語とする。「ヴィヤーサ」の名は、*MBh.* の伝承上の作者、あるいは論理哲学者として名高い人物 Bādarāyaṇa-Vyāsa、あるいは *Vedānta-sūtra* またはヨーガ学派の

Pātañjali-Yogasūtra-Bhāṣya の著者に見られる。Mittal, p.97 は、この宗義書における言及は、以上のいずれとも同一人物ではないとする。確かにジャイナ教とも関係する裸形隠者 nagna であると考えられ、その追隨者たちを rgyal ba pa'am gcer bu ba とするのは、ジャイナ祖師ジナ rgyal ba との混同が看取される。チャンキヤにおいてもこの箇所の詳細および典拠は不明である。(ただし、チャンキヤによって直前に言及される『殊勝聖讚廣積』("/ ne tsos nyi ma brtol nas ni // thar pa mchis par bshad ces grags /," (No.2001, 3a8); / ka shi mdses dga' mo la ni // rgyas pa yongs su chags rnam par 'gyur /", (No.2001, 3b2); "ne tso ni rgyas pa'i bu'o", (No.2002, 21a3) の記述との関係を考えれば、ヴィヤーサ仙が天女グリターチーが化身した五色の鸚鵡の美しさに精を漏らし、息子シュカ (= 鸚鵡 Skt. śuka = Tib. ne tso) を持つに至った MBh. の傳承上の作者であるヴィヤーサの伝説と合致する。『殊勝聖讚廣積』の伝える解釈がチベット宗義書で取り上げられ、一般的となったと考えられる。See Vettam Mani ed.; *Purāṇic Encyclopaedia* (1975, Delhi), p.886. また、『入楞伽經』には、ヴィヤーサへの言及が多出している。(LS. Skt. pp.362-363; 毘耶娑 (大正 16 卷 534a) ; 毘夜娑 (638c)。チベット宗義書への『楞伽經』の影響の大きさを考えるとき、無視できない。Cf. *lCang skya Grub mtha'* (14b2; 17b6).

²⁹[10] 〈「ローカチャクシュが根本書 10 万部を編纂」〉

lCang skya grub mtha' (17b3) は、「Avalokitavratā および Bodhibhadra の説に依る」として典拠を挙げている。

³⁰[11] 〈足目仙〉

Akṣapāda, *Mvyut.* 3466, 「ウマーの警護に任命されたが、……足目仙と称せられる。」。 *lCang skya Grub mtha'* (35b4-) ; *lCang skya Grub mtha'* (27a3) に同文あり。Vidyābhūṣaṇa はガウタマとアクシャパーダの一致については、別説を掲げる。

³¹[13] 〈九十六種悪見〉

ya mtshan can gyi lta ba dgu bcu rtsa drug

lCang skya Grub mtha' (11b3) と一致。

³²[13] 〈十四無記〉

lCang skya Grub mtha' (11b3) と一致。 *lCang skya Grub mtha'* (45a4) 参照。なお [13] 〈六十二見〉の注記 33 参照。

³³[13] 〈六十二見〉・〈『梵網經』〉

Brahmajāla-sutta in *Dīgha-Nikāya*; 『梵動經』、『長阿含經』所収；志謙訳『仏説梵網六十二見經』；金倉圓照：『印度古代精神史』(岩波書店、昭和 14 年)、pp.161-166. ; 宇井伯壽：

「六十二見論」、『印度哲學研究』第三（岩波書店、昭和40年）所収、pp.203-302.; 中村元：『思想の自由とジャイナ教』、(中村元選集・決定版第10巻)、pp.37-52.; 中村元：『ゴータマ・ブツダ』上、p.56. 『中観宝灯論 (*Madhyamaka-ratnapradīpa*)』 (D262b7) に「六十二見」に言及する。「十六見」、宇井、前掲書、p.287; 「十難」宇井、前掲書、p.291; 「十四無記」p.289 参照。

³⁴[13] 〈二十八見〉

lCang skya Grub mtha' (11b4) と一致。

³⁵[13] 〈二十悪見〉

lCang skya Grub mtha' (11b4) と一致。

³⁶[13] 〈『思釈炎』によると百十見〉

lCang skya Grub mtha' (11b4) と一致。

³⁷[13] 〈見解の区別は三百いくつか〉

lCang skya Grub mtha' (13a5) と一致。金倉圓照：『印度古代精神史』（岩波書店、昭和14年）、pp.166-173. には、ジャイナ教の「三百六十三見」について、F. Otto Schrader: “*Über den Stand der Indischen Philosophie, zur Zeit Mahāvīras und Buddhas*”, (Strassburg, 1902) および W. Schubring: “*Worte Mahāvīras*”, (Göttingen, 1926) を用いて、論じている。また、ジャイナ教における「363の数字」へのこだわりと、その多用については、中村元：『思想の自由とジャイナ教』、(中村元選集・決定版第10巻)、pp.51-56. に詳述されている。中村元：『ゴータマ・ブツダ』上、p.56. 「三百六十三見 (*lta ba sum brgya drug cu rtsa gsum po*)」としては、『思釈炎』*TJ.*(D278a3-279a3), ad *MHK* Chap. IX, v.19. に詳細な言及があり、実際には122分派名を羅列した提示がある。『中観宝灯論 (*Madhyamaka-ratnapradīpa*)』 (D262b2, D262b7) に「六十二見」、また (D263a) 以下には「三百六十三見」として言及があり、実際には九十三分派名を提示されている。

³⁸[13] 〈学問自在 = 法称〉

チベット仏教において、ダルマキールティはこの名で呼ばれて尊崇されてきた。rig pa'i dbang phyug chos kyi grags; Vidyeśvara-Dharmakīrti; Naiyāyika-īśvara Dharmakīrti として、Lokesh Chandra: *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, p.2250 に *Bhadrakalpika-sūtra* 1118 からの図像掲載あり。Cf. *lCang skya Grub mtha'* (11b2f); (22a1).

³⁹[14] 〈断見1派・常見8派〉

lCang skya Grub mtha' (15b2-3) と一致する。

他方、*dKon mchog Grub mtha'* では "rtsa ba'i sde drug tu yang bshad de / bye brag pa dang / rigs pa can pa dang / grangs can pa dang // dpyod pa ba dang / gcer bu pa dang/ rgyang 'phen pa rnams so'", (*dKon mchog Grub mtha'*, p.70) と述べて、これら根本六学派の中で、常見派はヴァイシェーシカ・ニヤーヤ・サーンキヤ・ミーマーンサーの五派で、断見派はローカーヤタだけとされ、この他にヴィシュヌ派 (khyab 'jug pa)・シヴァ派 (dbang phyug pa)・ジャイナ教 (rgyal ba pa)・カピラ派 (ser skya pa)・ブリハスパティ派 (phur bu pa) を「理屈好きの五派 (rtog ge sde lnga)」と称していて、トゥカンの外教分類とは異なる。

⁴⁰[15] 〈「太陽は昇る。」・「水は低きに流れる。」・「茨には棘がある。」・「孔雀の羽は美しい。」〉

以下に、比較参照のためにトゥカンと、先行する宗義書 2 点 (*Rin po che'i phreng ba, lCang skya Grub mtha'*) の叙述の一致する箇所をボールド字で掲げた。いずれとも同意味ではあるが、微妙な差異が存在する。

dnegos po thams cad rgyu med par ngo po nyid las byung bar 'dod de / nyi shar chu bo thur du 'babs pa dang / sran zlum tsher ma gzengs ring rno ba dang // rma bya'i mdongs la sogs pa'i chos rnams kun // sus **kyang** ma byas ngo bo nyid las byung / (*Rin po che'i phreng ba*, p.10).

de ltar yang slob dpon 'phags pa lhas / yang gzhan kha cig na re / phyi nag ske mched chos rnams thams cad ni / ngo bo nyid las grub pa gzhan las min / sran zlum skyer tsher gzangs ring rno ba dang // rma bya'i mjug ma mgrin pa'i tshogs bkra dang // nyi shar chu rnams thur du 'bab pa rnams // ngo bo nyid las grub ste rgyu yod min / (*lCang skya Grub mtha'*, 18b4-5).

⁴¹[15] 〈無因論〉・〈無因生論〉批判：

「はすの花の茎・花びら・花糸・花托の、形・色・配列・柔らかさなどの原因はいったい何でしょうか。ここにいる孔雀の羽根の色はだれが彩ったのでしょうか。[それを創造する者は、見当たらないではありませんか。ですから、] これら総ては本性的にそのように定められているのでありましょう。」(*Jātakamālā* XXIII, 17) ; 生井 p.159. svabhāva-anupalabdhi: 「蓮の花糸などの多様性、[つまり形や色や硬さの違い] をもたらずのは誰か。また多彩な孔雀の尾の斑紋などは、誰によって作られたのだろうか。[それは誰でもない。《創造神》などのその要因は認知されないから。]」

rājīvakesarādīnām vaicitryam kaḥ karoti hi /

mayūracandra-ādir vā vicitraḥ kena nirmitaḥ // *TS*. IV, 111.

生井, p. 35; pp.117-178. Cf. *Pramāna-vārttika*, II, 179ff.

「此義自然無人所作」、『佛本行集經』卷二十一 (大正 3 卷 750c)。

「無因生論者……現見孔雀鸞鳳鷄等山石草木花果刺等 色形差別皆不由因自然而有」(『大毘婆沙論』卷百九十九 (大正 27 卷 997b))。

⁴²[15] 〈酒と酔わせる力の如くに、……灯明とその明かりの如く……〉

lCang skya Grub mtha' (20a2) と一致。

⁴³[15] 〈禪定重視派〉

禪定を重視するものたちが三昧そして無色（定）などに到達すれば「自分は阿羅漢となった」と。*lCang skya Grub mtha'* (19a2).

⁴⁴[16] 〈有神サーンキヤ〉

サーンキヤ学派のイーシュヴァラ説は、古くは『マハーバーラタ』「解脱法品」に見られる他が知られているが、それらの中でも仏典『真実綱要 TS』第3章における言及は際だって詳細であることから、早くから注目されて来た（本多恵『サーンキヤ哲学研究』（上）p.211.）。今西順吉氏は、『真実綱要（TS）』第1章と竜樹造『十二門論』との関係に注目している。（「竜樹によって言及されたサーンキヤ思想」、『北大文学部紀要』16-2）。*lCang skya Grub mtha'* (22b2); (25b3).

⁴⁵[16] 〈鏡の両面の譬え〉

一つの鏡の両面、あるいは2枚の合わせ鏡についての言及は、『真理綱要』第7章第296-297頌に対するカマラシーラの釈に見られる。tathā hi -- buddhi-darpaṇa-ārūḍham artha-pratibimbakam dvitīya-darpaṇa-kalpe puṃsi samkrāmati tad evā'sya bhokṛtvam, na tu vikāra-āpattiḥ. (TSP. ad TS. v.296-7).

また、〈影像説〉については、「サーンキヤ頌にはないけれども、アースリ、ヴィンディヤヴァーシ等によって説かれた影像説（pratibimba）が見られる（『中観心論』第二、二十三頌）。彼の後、『真理綱要』にも続いてあらわれ、サーンキヤ・スートラにも受継がれて、サーンキヤ説の重要な一面を形成するに至っている。」、本多恵：『サーンキヤ哲学研究』（上）p.186.を参照されたい。なお、本多の本書は、第1篇第4章：「仏典に言及されたサーンキヤ思想」と題して、『大毘婆沙論』・仏伝文学・龍樹・『瑜伽師地論』・『涅槃経』・無着・バヴィヤ・ダルマパーラ・『真理綱要』における言及を省察している。トゥカン宗義書の本箇所における言及は、バヴィヤよりも『真理綱要』のカマラシーラ釈の言及と近似しているように考察される。谷口富士夫：『西藏仏教宗義研究』第六卷——トゥカン『一切宗義』チョナン派の章——（東洋文庫、1990）, p.40 には、以下の記載が存する。「[Ruegg 1963; 79, n.18; p.85, n.58] が指摘するように、トゥカンによるこのサーンキヤ学派の説明は、チャンドラキールティの『入中論』IV, 121の自註に基づいている（[小川1976: 255-257] [Poussin 1977: 235-237]）。また、トゥカン自身の『一切宗義』「インドの章」の中で、同様なサーンキヤ学派の解脱の説明を行っている（Cf. Mittal[1984]: pp.26-27）。」*lCang skya Grub mtha'* (26a5) には寂護を引用している。そして、トゥカンの本書自体の中にも、後述する [19] 文法学派の主張との関連において、「チベットのチョナン派の主張す

るところと近似しているように思われる。」と明言されており、この前後のチャンキヤの原文には存在していないので、これはトゥカンがチャンキヤからの引用の間に意図的に附加した文章であると判断できる。後述の訳註 50 を参照のこと。

⁴⁶[16] 〈根本原質からの開展〉

以上に見られるように、本宗義書は、その叙述の多くを *lCang skya Grub mtha'* (23a4f) に依拠している。本箇所においては、

a) 根本原質の *prakṛti* (*rtsa ba'i rang bzhing*) と *pradhāna* (*gtso bo*) を、「同一の所知である」と述べながら、開展においては別個に考えていて、同一視することはないようである。

b) 根本原質 (*rtsa ba'i rang bzhin*) によって音 (声・触・色・味・香) などの変異 (*vikāra*; *nam 'gyur*) の現出されることを説く。従って後述される五唯 (色・触・味・香) と重複する。

c) マハットから3種のアハンカーラ (我慢) が生起するとして、3種グナをアハンカーラと同視している。

d) サットヴァ (純質) のアハンカーラから11 インドリヤ (根) の生起を説くのはアールツダの『サーンキヤ・スートラ』2-18 に対する註と一致するが、仏典に伝えられるものとはそのいずれとも一致しない。

『中観心論』第6章第2頌に対する『思釈炎』釈との類似が注目される。Cf. 本多：前掲書、p.296.

⁴⁷[17] 〈跛者と盲目者の協力の譬え〉

Cf. *Sāṃkhya-kārikā*, 21. 本多：前掲書、上巻 pp.444--445 に『金七十論』・『ガウダパーダ』・『マータラ』の3古註の比較対照あり。

"*prakṛti-puruṣa-saṃbandhaś ca paṅgv-andhavat paraspara-apekṣā-nibandhanah*", *Sarva-darśana-saṃgraha*, p.329, line132. 中村元：『印度の哲学体系』II, pp.112-113.

long ba rkang can lta bu'i rang bzhin zha bo mig can lta bu'i skyes bu gnyis gcig tu 'khrul te /

TS v.292, TSP ad TS v.292, "And this relationship between the two stands like that between the lame and the blind persons."

/ gtso bos bstabs pa'i 'bras bu la // de ni longs spyod 'ga' zhig byed // de la byed pa nyid yod min // rang bzhin kho na der 'dod do / (Peking p.142-1-8) ただし、この箇所のチベット訳語においてはトゥカンとの一致なし。

Answer -- This relationship, etc.; just as the Blind man acts towards things, through his connection with the man with eyes, -- so do the Cosmic Intellect and other ... ", Cf. Jha tr., p.195.

⁴⁸[17] 〈サーンキヤ学派の解脱観〉

については、SK 64-68 がよく知られている。「身体が壊滅したときに、目的はすでに達成

されたのであるから、根本原質は活動を停止する。そのときに、〔プルシャは〕確定的であり、また究極的であるという両者の〔特質をそなえた〕独存 (kaivalya = 解脱) を達成する。SK 68]、中村元：『ヨーガとサーンキヤの思想』488 頁以下参照。lCang skya Grub mtha' (25a4f) 参照。

⁴⁹[18] 〈アシュヴァメーダ〉

aśvamedha (馬祠)、ヴェーダ祭式の中でも、もっとも有名かつ荘厳な儀式で、戦勝した王が行なう一種の凱旋行事であり、王権の最高の顕現とされ、古代インドで尊ばれた。L. Renou & J. Filliozat: *L'Inde Classique, Manuel des Études Indiennes*; 山本智教訳：『インド学大事典』第1巻ヴェーダ編 (金花舎、1981), p.329. Ṛg-veda I, 162, 2-3 & I, 163, 12; Śatapatha-Brahmaṇa XIII, 1-5; Taittirīya-Brahmaṇa III, 8, 9 他、さらに詳細な出典と叙述は、P. V. Kane: *History of Dharmaśāstra (Ancient and Medieval Religious and Civil Law)*, Government Oriental Series, Class B, No.6, Vol. II, Part II (Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1974), pp.1228-1239.

⁵⁰[18][19][20] 〈梵天 (ブラフマン) 派の分派〉

ヴェーダーンタ学派および文法学派に関する記述は、そのほとんどがチャンキヤ lCang skya Grub mtha' (28a6f; 29b1f) に依っている。すなわち、“ヴェーダのみが知識根拠 (*権証) である。と主張して、…… (29b3) ヴェーダのことばとは、人間によって作られたことが否定されるものである。真理のみを説く (唯一の) ものであると述べる。天界と梵 (の存在) を立証する方法は、ヴェーダの根本聖典に説かれているアシュヴァメーダ (馬祠祭) であると主張する。(29b4) 文法学派のものたちは、〈器世間 (・有情世間の) 種々なるものを産出する基体であり、これらの本質となっているブラフマン (梵) とはオームという字音であり、生滅なきものであるから常住であって、時空の隔てを持たず、内外の対象領域に真理として入っているものである。(これは) 勝義には (究極的本質としては) 唯一の自性を持つだけであるが、無知により汚染された人々にとっては様々な姿の所取・能取として顕現して見える。〉と述べている (『トゥカン宗義』に存する bod kyi jo nang pa'i 'dod tshul yang 'di dang nye bar snang / (Z20 (8b5)) を欠く)。(30a1) 解脱を達成させる道は、外的には獣畜の供犠護摩であり、内的 (秘密) には婦女のバガの炉に精液を放出する護摩を行わずることであると主張し、解脱とは、かかる折の空・朗・楽にあると主張する。ヴェーダーンタ学派、またの名はバラモン至上主義派たちは、知識根拠であるヴェーダに説かれるプルシャと称せられる唯一者、絶対に帰滅することがない故に常住なるもの、苦患を超脱しているが故に清浄であるもの、すべての生類に遍充せるもの、始終なきものであるが故に不死であり、太陽の色彩を有し、暗闇の輪郭から超脱せるものであり、巨大なるものであり、惰眠とは異質のものである、プルシャと呼ばれる唯一者が存在する。彼は諸々の神々の本体であり、大自在天の実体をなすものでもある。……このプルシ

ヤのみが三界のすべてと、苦と楽・束縛と解放の諸事を作成するが、それでも彼自体には変化することも滅尽することもない。……（われわれが）精神集中（三昧）に依拠して、天眼をもってこのプルシャを観察する時、このプルシャそのものが黄金の色彩を備えたものとして見えるならば、（われわれは）善も悪も、輪廻も解脱も（すべて分け隔てない）平等性に達して、解放に至る。ICang skya Grub mtha' (30b2)。トゥカンの本書においては、以上のチベット葉で三頁にわたって中途を省略して ICang skya Grub mtha' からの長大な引用となっていて、トゥカンによる付加部分は「チヨナン派に関する一文」だけに留まる。

⁵¹[20] 〈秘密派〉

ICang skya Grub mtha' (30b6); (31a1) 参照。

⁵²[21] 〈ヴィシュヌの十種権化〉

ICang skya Grub mtha' (32b5-33a6) 参照。ヴィシュヌ神のアヴァターラ (avatāra*権化・*化身) は、インドの叙事詩 (Mahābhārata, Śāntiparvan; Bhagavad-Gītā, Chap. IV, vv.7-8) や、ヴィシュヌ・プラーナ (Viṣṇu-Purāṇa) をはじめとするプラーナ文献から知られ、六種 (MBh. ibid., Chap.339, v.77) から最多の二十四種 (Purāṇa-vimarsā, Baladeva Upadhyāya ed., pp.173-4) まで、多くの異説が存在するが、もっとも有名なものは十種の権化で、以下の形で列挙される。

matsyaḥ kūrmo varāhaś ca narasiṃhaś ca vāmanaḥ /

rāmo rāmaś ca rāmaś ca kṛṣṇaḥ (buddhaḥ) kalkir janārdanaḥ //

(MBh. ibid., vv.103-4; cf. Padma-purāṇa, Uttara, 25, 7.40-41.)

これらの他にも十種権化 (daśa-avatāra) を列挙するものとしては、Jayadeva の Gītagovinda や Kṣemendra の Daśāvatāra-carita などが知られ、第九番目の権化 Buddha に替えて Haṃsa や Balabhadra-Rāma を挙げるものもあり、実に多様である。Cf. Vettam Mani ed.: Purāṇic Encyclopaedia, (1975, Dehli), pp.78-82. 仏典では、チャンキヤとトゥカンの両者が依拠したと思われる、『中観心論 MHK』第IX章第73頌に対する『思釈炎 TJ』(D.dsa296a; P.dsa334b) に解説が詳しく、そこでは、第九番目の権化は「ブツダ (sang rgyas)」となっている。ヴィシュヌ十種権化の成立は、インド文化思想史の面からも詳細な考究が進行中であり、『思釈炎』の著者問題および著述年代決定にも資する情報として注目したい。川崎：『一切智思想の研究』 p.172; p.388. 参照。

⁵³[21] 〈クムバカ〉

ICang skya Grub mtha' (33b1) 参照。

⁵⁴[21] 〈ヴィシュヌ派の主張〉

ICang skya Grub mtha' (32a4); (32b3) 参照。

⁵⁵[22] 〈チャーラカ〉

チャーラカ派? ts'araka pa rnam. *Madhyamaka-ratna-pradīpa* (D262b2) にも、44 異見を掲げる 4 番目に tsa ra ka として提示されている。中村元にシャバラスバーミンと医学書の作者チャーラカのアートマン観の類似の指摘あり。(中村: 前掲書、『ミーマーンサーと文法学の思想』決定版中村元選集第 26 卷春秋社 [1995]p.207; p.230 参照)。黒ヤジュールヴェーダ系統に人身供犠などを行なう遊行者の一派が存在したことが知られている。See A.A. Macdonell & A.B.Keith: *Vedic Index of Names and Subjects*, Vol.1, p.256. *MRP.* (D262b2) は、〈百十異見〉を列挙する四番目に "tsa ra ka" を挙げている。Mittal, p.31 に cāraḥkiyas (遊行者のグループ) は、十一の認識根拠 (*量) を獲得したとするが、典拠は示していない。*lCang skya Grub mtha'* (34a5-34b1) には、通常のみーまーンサー学派の掲げる現量 (pratyakṣa) ・比量 (anumāna) ・聖言量 (śābda) ・譬喩量 (upamāna) ・義準量 (arthāpatti) ・無体量 (abhāva) の六量に加えて、さらに他に、以下のごとく、第七から第十一量までを列挙している。

rgyu las 'bras bu rtogs pa lta bu rigs pa'i tshad ma (7);

yul de dmigs pa med pas med par rtogs pa ma dmigs pa'i tshad ma (8);

smra ba po snga ma dag gis bstan pa'i grags rgyud pa'i zhes grags kyi tshad ma (9);

tshogs pa yod par rtogs pa na tshogs pa can yod par rtogs pa srid pa'i tshad ma (10);

'di lta bu 'byung ngo snyam du sems pa las de ltar byung ba snyam sems pa'i tshad ma (11)

また宇井伯寿: 「チャーラカ本集に於ける論理説」、(『印度哲学研究』第二所収)、において、(17)~(23) として現量・比量・伝承量・譬喩量・疑惑・動機・不確定・欲知・決断・義準量・随生量の 11 を記している (pp.434-436; pp.453-459) が、トゥカンとの一致に関しては、なお検討を要する。

⁵⁶[22] 〈四十八サンスカーラ (浄法)〉

byas shugs zhe brgyad: saṃskāra. ミーマーンサー学派および法典において説かれる、懐妊前から誕生・結婚・葬儀に至るまでのバラモン階級一生涯に渉る四十八種の生活浄化規定。「四十八サンスカーラ (浄法)」については、P. V. Kane: *History of Dharmasāstra*, Vol.II, Pt.1 (1974, Poona), pp.188-267 以下に詳述されている。現存する法典で四十八種浄法を掲げるものは *Gautama-Dharmasāstra* のみである。仏教文献において「四十八サンスカーラ (浄法)」が言及されているのは、バヴィヤの『思釈炎』第九: 「ミーマーンサー学派の真実義決着の検討」章の冒頭に存する。川崎: "The Mīmāṃsā Chapter of Bhavya's *Madhyamaka-hṛdaya-kārikā* --Sanskrit and Tibetan Texts--", *Studies*, (Institute of Philosophy, the University of Tsukuba, 1976), pp.4-5.

⁵⁷[23] 〈ニヤーヤ学派の主張〉

lCang skya Grub mtha' (36b5) 参照。

⁵⁸[23] 〈ヴァイシェーシカ学派の十六句義〉・〈八句義〉

ICang skya Grub mtha' (37a5) 参照。

⁵⁹[24] 〈ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の解脱達成方法〉

ICang skya Grub mtha' (40b1) 参照。

⁶⁰[25] 〈ジャイナ教の九句義〉

Nava-tattva, Nava-padārtha, *ICang skya Grub mtha'* (43b3) に詳述あり。

「善業 (punya)」・「悪業 (pāpa)」・「靈魂 (jīva)」・「非靈魂 (ajīva)」・「流入 (āsrava)」・「制意 (bandha)」・「止滅 (saṃvara)」・「束縛 (nirjara)」・「解脱 (mokṣa)」; 順序および原語は、*SDS* p.81, lines 362-366. の記載によった。「ある人々は、上述の〔七つの原理と〕、楽しみを生じる手段としての善業と苦しみを生じる手段としての悪業とを合わせて、九つの原理を承認した。」中村元：『インドの哲学体系』II, pp.134-143、および金倉、前掲書：241-242 頁参照。

⁶¹[25] 〈植物などが有心である〉

vanaspaty-antānām ekam, in *Tattvādihigama-sūtra*, II, 23. 金倉圓照：『印度精神文化の研究』(岩波書店、昭和 19 年)、121 頁。この問題の詳細については、川崎信定：「Bhāvaviveka の生類観——草木にころがあるか——」、『豊山教学大会紀要』第 14 号 (眞言宗豊山派豊山教学振興会、昭和 61(1986) 年 6 月)、pp.104-118; 同：「バヴィヤの自然観」、『日本仏教学会年報』第 68 号 (日本仏教学会、平成 15 年 9 月)、pp.15-30.; *ICang skya Grub mtha'* (45b1) 参照。

⁶²[25] 〈ブツダの一切智者否定論〉

ICang skya Grub mtha' (45b3) 参照。「難一切智人」、宇井、前掲書、p.291。

「一切智の問題に一番執拗に取り組んだ印度の宗派はジャイナ教であった。仏教とジャイナ教がクマーリラを代表とするミーマーンサー学派の一切智者存在否定説に対して反駁した点では両者共通であるが、次に誰を一切智者と認めるかという点では、仏教側はジャイナ教祖師の一切智者であることを否定し、ジャイナ教側はブツダの一切智を否定する。」川崎、前掲書、p.291。

〈ジャイナ教の一切智思想〉研究資料としては、以下の諸研究が存在する。

Jaini, P. S.: "On the Sarvajñatva (Omniscience) of Mahāvīra and the Buddha", in Cousins, L. ed.: *Buddhist Studies in Honor of I. B. Honer*, (Dordrecht, 1974).

Singh, Ram Jee: *The Jaina Concept of Omniscience*, in L. D. Series 43 (L. D. Institute of Indology, Ahmedabad, 1974).

Pathak, K. B.: "Kumārila's Verses Attacking the Jain and Buddhist Notions of an Omniscient

Being", *Annals of Bhandarkar Oriental Institute*, Vol. XII, Pt.2, (Poona, 1931), pp. 123-130.

藤永伸：『ジャイナ教の一切知者論』（平楽寺書店，2001）。

⁶³[25] 〈五火〉

Pañca-agni-sevana; pañca-tapa-sevana. Mittal (*op.cit.*, p.32) の還梵による。

⁶⁴[25] 〈裸形と無言と五火供養〉

lCang skya Grub mtha' (45a2); *Rin chen phreng ba* (p.9) 参照。

⁶⁵[25] 〈天上界〉 saṅghāta-loka

Mittal (*op.cit.*, p.32) の還梵による。典拠非提示。

Schubring, W.: *Doctrine of the Jainas*, (Delhi, 1962), p.98ff.

Kirfel, W.: *Die Kosmographie der Inder*, (Bonn, und Leipzig, 1920), p.208ff.

Alsdorf, Zur Geschichte der Jain Kosmographie und Mythologie, *ZDMG*. 92, pts.2-3, (1938).

以上、ヴィンテルニッツ（中野義照訳）：『ジャイナ教文献』、382頁注記による。金倉圓照：『印度古代精神史』（岩波書店、昭和14年）は、以下のように記す。「解脱者の安らふ世界の絶頂は如何なる場所であらふか。『ウヴァヴァーイヤ』一六三以下によると吾等の寶光地及び日月星辰よりも上方数億萬里に、善法天乃至不動天よりも高く、諸天善神の住所の上に、一つの大平原がある。その朝ウィン雨王に廣厚共に八里の高臺があり、裾ひろがりその厚さ逡減し、大平原の端にあつては、一寸の無限分の一となり、終端は蠅の羽よりも薄い。此の天の原の表面は、白く、貝又は鏡面の如く清浄に、煮たる藕絲、泡、霜、乳の如き妙色を有し、開ける傘の形をなし、まったく白金より成り、明か滑か平かに、琢磨せられ、塵なく汚なく垢なく靄なく光り輝き、晴朗にして、所有る點に美しい。此の平原の上方一里が世界の頂點である。一里の上方四分の一の六分の一に完成者、即ち有始無終の聖者、換言すれば生老死、入胎、輪廻、再生、胎内住の苦を超越せる者が、永遠に止住するのである。」(p.275).

E. Leumann: "Das Aupapātika-Sūtra, erstes Upāṅga der Jain, 1. Teil. Einleitung, Text und Glossar", *AKM*. VIII, 2, (Leipzig, 1863).

なお、上掲ヴィンテルニッツ（中野義照訳）：『ジャイナ教文献』、p.379参照。

⁶⁶[25] 〈ローカサングラハ〉

本箇所叙述は、*Rin chen phreng ba* (p.9) とほぼ完全に一致。*lCang skya Grub mtha'* (45a3-4) とも、部分的に一致する。

⁶⁷[26] 〈『中観心論』および『思釈炎』〉

『中観心論 (MHK)』(D.3855; P.No.5255) および『思釈炎 (TJ)』(D.No.3856; P.No.5256)

におけるインド外教思想の検討は以下の箇所では広範に論じられている。これをデルゲ版大蔵経によって提示すれば、第6章「サーンキヤ説 *MHK* (Dsa24b-26b); *TJ*(Dsa227a-242a)」、第7章「ヴァイシェーシカ説 *MHK*(Dsa26b-27b); *TJ*(Dsa242a-25qb)」、第8章「ヴェーダーンタ説 *MHK*(Dsa27b-31a); *TJ*(Dsa)251a-271a」、第9章「ミーマーンサー説 *MHK* (Dsa31a-40a); *TJ*(Dsa271320b)」)。ただし、これら2書において第10章「一切智者の論証 *MHK*(Dsa40a-40b); *TJ*(Dsa320b-325b)」の箇所では「ナグナ（裸形）派＝ジャイナ教」の所説と題されながら、実際には仏典に見られる「十四無記・十難」などであって、ジャイナの所説ではないことが確認される。川崎信定：「善巧方便と智慧——『中観心論』第十章：一切智品にもとづく考察——」、『加藤純章博士還暦記念論集・アビダルマ仏教とインド思想』（春秋社、2000）、pp.237-250. ジャイナ教説が広範に論じられているのは、本書のこの箇所では言及されていないが、シャーンティラクシタ『真理綱要（*Tattvasamgraha*）』（D. No.4266;P.No.5764）第10章「空衣派（nam mkha'i gos can）の想定するアートマン考察」（Ze13a-b）およびカマラシーラ『真理綱要難語釈（*Tattvasamgraha-pañjikā*）』（D.No.4267; P.No.5765）の相当する箇所（Ze216b-219b）において論じられている。

⁶⁸[31] 〈七部論理学書〉

法称（*Dharmakīrti*）の論理学・認識論に関する作品はチベットでは古くより『量七部論（七部論理学書）』と呼ばれており、経量部論理随順派の基本文献である。(1)『量評釈（*Pramāṇavārttika*）』、(2)『量決択（*Pramāṇaviniścaya*）』、(3)『正理一滴論（*Nyāyabindu*）』、(4)『因一滴論（*Hetubindu*）』、(5)『諍正理論（*Vādanyāya*）』、(6)『結合の考察（*Saṃbandhaparīkṣā*）』、(7)『他相続の存在証明（*Santānāntarasiddhi*）』の七著が挙げられ、*ICang skya Grub mtha'* (40b5) 他にも多出する。^(三代)

⁶⁹[27] 〈『殊勝聖讚』〉

Viśeṣa-stava または *Viśiṣṭa-stava*; *Khyad par du 'phags pa'i bstod pa*, 『殊勝讚』とも漢訳される。大谷 No.2001 = 東北 No.1109。チベット大蔵経丹殊爾（論疏部）初卷（讚頌部）の冒頭に納められるこの讚仏偈からの引用である。

mu stegs can gyi gzhung lugs la //
 ji lta ji ltar rnam bsams pa //
 de lta de ltar mgon khyod la //
 bdag gi sems ni dad par 'gyur //
 de ltar thams cad mkhyen min pa'i //
 grub mtha'i skyon gyi brlag sems ldan //
 bsam brlag rnams kyis skyon med pa'i //
 ston pa khyod kyang mi mthong ngo // (ka. 5a6-7)

因みに、この『殊勝讚』は、同『広釈 -*tīkā*』とともに、チベット宗義書には多用される。
Cf. *lCang skya Grub mtha'* (11a2); (15a1).

⁷⁰[27]「外道 (mu stegs pa)」の語源解釈の例については、*lCang skya Grub mtha'* (11a4; 11b1-2) 参照。なお、本書トゥカンの "de phyir lta ngan mu la stegs 'cha' ba'i" で始められる第 1 章末の結頌は、*dKon mchog Grub mtha'*, p.74 にも、わずかに 2 字を変えて同じく章末の結頌として引用されている。

⁷¹[29] 〈過去仏とその在世時の人間の寿命〉

ここに示される諸仏の名称は『翻訳名義大集 (*Mahāvvyutpatti*)』により梵蔵の対応が知られる。『翻訳名義大集』に挙げられる番号・梵語・蔵語・漢語をもって、以下にそれらを示すことにする。*Mvyut. No. 91, kakut-sundah, 'khor ba 'jig*, 壞輪廻; *Mvyut. No. 92, kanakamuniḥ, gser thub*, 金仙・拘那含牟尼; *Mvyut. No. 93, kāśyapaḥ, 'od srungs*, 護光・迦葉波・飲光; *Mvyut. No. 94, śākya-muniḥ, śākya thub pa*, 能仁寂黙・釈迦牟尼。また、過去仏とその在世時の人間の寿命に関する記述は、『長阿含経』「大本経」(大正 1, 2, 4ff.) や『根本説一切有部毘奈耶雜事』(大正 24, 222c6ff.) などに存在する。それらによれば、毘婆尸仏 (*Vipaśyin*) 在世時の人間の寿命は八万歳、尸棄仏 (*Śikhin*) の時の人寿は七万歳、毘舍婆仏 (*Viśvabhuj*) の時の人寿は六万歳、拘樓孫仏 (*Kakutsunda*) の時の人寿は四万歳、拘那含仏 (*Kanakamuni*) の時の人寿は三万歳、迦葉仏 (*Kāśyapa*) の時の人寿は二万歳、そして、釈尊在世時の人寿はおよそ百歳であるとされる。^(飛田)

⁷²[29] 〈三度の転法輪〉

釈尊による三度の転法輪は、『解深密経』「無自性相品」(大正 16, 697a23ff.) にあらわれる。これには、第一の法輪は「四諦相」をもって転ぜられ、第二の法輪は「隱密相」をもって転ぜられ、第三の法輪は「顕了相」をもって転ぜられたと記されている。袴谷憲昭『唯識の解釈学：『解深密経』を読む』春秋社, 1994, p.20ff., 206ff. に詳しい解説がある。^(飛田)

⁷³[30] 〈『毘婆沙の海 (*Vibhāṣā-sāra*)』とか『大毘婆沙論 (*Mahāvibhāṣā-śāstra*)』〉

Cf. "bye brag bshad mtsho'am bye brag tu bshad pa chen po", *lCang kya Grub mtha'* (54a2) と同文である。Cf. *mngon pa kun btus kyi 'grel ba, lCang skya Grub mtha'* (54a3), cf. Mittal, pp.104-108. 池田練太郎：「*lCang skya* 宗義書における *Vaibhāṣika* 章について」、『日本西蔵學會々報』第 25 号、1-4 頁に、〈(チャンキヤにより)「所依の典籍」として列挙されているにも拘わらず、實際上の論述に何ら関わりをもたない〉典籍十二点の内の一つとして、"*Bye brag tu bshad pa chen po; Bye brag bshad mtsho = Mahāvibhāṣā*, 54a2, 62b2, 62b3" が指摘されている。

毘婆沙思想についてのチベットの宗義書の著者たちの知識典拠が、インド仏教の原典よ

りも、具体的には中国仏教書、この場合には『六足』・『發智』・『俱舍論』・『大毘婆沙論』に依ったものであることの例証となる記述であろう。

⁷⁴[30] 〈毘婆沙師の語義解釈〉

トゥカンで採用されている「毘婆沙師は、『毘婆沙の海』とか『大毘婆沙論』と称せられる根本聖典に従うもの」であるという解釈や「三世は、実体にある違いであると主張するので毘婆沙師と呼ばれる」という解釈は、チャンキャ (Cf. 池田練太郎「ICang skya 宗義書における Vaibhāṣika 章について」『日本西蔵学会々報』1979, 池田練太郎「チベットにおけるアビダルマ仏教の一断面 *dus gsum rdzas grub* (〈三世実有〉) 説を手掛りとして」『日本西蔵学会々報』1983.)、そしてクンチョク・ジクメーワンポからの伝統を受け継ぐものである。*ICan skya Grub miha'*, 54a2f.: *bye brag bshad mtsho'am bye brag tu bshad pa chen po zhes bya ba'i gzhung gi rjes su 'brangs pa'am / dus gsum rdzas kyi bye brag tu smra bas bye brag smra ba zhe bya ste / mngon pa kun btus kyi 'grel ba dang / slob dpon byang chub bzang po sogs kyis kyang de ltar bshad de grags che'o //; dKon mchog Grub mtha'*, p.77: *slob dpon dbyig bshes chos can / khyod la bye brag smra ba zhes brjod pa'i rgyu mtshan yod de / bye brag bshad mtsho chen mo'i rjes su 'brangs nas grub mtha' smra bas sam / dus gsum rdsas kyi bye brag tu smra bas na bye brag smra ba zhes brjod pa'i phyir /* このうち、チャンキャの記述には、この解釈が『阿毘達磨集論釈 (*Abhidharmasamuccayabhāṣya*, *mngon pa kun btus kyi 'grel ba*)』やボーディバドラ (*Bodhibhadra*, *byang chub bzang po*, 11C.) などによって説かれていることが指摘されているが、ボーディバドラによる『智心髓集』の註 (*Jñānasārasamuccayanibandhana*) に同様の記述が確認される。*Jñānasārasamuccayanibandhana*, Mimaki Katsumi, *La Réfutation Bouddhique de la Permanence des Choses (Sthirasiddhidūṣaṇa) et la Preuve de la Momentanéité des Choses (Kṣaṇabhāṅgasiddhi)*, Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, Paris, 1976. pp.192-195: *'di dag 'das pa dang ma 'ongs pa'i rgyur khas len cing / dus gsum dag rdzas kyi bye brag tu smar ba'am / Bye brag tu bshad pa chen po'i gzhung dang mthun par smra bas na de dag la de skad ces bya'o //* (飛田)

⁷⁵[30] 〈大衆部の上首：マハーカーシュヤパ〉

大衆部の上首をマハーカーシュヤパとする言及は、プトンに存する。「大衆部は、サンガであって、まさにそ(のサンガ)が巨大であるから、大衆部である。上首は、バラモンで、清浄なる功德第一のマハーカーシュヤパである。言葉は、プラークリット語であって…」(*Bu ston Chos 'byung*, 90a2f.: *dge 'dun phal chen pa ni / dge 'dun yang yin la de nyid phal che ba yang yin pas dge 'dun phal chen pa / mkhan po bram ze sbyangs pa'i yon tan gyi mchog 'od srungs chen po / skad tha mal ba'i skad.....*) ; Cf. 寺本訳 p.402, Obermiller 訳 p.100. (飛田)

⁷⁶[30] 〈説一切有部の上首：ラーフラ〉

説一切有部の上首をラーフラとする言及は、プトンに示される。「三世に一切は実有であると説くから説一切有部である…サンスクリット語によって説かれ、他の部派の法規が生ずる根源となったから、根本説一切有部である。上首は、クシャトリヤの種族で、教学に忠実であること第一のラーフラバドラである。言葉はサンスクリット語であって…」 (*Bu ston Chos 'byung*, 89b7f.: *dus gsum thams cad rdzas su yod par smra bas thams cad yod par smra ba..... sam skṛ ta'i skad kyis brjod cing sde pa gzhan gyi chos lugs 'byung ba'i gzhi yin pas gzhi thams cad yod smra'o // mkhan po rgyal rigs bslab pa la gus pa'i mchog sgra gcan zin bzang po / skad sam skṛ ta'i skad.....*) ; Cf. 寺本訳 p.402, Obermiller 訳 p.99f. ^(飛田)

⁷⁷[30] 〈上座部の上首：カーティヤーヤナ〉

上座部の上首をカーティヤーヤナとする言及は、プトンに見られる。「上座部は、上座は聖種であると説くから上座部である。上首は、王の種族（クシャトリヤ）で、辺境を教化すること第一のカーティヤーヤナである。言葉は中央地方の言葉（マガダ語？）であって…」 (*Bu ston Chos 'byung*, 90a4f.: *gnas brtan pa ni / gnas brtan 'phags pa'i rigs yin par smra bas gnas brtan pa / mkhan po rje rigs mtha' 'khob 'dul ba'i mchog ka tya ya na / skad 'bring du 'don pa.....*) ; Cf. 寺本訳 p.402, Obermiller 訳 p.100. ^(飛田)

⁷⁸[30] 〈一切所貴部の上首：ウパーリ〉

一切所貴部、すなわち、正量部の上首をウパーリとする言及は、プトンに紹介される。「たくさんの人によって尊ばれた師の規範を説くことから、一切所貴（部）である。上首は、シュードラの種族で、持律第一のウパーリである。言葉は、訛語アパブランシャであって…」 (*Bu ston Chos 'byung*, 90a3f.: *skye bo mang pos bkur ba'i slob dpon gyi lugs ston pas kun gyis bkur ba / mkhan po dmangs rigs 'dul ba 'dzin pa'i mchog nye bar 'khor / skad zur chag pa a bha bhraṃ shi'i skad.....*) ; Cf. 寺本訳 p.402, Obermiller 訳 p.100.

なお、以上に根本の四部派の上首として示された4人の仏弟子のうち、マハーカーシユヤパ、ラーフラ、ウパーリの梵蔵の対応は『翻訳名義大集 (*Mahāvvyutpatti*)』により知られる。『翻訳名義大集』に挙げられる番号・梵語・蔵語・漢語をもって、以下にそれらを示すことにする。*Mvyut.* No. 1031, *kāśyapaḥ*, 'od srung, 飲光・迦葉波; *Mvyut.* No. 1039, *rāhulaḥ*, *sgra gcan 'dsin*, 覆障・羅睺羅; *Mvyut.* No. 1062, *upāliḥ*, *nye bar 'khor*, 鄒波離・近執。なお、カーティヤーヤナ（摩訶迦旃延）については、*Mvyut.* No. 1034 参照。 ^(飛田)

⁷⁹[30] 〈トゥカンの挙げる十八部派の名称と『翻訳名義大集』の十八部派の名称の一致〉

トゥカンがヴィニータデーヴァの説として以下に挙げる18部派の名称は、『翻訳名義大集 (*Mahāvvyutpatti*)』に挙げられる十八部派名目と一致する。和訳中に示した部派の名称を示しつつ、相応する『翻訳名義大集』の部派名の番号・梵語・蔵語・漢語を以下に示すことにする（なお、和訳中の部派の名称は「」で囲んで示した）。

まず、トゥカンが「説一切有部」(*Mvyut.* No. 9077, *ārya-sarvāsti-vādāḥ*, 'phags pa thams cad yod par smra ba, 諸聖所説家・体毘履部)として挙げる7派の名は、『翻訳名義大集』では以下の通りに示される。「説一切有部」:*Mvyut.* No. 9078, *mūla-sarvāsti-vādāḥ*, *gshi thams cad yod par smra ba'i sde*, 説根由家・説言一切有部;「護(飲)光部」:*Mvyut.* No. 9079, *kāśyapīyāḥ*, 'od bsrungs pa'i sde, 'od bsrungs pa'i sde, 護(飲)光家・迦葉比部;「化地部」:*Mvyut.* No. 9080, *mahīśāsakāḥ*, sa ston gyi sde, sa ston sde, 示地家・賢部;「法蔵部」:*Mvyut.* No. 9081, *dharma-guptāḥ*, chos srung sde, 護法家・法護部;「多聞部」:*Mvyut.* No. 9082, *bāhuśrutīyāḥ*, mang du thos pa'i sde, 多聞部・多聞家;「紅衣(赤鉢)弟子部」:*Mvyut.* No. 9083, *tāmra-śāṭīyāḥ*, gos dmar sde, 紅衣家・犢子部;「分別説部」:*Mvyut.* No. 9084, *vibhajya-vādināḥ*, rnam par phye sde smra ba'i sde, 開示家・修妬路句部 (*sautrāntikāḥ*).

次に、「一切所貴部」(*Mvyut.* No. 9085, *ārya-sammatīyāḥ*, 'phags pa kun gyis bkur ba(i) sde, 恭敬諸聖家・一切所貴部)として挙げられる3派は以下の通りに相応する。「鷄胤部」:*Mvyut.* No. 9086, *kaurukullakāḥ*, sar sgrogs kyi sde, sar sgrogs kyi sde, 新演家・商拘梨柯部 (*gaukulikāḥ*);「阿槃提迦部」:*Mvyut.* No. 9087, *avantakāḥ*, bsrung ba pa'i sde, 守護家・不可棄部;「犢子部」:*Mvyut.* No. 9088, *vātsīputrīyāḥ*, gnas ma bu'i sde, 非住家・寓母子。

また、「大衆部」(*Mvyut.* No. 9089, *mahāsāṃghikāḥ*, dge 'dun phal chen po(i) sde, 多僧部・摩訶僧祇部)として挙げられる5派は以下の通りに相応する。「東山住部」:*Mvyut.* No. 9090, *pūrva-śailāḥ*, shar gyi ri bo'i sde, 東山部・東山家;「西山住部」:*Mvyut.* No. 9091, *apara-śailāḥ*, nub kyi ri bo'i sde, 西山部・西山家;「雪山住部」:*Mvyut.* No. 9092, *haimavatāḥ*, gangs ri'i sde, 雪山家・雪山部;「説出世部」:*Mvyut.* No. 9093, *lokottara-vādināḥ*, 'jig rten 'das (par) smra ba'i sde, 超出世間家・出世間語言部;「説假部」:*Mvyut.* No. 9094, *prajñāptivādināḥ*, brtags par smra ba'i sde (*sic.*), btags par smra ba'i sde, 執一語言部。

そして、「上座系」(*Mvyut.* No. 9095, *ārya-sthaviraḥ*, 'phags pa gnas brtan pa, 聖住堅固家・上座部)として挙げられる3派は以下の通りに相応する。「ヴィハーラ住部」:*Mvyut.* No. 9096, *mahāvihāra-vāsināḥ*, gtsug lag khang cheng gnas pa'i sde, 住勝妙宮家・法勝部;「ジェータヴァナ住部」:*Mvyut.* No. 9097, *jetavanīyāḥ*, rgyal byed tshas gnas (pa'i) sde (*sic.*), 作聖住家・只底舸部;「アバヤギリ住部」:*Mvyut.* No. 9098, *abhaya-giri-vāsināḥ*, 'jigs med ri(r) gnas sde, 住無畏山家・苾山部。^(飛田)

⁸⁰[30] 〈大衆部に関するヴィニータデーヴァの言及〉

十八部派の分派の歴史を示すインドの論書としては、ヴァスミトラ(世友, Vasmitra)の『異部宗輪論(P版の梵文タイトルは*Samayabhedoparacanacakra*, D版では*Samayabhedavyūhacakra*, チベット語訳タイトルは*gzhung lugs kyi bye brag bkod pa'i 'khor lo*)』(漢訳とチベット訳が存する)、バヴィヤ(Bhavya)の『異部分派解説(*Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna, sde pa tha dad par byed pa dang rnam par bshad pa*)』(チベット訳のみが存する)、ヴィニータデーヴァ(調伏天, Vinīta-deva)の『異宗義次第説誦論

中異部説宗と名づくるもの (*Samayabhedoparacanacakre nikāyabhedopadeśanasamgrahana-nāma, gzhung tha dad pa rim par klag pa'i 'khor lo las sde pa tha dad pa bstan pa bsdu pa*) (チベット訳のみが存する。以下、*Vinītadeva* と略す) などが存在する (寺本婉雅・平松友嗣共編訳註『異部宗輪論：藏漢和三訳対校，異部宗精積，異部説集』国書刊行会，東京，1974を参照。また、比較的近年に出された訳註としては、André Bareau “Trois Traités sur les Sectes Bouddhiques Attribués à Vasumitra, Bhavya et Vinītadeva”, *Journal Asiatique*, 1954, pp. 229-266.; *ibid.* 1956, pp. 167-200. が存する)。トゥカンの場合、プトンやチャンキヤを踏襲してヴィニータデーヴァの論書を引用している。*Vinītadeva* P187b4, D154b3: shar dang nub dang gangs ri gnas // 'jig rten 'das par smra ba'i sde // brtag par smra ba'i sde pa dang // lnga tshan dge 'dun phal chen pa // 「東 (山住部) と西 (山住部) と雪山住 (部) (と) 説出世部 (と) 説仮部とが、5つの大衆部の部派である。」 — トウカンは、西藏大蔵經に入蔵しているヴィニータデーヴァの論書とは若干異なる文を引用している。また、プトンとチャンキヤに引用される文は、両者の間では完全に一致している (ただし、両者とも西藏大蔵經とは一致しない) が、トゥカンはこれらとも若干異なる文を引用している。*Bu ston Chos 'byung*, 89b4; *ICan skya Grub mtha'*, 56a1f.: shar dang nub dang gangs ri dang // 'jig rten 'das par smra ba dang // brtag par smra ba'i sde pa rnams // lnga tshan dge 'dun phal chen pa // (飛田)

⁸¹[30] 〈説一切有部に関するヴィニータデーヴァの言及〉

Vinītadeva P187b5, D154b4: gzhi kun pa dang 'od srungs sde // sa ston sde dang chos srung sde // mang thos gos dmar slob ma dang // rnam par phyte ste smra ba'i sde // thams cad yod par smra ba yin // 「根本 (説) 一切 (有部) と護光部 (飲光部) (と) 化地部と護法部 (法藏部) (と) 多聞 (部と) 紅衣弟子 (部) と分別説部は、説一切有部である。」 — *Bu ston Chos 'byung*, 89b4f; *ICan skya Grub mtha'*, 56a2f.: gzhi kun pa dang 'od srungs sde // sa srung sde dang chos srung sde // mang thos gos dmar slob ma dang // rnam par phyte ste smra ba'i sde // thams cad yod par smra ba yin // (飛田)

⁸²[30] 〈上座部に関するヴィニータデーヴァの言及〉

Vinītadeva P187b6, D154b5: rgyal byed tshal gnas 'jigs med gnas // gtsug lag khang chen gnas brtan pa // 「ジェータヴァナ住 (部 = 祇陀林寺派) (と) アバヤギリ住 (部 = 無畏山寺派) (と) マハーヴィハーラ住 (部 = 大寺派) は、上座部である。」 — *Bu ston Chos 'byung*, 89b5; *ICan skya Grub mtha'*, 56a3: rgyal byed tshal gnas 'jigs byed gnas // gtsug lag khang chen gnas brtan pa // — ヴィニータデーヴァの部派の分類で、他の論書と比して特異な部分は、この上座部の解説である。ここに挙げられた三つの部派は、スリランカにおいて分裂した部派の名称と酷似している。スリランカでは、大寺派から、無畏山寺派や祇多林寺派などが分派したとされるが、この大寺派はヴィニータデーヴァが説くところの「マハーヴィハーラ住部」に、無畏山寺派は「アバヤギリ住部」に、祇多林寺派は「ジェータヴァナ住

部」に相応している。上座部の分派を以上のように説くものは、チベットでは、このヴィニータデーヴァの論書の他に、『比丘初夏問 (*Bhikṣuvarṣāgrapr̥cchā, dge slong gi dang po'i lo gri ba*)』(チベット訳のみが存する。)と『翻訳名義大集 (*Mahāvvyutpatti*)』がある。よって、『翻訳名義大集』の編纂の際には、このヴィニータデーヴァか『比丘初夏問』かの説が採用されたと考えられる。ヴィニータデーヴァの説、すなわち、大衆部を5派、説一切有部を7派、上座部を3派、一切所貴部(正量部)を3派とする分類と『比丘初夏問』の説、すなわち、説一切有部を4派、大衆部を6派、一切所貴部(正量部)を5派、上座部を3派とする分類(Cf. W. Woodville Rockhill, *The Life of the Buddha and the Early History of His Order*, 1907. p.187.)を照合すると、説一切有部(*Mvyut.* 9077)の許に7種の部派(*Mvyut.* 9078-9084)を示し、一切所貴部(*Mvyut.* 9085)の許に3派(*Mvyut.* 9086-9088)、大衆部(*Mvyut.* 9089)の許に5派(*Mvyut.* 9090-9094)、そして上座部(*Mvyut.* 9095)の許に3派(*Mvyut.* 9095-9098)を列挙する『翻訳名義大集』の分類は、極めてヴィニータデーヴァの論書に近似していることが判明する。^(飛田)

⁸³[30] 〈一切所貴部に関するヴィニータデーヴァの言及〉

Vinītaḍeva P187b7, D154b5: sa sgrogs ris dang srung ba pa // gnas ma'i bu yi sde rnams ni // kun gyis bkur ba mam pa gsum // 「鶏胤(部)と守護部(アヴァンタカ部)(と)犢子部は、一切所貴部の3派である。」— *Bu ston Chos 'byung, lCan skya Grub mtha'* も同じ文を提示する。^(飛田)

⁸⁴[30] 〈部派の分裂に関するヴィニータデーヴァの言及〉

Vinītaḍeva P187b7, D154b5: yul don slob dpon bye brag gis // tha dad rnam pa bco brgyad gsungs // 「場所(と)教義(と)阿闍梨の違いによって異なる18派であると陳べたまう。」— *Bu ston Chos 'byung, 89b6; lCan skya Grub mtha'*, 56a4: yul don slob dpon bye brag gis // tha dad rnam pa bco brgyad gyur // ^(飛田)

⁸⁵[30] 〈4人の長老が異なる言語によってアーガマを誦出したことによる部派分裂説〉

この異説はプトンに示される。しかし、プトンが仏滅後160年の出来事とするのに対し、トゥカンが仏滅後116年の出来事としている。「或る人(曰く)、尊師が入滅なさってから、160年のとき、クスマプラというところにアショーカ王が出現したときに、阿羅漢たちが、サンスクリット(語)とプラークリット(語)と訛(語)(アパブランシャ)とピシャーチャ語(パイシャーチカ)で、尊師の聖言を誦したので、弟子たちがそれぞれに分かれて、18部派となったと。」(*Bu ston Chos 'byung*, 88b5f.: kha cig ston pa 'das nas lo brgya drug cu na grong khyer me tog gis rgyas pa zhes par rgyal po mya ngan med byung ba'i tshe dgra bcom pa rnams legs par sbyar ba dang tha mal ba dang zur chag dang sha za'i skad kyis ston pa'i gsung rab 'don pa las slob ma rnams so sor gyes pas sde pa bco brgyad du gyur te); Cf. 寺本訳

⁸⁶[30] 〈クリクリ王の霊夢〉

クリクリ王の伝承としては、諸経に迦葉仏の仏塔を建立した王としての記述が存する (Cf. 赤沼智善『仏教固有名詞辞典』 p. 306f.) が、トゥカンと一致するものとしては、プトンの記述が挙げられる。「《一切法無我》などという三法印によって裏付けられているから、そして、仏陀のお言葉の内容のみを最高のものとして認めるから、そして、阿羅漢たちが分割なさったものであるから、そしてまた、それら (18 部派) は仏陀の加持によって生じたものであるから、さらに、クリクリ王の御夢を説いた經典の中で〈大王よ。汝が、御夢の中で、18 人が布を引くのを見たのは、これは、釈迦牟尼の教法が 18 部派に分裂してしまうということであるが、かの解脱の布は分裂してしまうことはない〉と説かれているから、(18 部派は) 仏説であるということが成立する。」 (*Bu ston Chos 'byung*, 89b1ff.: chos thams cad bdag med pa la sogs pa'i phyag rgya gsum gyis btab pa'i phyir dang / sangs rgyas kyi gsung don kho na gtsor bzhed pa'i phyir dang / dgra bcom pa nams kyi nram par dbye ba mdzad pa'i phyir dang / de dag kyang sangs rgyas kyi byin rlabs las byung ba'i phyir dang / rgyal po kṛ kṛ'i rmi lam bshad pa'i mdo las / rgyal po chen po khyod kyi rmi lam du mi bco brgyad kyi ras yug 'dren pa mthong ba de ni / shākya thub pa'i bstan pa nram pa bco brgyad du gyes par 'gyur la de'i nram par grol ba'i ras ni gyes par mi 'gyur ba'o zhes gsungs pas bkar bsgrubs so //); Cf. 寺本 訳 p.401, Obermiller 訳 p.98. ^(飛田)

⁸⁷[30] 〈毘婆沙師の阿闍梨〉

トゥカンが、『大毘婆沙論』の四大論師ではなく、四大論師のうちの 3 名と衆賢を挙げるのは、チャンキヤの伝統を受け継ぐものである。 (*ICan skya Grub mtha'*, 63a1f.: slob dpon ni / dbyig bshes dang / chos skyob dang / sangs rgyas lha dang / bdus bzang la sogs pa yin par grags so // — このうち、世友と法救と覺天は、『大毘婆沙論』にあらわれる四大論師 (この三人に妙音 (Ghoṣaka) を加えた四人) であり、説一切有部の教義の集大成に際し重要な役割を果たした人物として知られるが、彼らの伝記についてはほとんどが不明である。一方、衆賢は、世親の『俱舍論』が説一切有部の教義を正しく伝えていないことに不服に感じ、世親に論争を挑んで『俱舍電論』 (『阿毘達磨順正理論』) を造ったと伝えられる。彼の著作には、この他に『阿毘達磨顕宗論』がある。 ^(飛田)

⁸⁸[31] 〈経量部師・譬喩師の語義解釈〉

チャンキヤとクンチョク・ジクメーワンポにトゥカンと同じ語義解釈がある。 (*ICan skya Grub mtha'*, 72a5ff.: mdo sde'i rjes su brangs nas grub pa'i mtha' nram par 'jog pas mdo sde pa dang / dpes ston pa la mkhas pas na dpe ston par grags ces byang chub bzang po sogs kyi bshad do // (Cf. Anne Carolyn Klein, *Knowing, Naming and Negation: A Soucebook on Tibetan Sautrāntika*,

Snow Lion Publication, New York, 1991. p.121.); *dKon mchog Grub mtha'*, p.84: mdo sde pa dang dpe ston pa zhes brjod pa'i rgyu mtshan yod de / bye brag tu bshad pa'i rjes su mi 'brang bar gtso bor bcom ldan 'das kyi mdo la brten nas grub mtha' smra bas na mdo sde pa dang / chos thams cad dpe'i sgo nas ston pas na dpe ston pa zhes brjod pa'i phyir / このうち、チャンキヤの記述には、この解釈がボーディバドラ (byang chub bzang po) などによって説かれていることが指摘されているが、ボーディバドラの *Jñānasārasamuccayanibandhana* に同類の解釈が確認されている (Cf. Mimaki Katsumi, "Le chapitre du *Blo gsal grub mtha'* sur les Sautrāntika", *Zinbun* 16, Kyoto University, 1980. p.145.). *Jñānasārasamuccayanibandhana*, Mimaki Katsumi, *La Réfutation Bouddhique de la Permanence des Choses (Sthirasiddhidūṣaṇa) et la Preuve de la Momentanéité des Choses (Kṣaṇabhāṅgasiddhi)*, Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, Paris, 1976. pp.196-197: 'di ni sGo drug pa dang / 'phags pa bZang po spyod pa la sogs pa'i mdo sde rnam sgra ji lta bar khās len cing / mdo sde de dag gi rjes su 'jug pas na mDo sde pa ste / ming gzhan dpes ston pa la mkhas pas na dPes ston pa'o // — なおトウカンのごとく、経量部師と譬喩師を同一視するのは『俱舍論』より後世の傾向であって、『俱舍論』以前においては両者を使い分け、「譬喩師」の方を軽蔑的なニュアンスをこめて使用する傾向のあったことが、加藤純章『経量部の研究』春秋社、1989. p.68ff. に示されている。^(飛田)

⁸⁹[31] 〈聖典随順派・論理随順派〉

経量部における「聖典随順派」・「論理随順派」の区分については、*lCang skya Grub mtha'* (72b1ff) にも見られる。それによれば、前者は『俱舍論』を基本典籍とし、有部とも共通の思想をもち、後者はダルマキールティの『七部論理学書』に従うものである (*lCang skya Grub mtha'* 72b3-73a2, Klein, A.C., tr., *Knowing, Naming & Negation*, New York 1991, p.121)。Cf. 吉水「ゲルク派による経量部学説理解 (1) 二諦説」『成田山仏教研究所紀要』21, 1998, p.60, n.4; p.61, n.7; 袴谷憲昭「唯識の学系に関するチベット撰述文献」『駒澤大学仏教学部論集』7, 1976. また、クンチョク・ジクメワンポ (*dKon mchog Grub mtha'*, p.91) にも、二派の区分とそれぞれの基本典籍に関する同様の記述が見られる。唯識派における区分については、後記注 121 参照。^(三代)

⁹⁰[33] 〈『楞伽経』におけるナーガールジュナの授記〉

Lankāvatārasūtra, *Sagāthaka* vv.165-166 (Bunyu Nanjo ed., Kyoto 1923), p.286: dakṣṇāpathavedalyāṃ bhikṣuḥ śrīmān mahāyāśāḥ / nāgāvayaḥ sa nāmnā tu sadasatpakṣadārakah // prakāśya loke madvānaṃ mahāyānam anuttaram / āsādyā bhūmiṃ muditāṃ yāsyate 'sau sukhāvatiṃ //

チャンドラキールティの『入中論釈』第6章に同偈の引用がある (*Madhyamakāvātāra par Candrakīrti*, L. de La Vallée Poussin, ed., Gand 1907-1912, Reprint, Tokyo 1977, p.76, 11-16)。さらに、ツォンカパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal 1357-1419) による『入中論註

釈』である『密意解明』(dGongs pa rab gsal kha pa Blo gzung grags pa, bKra shis lhun po 版, Ngawang Gelek Demo, ed., vol.24, New Delhi 74b3-75a5)、チャンキヤ『宗義書』(lCang skya Rol pa'i rdo rje [1717-1786], lCang skya Grub mtha', dbu ma, cha 2a2ff.)にも引かれる。

⁹¹[33] 〈ナーガールジュナの授記の典拠〉

『文殊師利根本タントラ (Mañjuśrīmūlatantra)』(P162, vol.6) は、密教儀軌を集めた所作 (kriyā, bya ba) タントラ、『大法鼓経 (Ārya-mahābherihāraparivarta-nāma-mahāyānasūtra)』(P888, vol.35) は、大乘経典である。ナーガールジュナの授記については、『入中論釈』第6章 (op.cit., p.76) では『大雲経 (Ārya-mahāmegha-nāma-mahāyānasūtra)』(P898, vol.35) が典拠に挙げられる。プトン『仏教史』は、同じく『大雲経』を引き、中観派の祖師とされるナーガールジュナ (150-250 頃) と密教の師として知られるナーガールジュナ (9-10 世紀) を齢 600 年を生きた 1 人の人物として伝える詳しい伝記を紹介する (Bu ston Chos 'byung, 98b6-101b1; Obermiller, E., tr., II. Part, *The History of Buddhism in India and Tibet*, Heidelberg 1932, pp.122-130)。以下のトゥカンによる伝記も、このプトンの『仏教史』の記述を再構成したものである。チャンキヤ『宗義書』(lCang skya Grub mtha', dbu ma, cha 2a1- 5a5)、ジャムヤンシェーパの『大宗義書』('Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje [1648-1721], *Grub mtha' chen mo*, dbu ma 8a5-10a6.) も、多くの経典の引用と共に同じ伝記を紹介する。

⁹²[33] 〈「龍の国の泥」〉

チャンキヤ『宗義書』によれば、ナーガールジュナは地上に仏塔、寺廟を建設するための泥を龍王に求め、地下の龍の国で説法して、多くの泥をを持ち帰ったとある。lCang skya Grub mtha', dbu ma, cha 3b3-6 (Lopez, D.S., tr., *A Study of Svātantrika*, Ithaca, 1967, p.247) 参照。

⁹³[33] 〈『経集論』〉

『経集論 (Sūtrasamuccaya)』(P5330, vol.102) は、約六十の経典からの引用を集めたものであり、ナーガールジュナに帰せられているが、『根本中論』の作者であるナーガールジュナ以後に成立した経典も含むため、その真作であるとは確定されていない。梶山雄一「中観思想の歴史と文献」『講座大乘仏教 7』春秋社 1982, p.5 参照。

⁹⁴[33] 〈『理論の六群』〉

『理論の六群 (rigs pa'i tshogs drug)』は、中観派の祖ナーガールジュナの六部作として伝えられるもので、『根本中論 (Mūlamadhyamakakārikā)』、『宝行王正論 (Ratnāvalī)』、『廻諍論 (Vigrahavyāvartanī)』、『空七十論 (Śūnyatāsaptati)』、『広破論 (Vaidalyasūtra)』、『六十頌如理論 (Yuktiṣaṭikā)』を指す。

⁹⁵[33] 〈『讚法界頌』〉

『讚法界頌 (*Dharmadhātustotra-stava*)』(P2010, vol.46) は、如来蔵思想との類似性が指摘される内容を持ち、中観派の祖ナーガールジュナ作か、密教のナーガールジュナ作か、見解が分かれ、確定されていない。このほかにもナーガールジュナに帰せられる多くの讚頌がチベット大蔵経に収録されている。Seyfort Ruegg, D., "Le *Dharmadhātustava* de Nāgārjuna," *Études tibétaines, dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou*, Paris 1971, pp.448-471 参照。

⁹⁶[33] 〈『菩提心釈』〉

『菩提心釈 (*Bodhicittavivaraṇa*)』(P2665, vol.61, P5470, vol.103) は、『大日経』住心品の菩提心についての教説を中観思想によって解説した論であり、密教のナーガールジュナの作と考えられている。英訳が Lindtner, Ch., *Nāgarjuniana* (Copenhagen 1982) にある。吉水千鶴子「Nāgārjuna 作 *Bodhicittavivaraṇa* について」『印度学仏教学研究』36-2, 1988, pp.(80)-(84) 参照。

⁹⁷[33] 〈『五次第』〉

『五次第 (*Pañcakrama*)』は、『秘密集会タントラ (*Guhyasamājatantra*)』聖者流の究境次第 (*niṣpannakrama*) を説く根本聖典であり、生起次第 (*utpattikrama*) を説く『成就法略集 (*Piṇḍīkrama-ḤPiṇḍīkṛtasādhana*)』とともに密教のナーガールジュナの作とされる。後期密教の無上瑜伽タントラ (*anuttarayogatantra*) を代表する論であり、多くの研究がなされてきた。サンスクリット写本とチベット語訳の校訂テキスト、*Pañcakrama, Sanskrit and Tibetan Texts Critically Edited with Verse Index and Facsimile Edition of the Sanskrit Manuscripts*, Mimaki, Katsumi, and Tomabechi, Toru, eds., The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco 1994 とそこに引かれる研究を参照のこと。

⁹⁸[33] 〈ナーガールジュナ第七地説〉

「ナーガールジュナが第七地に（昇られる）お方である」という説を、プトン、チャンキヤは『大法鼓経』の授記とは明記しない。プトンは「『大法鼓経』よりナーガールジュナが授記されたことが詳しく説かれているということもまた考慮されるべきである」(*Bu ston Chos 'byung*, 7f.: *mga bo che'i mdo las / klu sgrub lung bstan pa rgyas par bshad ces pa'ang brtag par bya'o*) とだけ述べている。Obermiller 訳には (p.130)、"It is said, moreover, that according to Mahābherī-sūtra, Nāgārjuna has been foretold to attain the 8th Stage, but this must likewise be examined" とあるが、*rgyas par* を *brgyad par* と読んだものと思われる。チャンキヤは、『大雲経』、『文殊師利根本タントラ』、『大法鼓経』に授記があることを示し、「ある経典には、この師は初地と説かれ、あるものには七地と説かれ」(*lCang skya Grub mtha'*, *dbu ma, cha 2alf.*: *de yang mdo 'ga' zhib tu slob dpon 'dis dang por bshad pa dang / kha cig tu sa*

bdun par bshad pa dang) と続ける。

⁹⁹[33] 〈『灯作明』におけるナーガールジュナの授記〉

『灯作明 (*Pradīpoddyotana*)』(P2650, vol.60) は、『五次第』の作者ナーガールジュナと同じく『秘密集会タントラ』聖者流に属するチャンドラキールティに帰せられる『秘密集会タントラ』の註釈書である。サンスクリット語写本は Jayaswal Institute (Patna) に現存する (Matsunaga Yukei, “On the Characters of the Pradīpoddyotana’s Sanskrit Manuscript.” 『密教文化』71/72, 大山公淳教授頌寿記念論集 (下) 1965, pp.1-19 参照)。チャンキヤは『灯作明』の授記を「この師は、真言道によって今生で金剛持の位を実現なさる」(*ICang skya Grub mtha'*, dbu ma, cha 2a2f.: slob dpon 'dis sngags kyi lam gyis sku tshe de nyid la rdo rje 'chang gi go 'phang mngon du mdzad pa) と伝える。

¹⁰⁰[34] 〈根本教説の中観派〉

チャンキヤはより詳しく次のように記す。「ナーガールジュナ足下の弟子達のうちで、アーリヤデーヴァは、ブツダパーリタなど他の者達によっても師 (ナーガールジュナ) ご自身と同じく権威であると見なされているので、この聖者師資お二人を (根本教説の中観派)、ほかの (中観の論師) たちを (特定の) 学説をもつ中観派) と先人達はお呼びになり、ツォンカパ師資も適切だにご承認になったのである。これについて、根本なるものと (特定の) 学説をもつものという名称を与える理由は、(聖者) 師資お二人の究極のご真意は、帰謬派の学説にあるのだけれども、(彼らの) 論に説かれる限りにおいては、言説として事物に独自の相をご承認なさるか、なさらないか、外界の対象をご承認なさるか、なさらないか、他者に知られているのみの観点から対論者に対して推論を起こすべきか否かなどの設定を明瞭に区別して (なさる) ことがなく、帰謬派、自立派いずれの立場にも共通な (見解) にいらしゃったので、根本と言われるのである。」(*ICang skya Grub mtha'*, dbu ma cha 8a2-8b1, Lopez, tr., p.253: klu'i zhabs kyi slob ma rnams kyi nang nas 'phags pa lha ni sangs rgyas bskyangs la sogs pa gzhan rnams kyis kyang slob dpon nyid dang 'dra bar tshad mar 'dzin pas yab sras de gnyis la gzhung phyi mo'i dbu ma pa dang gzhan rnams la phyogs 'dzin pa'i dbu ma pa zhes snga ma rnams kyis tha snyad mdzad de / rje yab sras kyis kyang 'thad par bzhed do // de la phyi mo dang phyogs 'dzin pa'i tha snyad byed pa'i rgyu mtshan ni yab sras gnyis kyi dgongs pa mthar thug 'thal 'gyur ba'i lugs su gnas kyang gzhung gi bstan tshod la tha snyad du dngos po la rang mtshan zhal gyis bzhes mi bzhes dang / phyi rol gyi don zhal gyis bzhes mi bzhes dang / gzhan grags tsam gyi sgo nas phyi rgol la rjes dpag bskyed du rung mi rung sogs kyi rnam bzhag gsal bar phye ba med pas thal rang gi phyogs gnyis ga'i spyi la bzhugs pas na phyi mo zhes zer ro //) この説は、ツォンカパの『菩提道次第大論』(*Lam rim chen mo* 342a3f., 長尾雅人『西藏佛教研究』岩波書店 1954, p.109, 『大乘仏典 15 ツォンカパ』、御牧克己、森山清徹、苔米地等流訳、中央公論社 1996, pp.101-104)、『善説心髓』(*Legs bshad snying*

po)』(『ツォンカパ中観哲学の研究Ⅱ レクシェーニンポ中観章和訳』、片野道雄、ツルティム・ケサン校訂・共訳、文永堂 1998、p.28f.)に遡れる。

¹⁰¹[35] 〈(特定の) 学説をもつ中観派〉

「(特定の) 学説をもつ中観派」については、*ICang skya Grub mtha'*, dbu ma, cha 8b3-9a1 (Lopez, tr., p.253) に同じ説明がある。ブッダパーリタ、チャンドラキールティのいずれを帰謬派の祖とするかについてチャンキヤは、後者を祖とする立場をとるべきであることを詳しく論じている。「そのようであるとしても、(ツォンカパの弟子であるケードゥブ [mKhas grub dGe legs dpal bzang po, 1385-1438] の)『大要訣 (*sTong thun chen mo*)』に『その後ブッダパーリタ師が『根本中論』に註釈をお作りになって、聖者師資のご真意は帰謬であると解説し』、とお説きになっている意味について(勝手に)考えて、ブッダパーリタが帰謬派の教乗の轍を開いたと、我が方の(ゲルク派の)ある学者がご主張なさるけれども、それは尊師(ツォンカパ)のお考えではない。ブッダパーリタは自立論証の証因をお説きにならず、帰謬のみを通して論(=『中論』)の意味を解説なさったのではあるが、それのみによって帰謬派の教乗の轍を開いたと(するのは)適切ではないからである。」(*ibid.*, 9a1-4, Lopez., tr., 253f.: de ltar na stong thun chen mo las de'i rjes su slob dpon sangs rgyas bskyangs kyis rtsa shes 'grel pa mdzad nas 'phags pa yab sras kyi dgongs pa thal 'gyur du bkral zhing zhes gsungs pa'i don du bsam nas sangs rgyas bskyangs 'thal 'gyur ba'i shing rta'i srol 'byed du rang re'i mkhas pa kha cig bzhed mod / de ni rje bdag nyid chen po'i dgongs par ma son te / sangs rgyas bskyangs kyis rang rgyud kyi gtan tshigs ma bshad par thal 'gyur tsam gyi sgo nas gzhung don 'grel par mdzad mod kyang de tsam gyis 'thal 'gyur ba'i shing rta'i srol 'byed du mi rung ba'i phyir /) さらに続けて、その根拠をツォンカパの『善説心髓』(片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 p.12, 1ff. に当たる文の要約)に従って論じ、ケードゥブもギャルツァブ (rGyal tshab Dar ma rin chen 1364-1432) も含めたツォンカパ師資の一致した見解であることを確認している (*ibid.*, 9a4-9b3, Lopez., tr., 254)。

¹⁰²[35] 〈自立論証派東方三指針〉

チャンキヤ『宗義書』(*ICang skya Grub mtha'*, dbu ma, cha 7a2) に同じ記述がある。一般に、著作ではなく、この3人を「東方指針」(dbu ma shar gsum) = 東方のベンガル出身の三人の師という意味で呼ぶことが多い。Tauscher, H., *Phya pa chos kyi seng ge, dBu ma shar gsum gyi stong thun*, Wien 1999, p.IX 参照。

¹⁰³[35] 〈基体の設定の仕方〉

gzhi とは正しい認識手段 (pramāṇa) によって認識される基体であり、ここでは世俗として外界の存在をどのようなものと規定するかを問題としている。

¹⁰⁴[35] 〈カムバラ〉

ラワパ、別名カムバラ (Kambala, 赤衣, 羅婆, Lva ba pa) は、ヴィニーターデーヴァと同時代とされる中観思想家で、『般若波羅蜜多九頌精義論 (Navaśloki)』(大正 No.1516, 北京 No.5210; Tucci: *The Minor Buddhist Texts*, I)・『明鬘論 (Alokamālā)』(北京 No.5868) の著者とされる。Mittal, *Eye-view*, pp.168-169 に伝記の詳述が存する。Doha-kośa (NIBS, p.340) は 84 密教シッダの一人として掲げ、*The Blue Annals*, I, p.362 には彼の名前の由来を「赤い毛布を法衣代わりに着用していたため」と記す。同一人かは検討の要あり。この他に『パクサムジョンサン』*Pag Sam Jon Zang*, p.108; 『ターラナータ仏教史』*Tāranātha*, p.269 参照。

¹⁰⁵[35] 〈自立論証派の細分類〉

この自立論証派の細分類は、ジャムヤンシェーパの『大宗義書』に説かれるものであり (*Grub mtha' chen mo*, dbu ma 106a6f., 130a1-133a1)、ジャムヤンシェーパ二世であるクンチヨク・ジクメーワンポ (dKon mchog 'jigs med dbang po 1728-1791) の『宗義の宝環』にも踏襲されている (*dKon mchog Grub mtha'*, p.97)。「形象虚偽有垢論派」にはジターリを、「形象虚偽無垢論派」にはカムバラを配する。袴谷憲昭「中観派におけるチベットの伝承」(『三蔵』117, 1976, pp.1-10)、御牧克己「チベットにおける宗義文献(学説綱要書)の問題」(『東洋学術研究』21-2 [特集・チベット仏教], 1982, pp.185-192) 参照。

この分類の仕方とその根拠については、以下に挙げるような問題があり、考察と議論がなされてきたが、さらなる検討を要するものも多い。ジャムヤンシェーパ『大宗義書』に引かれる数々の典拠についても、十分な調査がなされているとはいえない。

1a) 「瑜伽行中観派」「経量行中観派」という分類は、インドの密教者ラクシュミー (Lakṣmī 11 世紀) の『第五次第註 (*Pañcakramaṭīkā*)』やボーディバドラ (Bodhibhadra 10-11 世紀) の『智心髓集註 (*Jñānasārasamuccayanibandhana*)』などのインド撰述文献に類似の分類が見られることから、インドで成立したものと考えられるが、その本来の意味については明らかではない。チベットでは、イエシェーデ (Ye shes sde, 9 世紀) の『見解の差別』(*lTa ba'i khyad par*) に rnal 'byor spyod pa'i dbu ma'i lugs, mdo sde dbu ma'i lugs という分類があり、それぞれ「世俗において瑜伽行派に一致して外界を識のみと認める中観派」「世俗において経量部に一致して外界の対象を認める中観派」と理解されている。ゲルク派の諸宗義書も同じ見解をとる。松本史朗「*lTa ba'i khyad par* における中観理解について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』13, 1981, pp.93-124) は、それに反対して、それぞれ『瑜伽師地論』、『般若経』に従う中観派を表していた、という解釈を提示、梶山雄一「中観思想の歴史と文献」(『講座大乘仏教』7, 1982, pp.1-83) で注目されたが、斎藤明「*lTa ba'i khyad par* における「経(部)中観」の意味」(『印度学仏教学研究』55-2, pp.(111)-(119)) によって否定されている。

1b) 実際のパーヴィヴェーカ思想、シャーンタラクシタ等の思想がそれぞれ経量部、瑜伽行派の思想と共通性をもつものであるかについては疑問点も指摘されている。梶山

前掲論文はいずれについても概ね共通性を認め、肯定的な評価を下している (pp.30-51)。シャーントラクシタが『中観莊嚴論』において、外界の対象を認めず、世俗唯識説に立つことについては、一般に認められているが、松本史朗は否定的な見解をもつ (『後期中観派の空思想『瑜伽行中観派』について』『理想』610,1984, pp.140-159、「後期中観思想の解明にむけて」『東洋学術研究』25-2, 1986, pp.177-203)。

1c) 「瑜伽行中観派」「経量行中観派」の分類は、ゲルク派の宗義書には採用されるが、それは『見解の差別』などでは「自立論証派」「帰謬論証派」という分類とは別個に立てられており、自立論証派の下位分類とはなっていない (御牧前掲論文参照)。ゲルク派においてどのようにこの二つが自立論証派に組み入れられるようになったのか、その過程とツォンカパの立場については議論がある。ツルティム・ケサン「経部行中観派と瑜伽行中観派の学派分類について」『印度学仏教学研究』51-1, 2002, pp.109-113 とその注に挙げられた論文を参照のこと。

1d) チャンキャ『宗義書』(ICang skya Grub mtha', dbu ma, cha 46a1-47a6) には、「経量行中観派」「瑜伽行中観派」という呼称が起こった理由が説明されているが、それはトゥカンのこの説明をより詳しくしたものである。ジャムヤンシェーパ『大宗義書』(Grub mtha' chen mo, dbu ma 106a5-107a1)、クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』(dKon mchog Grub mtha', p.97) にも同様の説明がある。

2a) 「瑜伽行中観派」の下位分類である「形象真実派」「形象虚偽派」は、satyākāravāda, alikākāravāda と呼ばれる瑜伽行派内部における考えの相違にもとづくものであり、「有相 (有形象) 唯識」「無相 (無形象) 唯識」とも呼ばれる。形象真実論をとる 11 世紀のジュニャーナシュリーミトラ (Jñānaśrīmitra)、ラトナキールティ (Ratnakīrti)、形象虚偽論をとるラトナーカラシャンティ (Ratnākaraśānti) の間で論争となったことは知られている (沖和史「無相唯識と有相唯識」『講座大乘仏教』8、岩波書店 1982, pp.177-209 参照)。しかしながら、この中観派に関するチベットの分類が正しいか否かについては、多くの疑問が提示されている。松本史朗は、「知と形象の無区別性が同一性を意味すると考えるのが形象真実派であり、単なる区別の否定と考えるのが形象虚偽派である」というダルモッタラ (Dharmottara 750-810 頃) のメルクマールを用いて両派の分類を考察し、シャーントラクシタの『中観莊嚴論』第 91 偈は「有形象唯識」説を説くが、それはシャーントラクシタ自身の説ではないと主張する (『Ratnākaraśānti の中観派批判 (下)』『東洋学術研究』19-2, 1980, p.167ff.、「後期中観派の空思想『瑜伽行中観派』について」p.149ff.)。沖前掲論文 (p.191) では、シャーントラクシタは「形象虚偽派」の系譜に入れられており、梶山前掲論文 (p.60-63) も、形象真実論者とするには懐疑的である。カマラシーラについても同様に、『中観明』の論述には形象虚偽論の批判は見られるが、彼自身が形象真実論をとるかどうかについては、はっきりした言明は見られないとされ (梶山前掲論文 pp.63-67 参照)、ハリバドラもまた、形象虚偽論者であるという確証は見出されていない (梶山前掲論文 pp.67-71 参照)。

2b) ヴィムクティセーナ、ジターリ、カムバラについては、その思想自体が明らかではなく、この分類が正しいかどうかについては結論は出ていない。松本「Ratnākaraśānti の中観派批判（下）」p.174、梶山前掲論文 p.21, 71 参照。

2c) チベットのゲルク派内での「形象真実派」「形象虚偽派」の分類は、ツォンカパによってインド密教系の伝承として受容されている。『善説心髓』（片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 p.57）、ツルティム・ケサン「形象真実と形象虚偽について」『日本西藏学会会報』45, 2000, pp.3-11 参照。

2d) 「有垢論」「無垢論」の主張がいかなるものと考えられているかについては、後出のトゥカン自身の唯識派の項の解説のほか、次のクンチョク・ジクメーワンポの『宗義の宝環』唯識派の説明が参考になろう。「心の本質は無明の薫習の汚れに染まっていると主張するので有垢論（者）（と言われ）、心の本質は無明の薫習の汚れに少しも染まっていないと主張するので、無垢論（者）と言われる。あるいはまた、仏地に無明はないけれども迷乱の顕現はあると主張するので有垢論（者）（と言われ）、仏地に無明はないので迷乱の顕現もないと主張するので無垢論（者）と言われる。」(dKon mchog Grub mtha', p.91: 5-11: sems kyi ngo bo ma rig pa'i bag chags kyi dri mas bslad par 'dod pas na Dri bcas pa dang / sems kyi ngo bo ma rig pa'i bag chags kyi dri mas cung zad kyang ma bslad par 'dod pas Dri med pa zhes zer / yang na / sangs rgyas kyi sa na ma rig pa med kyang 'khrul ba'i snang ba yod par 'dod pas na Dri bcas pa dang / sangs rgyas kyi sa na ma rig pa med pas 'khrul snang yang med par 'dod pas na Dri med pa zhes zer /)

¹⁰⁶[36] 「中観」(dbu ma, madhyamaka) の語義として、ジャムヤンシェーパ『大宗義書』(Grub mtha' chen mo, dbu ma 2b1-3b6)、チャンキヤ『宗義書』(lCang skya Grub mtha', dbu ma, cha 7b2-8a1) にはより詳しい説明が、クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』(dKon mchog Grub mtha', p.96) には同じ説明がある。チャンキヤはバーヴィヴェーカによる語義解釈を引き、ジャムヤンシェーパは多くの典籍を引用し、dbu ma の語は、学説、典籍、論者のいずれにも適応されるとする。バーヴィヴェーカ(バヴィヤ)の『思釈炎』による Madhyamaka の語義解釈については、斎藤明「バヴィアの規定する Madhyamaka とその解釈をめぐって」『アビダルマ仏教とインド思想』(春秋社 2000, pp.267-279) 参照。

¹⁰⁷[36] 「自立論証派」「帰謬論証派」の区分とその根拠
クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』(dKon mchog Grub mtha', p.97, p.102) に同じ説明がある。ジャムヤンシェーパ『大宗義書』(Grub mtha' chen mo, dbu ma 102b6-106a5, 142a2-142b3)、チャンキヤ『宗義書』(lCang skya Grub mtha', dbu ma, cha 45a1-46a1, ja 1b2-3b3) には、「自立論証派」「帰謬論証派」の区分とそれぞれの定義について、様々な説が引かれ、検討されている。しかしながら、チベットでは定着しているこの中観派の分派の起源についてはいまだ明らかではない。「自立論証」「帰謬論証」とは何か、という問題もイ

ンドに遡って明確に定義することには困難がある。チベットにこの分派を導入したのは、『明句論』の翻訳者であるパツァブ・ニマタク (Pha tshab Nyi ma grags -1115?) であると伝えられるが、彼の直弟子であるシャン・タンサクパ (Zhang Thang sag pa) はその区分を用いているとは思われず、インドからチベットへチャンドラキールティの思想が輸入された当時、「自立論証」を説く者を「中観派」と見なすか否かで異なった見解があったのではないかと推測される (吉水後掲論文参照)。パツァブに帰せられる著作の写本が『カダム全集』第1輯 (*bKa' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po*, dPal brtsegs bod yig dpe mnying zhib 'jug khang. 30 Vols. Si khron mi rigs dpe skrun khang 2006) に含まれ、出版されたので、今後これらのことも明らかになると期待される。この中観派の区分についての研究は数多くなされている。中でも最近のものとして、Seyfort Ruegg, D., *Three Studies in the History of Indian and Tibetan Madhyamaka Philosophy. Studies in Indian and Tibetan Madhyamaka Thought, Part 1*, Wien 2000; Id., *Two Prolegomena to Madhyamaka Philosophy. Studies in Indian and Tibetan Madhyamaka Thought, Part 2*. Wien 2002; *The Svātantrika-Prāsaṅgika Distinction, What difference does a difference make?*, Dreyfus, G., & McClintock, S., eds., Wisdom Publications, Massachusetts, USA, 2003; 四津谷孝道『ツォンカパの中観思想』大蔵出版 2006; 吉水千鶴子「インド・チベット中観思想史の再構築にむけて」『哲学・思想論集』32 (2006)、筑波大学哲学・思想専攻 2007 を挙げておこう。それ以前の研究については、四津谷前掲書が網羅的な文献表を提供している。

¹⁰⁸[37] 〈『文殊師利根本タントラ』におけるアサンガについての予言〉

チャンキャ『宗義書』唯識章 (*lCang skya Grub mtha'*, 103a2-103b2) に同じ引用がある。

¹⁰⁹[37] 〈アサンガの出現年代〉

チャンキャ『宗義書』唯識章 (*lCang skya Grub mtha'*, 103a2ff.) によると、『解深密経大註』(dgongs 'grel gyi 'grel chen, *Samdhinirmocanasūtra-vyākhyāna* P5845, vol.144 を指すか?) を引く上記の『文殊師利根本タントラ』に仏滅 900 年後説が、他の諸典籍 (gzhung gzhan dag) に 600 年説があると記されている。以下のアサンガ、ヴァスバンドウ兄弟の伝記は、プトン『仏教史』(*Bu ston Chos 'byung*, 103a7 infra., Obermiller, tr., pp.136-147) の叙述をまとめたものである。チャンキャも同じ伝記を紹介する。

¹¹⁰[38] 〈『弥勒五法』〉

マイトレーヤに帰せられる『大乘莊嚴経論 (*Mahāyānasūtrāḷmkāra*)』『中辺分別論 (*Madhyāntavibhāga*)』『法法性分別論 (*Dharmadharmatāvibhāga*)』『宝性論 (*Ratnagotravibhāga-Uttaratantra*)』『現観莊嚴論 (*Abhisamayāḷmkāra*)』を指す。プトン『仏教史』(*Bu ston Chos 'byung*, 20b4f., *History of Buddhism, I. Part*, Obermiller, tr., p.53f.)、袴谷憲昭「瑜伽行派の文献」(『講座大乘仏教』8, 春秋社 1982, pp.53-58)、「チベットにおけ

るマイトレーヤの五法の軌跡』『チベットの仏教と社会』（春秋社 1986, pp.235-268）参照。

¹¹¹[38] 〈『五部瑜伽師地論』〉

いわゆる『瑜伽師地論 (*Yogācārabhūmi*)』のことで、その「本地分」「撰決撰分」「撰事分」「撰異門分」「撰積分」を五部と数えたもの。プトン『仏教史』(*Bu ston Chos 'byung*, 21a5f., Obermiller, tr., *op.cit.*, p.54)、袴谷前掲論文 pp.58-62 参照。

¹¹²[38] 〈『二種撰頌』〉

『阿毘達磨集論 (*Abhidharmasamuccaya*)』・『撰大乘論 (*Mahāyānaśāstra*)』を指す。プトン『仏教史』(*Bu ston Chos 'byung*, 21b6f., Obermiller, tr., *op.cit.*, p.56)、袴谷「瑜伽行派の文献」p.62ff. 参照。

¹¹³[38] 〈『地讚嘆釈』〉

プトン『仏教史』(*Bu ston Chos 'byung*, 105a4f., Obermiller, tr., II. Part, p.141) 参照。Obermiller は『地讚嘆釈』を『瑜伽師地論』第1分への註釈とする。チャンキヤも同じ引用をする (*iCang skya Grub mtha'*, 114b4f.)。

¹¹⁴[38] 〈『(現観莊嚴論註釈) 語句解明』〉

Abhisamayālaṅkāra の註釈 (P5194, vol.91)。プトン『仏教史』(*Bu ston Chos 'byung*, 105a1f., Obermiller, tr., II. Part, p.140, Obermiller はこれを『現観莊嚴論ハリバドラ註』への複注とする)、チャンキヤ『宗義書』(*iCang skya Grub mtha'*, 114b5f.) 参照。

¹¹⁵[38] 〈『アスヴァバーヴァの註釈』〉

プトン『仏教史』(*Bu ston Chos 'byung*, 105b1f., Obermiller, tr., II. Part, p.142) には「バダント・アスヴァバーヴァの註釈」(*btsun pa ngo bo nyid med pa'i 'grel bshad*) とある。『大乘莊嚴經論』への註釈 (P5530, vol.108) を指すか？

¹¹⁶[39] 〈『プラカラナ八部』〉

プトン『仏教史』(*Bu ston Chos 'byung*, 22a1ff., Obermiller, tr., I. Part, p.56f.) によれば、独立の著作として『唯識三十頌 (*Triṃśikā*)』『唯識二十頌 (*Viṃśatikā*)』『五蘊論 (*Pañcaskandhaka*)』『釈軌論 (*Vyākhyāyukti*)』『成業論 (*Karmasiddhi*)』の5つ、註釈として『大乘莊嚴論註 (*Mahāyānasūtrālaṅkārabhāṣya*)』『縁起經註 (**Pratītyasamutpādādivihāgabhāṣya*)』『中辺分別論註 (*Madhyāntavihāgabhāṣya*)』の3つを数えて、計8つである。チャンキヤは『縁起經註』のかわりに『法法性分別論註』を挙げる (*iCang skya Grub mtha'*, 115a5)。袴谷「瑜伽行派の文献」pp.64-70 参照。

¹¹⁷[39] 〈「弥勒と関係する二十部の法」〉

この二十部という数え方の伝承はプトン以前にあったと考えられる。プトン『仏教史』(Bu ston Chos 'byung, 22a3ff, Obermiller, tr., I. Part, p.57)、チャンキヤ『宗義書』(iCang skya Grub mtha', 115b1)。袴谷「瑜伽行派の文献」p.47f. 参照。

¹¹⁸[41] 〈形象真実派の三分類と形象虚偽派との区分〉

形象が多数ならば知も多数であると考ええる主客同数論 (gzung 'dzin grangs mnyam pa)、ひとつの知にひとつの形象が顕われると考える一卵半塊論 (sgo nga phyed tshal)、ひとつの知に多くの形象が顕われると考える多様不二論 (sna tshogs gnyis med pa, citrādvaita) の3つである。チャンキヤ『宗義書』(iCang skya Grub mtha', 158b2f.) 参照。形象真実派と虚偽派の区分を含めて、ジャムヤンシェーパの『大宗義書』とチャンキヤの記述を詳しく分析した論文に、袴谷憲昭「唯識の学系に関するチベット撰述文献」『駒澤大学仏教学部論集』7, 1976, pp.256-232 がある。それによると、一般にアサンガの系統を形象虚偽派、ディグナーガの系統を形象真実派とするが、個々の論師あるいは論書の立場をいずれととらえるのかについては、様々な議論がある。さらに、沖和史「無相唯識と有相唯識」『講座大乘仏教』8, 岩波書店 1982, pp.177-209; 福田洋一「一卵半塊論について」『日本西藏学会会報』33, 1987, pp.1-8; 小林守「形象真実〈一卵半塊〉説について」『印度学仏教学研究』36-2, 1988, pp.(101)-(107) とそれらに引かれる文献を参照のこと。

¹¹⁹[41] 〈形象真実派の三分類に関する解釈〉

ケンチョク・ジクメーワンポの『宗義の宝環』は、具体的に「諸説」を挙げる (dKon mchog Grub mtha', p.89ff.)。

¹²⁰〈形象虚偽有垢派と形象虚偽無垢派〉

上記注 105, 2d) 参照。

¹²¹[41] 〈聖典随順唯識派と論理随順唯識派〉

チベットでは、アサンガの系統を「聖典随順派」、ディグナーガ・ダルマキールティの系統を「論理随順派」と呼ぶ。袴谷「唯識の学系に関するチベット撰述文献」参照。学説上の相違は、前者は八識説、三乗説をとり、後者は六識説、一乗説をとることにある (袴谷「瑜伽行派の文献」p.70, (1) 参照)。経量部における区分については、前記注 89 参照。

¹²²[43] 〈仏教四派のブドガラ観〉

Lopez, *op.cit.*, p.111 には、ゲルク派に伝えられる学派別のより詳細なブドガラ観が紹介されている。それによると、毘婆沙師と聖典随順派の経量部はブドガラを「蘊の相続」と考え、論理随順派の経量部と瑜伽行派は「意識」と考え、聖典随順派の瑜伽行派は「ア

ーラヤ識」、経量行中観派は「意識」、瑜伽行中観派は「意識の相続」と考えるという。クンチョク・ジクメーワンポの『宗義の宝環』では、毘婆沙師は「五蘊の集まり」とするが、一切所貴部は「五蘊すべて」、守護部は「心ひとつのみ」、聖典随順派の経量部は「蘊の相続」、論理随順派の経量部は「意識」、聖典随順派の瑜伽行派は「意識とアーラヤ識」、論理随順派の瑜伽行派は「意識」、瑜伽行中観派・経量行中観派は「意識」をブドガラの基体 (mtshan gzhi) と考えるとしている (*dKon mchog Grub mtha'*, p.79, 87, 93, 98)。こうした分類は、チャンドラキールティの『入中論』VI.126に基づく。そこでチャンドラキールティは次のように述べる。「ここで (仏教) 自派の者達は言う。『蘊以外に他の我は成立しないが故に、我見の対象は蘊のみである。』(126ab) このように説かれた論理によって、蘊とは別の我は成立しない。それ故に、蘊以外の我が成立することはないので、有身見の対象は諸蘊だけなのである。従って、我とは蘊だけにすぎないというのである。この見解は、(仏教) 自派の一切所貴部 (Sammatīya) たちのものである。そのうちまた『ある者は、我見の拠り所としての蘊を五つとも認め、ある者は、心のみと主張する。』(126cd)」(*Madhyamakāvātāra par Candrakīrti*, p.244, 1-11: 'dir rang gi sde pa dag na re / phung po las gzhan bdag grub med pa'i phyir // bdag lta'i dmigs pa phung po kho na'o // gang gi phyir ji skad du bshad pa'i rigs pas phung po las tha dad pa'i bdag ma grub pa de'i phyir / phung po dag las gzhan pa'i bdag grub pa med pa'i phyir / 'jig tshogs la lta ba'i dmigs pa ni phung po dag kho na yin no // de'i phyir bdag ni phung po tsam kho na yin no zhes zer ro // phyogs 'di ni rang gi sde pa mang pos bkur pa rnam kyī yin no // de las kyang / kha cig bdag lta'i rten du phung po ni // Inga char yang 'dod kha cig sems gcig 'dod //) ツォンカパは 126 偈 cd も「一切所貴部のある者」と註釈するが、その後『思釈炎』(*Tarkajvālā*) を引用して、バーヴィヴェーカが「人我を心である」と考える者であることを示し、さらに彼はアーラヤ識を認めないので、彼にとっての「心」とは「意識」(rnam shes) であるが、アーラヤ識を認める者たちは「人我の基体はアーラヤ識である」と考えることを述べている (*dGongs pa rab gsal*, 220b3-221a5)。このツォンカパの解釈に基づいて、唯識派は「アーラヤ識」を、中観自立論証派は「意識」をブドガラと考えるという理解が起こったと推測される。帰謬派の立場から見れば、これらいずれの見解も退けられる。ツォンカパによれば、「ブドガラの言説を立てるだけでは満足せずに、その言説を立てる (対象である) 仮設の基体はどのようなものであるかを考察し、求めてから設定する。そうであれば、ブドガラはそれ自身のあり方によって (自ずから) 成立するものと設定することである。自派の毘婆沙師から中観自立論証派まですべてがそのように主張する。」(*Legs bshad snying po*, 片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 p.86f.) これに対して帰謬派は、ブドガラという言説の基体を求めず、ただ仮設のみと考えるのである。Yoshimizu Chizuko, "rang gi mtshan nyid kyis grub pa III Section II and III" 『成田山仏教研究所紀要』17, 1994, p.326 infra. 参照。

¹²³[43] 〈rang gi mtshan nyid kyis grub pa などの熟語中の具格の解釈〉

rang gi mtshan nyid kyis grub pa, rang bzhin gyis grub pa, ngo bo nyid kyis grub pa という熟語の具格をどのように解するかについては様々な考えがある。「(自相、自性、本性)によって」とするときには、名称や認識のように外的なものの力によらず、「自ら、自ら、おのずから、生来、本来 by nature, intrinsically」という意味となろう。この場合、成立しているものとは別個な自相等が成立の原因として存在するわけではないことに注意しなくてはならない。また、「自相、自性、本性として」とするならば、やはり「他には依存しない自立的なものとして、生来的なものものとして」という意味となろう。しかも、名詞としての rang mtshan / svalakṣaṇa, rang bzhin, ngo bo nyid / svabhāva という語はそれぞれ直接知覚の対象を指したり、常住不変の性質を指したりもする。それらの意味が含意されていることも考慮されなくてはならない。さらに、この具格の働きは何について「成立している」と言われているのかによっても異なってくるように思われる。ここでは平易な訳を心がけた。rang gi mtshan nyid kyis grub pa という熟語が由来する『解深密経』における原義とその意味については以下の論文を参照のこと。松本史朗「ツォンカパの中観思想について」『東洋学報』62-3/4, 1981, pp.174-211；吉水千鶴子「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (I)」『成田山仏教研究所紀要』第15号、『仏教文化史論集』II, 1992, pp.609-656；「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (II)」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集, インド学・密教学研究』, 法蔵館, 1993, pp.971-990；"On rang gi mtshan nyid kyis grub pa II Introduction and Section I," 『成田山仏教研究所紀要』16, 1993, pp.91-147；"On rang gi mtshan nyid kyis grub pa III, Section II and III," 『成田山仏教研究所紀要』17, 1994, pp.295-354；"Tsong kha pa's Reevaluation of Candrakīrti's Criticism of Autonomous Inference," *The Svāntarika-Prāsaṅgika Distinction, What Difference does a Difference Make?*, Dreyfus, D., and McClintok, S., eds., Boston, Wisdom Publications, 2003, pp.257-288, Appendix p.275f.；小林守「自相成立と自性成立」『印度学仏教学研究』43-1, 1994, pp.(187)-(190)；福田洋一「ツォンカパにおける中観自立派の存在論」『日本西蔵学会会報』45, 2000, pp.13-27；「自相と rang gi mtshan nyid」『江島恵教博士追悼記念論集 空と実在』春秋社 2000, pp.173-189；「rang gi mtshan nyid kyis grub pa 再論」『印度学仏教学研究』54-2, 2006, pp.(1)-(8)；木村誠司「ツォンカパの自相説に関する一報告」『駒沢短期大学研究紀要』32, 2004；「ツォンカパの自相説 (1)」『駒沢短期大学仏教論集』10, 2004, pp.(1)-(14).

¹²⁴[44] 〈実有論者たちのプロダガラ理解〉

実有論者たちにとっても「プロダガラ」は仮設された言説に過ぎないが、その仮設の基体となる実体があると想定する点、そしてプロダガラも言説としては成立すると認める点で、帰謬派とは異なるという意味か。

¹²⁵[44] 〈毘婆沙師による二諦の設定〉

毘婆沙師による二諦の設定であり、『俱舍論 (*Abhidharmakośa*)』VI.4 (「例えば壺のように、壊れたとき、あるいは水のように、(分析的な) 知によって (色などの構成要素である) 他のものが除かれたとき、そのものの認識がなくなるもの、それが世俗の存在であり、勝義の存在はそれとは別のものである。」 *yatra bhinne na tadbuddhir anyāpohe dhiyā ca tat / ghaṭāmbuvat samvṛtisat paramārthasad anyathā //*) に従う説である。チャンキヤ『宗義書』毘婆沙師の章 (*ICang skya Grub mtha'*, 63a4 *infra.*) に引用と解説がある。吉水千鶴子『ゲルク派による経量部学説理解 (1) 二諦説』『成田山仏教研究所紀要』21, 1998, p.60 n.6, p.67 n.17 参照。

¹²⁶[45] 〈経量部による二諦の設定〉

経量部による二諦の設定である。チャンキヤ『宗義書』経量部の章 (*ICang skya Grub mtha'*, 73a5 *infra.*) によれば、「聖典随順経量部」は毘婆沙師と同じように二諦を設定し、「論理随順経量部」はダルマキールティの *Pramāṇavārttika* に従って二諦を設定する。その典拠と方法については、吉水前掲論文参照。

¹²⁷[45] 〈チャンキヤの詩〉

この詩は、チャンキヤの『アムドにとりつく (謬) 見の歌』にある (*ITa mgur a mdo 'dzin / A mdo shes kyi brdzun tshig grag cha'i sgra dbyangs according to the colophon, sTong thun chen mo and other Madhyamaka Texts on Madhyamaka Philosophy. Madhyamaka Text Series 1, lHa mkhar Yongs 'dzin bstan pa rgyal mtshan, ed., New Delhi 1972, 2b1*)。その頌の内容は次のように読めるか。「毘婆沙師、経量部、唯識派、(中観自立論証派) 東方三家の学者ときたら、母なる大象の白い姿について、インド虎の麗しき縞目模様の色法 (つぎはぎ衣) をまとった脳足りんの気のふれたお猿さん (毘婆沙師、経量部、経量行中観派か?)、比類なき (無二の) 自立した熊っ子 (唯識派、瑜伽行中観派か?) が、いい大人の弁を弄しているけれど、老いたるおっかさん (象) はいなくなっちゃったよ。(bye mdo nam rig dang shar gsum mkhan pos // a ma glang chen gyi thal dkar gzugs la // bem po 'dzum ris kyi rgya stag khra bo // 'dzin pa klad med kyi spre'u smyon pa // gnyis med tshugs thub kyi dom bu dar ma'i tha snyad sna tshogs zhig 'dogs par byed kyang // a ma rgan mo de stor nas 'dug go // 2a6ff.)」

¹²⁸[46] 〈三性説と二諦〉

依他起性を勝義と見なすか否かについては両論があり、ゲルク派ではツォンカパに従って勝義と見る。『善説心髓』によれば、その典拠は『菩薩地』『撰大乘論』である。ツォンカパは、それらとは異なって、円成実性のみを勝義と唱える『解深密経』『中辺分別論』などを挙げて、その会通をはかっている (*Legs bshad snying po 22b4-25b5, The Collected Works of Tsong kha pa Blo bzang grags pa (bKra shis lhun po 版) vol.21, Ngawang Gelek*

Demo, ed., New Delhi 1979; Yoshimizu Chizuko, "rang gi mtshan nyid kyis grub pa II Introduction and Section I," p.119 n51; 吉水「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (I)」参照)。依他起性は遍計所執が起こる基体であることについても、ツォンカパは『菩薩地』4章 (*Bodhisattvabhūmi*, Dutt, N., ed., Patna 1966, p.30f.) を引きながら、詳しく論証している (*Legs bshad snying po* 16a1f., 16b6f., 17a3-6, 吉水「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (II)」p.980f. 参照)。

¹²⁹[46] 〈遍計所執性の相無自性〉

瑜伽行派が用いる rang mtshan, rang gi mtshan nyid kyis grub pa という語は、『解深密経』7章の三無自性説の中の遍計所執性の相無自性 (mtshan nyid ngo bo nyid med pa, lakṣaṇaniḥsvabhāvatā) についての表現であり、「それは名称と協約によって設定されたあり方 (ming dang brdas nmam par bzhaḡ pa'i mtshan nyid) であって、それ自身のあり方として確定しているものではない (rang gi mtshan nyid kyis nmam par gnas pa ni ma yin pa)」 (*L'explication des mystères*, Lamotte, E., ed., Louvain 1935, p.67f.) とされる。この瑜伽行派が遍計所執性について用いる rang mtshan という概念は、帰謬派が用いる「真実有」「実在」を意味する rang mtshan と同義だということであろう。

¹³⁰[46] 〈『善説心髓』における遍計所執性理解〉

『善説心髓』 (*Legs bshad snying po* 5b2) からの引用。前文は「しかしながら、この(唯識派)に〈それ自身のあり方によって存在する〉と捉えることがあるならば、帰謬派が〈それ自身のあり方によって成立する〉と捉えることもあり ('on kyang 'di'i rang mtshan gyis yod par 'dzin pa yod na thal 'gyur ba'i rang mtshan gyis grub par 'dzin pa yang yod la)」とある。言わんとするところは、「遍計所執性は唯識派にとって rang mtshan gyis ma grub pa であり、それゆえに無であるが、帰謬派はそのとおりに認めない。名称と協約 (ming dang brda) によって設定されたものを(仮)有と考えるからである。しかしながら、名称と協約によって設定されたものは帰謬派にとっても rang gi mtshan nyid kyis ma grub pa であるので、遍計所執性は帰謬派の考えとおりにそれ自身のあり方によって自ずから成立するものではない」という意味か。Thurman, R., *Tsong kha pa's Speech of Gold in the Essence of True Eloquence*, Princeton 1984, p.195 n.16 参照。

¹³¹[46] 〈外境の否定だけでは唯識は成立しないということ〉

チベットの論書一般の議論の仕方として、「他派の学説の論駁」(gzhan lugs dgag pa) と「自説の設定」(rang lugs gzhaḡ pa) を立てる。いかなる学説もこの二段階を経て確立されねばならず、他派の外境説の論駁だけでは「唯識説」は確立できないという意味か。しかしながら学説綱要書類はあまりこのような議論の立て方をしないことも事実である。チャンキヤの『宗義書』唯識章では、「唯識の真理に入る仕方」(nam rig tsam gyi de kho na

nyid la 'jug tshul) にその理論の実際 (dngos) と所取、能取が別体であることを否定する論理 (gzung 'dzin rdzas gzhan 'gog pa'i rigs pa) を分けて論じている (*ICang skya Grub mtha'*, 181a5-200a3)。

¹³²[47] 〈自立論証派による勝義有と言説有の設定〉

上記 Z17a6f. 参照。ツォンカパは『入中論釈』で de kho na nyid du grub pa, rdzas su grub pa を除く 6つを挙げ、自立論証派は前の 3つを言説として認めると述べている (*dGongs pa rab gsal* 88a1ff., 松本「ツォンカパの中観思想について」p.183 参照)。ゲルク派によるこれらの概念の区別と学派ごとの承認の仕方については、Hopkins, J., *Meditation on Emptiness*, London 1983, p.39 のチャート参照。

¹³³[47] 〈仏教諸学派によるプロダラの設定〉

上記注 122 参照。

¹³⁴[47] 〈実有論者による自立的プロダラの設定の仕方〉

ツォンカパ『善説心髓』に説かれる rang gi mtshan nyid kyis grub pa の意味内容に呼応する考えである。『この人がこの行為をなした。この結果を享受した。』という言語表現について、(この人) 自身のこの蘊こそが人 (プロダラ) であるのか、それともそれとは別のものであるか、と人 (プロダラ) のその言語表現の対象を求めて、同一 (のものか) 別異 (のものか) などのいずれかの方向を得て、その人を設定する基盤があったならば、業を積む人などと設定できるが、得られなければ設定できないので、人の言説を立てるだけでは満足せずに、それについて何らかの言説を立てるその仮設のその基体はどのようなのか、考察して求めてから設定するならば、人 (プロダラ) はそれ自身のあり方によって (自ずから) 成立していると設定するのである。自派の毘婆沙師から中観自立論証派にいたるまですべてがそのように主張するのである。」(片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳、前掲書 p.86f.: gang zag 'dis las 'di byas so // 'bras bu 'di myong ngo zhes pa'i tha snyad btags pa la rang gi phung po 'di nyid gang zag yin nam 'on te de dag las don gzhan zhes gang zag gi tha snyad btags pa de'i don btsal te / don gzig pa'i don tha dad la sogs pa'i phyogs gang rung zhig myed nas gang zag de 'jog sa byung na las gsog pa po la sogs par 'jog nus la / ma myed na 'jog mi nus pas gang zag gi tha snyad btags pa tsam gyis mi tshim par de'i tha snyad gang la btags pa'i gdags gzhi de ji ltar yin dpyad cing btsal nas 'jog na gang zag rang gi mtshan nyid kyis grub par 'jog pa yin te / rang sde bye brag tu smra ba nas dbu ma rang rgyud pa'i bar thams cad kyis de bzhin du 'dod do //)」吉水「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (I)」p.632, Yoshimizu, "rang gi mtshan nyid kyis grub pa III Section II and III", p.329ff.; 四津谷孝道『ツォンカパの中観思想』大蔵出版 2006, p.40f. 参照。

¹³⁵[48] 〈ツォンカパによる実有論者批判〉

実有論者たちが、勝義を審察する理によって仮設の対象を求め、考察することにより、生起などの縁起まで否定してしまうという否定対象過大の過失に陥っているというこの批判は、ツォンカパ『菩提道次第大論』に見られる (*Lam rim chen mo* 347b5-348b1, 長尾訳 p.118-122)。つまり彼らは、仮設されたのみではない、それ自身のあり方で自ずから成立しているもの *rang gi mtshan nyid kyis grub pa* を有 (中観自立論証派にとっては世俗有) と考え、そうでないものを無と考えるので、芽などの生起や人 (ブドガラ) の行為とその結果まで無として否定し、虚無論に陥るのであると考え、ツォンカパは次のように述べる。「(否定の範囲を) 過大にとって、否定対象の限量を (正しく) 把握せず、否定したならば、因果・縁起の次第を排斥してしまうので、断 (見) の辺に陥り、まさにその見によって悪趣へ導くことになろう。」 (*Lam rim chen mo* 347a4f., 長尾訳 p.119: *ha cang thal ches nas dgag bya ba'i tshod ma zin par bkag na ni rgyu 'bras rten 'brel gyi rim pa sun phyung bas chad pa'i mthar ltung zhing lta ba de nyid kyis ngan 'gror 'khrid par byed do //*) 松本史朗は、ここでのツォンカパの批判対象を、自立論証派ではなく「離辺中観説」 (*mtha' 'bral dbu ma'i lugs*) を唱える者だとしているが (松本史朗「ツォンカパとゲルク派」『岩波講座東洋思想 11 チベット仏教』1989, pp.224-262)、「離辺中観説」自体がツォンカパ後のサキャ派の文献から再構成されており、再考を要する。ツォンカパの批判は確かに中観派を自称する者たちへ向けられたものであるが (*Lam rim chen mo* 347a6f.)、トゥカンの記述を見る限り、トゥカンはそれを自立論証派と解しているのではないかと思われる。なお「離辺中観説」については、近年新資料の発見によってその実像が明らかになりつつある。Yoshimizu Chizuko, "A Tibetan Buddhist Text from the Twelfth Century Unknown to Later Tibetans," *Les Cahiers d'Extrême-Asie* 15 (2005), École française d'Extrême-Orient, 2006, pp.127-164; 吉水千鶴子「インド・チベット中観思想史の再構築にむけて」『哲学・思想論集』32 (2006), 筑波大学哲学・思想専攻, 2007 参照。

¹³⁶[48] 〈帰謬論証派にとっての「正理による審察に堪えて成立するもの」〉

「正理による審察に堪えて成立するもの」とは勝義であり、帰謬派にとっては *rang gi msthan nyid kyis grub pa* なるものであるもので、実際にはそのようなものは存在しない。上記注 134 参照。「正理 (*rigs pa, yukti*)」とそれによる審察 (考察) については四津谷前掲書 p.58 以下参照。

¹³⁷[48] 〈自立論証派にとっての正理の審察対象〉

自立論証派にとっては、*rang gi mtshan nyid kyis grub pa* は *don dam par grub pa* すなわち勝義有とは区別される世俗あるいは言説有であるので、正理の審察対象ではない。しかしながら、帰謬派の立場から見ると、正理によって否定されたものは言説としても否定されるべきであるので、この自立論証派のような主張はツォンカパによって次のように否

定されている。『入中論』(VI.36)で『真実(=勝義)に関する場合に正理によって自(生)と他生が不合理である(と考察される)その(同じ)正理によって(それらは)言説としても不合理なのである。汝にとってどうして生起があろうか。』と勝義として生起を否定する正理によって言説としても(生起を)否定するとお説きになっているからである。」(*Lam rim chen mo* 348a2f., 長尾訳 p.121: 'jug pa las / de nyid skabs su rigs pa gang zhig gis // bdag dang gzhan las skye ba rigs min pa'i // rigs des tha snyad du'ang rigs min no // khyod kyi skye ba gang gis yin par 'gyur // zhes don dam par skye ba 'gog pa'i rigs pas tha snyad du'ang 'gog par gsungs pa'i phyir ro //) この説は、ツォンカパも引くように(348a5)、同じチャンドラキールティの『明句論』(*Prasannapadā, Mūlamadhyamakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā*, La Vallée Poussin, L. de, ed., St. Pétersbourg 1903-1913, p.26f.)にも生起を否定する場合に「勝義として」という限定語が不要であるという議論によって述べられている。

¹³⁸[49] 〈自立論証派にとっての「正理による審察に堪えて成立するもの」=勝義有〉

この設定は、ツォンカパによればカマラシーラの『中観明 (*Madhyamakāloka*)』に従うもので、『入中論釈』では次のように言われる。「それ故、慧に顕現することまたは慧の力によって設定されたのではなく、対象それ自体のあり方として存在するものが、真実と、勝義と、実義として存在するものである。そしてそれとして捉えるのが自然発生的な真実執着である。」(*dGongs pa rab gsal* 82b1f.: de ltar byas na blo la snang ba'am blo'i dbang gis bzhag pa min par don gyi sdod lugs su yod pa ni / bden pa dang don dam pa dang yang dag par yod pa dang der 'dzin pa ni bden 'dzin shan skyes so //) 同じ自立論証派の説が『善説心髓』(片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 p.94f.)に言及される。この勝義有に対して、慧に顕現することのみによって設定されたものが世俗有または言説有である。この自立論証派の二諦の設定に関する詳しい解説は、松本「ツォンカパの中観思想について」p.184 以下、吉水「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (I)」p.628ff. 参照。

¹³⁹[49] 〈自立論証派が考える真実執着〉

上記注 138 参照。

¹⁴⁰[49] 〈自立論証派にとっての遍計の我執(真実執着)と自然発生的我執(真実執着)〉

上記注 134 に引いた『善説心髓』による rang gi mtshan nyid kyis grub pa なるものの設定の仕方が、「正理による審察」であり、毘婆沙師から中観自立論証派にいたるまで、このように考察して人(プドガラ)の基体を得るならば、それを「遍計の人我執(真実執着)」と考える。これに対して、「自然発生的(俱生)我執(真実執着)」とは、同じく『善説心髓』に次のように説明される。「そのように言説の対象を考察して、それ自身のあり方によって(自ずから)成立している自性があると捉えることは、俱生の我執の捉え方ではな

い。有情を輪廻に縛るのは、まさにその俱生のものであるから、それ自体を諸々の正理によって主に否定すべきであるので、その捉え方はどのようなものか、というならば、それは、内外の諸法が言説の力によって設定されただけではなく、自分自身の本性の側から存在すると捉えることである。」(片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 p.96f.: *de ltar tha snyad kyi don la dpyad nas rang gi mtshan nyid kyi grub pa'i rang bzhin yod par 'dzin pa ni bdag 'dzin lhan skyes 'dzin tshul min la / sems can 'khor bar 'ching ba ni lhan skyes nyid yin pas de nyid rigs pa rnams kyi gtso bor dgag dgos pas de'i 'dzin tshul ji ltar yin zhe na / de ni phyi nang gi chos rnams tha snyad kyi dbang gis bzhag pa tsam min par rang gi ngo bo'i sgo nas yod par 'dzin pa ste /*) 四津谷前掲書 p.48f. 参照。『菩提道次第大論』では、「遍計の無明 *kun brtags kyi ma rig pa*」 「俱生の無明 *lhan skyes kyi ma rig pa*」 という表現によって、同じ内容が説明される (*Lam rim chen mo* 396b5, 長尾訳 p.214, 四津谷前掲書 pp.35-41 参照)。

¹⁴¹[49] 〈自立論証派にとっての勝義有と言説有〉

上記注 132、Z17a6f. 参照。

¹⁴²[50] 〈実有論者の認識根拠による設定の仕方〉

Z17a6f.、上記注 124 参照。これらの成立を設定する場合はそれぞれの学派が認める認識根拠 (*pramāṇa*) に従う。自立論証派が「慧 (*blo*)」と呼ぶものも、「認識根拠」すなわち直接知覚 (*pratyakṣa*) と推論 (*anumāna*) と理解される。松本「ツォンカパの中観思想について」、吉水「rang gi mtshan nyid kyi grub pa について (I)」参照。

¹⁴³[51] 〈ブドガラについての七種類の審察〉

ブドガラが成立するならば、以下の七つの選択肢のいずれかのあり方で成立するはずであるから、これらの可能性について考察する。1) ブドガラと五蘊は同一である、2) 別異である、3) ブドガラが五蘊に依存する、4) 五蘊がブドガラに依存する、5) ブドガラが五蘊を有する、6) ブドガラは五蘊が集積したものである、7) ブドガラは五蘊が一定の配列で結合したものである。これはチャンドラキールティの『入中論』第6章 (*Madhyamakāvātāra* VI 151-162, pp.271-282 参照) で車とその部分の関係を比喻として用いながら論じられるブドガラ批判に基づき、ツォンカパが『菩提道次第大論』 (*Lam rim chen mo* 434a4-441a1, 長尾訳 p.290-303) 『善説心髓』(片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 pp.210-213) 『入中論釈』 (*dGongs pa rab gsal* 225a5-234a6) でも詳しく論じるものである。四津谷前掲書 p.59f. 参照。

¹⁴⁴[51] 〈輪廻の根本である自然発生的我執 (真実執着)〉

上記注 140 に引いたように、『善説心髓』に「有情を輪廻に縛るのは自然発生的 (俱生の) 我執である」と言われる。『菩提道次第大論』にも「俱生の無明の思念対象が否定対象の

根本であると知るべきであって、遍計（の無明）は学説を語るものだけによって構想されたものにすぎない... あらゆる有情を輪廻に縛るのは俱生の無明であるがゆえに、遍計の無明は学説を語るかの者達だけに有るのだから、輪廻の根本としては不合理であるからである。」と述べられる。（*Lam rim chen mo* 396b3ff., 長尾訳 p.214: lhan skyes kyi ma rig pa'i zhen yul dgag bya'i rtsa bar shes par bya kyi kun brtags grub mtha' smra ba 'ba' zhid gis btags pa tsam ... sems can thams cad 'khor bar 'ching ba ni lhan skyes kyi ma rig pa'i phyir dang kun brtags kyi ma rig pa ni grub mtha' smra ba de dag kho na la yod pas 'khor ba'i rtsa bar mi 'thad pa'i phyir ro //）四津谷前掲書 p.51f. n.5 参照。従って、遍計の無明は学説を立てないものには無縁なのである。輪廻より解脱するためには、誰にでもある俱生の無明を捨てねばならない。

¹⁴⁵[51] 〈自然発生的法我執は所知障か、煩惱障か〉

この見解は、帰謬派以外の中観者の説として、ツォンカパの『菩提道次第大論』に言及されている。「チャンドラキールティ師のご主張は、他の中観論師たちが所知障と認める事物の真実執着を無明であるとお考えになるのであり、それをまた有染汚の無明（煩惱障）だとお考えになる。」（*Lam rim chen mo* 394a3, 長尾訳 p.208: slob dpon zla grags pa'i bzhed pani dbu ma pa mams shes sgrub tu bshed pa'i dngos po bden par 'dzin pa ni ma rig par bzhed la de yang nyon mongs can gyi ma rig par bzhed de）（また 462b4 長尾訳 p.351 にも同様の言明がある）。このような俱生の真実執着を所知障ではなく煩惱障とする見解は、ツォンカパ独自の中観思想のひとつとサキヤ派の学匠たちからは見なされている。松本「ツォンカパの中観思想について」p.193 参照。ツォンカパ自身も帰謬派独自の重要な見解のひとつとし、ゲルク派に継承されている。松本前掲論文 p.199、Yoshimizu, "rang gi mtshan nyid kyis grub pa III Section II and III", p.327 n.67 に引かれた *dGongs pa rab gsal* 139a1-5 の記述参照。

¹⁴⁶[52] 〈帰謬論証派による人我執と法我執の設定〉

ツォンカパの『菩提道次第大論』の次の説と一致する。「従って、慧の力によって設定されたのではなく、それ自身の本姓の側から対象の上に成立するものに我あるいは自性というのであって、その同じものが特別な基体（すなわち）ブドガラの上に無いことが人無我であり、眼や鼻などの法の上に無いことが法無我だと（インドの中観祖師たちは）お説きになっているので、その自性がブドガラと法の上に有ると捉えることが二我についての執着だと間接的に理解できるのである。」（*Lam rim chen mo* 397b6-398a2 長尾訳 p.216: des na nang gi blo'i dbang gis bzhag pa min par rang gi ngo bo'i sgo nas yul gyi steng du grub pa de la bdag gam rang bzhin zhes zer la / de nyid khyad par gyi gzhi gang zag gi steng du med pa ni gang zag gi bdag med dang mig sna la sogs pa'i chos kyi steng du med pa ni chos kyi bdag med du gsungs pas rang bzhin de gang zag dang chos kyi steng du yod par 'dzin pa ni bdag gnyis kyi 'dzin par shugs kyis rtogs par nus so //）この考えの特徴は、我執を自性への執着、俱生の真実執着と同一視し、それは人我執、法我執いずれにおいても同じであるとみなすことである。

それは帰謬派独自の考えとツォンカパ自身によって言われる（四津谷前掲書 p.53 n.13 参照）。

¹⁴⁷[52] 〈自然発生的二我執は無明であるという説〉

上記注 144, 145 参照。この無明は十二縁起の第一支の「無明」である。『善説心髓』（片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 p.118f.）にもその記述がある。四津谷前掲書 p.34f. 参照。

¹⁴⁸[52] 〈自然発生的我執（真実執着）確定の重要性〉

この一文が引用を含むのかどうかははっきりしないが、上記注 144 に引いた『菩提道次第大論』の一節に続く次の文にもとづいて構成された文であると推測できるかもしれない。「このこと（＝俱生の無明こそが輪廻の根本であること）について確定を（よく）注意して得ることがたいへん重要である。」（*Lam rim chen mo* 396b6, 長尾訳 p.214: 'di la nges pa dmigs byed par rnyed pa shin tu gal che'o）ツォンカパが言わんとするところは、「俱生の無明と学派的な遍計の無明がどんなものをよく区別して、俱生の無明がいかなるものであるか確定することがたいへん重要である」ということである。トゥカンの文ではその内容は若干詳しく示され、「俱生の真実執着こそが重要である。それを確定するためには、まず言説の力によって設定されるとはどのようなことか、分別によって仮託して設定されるとはどのようなことか、を知らねばならない。なぜならば、俱生の真実執着とは、人や法が言説の力によって設定されただけではなく、また分別の力によって構想されただけではなく、対象自身の側から存在すると執着することであるからである。」という意味と読めるだろうか。具体的にブドガラが設定される仕方とその確定は、続いて説明されている。「一切法は言説として、分別あるいは言説の力によって設定される」というのは、やはりツォンカパ独自の帰謬派学説として認められており（松本「ツォンカパの中観思想について」p.191 参照）、帰謬派がこの仕方でのどのようにブドガラの言説有を立てるのか、トゥカンがここで説明するのである。

¹⁴⁹[53] 〈帰謬論証派不共の勝法〉

これは真実執着の常見と世俗の言説、縁起を損ねる断見を離れた中観帰謬派不共の勝法として、ツォンカパならびにゲルク派の著作には繰り返し説かれている。松本「ツォンカパの中観思想について」p.199、Yoshimizu, "rang gi mtshan nyid kyis grub pa III Section II and III", p.327 n.67 とそこに引かれた *dGongs pa rab gsal* 139a1-5, *lCang skya Grub mtha'*, *thal 'gyur* 51a2ff. 参照。また、ゲルク派による「中観派の8つの難解な学説」の中心的なものでもある。Seyfort Ruegg, D., *Two Prolegomena to Madhyamaka Philosophy, Candrakīrti's Prasannapadā Madhyamakavṛttiḥ on Madhyamakakārikā I.1 and Tsong kha pa Blo bzang grags pa / rGyal tshab Dar ma rin chen's dKa' gnad/gnas brgyad kyi zin bris*, Wien 2002, p.168 infra. 参照。

¹⁵⁰[54] 〈帰謬論証派の所知障理解〉

この所知障の理解も帰謬派独特のものといわれるツォンカパ説に基づく。『菩提道次第大論』には「然るにこの（帰謬派の）学説においては、所知障とは何についていわれるのかと思うならば、所知障とは、無始以来本性があると考えられている事物に実際に執着することを通して、心の相続に堅固な薫染として置かれた薫習の力によって、本性が無いにもかかわらず本性があると顕現する（主客）二者としての顕現のもろもろの迷乱である。」（*Lam rim chen mo* 462b6f., 長尾訳 p.351: 'o na 'di pa'i lugs la shes sgrib gang la byed snyam na / shes sgrib ni thog ma med pa nas rang bzhin yod par zhen pa'i dngos po la mngon par zhen pa'i sgo byed kyis sems rgyud la bag chags brten par bzhag pa'i bag chags kyi dbang gis rang bzhin med bzhin du rang bzhin yod par snang ba'i gnyis snang gi 'khrul pa rnam yin te /）『善説心髓』片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 p.122f. にも同様の記述が見られる。詳しくは松本前掲論文 p.194 参照。さらにゲルク派による「中観派の8つの難解な学説」のひとつに煩惱障、所知障の設定が含まれ、そこでも同じ説が説かれている。Seyfort Ruegg, *op.cit.*, p.239f. 参照。

¹⁵¹[54] 〈『善説心髓』の説〉

片野、ツルティム・ケサン校訂・共訳 p.104f.

¹⁵²[54] 〈蘊とプドガラの関係についての譬え〉

引用であるかどうか不明。「プドガラが蘊と特質を異にするものではないこと」の比喩であろう。

¹⁵³[55] 〈毘婆沙師による細密なる人無我理解〉

クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』によると、毘婆沙師一般は「独立自存のプドガラが実有であることについて空であることが細密なる人無我と認める」が、「一切所貴部はそのようには認めない」という（*dKon mchog Grub mtha'*, p.80f., I.4.21）。

¹⁵⁴〈仏教四派による粗・密なる人無我の設定〉

クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』の毘婆沙師、経量部、唯識派、自立論証（瑜伽行）中観派の章には同じ粗と細密な人無我の設定が説かれ、唯識派においてはそれは空性であると述べられている（*dKon mchog Grub mtha'*, p.80, 88, 94, 99）。これら各学派の粗・密なる人無我の設定が、それぞれいかなるインドの論書に基づき、いつ頃からこのように整理されたのか、はっきりしない。ツォンカパの著作で議論されたものではなく、チャンキヤ『宗義書』も話題としない。しかし、トゥカン、クンチョク・ジクメーワンポがほぼ類似の設定を行っているところから、彼らの時代にはゲルク派内ですでに確立されていたものと思われる。

¹⁵⁵[55] 〈『俱舍論』 分別定品第八〉

ānimittaḥ samākāraḥ sūnyatānātmasūnyataḥ /

pravartate apraṇihitaḥ satyākārair atah paraiḥ //24//

AKBh. VIII, 24 (Pradhan: *Abhidharmakośa-bhāṣya*, pp.449-450). 大正 29 卷 149c.

『俱舍論』 分別定品第八の三種等至、すなわち空三摩地・無願三摩地・無相三摩地が如何なる相を保有するかを論じた箇所からの引用である。プサンは "ānimittaḥ śāntākāraḥ" に替えて "ānimittaḥ samākāraḥ" の還梵を提示している。La Vallee Poussin, Louis de: *L'ABHIDHARMAKOŚA de Vasubandhu*, (Bruxelles, 1971), Tome V, p.185. 桜部建・小谷信千代・本庄良文: 『俱舍論の原典研究 智品・定品』 (大蔵出版, 2004), pp.299-302.

¹⁵⁶[55] 〈経量部による細密なる人無我理解〉

クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』によると、「細密なる人無我が見道と無間道の把握の仕方の対境とは認めない。なぜならば、それによって人我が静まった潜在的影響力 (*行) が直接に量られる力で (間接的に) 細密なる人無我が理解されると主張するからである。」という。(dKon mchog Grub mtha', p.88, II.4.23: gang zag gi bdag med phra mo mthong lam bar chad lam gyi 'dzin stangs kyi yul du mi 'dod de / des gang zag gi bdag gis dben pa'i du byed dngos su gzhal ba'i shugs la gang zag gi bdag med phra mo rtogs par 'dod pa'i phyir /)

¹⁵⁷[55] 〈十六心所縁〉

「しかるに、他の部派 (= Dharmagupta) の人々は、四諦の現観は一時になされると主張する。かれらの意趣は検討されねばならない。…… 〈この諦現観は十六心に互る。これは三種であつて、見現観と、所縁現観と、事現観となづける。それは世第一法と同一地 (未至・中間・四静慮地の六地) に依る。〉 ……」、AKBh. ad AK. VI, 27abcd, (Pradhan ed., pp.351-352). AKvy. (U.Wogihara ed. pp.542-545. 桜部建・小谷信千代訳: 『俱舍論の原典解明賢聖品』 (法蔵館, 1999), pp.157-199. 小谷信千代: 『チベット俱舍学の研究——『チムゼー』賢聖品の解説——』 (文栄堂, 1995), pp.139-157. 参照。

¹⁵⁸[55] 〈毘婆沙師が得る果〉

毘婆沙師が得る果については、クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』に詳しく、経量部も同じであるとしている (dKon mchog Grub mtha', p.81ff., I.4.3, p.88, II.4.3)。

¹⁵⁹[56] 〈唯識派による粗・密なる法無我の設定〉

クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』は少し異なった解釈を与えている。「色と色を捉える認識手段が別体であることについて空であることと、色が色を捉える分別の思念の基体にそれ自身のあり方によって (自ずから) 成立していることについて空であることの二つが細密な法無我である。」(dKon mchog Grub mtha', p.94: gzugs dang gzugs 'dzin tshad

ma rdzas gzhan gyis stong pa dang / gzugs gzugs 'dzin rtog pa'i zhen gzhir rang gi mtshan nyid kyis grub pas stong pa gnyis chos kyi bdag med phra mor 'dod do //) 粗なる法無我は述べられない。

¹⁶⁰[57] 〈瑜伽行中観自立論証派による粗・密なる法無我の設定〉

クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』では、「色と色を捉える認識手段が別体であることについて空であることが粗なる法無我であり、一切法が真実として成立することについて空であることが細密なる法無我だ」とご主張なさる。」という。(dKon mchog Grub mtha', p.99: gzugs dang gzugs 'dzin tshad ma rdzas gzhan gyis stong pa chos kyi bdag med rags pa dang / chos thams cad bden grub kyis stong pa chos kyi bdag med phra mor bzhed do //)

¹⁶¹[58] 〈経量行中観自立論証派による法の基体成立理解〉

この主張は、自立論証派の「慧の力によって設定されたもの」は rang gi mtshan nyid kyis grub pa であるという基本的な立場と経量部と共通する外境を認める立場を統合した、経量行中観派の世俗（言説）有を述べたものといえよう。

¹⁶²[59] 〈帰謬論証派による無我の設定〉

クンチョク・ジクメーワンポ『宗義の宝環』帰謬派の章にはほぼ同じ説明がある (dKon mchog Grub mtha', p.105)。

第3部

チベット語原典対照校訂テキスト

トゥカン：『一切宗義』序章
「インドの思想と仏教」

**Comparative Edition of
Grub mtha' shel gyi me long of
Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma**

**Chapter 1: The Philosophical Systems and
Buddhism in India (rGya gar)**

使用に際しての注意事項（本巻における略語他）

[Z] = (従前の一部の巻にて使用の略語では) TGS-Z:

シヨル Zhol 寺版、ガワン・ゲレ刊行本: *Thu'u bkwan grub mtha'*, Zhol ed. in *Collected Works of Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma* (CWT), edited and reprinted by Ngawang Gelek Demo, Geden sungrab minyam Series 2 (Delhi, 1969), (IASWR. No.R-1224).

[G] = (従前の一部の巻にて使用の略語では) TGS-G:

東大所蔵本（ゴンルン寺版）; *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad zhel gyi me long*, dGong klung ed., Tokyo Univ., No.107.

[D] = (従前の一部の巻にて使用の略語では) TGS-D:

ウラガ・デルゲ寺版; *Thu'u bkwan grub mtha'*, sDe-dge ed. (甘肅民族出版社, 1984).

[1] ~ [61] テンパギエルツェン師（前東洋文庫研究協力員）が [D]（ウラガ・デルゲ寺）版（甘肅民族出版社刊本）にもとづいて、付した章節（科段）通し番号。巻末の語彙索引においても、この **Section Nos.** [1] ~ [61] を記した。

なお、ボールド・ローマ字体の章節および科段内容（例：[1] **mchod brjod dang rtsom par dam bca' ba** / など）は、テンパ師が [D] 版（甘肅民族出版社刊本）の編集者記載を参考に作成したものである。いずれの木版本にも存在していないので、これらの語句を語彙索引に採取することは行っていない。

[grub mtha'] o チベット版本において該当する文字の下に強調の白点が存することを示すマーク。

各科段の下に記載した [Z7 (2a1)] などは、写本 3 版において対応する箇所のある最初の葉数と行数を記した。3 版および科段番号との照合は、次ページに掲載の「チベット語原典 3 版ページ対照表 **Concordance of the Three Tibetan Texts**」を参照されたい。この際に、初めの [Z7] は、ガワン・ゲレ氏刊行本の葉の欄外左側に記された洋式ページ・ナンバーを示し、[Z7 (2a1)] は、Zhol 寺版の版枠内左隅に記されたチベット字による葉数と、表 a・裏 b の別、および行数を示す。

なお、この対照テキストの最終部（本書 pp.165-168）には、シヨル寺版内容目次（dkar chags[Z1]~[Z4.2]）とゴンルン寺版の内容目次（dkar chags[G1.1]~[G2.3]）を転載してある。併せて、参考に供せられたい。

チベット語原典 3 版 ページ対照表
Concordance of the Three Tibetan Texts

| Section No. | Z | G | D | Section No. | Z | G | D |
|-------------|------------------|------------|------------|-------------|------------------|------------|-------------|
| | Zhol(=Shol) | dGon-lung | sDe-dge | [11] | 13.3(5a3) | 5b4 | |
| | 5.1(0a1) | 0a1 | | | 13.4(5a4) | 5b5 | p.7 |
| [1] | 6.1(1a1) | 1a1 | p.1 | [12] | 13.4(5a4) | 5b6 | |
| | 6.4(1a4) | 1a3 | | | 13.5(5a5) | 6a1 | |
| | 7.1(2a1) | 2a1 | | [13] | 13.5(5a5) | 6a1 | |
| | 7.4(2a4) | 2a3 | | | 14.1(5b1) | 6a3 | |
| | 8.1(2b1) | 2b1 | | [14] | 14.2(5b2) | 6a5 | |
| | 8.3(2b3) | 3a1 | | | 14.2(5b2) | 6a6 | p.8 |
| | 9.1(3a1) | 3a3 | | [15] | 14.3(5b3) | 6a6 | |
| | 9.1(3a1) | 3a3 | p.2 | | 14.3(5b3) | 6b1 | |
| | 9.2(3a2) | 3b1 | | | 15.1(6a1) | 6b5 | |
| | 10.1(3b1) | 3b3 | | | 15.2(6a2) | 7a1 | |
| | 10.3(3b3) | 4a1 | | | 15.2(6a2) | 7a1 | p.9 |
| | 10.3(3b3) | 4a1 | p.3 | [16] | 15.6(6a6) | 7a6 | |
| | 11.1(4a1) | 4a5 | | | 15.6(6a6) | 7b1 | |
| [2] | 11.2(4a2) | 4a6 | p.4 | | 16.1(6b1) | 7b1 | |
| | 11.2(4a2) | 4b1 | | | 16.2(6b2) | 7b2 | p.10 |
| [3] | 11.6(4a6) | 4b5 | | [17] | 16.4(6b4) | 7b5 | |
| [4] | 11.6(4a6) | 4b5 | | | 16.6(6b6) | 8a1 | |
| | 12.1(4b1) | 4b5 | | | 17.1(7a1) | 8a2 | |
| [5] | 12.1(4b1) | 4b6 | p.5 | | 17.2(7a2) | 8a3 | p.11 |
| | 12.1(4b1) | 5a1 | | [18] | 17.5(7a5) | 8a6 | |
| [6] | 12.3(4b3) | 5a3 | | | 17.5(7a5) | 8b1 | |
| | 12.4(4b4) | 5a4 | p.6 | | 18.1(7b1) | 8b2 | |
| [7] | 12.4(4b4) | 5a5 | | [19] | 18.1(7b1) | 8b3 | |
| [8] | 12.5(4b5) | 5a6 | | | 18.2(7b2) | 8b4 | p.12 |
| | 12.6(4b6) | 5b1 | | [20] | 18.3(7b3) | 8b6 | |
| | 13.1(5a1) | 5b1 | | | 18.4(7b4) | 9a1 | |
| [9] | 13.1(5a1) | 5b2 | | | 19.1(8a1) | 9a3 | |
| [10] | 13.1(5a1) | 5b2 | | [21] | 19.2(8a2) | 9a5 | |

| Section No. | Z | G | D | Section No. | Z | G | D |
|-------------|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------------|-------------|-------------|
| | 19.2(8a2) | 9a5 | p.13 | | 27.1(12a1) | 13b6 | |
| | 19.3(8a3) | 9b1 | | [31] | 27.1(12a1) | 14a1 | |
| [22] | 19.5(8a5) | 9b2 | | [32] | 27.3(12a3) | 14a3 | |
| | 20.1(8b1) | 9b4 | | | 27.5(12a5) | 14a6 | p.22 |
| | 20.2(8b2) | 9b6 | p.14 | | 27.6(12a6) | 14b1 | |
| [23] | 20.3(8b3) | 9b6 | | | 28.1(12b1) | 14b1 | |
| | 20.3(8b3) | 10a1 | | [33] | 28.2(12b2) | 14b3 | |
| | 21.1(9a1) | 10a5 | | | 28.5(12b5) | 15a1 | |
| | 21.2(9a2) | 10b1 | | | 28.6(12b6) | 15a1 | p.23 |
| | 21.2(9a2) | 10b1 | p.15 | | 29.1(13a1) | 15a2 | |
| [24] | 21.3(9a3) | 10b2 | | | 29.4(13a4) | 15b1 | |
| | 22.1(9b1) | 10b6 | | | 29.6(13a6) | 15b3 | p.24 |
| [25] | 22.1(9b1) | 10b6 | | | 30.1(13b1) | 15b3 | |
| | 22.1(9b1) | 11a1 | | | 30.3(13b3) | 16a1 | |
| | 22.2(9b2) | 11a2 | p.16 | [34] | 30.4(13b4) | 16a2 | |
| [26] | 22.4(9b4) | 11a4 | | [35] | 30.6(13b6) | 16a4 | |
| [27] | 22.6(9b6) | 11a6 | | | 30.6(13b6) | 16a4 | p.25 |
| | 22.6(9b6) | 11b1 | | | 31.1(14a1) | 16a5 | |
| | 23.1(10a1) | 11b1 | | | 31.2(14a2) | 16b1 | |
| | 23.1(10a1) | 11b2 | p.17 | | 31.6(14a6) | 16b5 | p.26 |
| | 23.5(10a5) | 12a1 | | | 32.1(14b1) | 16b5 | |
| | 24.1(10b1) | 12a2 | | | 32.2(14b2) | 17a1 | |
| | 24.1(10b1) | 12a3 | p.18 | [36] | 32.2(14b2) | 17a1 | |
| | 24.4(10b4) | 12b1 | | [37] | 32.4(14b4) | 17a3 | |
| [28] | 24.5(10b5) | 12b2 | | | 32.6(14b6) | 17a5 | p.27 |
| [29] | 24.6(10b6) | 12b3 | | | 33.1(15a1) | 17a6 | |
| | 24.6(10b6) | 12b3 | p.19 | | 33.1(15a1) | 17b1 | |
| | 25.1(11a1) | 12b4 | | [38] | 33.3(15a3) | 17b3 | |
| [30] | 25.3(11a3) | 12b6 | | | 33.6(15a6) | 18a1 | |
| | 25.3(11a3) | 13a1 | | | 33.6(15a6) | 18a1 | p.28 |
| | 25.6(11a6) | 13a5 | p.20 | | 34.1(15b1) | 18a2 | |
| | 26.1(11b1) | 13a5 | | | 34.4(15b4) | 18b1 | |
| | 26.2(11b2) | 13b1 | | [39] | 34.6(15b6) | 18b3 | |
| | 26.5(11b5) | 13b5 | p.21 | | 35.1(16a1) | 18b3 | |

| Section No. | Z | G | D | Section No. | Z | G | D |
|-------------|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------------|-------------|-------------|
| | 35.1(16a1) | 18b3 | p.29 | | 43.1(20a1) | 23a3 | p.37 |
| | 35.4(16a4) | 19a1 | | [50] | 43.3(20a3) | 23a4 | |
| [40] | 35.4(16a4) | 19a1 | | | 43.5(20a5) | 23b1 | |
| [41] | 35.5(16a5) | 19a2 | | [51] | 43.6(20a6) | 23b2 | |
| | 36.1(16b1) | 19a4 | | | 44.1(20b1) | 23b3 | |
| | 36.1(16b1) | 19a4 | p.30 | | 44.1(20b1) | 23b3 | p.38 |
| | 36.3(16b3) | 19b1 | | | 44.4(20b4) | 24a1 | |
| [42] | 36.4(16b4) | 19b1 | | [52] | 44.6(20b6) | 24a3 | |
| [43] | 36.6(16b6) | 19b4 | p.31 | | 45.1(21a1) | 24a3 | |
| | 37.1(17a1) | 19b4 | | | 45.1(21a1) | 24a4 | p.39 |
| | 37.3(17a3) | 20a1 | | | 45.4(21a4) | 24b1 | |
| | 37.5(17a5) | 20a4 | p.32 | [53] | 45.5(21a5) | 24b2 | |
| | 38.1(17b1) | 20a5 | | | 46.1(21b1) | 24b4 | |
| [44] | 38.1(17b1) | 20a6 | | | 46.1(21b1) | 24b4 | p.40 |
| | 38.2(17b2) | 20b1 | | | 46.3(21b3) | 25a1 | |
| [45] | 38.4(17b4) | 20b3 | | [54] | 46.5(21b5) | 25a2 | |
| | 38.5(17b5) | 20b5 | p.33 | | 47.1(22a1) | 25a4 | |
| [46] | 38.6(17b6) | 20b6 | | | 47.1(22a1) | 25a5 | p.41 |
| | 39.1(18a1) | 20b6 | | | 47.3(22a3) | 25b1 | |
| | 39.1(18a1) | 21a1 | | [55] | 47.5(22a5) | 25b2 | |
| | 39.6(18a6) | 21a6 | p.34 | | 48.1(22b1) | 25b4 | |
| | 39.6(18a6) | 21b1 | | | 48.1(22b1) | 25b5 | p.42 |
| | 40.1(18b1) | 21b1 | | | 48.2(22b2) | 26a1 | |
| [47] | 40.2(18b2) | 21b2 | | | 49.1(23a1) | 26a5 | |
| | 40.6(18b6) | 22a1 | | | 49.2(23a2) | 26a6 | p.43 |
| | 40.6(18b6) | 22a1 | p.35 | | 49.2(23a2) | 26b1 | |
| | 41.1(19a1) | 22a1 | | [56] | 49.5(23a5) | 26b4 | |
| | 41.5(19a5) | 22b1 | | | 50.1(23b1) | 26b6 | |
| [48] | 41.6(19a6) | 22b1 | | | 50.1(23b1) | 27a1 | |
| | 41.6(19a6) | 22b2 | p.36 | [57] | 50.1(23b1) | 27a1 | |
| | 42.1(19b1) | 22b2 | | | 50.1(23b1) | 27a1 | p.44 |
| | 42.5(19b5) | 23a1 | | [58] | 50.4(23b4) | 27a4 | |
| [49] | 42.5(19b5) | 23a1 | | [59] | 50.6(23b6) | 27a6 | |
| | 43.1(20a1) | 23a2 | | | 50.6(23b6) | 27b1 | |

| Section No. | Z | G | D |
|-------------|-------------------|-------------|-------------|
| | 51.1(24a1) | 27b1 | |
| | 51.2(24a2) | 27b2 | p.45 |
| [60] | 51.3(24a3) | 27b4 | |
| | 51.6(24a6) | 28a1 | |
| | 52.1(24b1) | 28a1 | |
| | 52.2(24b2) | 28a3 | p.46 |

| Section No. | Z | G | D |
|-------------|-------------------|-------------|-------------|
| [61] | 52.3(24b3) | 28a4 | |
| | 52.5(24b5) | 28b1 | |
| | 53.1(25a1) | 28b2 | |
| | 53.3(25a3) | 28b4 | p.47 |
| | 53.5(25a5) | 29a1 | |
| | 54.1(25b1) | 29a2 | |

チベット語原典 3 版対照校訂テキスト
Concordance of the Three Tibetan Texts

[Z5 (0a1)] · [G (0a1)] Sanskrit book-title in the Lan tsha scripts;

☞ | **!sarvasiddhāntānamākaraścamatanayakāśita**

subhāṣitasphaṭikādarśanāmaviharatisma ! !

[Z5 (0a2)] · [G (0a2)] The same in the Tibetan tonal transcriptions.

☞ | **!sarbasiddhāntānāmākaraśtsamatānayakāshita**

subhaṣi (G shi) taspḥaṭikādarshanāmabiharatisma ! !

[Z5 (0a3)] · [G (0a3)]

☞ | **!grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa**

legs bshad shel gyi me long zhes bya ba bzhugs so ! !

(Editor's note: The book-title written in the ornamental script of the Lan tsha style can be tentatively restored as follows:

!sarva-siddhāntānām ākaraś ca mata-naya-kāśita-subhāṣita-sphaṭika-ādarśa nāma viharati sma!)

[1] **mchod brjod dang rtsom par dam bca' ba /** [D1.1]

[Z6 (1a1&2)] · [G (1a1)] (in the Lan tsha script and Z. has an additional line in an old Tibetan script)

☞ | **!paryyantasiddhāntabhedam lokitvā !**

! durvādasiddhāntamatyaṃ dūṣtvā !

[Z6 (1a3)] · [G (1a2)] (in the Tibetan tonal transcriptions)

☞ | **!paryyantasiddhāntabhedamlokitwā !**

! durbādasiddhāntamatyaṃdūṣi(G shi)dwā !

[Z6 (1a4)] · [G (1a3)] · [D1.2]

☞ | **!rab 'byams grub mtha' dbye ba kun gzigs nas !**

! smra ngan grub mtha'i 'dod pa sun phyungs te !

(ZGD insert the stressing mark o under of the words: **grub mtha'i**)

(Editor's suggested Skt. restoration:

!paryanta-siddhānta-bhedam lokitvā | !durvāda-siddhānta-matyaṃ dūṣ(ay)itvā!)

[Z7 (2a1&2)] · [G (2a1)]

༄༄༄ | biśuddhasiddhāntatattvaṃ vāditam |

| maunendrasiddhāntayośśriṣṭham namrah | |

[Z7 (2a3)] · [G (2a2)]

༄༄༄ | bishūddhāsiddhāntatattvaṃ bāditam |

| maunendrasiddhāntayoshshriṣṭham namrah | |

[Z7 (2a4)] · [G (2a3)] · [D1.3]

༄༄༄ | rnam dag grub mtha'i de nyid 'doms mdzad pa |

| thub dbang grub mtha'i bdag por (G po) phyag

'tshal lo | | (1)

(ZGD insert the stressing mark **o** under of the words: **grub mtha'i**)

(Editor's suggested Skt. restoration:

lviśuddha-siddhānta-tattvaṃ vādinam | lmaunendra-siddhāntayoś śreṣṭham (or śreṣṭhe) namrah |)

(On the upper margin of this page of the two editons, [Z] & [G], a following note is inscribed in the smaller letters , referring to the above-mentioned 33 Lan tsha syllables. This denotation of metrical Vṛtta and the 37th Prastāra-chart is not identified for the moment.

mnyam pa'i bṛtta'i nang tshan yi ge bcu gcig pa gsum ba sngags kyi sde ba sbyor dbang po rdo rje'i char gtogs prasta'ara (G bru srar) so bdun pa /)

[Z8 (2b1)] · [G (2b1)] · [D1.5]

rgyal ba'i (G pa'i) gsung gi gsang mdzod kun bzung ste //

grangs med zhing du sna tshogs sprul pa (G ba) yis //

zab rgyas chos kyi dga' ston 'gyed mdzad pa //

mi pham 'jam pa'i dbyangs la gus phyag 'tshal //(2)

tshul gnyis 'dab brgya pa (GD ba) dang ku mu ta tshal so sor legs 'byed pa'i //

nyi zla zung cig 'char zhes rgyal ba rang gis lung bstan ji bzhin du //

gsung rab drang nges legs par phye ste dbu sems shing rta'i srol chen po //

gsal mdzad klu sgrub thogs med ces grags 'jig rten mig gnyis rgyal

gyur cig //(3)

'phags lha dpa' bo (G dap'po) legs ldan sangs rgyas bskyangs //
zla grags zhi lha dbyig gnyen seng ge bzang //
blo brtan phyogs glang chos grags yon sh'ak sogs //
'dzam gling mdzes rgyan rnams la gus pas 'dud //(4)

theg mchog bla na med pa'i khang bzang du //
bde stong chang gis rab myos gsang chen glus //
skal bzang grub mchog dga' ston la sbyor ba //
rnal 'byor dbang phyug tshogs la'ang phyag bgyi'o //(5)

gangs ris bskor kyang rmongs pa'i mun 'thibs pa'i //
ljongs 'dir dam chos nyi ma 'od po che //
thugs bskyed rta ljang shugs kyis 'dren mdzad pa'i //
lo paṅ chos rgyal bka' drin dran pas 'dud //(6)

tha dad 'bab kyang rgya mtshor gcig tu 'dre ba'i chu klung bzhin //
tha dad bkral yang mthar thug dgongs pa gcig tu legs 'bab pa'i (ZD ba'i) //
tha dad grub mtha'i srol mang gangs can ljongs 'dir dar mdzad pa //
tha dad snang yang ngo bo gcig gyur skyes mchog yongs la 'dud //(7)

(ZGD insert the stressing mark **o** under of the words: **tha dad**)

dka' ba du mas gser gyi gling nas
nyer blangs byang chub sems kyis gdams pa dbang gi
rgyal //
bod yul gdul byar brtse bas 'phangs med
stsol mdzad jo bo chen po di (Z de) paṃ ka ra dang //
yongs rdzogs thub bstan bdag gir bzhes te
legs bshad gtam dang rnam thar gtsang ma'i ngo mtshar
gyis //
kun las khyad 'phags dge ldan srol 'byed

rgyal ba gnyis pa sras dang bcas la snying nas 'dud //(8)

mgon de'i ring lugs dri bral yid bzhin nor //
bshad dang sgrub pa'i rgyal mtshan rtser bkod de //
'dzad med dge legs 'dod dgu'i char 'bebs pa'i //
dge ldan bstan 'dzin rnams la phyag bgyi'o //(9)

'od dpag med dang 'jig rten dbang phyug gnyis //
ngur smrig gar gyis thub bstan snying po (GD bo) mchog /
srid mtha'i bar du mi nyams 'phel mdzad pa //
rgyal ba'i (G pa'i) dbang po yab sras gtsug na rgyal //(10)

'gro la bu ltar brtse ba'i dbang gyur
 thugs gsang 'dzad med chos mdzod sgo phye nas //
legs bshad dbyig gi snying po ci 'dod
 stsol mdzad yongs 'dzin rnams dang khyad par du //
sangs rgyas kun dngos rol pa'i (GD ba'i) rdo rje
 mai tri'i zhabs dang ratna'i mtshan can te //
bka' drin mtshungs med bla ma nam gsum
 byang chub bar du snying dbus bzhugs //(11)

de ltar bstan pa'i bdag po che //
thub pa sras dang slob mar bcas //
dad pa'i snyim par bzung ba yi //
bstod tshig me tog gis mchod nas //(12)

'di na grub mtha' mi gcig pa //
so so'i rnam dbye mi shes par //
gzhan gyi chos dang gang zag la //
sdang zhugs dbang gis smod byed cing //(13)

rang gi grub mtha' khyad 'phags pa'i //
 rgyu mtshan ci yang ma nges par //
 rmongs zhen tsam gyis mchog 'dzin pa //
 'gro ba bzhi yi dbang gyur mang //(14)

de dag bag yod la 'god phyir //
 'phags bod tsi na'i yul byung ba'i //
 grub mtha'i khungs dang 'dod tshul bcas //
 mdo tsam 'dir ni brjod bya yi //(15)

phyogs lung ling thog dang bral ba'i //
 gzu bo'i mig ldan 'ga' mchis na //
 legs bshad shel dkar me long du //
 ngo mtshar gzugs mang 'char 'di ltos //(16)

(Editors' s note: The following images of the Buddhas, saints and sages are engraved on the left and right sides of the opening pages of the two editions)

| | | | |
|-------------|---|--------------|---|
| [G1a. Left] | rgyal ba rdo rje 'changs | [G1a. Right] | thub pa'i dbang po |
| [G2a. L] | rgyal tshab byams pa | [G2a. R] | rje btsun 'jam dbyangs |
| [G2b. L] | mgon po klu sgrub | [G2b. R] | 'phags pa thog med |
| [Z6 (1a) L] | rigs kun khyab bdag rgyal ba rdo rje 'chang | [Z6 (1a) R] | smra ba zla med 'dren mchog shākya'i tog |
| [Z7 (2a) L] | rgyal tshab rje btsun mi pham mgon po'i zhabs | [Z7 (2a) R] | smra bdag gi dbang phyug 'jam dpal dbyang |
| [Z8 (2b) L] | zab mo'i don gzigs 'phags mchog klu grub zhabs | [Z8 (2b) R] | rgyal ba'i lung bstan 'phags pa thogs med zhabs |
| [Z9 (3a) L] | klu grub dgongs pa gsal mdzad 'phags pa lha | [Z9 (3a) R] | 'dzam gling mkhas pa'i btsug rgyan dbyig gi gnyen) |

[2] brtsams chos spyir bshad pa /

[Z11 (4a2)]; [G (4a6)]; [D4. 2]

de yang nam mkha' ltar tshad med pa'i 'jig rten gyi khams rnams su so
so'i skye bo rtog ge ba rnams kyis rang rang gi blos byas kyis bzhag pa'i grub
mtha'i tshul mtha' yas pa dang / de bzhin du thub pa sangs rgyas bcom ldan
'das rnams kyi thugs bskyed dang 'phrin las las byung ba'i (G pa'i) rnam par dag
pa'i grub pa'i mtha' yang bgrang las 'das pas na / de dag gi byung tshul mtha'
dag pa su zhig gis brjod par nus / 'dir ni 'dzam bu'i gling gi yul gyi bye brag
pa (G ba) rnams su grub mtha' mi 'dra ba (G pa) ji ltar byung ba (G pa) dang / de
dag rang rang gi thun mong ma yin pa'i 'dod tshul rnams mdor bsdu tsam
zhig brjod par bya'o //

des na 'di la lnga / rgya gar 'phags pa'i yul du byung tshul / bod gangs
can gyi ljongs su byung tshul (G insert dang) / ma h'a tsi na'i yul du byung tshul /
yul gru gzhan 'ga' zhig tu byung tshul / grub don bshad pas (G bas) mjug bsdu
ba'o //

[3] le'u dang po / rgya gar 'phags pa'i yul du grub mtha' byung tshul /

[Z11 (4a6)]; [G (4b5)]; [D4. 14]

dang po la gnyis / phyi pa mu stegs pa'i byung tshul (ZD insert dang) /
nang pa (GD ba) sangs rgyas pa'i byung tshul lo //

[4] phyi pa mu stegs pa'i byung tshul /

[Z11 (4a6)]; [G (4b5)]; [D4. 15]

dang po la gsum / mu stegs pa ji ltar byung ba'i (G pa'i) lo rgyus (G rgyas)
dang / de dag gi 'dod tshul mdo tsam bshad pa dang / (D omit dang /) de bshad
pa'i dgos pa bstan pa'o //

[5] mu stegs pa ji ltar byung ba'i lo rgyus bshad pa /

[Z12 (4b1)]; [G (4a6)]; [D5. 5]

dang po ni / (D omit dang po ni /) 'jig rten gyi khams 'di thog mar chags nas yun ring tsam song ba'i tshe / 'dzam bu'i gling 'dir mi rnam ma rmos pa'i lo tog longs spyod pa byung la / de'i tshe mi le lo can gyis gsog (G gsogs) 'jog byas pas so nam byed dgos pa byung / de la brten nas sred pa can zhig gis ma byin par blangs pas phan tshun ma 'chams (ZG 'cham) par zhal lce gcod pa'i dpon bsko (G bsgo) dgos pa byung ba'i (G byung pa'i, D byung) dpon gyi thog ma ni mang pos bkur ba'i rgyal po zhes bya ba yin no //

[6] bram ze dang drang song byung tshul /

[Z12 (4b3)]; [G (5a3)]; [D5. 12]

de'i tshe rgyal pos mi nyes pa can 'ga' zhig la chad pas tshar gcod pa mthong nas skyo ba skyes te 'ga' zhig nags gseb dben par song nas bsdad pas bram ze byung / de las kyang 'ga' zhig gis dben par 'dod chung chog shes byas nas gcig pur bsdad pas lus dang sems dben pa (G ba) la brten nas zhi gnas thob / de la brten nas mngon shes dang rdzu 'phrul yod pa byung ba la drang srong zhes btags /

[7] mu stegs byed kyi grub mtha' dar tshul /

[Z12 (4b4)]; [G (5a5)]; [D6. 2]

de dag las mngon shes thob pa dang rtog ge la byang ba du mas rang rang gi blos dpyad nas thar pa (G ba) dang mtho ris thob byed kyi lam gyi rnam gzahag (ZG bzhag) dang / de sgrub byed kyi gtan tshigs kyi rigs pa bkod pa'i gzhung sna tshogs brtsams pa la brten nas mu stegs byed kyi grub mtha' dar bar (G par) gyur (D byas) /

[8] thams cad kyi thog mar grangs can pa byung tshul /

[Z12 (4b5)]; [G (5a6)]; [D6. 6]

de yang thams cad kyi thog mar byung ba ni grangs can pa ste / tshe

lo tshad med pa'i dus su drang srong ser skya zhes bya ba ral ba ser skya yod pa mngon shes lnga dang ldan pa zhid byung / des rang gi skyes stobs kyi shes rab la brten nas gzhung mang po brtsams te de'i rjes su 'brang ba (D 'brangs pa) rnams la grangs can pa'am ser skya pa (D ba) zhes grags so //

[9] gcer bu ba byung tshul /

[Z13 (5a1)]; [G (5b2)]; [D6. 11]

tshe lo nyi khri pa'i dus su drang srong rgyas pa zhes bya ba byung ste / de'i rjes su 'brang ba (D 'brangs pa) rnams la rgyas pa'am gcer (G gced) bu ba zhes zer ro //

[10] chad smra rgyang 'phen pa byung tshul /

[Z13 (5a1)]; [G (5b2)]; [D6. 12]

yang drang srong 'jig rten mig ces bya ba rtog ge la shin tu byang ba zhid byung ste / des rang gi bu mo la 'dod pa spyod pa'i phyir skye ba snga phyi med par smras te dge ba la phan yon dang sdig pa la nyes dmigs med par ston pa'i gzhung 'bum phrag gcig brtsams / de'i rjes 'brang rnams la mu stegs rgyang 'phen pa bya ba'i shin tu tha chad de byung ngo //

[11] rig pa can pa byung tshul /

[Z13 (5a3)]; [G (5b4)]; [D6. 17]

(D insert yang) drang srong mdzes pa bya ba / lha chen gyis u ma'i srung ma la bzhag pas / u ma drang srong mdzes pa la chags nas mdun du 'dug ste / nmam 'gyur du ma bstan kyang drang srong de rkang par (G bar) mig phab ste brtul zhugs bsrungs (G bsrung) pas / lha chen mnyes nas gzhung rtsom pa la dbang bskur bas (ZG pas) drang srong rkang mig ces grags / de'i rjes su 'brang ba (D 'brangs pa) rnams la rkang mig pa'am rig pa can pa zhes grags so //

[12] bye brag pa byung tshul /

[Z13 (5a4)]; [G (5b6)]; [D7. 3]

'ug pa la (D omit la) lhar 'khrul nas tshig don drug rnyed par rlom pa'i drang srong 'ug pa dang / gzhan gyis bor ba'i gzegs ma za zhing brtul zhugs (D insert la) spyod pa'i drang srong gzegs zan gnyis kyi rjes su 'brang ba (D 'brangs pa) la bye brag pa (G ba) zhes zer ro //

[13] mu stegs pa'i 'dod tshul mdo tsam bshad pa /

[Z13 (5a5)]; [G (6a1)]; [D7. 8]

gnyis pa ni / (D omit gnyis pa ni /) mdo sde las ya mtshan can gyi lta ba dgu bcu rtsa drug dang / lung ma bstan gyi lta ba bcu bzhi / lta ngan drug cu re gnyis dang / dam pa min pa'i lta ba nyer brgyad dang / lta ngan nyi shu sogs bshad la / rtog ge 'bar ba las / lta ba'i dbye ba brgya rtsa bcu dang / dbu ma rin chen sgron ma las lta ba'i dbye ba sum brgya sogs yod tshul bshad mod / rig pa'i dbang phyug gis / log pa'i lam la mu med phyir // zhes gsungs pa ltar lam dang lam min 'byed ba'i blo gros dang bral ba (G nga) rnams kyi lta ngan la 'di 'byung dang 'di mi 'byung zhes pa'i kha tshon gcod dka' bas lta ngan gyi grub mtha'i grangs la nges bzung ma mchis pas 'dir grags che ba 'ga' zhig gi 'dod tshul mdo tsam bshad na /

[14] rtag par smra ba dang chad par smra ba gnyis su 'du tshul /

[Z14 (5b2)]; [G (6a5)]; [D7. 17]

phyi rol pa'i (G ba'i) grub mtha' rnams lta ba'i dbye bas rtag par smra ba dang / chad par smra ba gnyis su 'du ste / chad par smra ba ni rgyang 'phen dang / rtag par smra ba ni / grangs can pa / tshangs pa pa (D ba) / khyab 'jug pa / dpyod pa pa (D ba) / dbang phyug pa / bye brag pa / rig pa can pa / gcer bu pa (GD ba) brgyad du 'du bar gsungs so //

[15] rgyang 'phen pa'i dbye ba dang 'dod tshul /

[Z14 (5b3)]; [G (6a6)]; [D8. 3]

rgyang 'phen pa la bsam gtan pa dang / rtog ge ba (Z pa) gnyis dang /
de re re la'ang skye ba snga phyi 'dod kyang las 'bras mi 'dod pa'i chad smra
gcig dang / skye ba snga phyi dang las 'bras gtan nas mi 'dod pa'i chad smra
gcig ste gnyis re yod la / de dag gis log par smra ba'i tshul ni / nyi ma 'char ba
dang / chu thur du 'bab pa (G ba) dang / sran (G srang) ma zlum pa dang / tsher
ma mo ba dang / rma bya'i mdongs (D mdangs) bkra ba rnams sus kyang 'bad
nas byed pa ma mthong ba'i phyir / dngos po 'di dag ni rang gi ngo bo nyid
las byung ba yin gyi rgyu med pa'o zhes rgyu 'bras la skur ba 'debs par byed
la / blo ni lus la khyad par gsum gyis brten (D bstan) pa yin te / chang dang
myos byed kyi nus pa bzhin lus kyi bdag nyid du gyur pa (G ba) dang / mar me
dang de'i 'od bzhin du lus kyi 'bras bur gyur pa dang / rtsigs pa dang de'i ri
mo bzhin du lus kyi yon tan du gyur pa'i (G ba'i) sgo nas brten pa'o //

des na mar me glo bur ba las 'od glo bur du grub pa bzhin / lus glo
bur ba las sems glo bur du grub pa yin pas / skye ba snga ma nas 'dir 'ongs
pa med do // 'chi ba'i tshe lus ni 'byung ba chen po bzhi dang / dbang po ni
nam mkha'i bag la zha bar gyur te 'jig la / lus sems rdzas gcig pas rtsigs pa
'jig na ri mo yang 'jig pa bzhin / lus 'jig na blo yang 'jig par 'gyur bas tshe 'di
nas phyi mar 'gro ba yang med do zhes skye ba snga phyi med par 'dod cing /
des na skye ba du mar lam goms par byed pa med pas thams cad mkhyen pa
med pa dang / sdug bsngal sogs rgyu med pas de las grol byed kyi lam dang
grol ba yang med do zhes (G ces) thar pa (G ba) la skur ba (Z pa) 'debs pa dang /
snyoms 'jug pa dag gis / bsam gtan dang gzugs med sogs thob pa na rang
nyid la dgra bcom pa'i 'du shes skye la / 'chi ba'i tshe ting nge 'dzin las nyams
nas 'og mar skye ba mthong ba na / rgyu des 'jig rten na dgra bcom pa med
par smra ba dang / 'ga' zhig gis mngon shes gyis brtags nas tshe 'dir sbyin pa
btang ba kha cig tshe phyi mar dbul por (G bar, D bor) gyur pa (G ba) mthong nas
las 'bras med par smra ba dang / rang gi mngon shes kyis ma mthong ba'i don
rnams la skur ba (Z pa) 'debs par byed do //

des na 'dis ni tshad ma la mngon sum tshad ma gcig pus khyab par khas blangs nas / spyi mtshan dang rjes dpag sogs mi 'dod par skye ba snga phyi dang / las 'bras dang / thar pa dang / thams cad mkhyen pa mtha' dag la skur ba (Z pa) 'debs pas (G bas) phyi rol pa'i (G ba'i) nang nas kyang shin tu tha chad du gyur pa'o // (G ba'o /)

[16] grangs can gyi dbye ba dang 'dod tshul /

[Z15 (6a6)]; [G (7a6)]; [D9. 15]

grangs can pa'am ser skya ba (Z pa) la / 'bras bu rnams rgyu dus na yod pa rkyen gyis mngon par gsal bar smra zhing / de yang gtso bo tsam las 'byung bar 'dod pa'i grangs can lha med pa dang / rgyu 'bras rang bzhin gcig kyang nam 'gyur tha dad du 'gyur ba lha chen dbang phyug gis byin gyis brlabs par 'dod pa'i grangs can lhar bcas pa gnyis yod la / shes bya thams cad nyi shu rtsa lngar grangs nges par 'dod de / gtso bo dang / chen po dang / nga rgyal dang / de tsam lnga dang / 'byung ba lnga dang / dbang po bcu gcig dang / bdag shes rig gi skyes bu ste nyer lnga'o //

de dag las skyes bu ni shes pa dang / lhag ma nyer bzhi 'dus bsags yin pas bem por 'dod cing / rtsa ba'i rang bzhin dang / spyi dang / gtso bo rnams don gcig cing khyad chos drug ldan gyi shes bya zhig la 'dod / skyes bu dang / bdag dang / shes pa dang / rig pa rnams don gcig / blo dang chen po ni (G omit ni) ming gi nam grangs yin zhing (D cing) / de ni phyi nas yul dang nang nas skyes bu'i gzugs brnyan 'char ba me long ngos (G lo dngos) gnyis pa lta bu zhig la 'dod / blo la bem pos khyab pa dang / shes pa la bdag gcig dgos zhes zer ro //

[17] bcing grol gyi 'dod tshul /

[Z16 (6b4)]; [G (7b5)]; [D10. 11]

bcing grol gyi 'dod tshul ni / gang gi tshe skyes bu des yul la longs spyod pa'i 'dod pa skyes pa na / rtsa ba'i rang bzhin gyis sgra la sogs pa'i nam 'gyur rnams sprul bar (ZG par) byed / de yang gtso bo las chen po dang / de las

nga rgyal gsum skyes pas / mun pa can gyi nga rgyal gyis nga rgyal gzhan
 gnyis ka 'jug par byed / rnam par 'gyur ba can gyi nga rgyal las / gzugs sgra
 dri ro reg bya ste de tsam lnga dang / snying stobs can gyi nga rgyal las / blo'i
 dbang po lnga dang / lus kyid dbang po lnga dang / yid kyid dbang po ste dbang
 po bcu gcig skye / de yang long ba rkang can lta bu'i rang bzhin dang / zha
 bo mig can lta bu'i skyes bu gnyis (D omit gnyis) gcig tu 'khrul te / rnam 'gyur
 rnams rtsa ba'i rang bzhin gyis sprul ba'i (ZD pa'i) tshul ma shes pa'i dbang gis
 'khor bar 'khor bar 'dod do //

nam zhig bla mas nye bar bstan pa'i man ngag thos pa la brten nas
 rnam 'gyur 'di dag rang bzhin gyis sprul ba (ZD pa) tsam du zad do zhes nges (G
 des) shes lhag par skyes pa na / rim gyis yul la chags pa dang bral bar gyur pa
 (G ba) de'i tshe bsam gtan la brten nas lha'i mig gi mngon (G mdon) shes bskyed
 de / mngon shes kyis gtso bo la bltas pa na gtso bo de gzhan kyid bud med
 ltar ngo tsha bas skyengs te rnam 'gyur rnams nye bar bsdus te / rang bzhin
 yan gar bar gnas shing / de'i tshe rnal 'byor pa'i (D ba'i) blo ngor kun rdzob kyid
 snang ba thams cad log ste skyes bus yul la longs spyod pa med cing byed pa
 med par gnas pa de'i tshe thar pa thob pa yin no zhes 'dod do //

[18] tshangs pa ba rnams kyid dbye ba dang 'dod tshul /

[Z17 (7a5)]; [G (8a6)]; [D11. 11]

tshangs pa ba (ZG pa) ni / ston pa tshangs pa yin par smra zhing / nang
 gses la / brda (G brda') sprod pa ba (ZG omit ba) dang / rig byed mtha' pa (GD ba)
 dang / gsang ba pa rnams yod la / 'jig rten snod bcud thams cad tshangs pas
 byas pa dang / rig byed kho na tshad (G tshang) mar 'dod cing / rig byed kyid
 sgra rnams ni skyes bus ma byas pa'i ngag yin pas / don bden pa kho na ston
 pa yin zer / mtho ris dang tshangs pa sgrub pa'i thabs ni rig byed kyid gzhung
 las bshad pa'i rta'i mchod sbyin du 'dod do //

[19] brda sprod pa'i 'dod tshul /

[Z18 (7b1)]; [G (8b3)]; [D11. 17]

brda sprod pa dag ni snod bcud sna tshogs pa skye ba'i gzhi dang / de
dag gi bdag nyid du gyur pa'i (G ba'i) tshangs pa yi ge om zhes bya ba / skye
'jig med pas rtag pa / phyogs dang dus kyi cha shas med pa / phyi nang gi yul
la bden par 'jug pa / gcig pu'i rang bzhin don dam par gnas pa zhig yod de /
ma rig pas bslad pa rnams la gzung 'dzin sna tshogs su snang ba yin zer / bod
kyi jo nang pa'i (GD ba'i) 'dod tshul yang 'di dang nye bar snang / (Z //) thar pa (G
ba) thob byed kyi lam ni phyi'i phyugs kyi mchod sbyin gyi sbyin sreg dang /
nang bud med kyi bha ga'i thab du (ZD tu) khams 'dzag pa'i sbyin sreg byed pa
la 'dod cing / thar pa (G ba) ni de dus kyi stong sangs dang bde ba la 'dod do //

[20] rig byed mtha' pa'i 'dod tshul /

[Z18 (7b3)]; [G (8b6)]; [D12. 6]

rig byed mtha' pa'am (GD ba'am) bram ze mchog rnams ni tshad mar
gyur pa'i rig byed las bshad pa'i skyes bu zhes bya ba / gcig pu ba (Z pa) /
nam yang mi nyams pas rtag pa / mya ngan las 'das pas tshangs pa / skye rgu
thams cad la khyab pa / thog mtha' med pas 'chi ba med pa / nyi ma'i mdog
can / mun pa'i dkyil 'khor las 'das pa / chen por gyur pa (G ba) / gnyid log pa
las gzhan yin pa skyes bu zhes bya ba zhig yod / de lha rnams kyi bdag nyid
yin pa dang / dbang phyug chen po'i ngo bo yang yin / skyes bu de kho nas
khams gsum thams cad dang / bde sdug / 'ching grol rnams byed / 'on kyang
rang gi ngo bo (D bor) 'gyur ba dang zad pa med / bsam gtan la brten nas lha'i
mig gis skyes bu de la bltas pa (D pas) na skyes bu de nyid gser gyi mdog can
du mthong na dge sdig 'khor 'das mnyam nyid du gyur nas grol bar 'gyur zer /
gsang ba ba (ZD pa) rnams phal cher de dang 'dra ba la / rig byed la brten nas
bdag shes rig rtag pa cha med cig (ZG gcig) yod par 'dod do //

[21] khyab 'jug pa'i 'dod tshul /

[Z19 (8a2)]; [G (9a5)]; [D12. 20]

khyab 'jug pa ni / khyab 'jug ston par 'dzin cing / khyab 'jug la zhi ba dang ma zhi ba'i ngo bo gnyis yod pa'i / zhi ba ni lha rdzas kyi ngo bo yod min med min gyi bdag nyid 'chi ba med pa'i ngo bo yin la / de bsgoms pas (G bas) thar pa thob par smra la / ma zhi ba ni / nya la sogs pa'i khyab 'jug gi 'jug pa bcu bshad la / rtag pa cha med kyi bdag khas len (G lin) pa dang / 'khor ba mtha' can dang / grol byed kyi lam ni yi ge om bsgom (Z sgom) pa dang / rlung bum pa can (G nyan) bsgom pa sogs yod par bshad / lugs 'dis 'khor ba zad mtha' can du 'dod cing / rig byed mtha' pa (GD ba) la sogs pa mang po zhig kyang 'di'i rjes 'brang du bshad do //

[22] dpyod pa pa'i 'dod tshul /

[Z19 (8a5)]; [G (9b2)]; [D13. 9]

dpyod pa ba (ZG pa) ni / rgyal dpog gi rjes su 'brang ba yin pas rgyal dpog pa yang zer la / bdag ni blo'i ngo bo sems pa can dang / bem po ma yin pa / shes rig gi rang bzhin / rtag pa'i ngo bo / yan gar ba'i rdzas yod / cha shas med pa zhig tu 'dod do //

rig byed tshad mar 'dod tshul snga ma nams dang 'dra / mchod sbyin la sogs pa 'ba' zhig gis tshangs pa lta bu'i mtho ris kyi go 'phang thob pa yod par 'dod la / (Z //) de ni ngan song las grol ba'i phyir thar pa tsam yin kyang / sdug bsngal nye bar zhi ba'i thar pa ni med de / dri ma sems kyi rang bzhin la zhugs pa'i phyir dang / thams cad mkhyen pa yang med de / shes bya mtha' yas pa'i phyir / des na bden pa'i ngag kyang med do zhes (GD ces) smra'o //

tshad ma drug 'dod pa dang / rgyal dpog pa'i nang tshan ts'a ra ka pa (G ba) nams tshad ma bcu gcig tu 'dod pa dang / gzhan yang byas shugs zhe brgyad kyi nam gzhang (ZG bzhag) kyang smra ste 'dir ma bkod do //

[23] dbang phyug pa / bye brag pa / rig pa can pa gsum gyi 'dod tshul /

[Z20 (8b3)]; [G (9b6)]; [D14. 2]

dbang phyug pa / bye brag pa dang / rig pa can pa gsum ni / dbang phyug ston par 'dzin cing / bye rig gnyis la tshangs pa dang / khyab 'jug ston par byed pa (D par) yang yod pas / de gnyis la tshangs pa ba (ZG pa) dang / khyab 'jug pa'i (G ba'i) tha snyad kyis gsungs pa'ang yod do //

bye brag pa la gong du brjod zin pa ltar / 'ug pa lhar 'khrul ba dang / gzegs ma za ba'i drang srong gi rjes su 'brangs pas / 'ug pa ba (ZG pa) dang / gzegs zan pa zhes kyang zer la / rig pa can pa yang sngar bshad pa'i drang srong rkang mig gi rjes 'brang yin pas rkang mig pa zhes kyang zer ro //

de dag gis dbang phyug kun mkhyen du 'dod cing / snod bcud thams cad dbang phyug gis blo sngon du btang nas byas zer la / bum pa can gyi rlung sbyor dang / dbang phyug gi lingga'i rtse nas dbang bskur ba dang / bud med dang sbyar nas khams 'dzag pa'i bde ba mams lam yin par smra zhing / khams 'dzag pa'i bde ba las 'khrig bde'i ye shes skyes pa thar par 'dod do //

bye rig ni / tshig don drug gi (D gis) spyi bye brag gi khyad par mang du smra bas bye brag pa (D insert dang) / drang srong rkang mig gis byas pa'i rig pa'i rjes su 'brangs pas na rig pa can pa zhes grags / bye brag pas mngon rjes lung gi tshad ma gsum / rig pa can pas de gsum dang dpe nyer (Z nyid) 'jal gyi tshad ma ste bzhi dang / gnyis kas kyang rjes dpag la gsum dang / de dag gi rten du gyur pa'i (G ba'i) rtags yang dag gsum dang ltar snang gsum 'dod cing / rtog ge'i tshig don bcu drug dang / tshig don bryad rnams 'dod tshul 'dir mi spro'o //

[24] thar lam 'dod tshul /

[Z21 (9a3)]; [G (10b2)]; [D15. 5]

thar pa thob byed kyi lam ni / khrus dang / dbang bskur ba dang / smyung bar (G par) gnas pa dang / bla ma'i khyim du gnas pas tshangs par spyod pa dang / nags su gnas pa dang / mchod sbyin dang / sbyin pa (G ba) la

sogs pa yin zhing nam zhig bla ma'i man ngag las rnal 'byor bsgoms te / bdag dbang sogs rnams las don gzhan du shes nas bdag gi de kho na nyid mthong zhing tshig gi don drug gi rang bzhin khong du chud pa na / bdag ni (D gi) khyab pa'i rang bzhin yin yang byed pa med par shes te / chos dang chos ma yin pa'i las gang yang gsog par mi byed / las gsar pa (GD ba) ma bsags shing rnying pa (GD ba) zad pas sngar blangs pa'i lus dang dbang po dang blo dang bde sdug 'dod sdang sogs bdag dang bral zhing / gsar pa'i (GD ba'i) lus dang dbang po ma blangs pas / bud shing zad pa'i me bzhin du skye ba'i rgyun chad de bdag 'ba' zhig tu gnas par gyur pa (G ba) na thar pa (D ba) thob pa yin zhes (D ces) zer ro //

[25] gcer bu pa'i 'dod tshul /

[Z22 (9b1)]; [G (10b6)]; [D15. 17]

gcer bu pa (D ba) ni / rgyal ba dam pa sogs kyis rjes su 'brangs pas rgyal ba par (D bar) grags la / shes bya thams cad tshig don dgur 'du bar 'dod cing / ljon shing sogs sems ldan dang / ston pa sangs rgyas kun mkhyen ma yin par sgrub pa'i (G ba'i) rig pa sogs smra'o //

thar pa (D ba) ni lus gcer bu dang / ngag mi smra ba dang / me lnga bsten pa la sogs pa'i dka' thub kyis spyod pa la brten nas sngar byas kyis las thams cad zad cing / las gsar du ma bsags pas / 'jig rten thams cad kyis steng na 'dug pa'i gnas 'jig rten 'dus pa zhes bya ba gdugs dkar po gyen la bsangs pa lta bu zho'am (G zho 'am) ku mu ta ltar dkar ba / tshad dpag tshad 'bum phrag (D omit phrag) zhe lnga yod pa / srog yod pas dngos po yin cing / 'khor ba las grol bas dngos po med pa yang yin pa der 'gro ste / gnas de ni thar pa zhes bya ba'o // zhes zer ro //

[26] mu stegs kyis 'dod tshul 'gog pa'i rig pa /

[Z22 (9b4)]; [G (11a4)]; [D16. 8]

mu stegs kyis 'dod tshul de rnams 'gog pa'i rigs (ZG rig) pa 'jug pa dang / dbu ma snying po rtsa 'grel / rtog ge 'bar ba / mam 'grel nges sogs las rgya

cher gsungs shing / mu stegs kyi grub mtha'i nang nas grangs can pa / bye
brag pa / rig pa can pa gsum gyi 'dod tshul cung zad brling (G brnying) bas
tshad ma sde bdun sogs nas de 'gog pa'i rigs (ZG rig) pa mang du gsungs te /
'dir de rnams bkod na ha cang mang du dogs nas ma bris so //

[27] mu stegs pa bshad pa'i dgos pa bstan pa /

[Z22 (9b6)]; [G (11b6)]; [D16. 15]

gsum pa ni / (D omit gsum pa ni /) gzhan sde 'di dag gis rtag pa dang chad
par smra ba'i tshul dang / de 'gog byed kyi rigs pa shing rta chen po rnams kyi
gzhung las mang du 'byung ba (G pa) rnams legs par shes na / rang lugs kyi
bstan pa dang ston pa skyon med du rigs (ZG rig) pa'i lam nas drangs pa'i dad
pa ldog tu med pa skye bar 'gyur bas / khyad par 'phags bstod las /

mu stegs gzhan gyi gzhung lugs la //

ji lta ji ltar nam bsams (G pasms) pa //

de lta de ltar mgon khyod la //

bdag gi sems 'di dad (G ngang) par gyur //

ces gsungs so //

gzhan yang sdug bsngal rgyu med dang / mi mthun pa'i rgyu las
'byung bar (G par) 'dzin pa dang / lam ma yin pa la lam du 'dzin pa dang / thar
pa ma yin pa la der 'dzin pa sogs kyi log rtog 'gag par 'gyur ba (G pa) dang /
skye ba (G pa) gzhan dag tu rgyang (G rkyang) 'phen sogs grub mtha' ngan pa'i
gzhung lugs thos pa'i stobs kyis bzhag pa'i bag chags kyi sa bon nyams smad
pa dang / skye ba phyi ma rnams su log lta mtha' dag las ldog pa dang / yang
dag pa'i lta ba myur du rgyud la skye ba'i bag chags 'jog pa dang / der ma
zad bod du dar ba'i grub mtha' sna tshogs 'di dag las / 'ga' zhid gi lta ba'i 'dod
tshul mu stegs kyi lugs dang phyogs mthun pa'ang snang bas / de dag gi dbye
ba legs par shes nas rang lugs kyi lta ba la gzhan du drang mi nus pa'i nges pa
brtan po skye ba sogs kyi dgos pa chen po yod pas / 'di dag mu stegs kyi rtsod
pa byung na zlog byed tsam yin gyi / nyams len la nye bar mkho ba ma yin
no snyam du mi bsam par thar pa 'dod pa rnams kyis shing rta chen po rnams

kyi gzhung dang / rje bla ma yab sras kyi legs bshad rnams la thos bsam lhur
blangs te shes par (G bar) bya ba gnad du che'o //

smras pa /

gang yang 'di na blo gros ldan rnams kyis //

sems dang las su bya ba'i gtso bo ni //

srid las grol ba'i thabs tshul 'tshol ba ste //

de lta min na phyugs dang bye brag ci //

'jig rten 'di na ston par khas 'che zhing //

'ching (D 'chang) grol rnam gzhang (ZG bzhag) smra ba mang mchis kyang //

srid pa'i rtsa ba brtan par byed pa'i thabs //

zhi ba'i lam du ston pa sha stag ste //

gang gi bstan pa thar pa 'dod rnams la //

bslu ba med pa'i 'jug ngogs mchog gyur pa //

bde bar gshegs pa'i bstan pa kho na'i phyir //

sangs rgyas nyag gcig tshad ma'i skyes bu yin //

gzhan sde'i 'dod tshul phyogs tsam mi shes par //

rang gi bstan dang ston pa skyon med du //

ci tsam smras kyang ne tso'i 'don (G 'dod) pa bzhin //

tshig tu zad kyi nges pa 'dren mi nus //

de phyir lta ngan mu la stegs 'cha' ba'i //

phyi rol grub mtha'i rnam gzhang (ZG bzhag) legs shes nas //

spong bar byed pa thar pa'i grong khyer du //

'jug pa'i them skas nyid ces mkhas rnams gsungs //

zhes bya ba ni bar skabs kyi tshigs su bcad pa'o // //

[28] nang pa sangs rgyas pa'i byung tshul /

[Z24 (10b5)]; [G (12b2)]; [D18. 14]

gnyis pa (D omit gnyis pa) nang pa (GD ba) sangs rgyas pa'i byung tshul
la gnyis / grub mtha' smra ba bzhi'i byung tshul dang / de mams kyi lta ba'i
bzhed tshul mdo tsam bshad pa'o //

[29] grub mtha' smra ba bzhi'i byung tshul /

[Z24 (10b6)]; [G (12b3)]; [D18. 18]

dang po ni / (D omit dang po ni /) bskal pa (GD ba) 'di la theg chen ltar na
sangs rgyas stong / theg dman ltar na lnga brgya 'byung la / de yang 'dzam bu
gling pa'i (G ba'i) mi rnams kyi tshe lo dpag med nas bri ste bzhi khri la thug
pa'i tshe sangs rgyas 'khor ba 'jig byon / sum khri'i tshe gser thub byon / nyi
khri'i tshe 'od srung (G srungs) byon / tshe lo brgya pa (GD ba) snyigs ma lnga
bdo ba'i tshe bdag cag gi ston pa sh'akya thub pa 'jig rten du byon te chos
kyi 'khor lo rim pa gsum bskor zhing / bka' dang po bden bzhi'i chos 'khor
gyi rjes su 'brangs te theg pa 'og ma'i grub mtha' smra ba nyan thos sde gnyis
dang / 'khor lo bar pa (GD ba) dang tha ma'i rjes su 'brangs te theg chen gyi
grub mtha' smra ba dbu sems gnyis byung ngo //

[30] nyan thos sde gnyis las bye brag smra ba /

[Z25 (11a3)]; [G (12b6)]; [D19. 9]

nyan thos sde gnyis las / (ZG omit /) bye brag smra ba (G pa) ni / bye
brag bshad mtsho'am / bye brag tu bshad pa chen po zhes bya ba'i gzhung gi
rjes su 'brangs pa dang / dus gsum rdzas kyi bye brag tu smra bas bye brag tu
smra bar grags la / dbye na rtsa ba'i sde bzhi / gyes pa bco brgyad yod do //

rtsa ba'i sde bzhi ni / mkhan po dgra bcom pa 'od srung (G srungs) chen
po nas brgyud pa phal chen sde pa / sgra gcan zin nas brgyud pa gzhi thams
cad yod par smra ba / kā tyā (ZG tya) ya na nas brgyud pa gnas brtan pa'i sde
pa (G ba) / nye bar 'khor nas brgyud pa mang bkur ba'i sde pa mams so //

gyes pa bco brgyad ni / phal chen pa las gyes pa lnga ste / slob dpon

dul ba lhas /

shar nub ri dang gangs rir gnas //

'jig rten 'das par smra ba dang //

btags par smra ba'i sde rnams ni //

lnga tshan dge 'dun phal pa'i (D ba'i) sde //

zhes pa ltar ro //

gzhi thams cad yod par smra ba las gyes pa bdun te /

gzhi kun yod (G yong) dang 'od srung sde //

sa srung (D ston) sde dang chos srung sde //

mang thos gos dmar slob mar bcas //

phye ste smra ba'i sde rnams ni //

gzhi kun yod par smra ba yin //

zhes so //

gnas brtan pa las gyes pa gsum ste /

rgyal byed tshal gnas 'jigs med gnas //

gtsug lag khang gnas gnas brtan pa //

zhes so //

mang bkur ba las gyes pa gsum ste /

sa sgrog ri dang srung ba pa (G ba) //

gnas ma bu pa'i (D ba'i) sde rnams ni //

mang pos bkur ba'i sde pa (G ba) yin //

zhes so //

de dag kyang gang gi rjes su 'brang ba'i (D 'brangs pa'i) slob dpon dang /
gnas pa'i (D sa'i) yul dang / grub mtha'i 'dod tshul ci rigs kyis dbye ba bco
brgyad du gyur pa ste /

yul don slob dpon bye brag gis //

tha dad (G dang) sde pa (G ba) bco brgyad do //

zhes so //

sde pa (G ba) bco brgyad du gyes tshul la bshad pa mi mthun pa gzhan
yang yod do //

de yang ston pa mya ngan las 'das nas lo brgya dang bcu drug lon pa na grong khyer me tog gis rgyas pa zhes bya bar dge 'dun gyi gnas brtan bzhi skad rigs mi mthun pa bzhis lung 'don par brten / (ZG omit /) slob ma rnams mi mthun par gyur te rtsa ba'i sde bzhir gyes / de dag kyang nang gses kyis bco brgyad du gyur te phan tshun rtsod par (G pa) gyur to //

nam zhig na rgyal po kri (D kr'i) kri'i rmi (ZG rmis) ltas lung bstan pa'i mdo rnyed (D brnyed) nas bltas pas (G bas) sde pa (G ba) bco brgyad du gyur kyang nam par grol ba'i 'bras bu nyams pa med par gsungs pa mthong nas phan tshun mthun par gyur pa (G ba) ste bshad tshul gzhan yang yod do //

bye brag smra ba'i slob dpon ni / dbyig bshes dang / chos skyob dang / sangs rgyas lha dang / 'dus bzang (G pa zad) sogs yin par grags so //

[31] nyan thos sde gnyis las mdo sde pa /

[Z27 (12a1)]; [G (14a1)]; [D21. 7]

mdo sde pa'am (D ba'am) dpe ston sde pa (G ba) ni / mdo sde'i rjes su 'brangs nas grub mtha' 'jog pa dang / chos thams cad dpe'i sgo nas ston pa la mkhas pas de ltar grags la / dbye na mdo sde las ji ltar 'byung ba sgra ji bzhin du khas len pa tsam gyi sgo nas grub pa'i mtha' smra bas lung gi rjes 'brang (G 'brangs) dang / tshad ma sde bdun nas bshad pa ltar gyi rigs (ZG rig) pa'i rjes su 'brangs pas rigs pa'i rjes 'brang gnyis yod / slob dpon ni ku ma ra ta dang / shi ri ra ta dang / btsun pa ra ta sogs yin par grags so //

[32] theg chen gyi grub mtha' byung tshul /

[Z27 (12a3)]; [G (14a3)]; [D21. 14]

theg chen gyi grub mtha' byung tshul ni / ston pa mya ngan las 'das nas theg chen gyi bstan pa lha dang klu'i yul du shin tu dar (G dad) zhing / gling gzhan du'ang yod par bshad la / 'dzam bu'i gling 'dir ni sa la gnas pa'i byang chub sems dpa' dang / gsang sngags kyi rnal 'byor pa (D ba) sbas pa'i brtul zhugs 'dzin pa mang pos rang gis nyams su len pa dang / skal ldan rnams la 'chad pa sogs kyis theg chen gyi bstan pa 'dzin spel cung zad yod

mod kyang / nyan thos sde pa (G ba) dar rgyas che ba'i dbang gis theg chen gyi
sde snod nub pa lta bur gyur te yun ring (D re) zhig lon / skabs shig bram ze
chen po sa ra ha byon nas theg pa chen po gsang sngags kyi bstan pa gtso bor
spel / de nas rgyal ba rang nyid kyis lung bstan pa bzhin sangs rgyas gnyis
pa klu sgrub dang thogs med gnyis byon nas bcom ldan 'das nyid kyi bka' la
brten nas gsung rab la drang nges phye ste theg pa chen po'i zab rgyas kyi
lam nyams su len tshul yongs su rdzogs pa nyin mo ltar gsal bar mdzad pas
(D pa) shing rta chen po gnyis su grags shing / de nas brtsams te theg chen gyi
bstan pa dar zhing rgyas par gyur to //

**[33] klu sgrub lung bstan dang sher phyin 'bum pa spyen drangs
tshul sogs /**

[Z28 (12b2)]; [G (14b3)]; [D22. 9]

de yang mgon po klu sgrub ni / theg pa chen po spyi'i shing rta'i srol
'byed yin la / lang kar gshegs pa'i mdo las /

lho phyogs be ta'i (G da'i) yul du ni //

dge slong dpal ldan cher grags pa //

de ming klu zhes 'bod pa ste //

yod dang med pa'i phyogs 'jig pa //

nga (G da) yi theg pa 'jig rten du //

bla med theg pa rab bshad nas //

rab tu dga' ba'i sa bsgrubs te //

bde ba can du de 'gro'o //

zhes dang / gzhan yang 'jam dpal rtsa rgyud dang / rnga bo che'i mdo sogs
mang po las rgyal ba rang nyid kyis gsal bar lung bstan pa ste / sangs rgyas
mya ngan las 'das nas lo bzhi brgya lon pa na lho phyogs be darbha'i yul du
bram ze'i rigs su 'khrungs / bram ze chen po sa ra has rjes su bzung ste rab tu
byung / sku tshe zhag bdun las med pa bsrings te (G omit bsrings te) gsang sngags
kyi gdams pa mang du bstsal (ZG stsal) / nā lendra'i mkhan po sgra gcan 'dzin
bzang po las bsnyen par rdzogs te dge slong dpal ldan zhes grags / nā lendra'i

dge 'dun gyi zhal ta ba (Z pa) mdzad de gser 'gyur byas nas dge 'dun gyi gdugs tshod (G ched) sbyar / nyan thos sde pa (G ba) dge slong bde byed zhes bya bas rig pa'i rgyan zhes bya ba'i gzhung 'bum phrag bcu gnyis pa byas nas theg chen sun phyung ba (ZG phyungs pa) slob dpon 'dis tshar bcad pa sogs chos sgra chen po lan gsum du bsgrags / klu yul du byon nas klu mang po la chos bstan cing klu'i 'dam mang po dang sher phyin (Z phyir) 'bum pa sogs 'dzam gling du nub pa'i mdo sde mang po mi yul du spyan drangs pas klu sgrub tu grags / li kha ra shing 'phel dang / sa (G ba) ta be sa sogs yul mang por 'gro don mdzad / byang gi sgra mi snyan du byon pa sogs rdzu 'phrul dang chos ston pa sogs kyis 'gro don mtha' yas pa mdzad / mchod rten dang lha khang mang po bzhengs pa dang / rdo rje gdan la rdo rje'i (Z rdo'i) dra mig gi ra bas bskor ba dang / dpal ldan 'bras spungs kyis mchod rten gyi bkod pa bzhengs pa sogs mdzad pa phyag rjes dang (ZG kyang) bstan pa la phan pa dpag med mdzad /

khyad par du zab mo dbu ma'i lam nges don mthar thug pa lung gis bsgrub pa la mdo kun las btus pa dang / rigs (ZG rig) pas bsgrub pa la rtsha shes sogs rigs pa'i tshogs drug dang / gzhan yang chos dbyings bstod pa sogs bstod pa'i tshogs dang / byang chub sems 'grel dang rim pa lnga pa (D ba) sogs gsang sngags kyis skor te mdo dang rgyud sde'i dgongs 'grel mang po mdzad cing / rigs (ZG rig) pa'i stobs kyis smra ba ngan pa rnam tshar bcad / theg pa chen po'i bstan pa nub pa gzhi nas gsos shing rgyal ba'i bstan pa la rgyal ba nyid dang mtshungs par bka' drin gyis khyab par mdzad do //

mi yul du lo drug brgya'i bar du bzhugs / rgyal po bde spyod bzang po'i bu gzhon nu nus ldan bya bas dbu bslangs pas gnang ste / ral gris ma chod (G mchod) pa la rtswa (ZG rtswa) ku shas srog chags kyis srog bcad pa'i rnam smin yod pas ku shas chod gsungs nas bcad de / dbu khyer phyin pa gnod sbyin mos 'phrogs te dpag tshad du dor / dbu dang sku lus gnyis mi nyams la lo re bzhin nye bar song nas mthar 'byar nas slar yang bstan 'gro'i don mdzad ces grags / rnga bo che'i mdo las slob dpon 'di sa (GD 'dis) bdun pa bar bshad / sgron gsal las sku tshe 'dir mchog gi dngos grub brnyes par bshad do //

slob ma yang 'arya de ba dang / dpa' bo dang / legs ldan 'byed dang /

sangs rgyas bskyangs dang / zla ba grags pa la sogs pa zla bral gyi mkhas pa mang du byon / rtsa ba shes rab kyi sgo nas dbu ma'i (ZG ma) pa'i (D omit pa'i) shing rta'i srol phye ba la brten nas klu sgrub kyi rjes 'brang (D 'brangs) rnam la dbu ma pa (GD ba) dang ngo bo nyid med par smra ba zhes zer ro //

[34] 'phags pa lha /

[Z30 (13b4)]; [G (16a2)]; [D24. 15]

'phags pa lha ni klu sgrub kyi slob ma gzhan rnam kyis kyang slob dpon nyid dang 'dra bar tshad mar 'dzin cing / 'di nyid kyis rnal 'byor spyod pa bzhi brgya pa (GD ba) mdzad / yab sras 'di gnyis kyi dgongs pa mthar thug thal 'gyur ba'i (G pa'i) lugs su gnas kyang gzhung gi bstan tshod la thal 'gyur ba'i (G pa'i) thun mong ma yin pa'i rnam gzhag (ZG bzhag) gsal bar ma phye bas thal rang gi phyogs gnyis ka'i spyi la bzhugs pas gzhung phyi mo'i dbu ma pa (D ba) zhes (D omit zhes) zer ro //

[35] thal 'gyur ba dang rang rgyud pa'i byung tshul /

[Z30 (13b6)]; [G (16a4)]; [D24. 20]

slob dpon sangs rgyas bskyangs kyis rtsa shes 'grel pa (GD ba) buddha (G bud dha, D bu ddha) p'a li ta mdzad cing / rtsa bar bshad pa'i rigs pa rnam kyis don thal 'gyur mang po mdzad nas bkral zhing rang rgyud kyi gtan tshigs ma bshad pa la / slob dpon legs ldan 'byed kyis shes rab sgron mer skyon mang du brjod cing / rang rgyud kyi gtan tshigs 'god dgos pa'i rgyu mtshan mang du bshad nas rang rgyud pa'i shing rta'i srol 'byed par mdzad / de'i 'og tu slob dpon zla ba grags pas bstan bcos dbu ma 'jug pa dang / rtsa shes 'grel pa (GD ba) tshig gsal bcas mdzad nas sangs rgyas bskyangs la skyon de rnam mi 'jug pa dang / rang rgyud kyi gtan tshigs (D tshig) khas len pa la gnod byed dang / khas mi len pa la sgrub byed mang du bstan nas 'phags pa'i dgongs pa thal 'gyur du bkral / 'on kyang thal 'gyur ba'i (G pa'i) shing rta'i srol 'byed ni sangs rgyas bskyangs yin par bzhed pa dang / zla ba grags pa yin par bzhed pa'i phyogs gnyis snang ngo //

de ltar 'phags pa'i dgongs pa thal rang so sor 'grel pa (GD ba) rnams la phyogs 'dzin pa'i dbu ma pa (D ba) zhes grags / slob dpon zhi 'tshos dbu ma rgyan dang / slob dpon ye shes snying pos (G bos) dbu ma bden gnyis / ka ma la sh'i las dbu ma snang ba mdzad cing / de gsum la rang rgyud shar gsum du grags / rang rgyud pa la dbye na / gzhi'i nam gzhag (ZG bzhag) sems tsam pa dang mthun par khas len pa'i rnal 'byor spyod pa dang / mdo sde pa (G ba) ltar rdul phra rab bsags pa'i phyi rol gyi don khas len pa'i mdo sde spyod pa'i dbu ma rang rgyud pa gnyis dang / snga ma la yang nam bden pa dang mthun pa dang / nam rdzun pa dang mthun pa'i dbu ma pa (D ba) gnyis yod pa'i zhi ba 'tsho dang / ka ma la sh'i la dang / 'phags pa grol sde lta bu snga ma dang / slob dpon seng ge bzang po / dze ta (D t'a) ri / lwa ba pa (G ba) lta bu phyi ma yin la / phyi ma la yang nam rdzun dri bcas pa dang mthun pa dang / dri med pa dang mthun pa gnyis yod do //

[36] dbu ma pa dang thal rang so so'i don bshad pa /

[Z32 (14b2)]; [G (17a1)]; [D26. 7]

dbu ma pa'am (D ba'am) ngo bo nyid med par smra ba (G smrab) zhes pa'i don ni / mtha' gnyis dang bral ba'i dbus khas len pas dbu ma pa (D ba) dang / chos rnams la bden grub kyi ngo bo nyid med par smra bas na ngo bo nyid med par smra ba zhes bya la / thal rang gi don ni / tshul gsum rang ngos nas grub pa'i rtags yang dag la brten nas bden dngos 'gog par byed pas na rang rgyud pa dang / thal 'gyur tsam gyis phyir rgol gyi rgyud la bsgrub bya rtogs pa'i rjes dpag skye bar 'dod pas na thal 'gyur ba zhes brjod do //

[37] sems tsam pa'i grub mtha' byung tshul dang 'phags pa thogs med lung bstan tshul /

[Z32 (14b4)]; [G (17a3)]; [D26. 15]

sams tsam pa'i grub mtha' byung tshul ni / lugs 'di'i shing rta'i srol 'phags pa thogs med kyis phye ba yin zhing / slob dpon 'di nyid 'jam dpal rtsa rgyud las /

nga ni mya ngan 'das 'og tu //
lo ni dgu brgya lon pa na //
thogs med ces bya'i dge slong ni //
bstan bcos de ni don la mkhas //
mdo sde nges don drang ba'i don //
nam pa mang po rab tu 'byed //
ces dang /
bstan pa yun ring (D rang) gnas bya'i phyir //
mdo yi de nyid don sdud byed //
lo ni brgya dang lnga bcur 'tsho //

zhes sogs kyis gsal bar lung bstan pa ste / ston pa 'das nas lo dgu brgya na
byon pa dang / drug brgya'i dus byon pa'i 'dod pa mi 'dra ba (G pa) yod cing /
gang ltar yang rgya gar du chos mngon pa la dgra lan gsum byung nas bstan
pa nub pa / bram ze mo gsal ba'i tshul khrims zhes bya bas ma bzod par / lus
la bu skyed la bstan pa dar bar byed du gzhug go snyam ste rgyal rigs dang
'dus pa las thogs med dang / bram ze dang 'dus pa las dbyig gnyen byung / bu
gnyis la blo rno ba'i cho ga byas te cher skyes pa'i tshe / bu gnyis kyis pha'i
las gang yin dris par / ma na re / khyed de'i phyir skyed pa min gyi bstan
pa dar ba'i ched du yin pas blo sbyong gyis la bstan pa dar bar gyis shig ces
smras pas / gcung dbyig gnyen kha che 'dus bzang gi drung du byon /

[38] gcen thogs med kyis byams pa bsgrubs tshul /

[Z33 (15a3)]; [G (17b3)]; [D27. 11]

gcen gyis ni (D omit ni) byams pa bsgrubs nas bstan pa dar bar bya'o
snyam ste / ri bya rkang (G rgang) gi phug tu byon nas lo gsum du bsgrubs pas
mtshan ma cung zad kyang ma mthong bas skyo ste phyir thon pa na / rgan
po shing bal gyi 'dab mas lcags kyis sdong po la khab byed pa (D par) mthong
nas dris par /

snying stobs ldan pa'i skyes bu yis //
bsgrubs na mi 'grub gang yang med //

dka' yang brnag pa ma dor na //

ri bo (Z po) nmams kyang thal bar rlog /

ces zer bas rkyen byas te phyir log nas / yang lo gsum bsgrubs nas thon pa na
chu thigs kyis brag zad pa mthong nas brtson pa'i blo skyes te phyir log / yang
lo gsum bsgrubs te thon pa na bya sgros brag zad pa mthong nas sngar ltar
phyir log / yang lo gsum bsgrubs pas mtshan ma ma byung bar (G par) skyo ste
thon nas phyin pa (Z ba) na khyi mo ro smad 'bus gzhighs pa / (ZG omit /) ro stod
zug cing za ba zhigh mthong nas snying rje lhag par skyes te / rang gi lus las (ZG
la) sha bcad de 'bu bsal snyam nas gser gyi spu gri g-yar te rang gi lus las sha
bcad lag pas blangs na shi yis dogs te spyen (G sbyan) zum nas ljags kyis blang
snyam pa dang khyi med par rje btsun 'od dang bcas pa mthong nas / bdag
gis de tsam bsgrubs kyang rtags tsam yang ma byung ba rje btsun thugs rje re
chung zhes 'khangs pas / rje btsun gyis nga dang po nas yod de khyod rang gi
sgrib pas ma mthong la / da lta snying rje chen po skyes pas (G bas) sgrib pa
dag nas mthong ba yin / zhes gsungs / de nas theg chen dar bar zhu 'tshal zhes
zhus pas / nga'i chos gos la 'jus shig gsungs nas dga' ldan du byon te lha'i gro
skad cig gam (G ga ma) mi lo lnga bcu'am lnga bcu (D omit 'am lnga bcu) rtsa gsum
bzhugs par grags / der byams pa las yum gyi mdo dang / byams chos sde lnga
sogs gsan nas slar mi yul du byon / sa sde lnga dang sdom nam gnyis sogs
mdzad nas sems tsam pa'i shing rta'i srol phye / sa'i bstod 'grel las / slob dpon
'dis chos rgyun gyi ting nge 'dzin brnyes par bshad / tshig gsal du / slob dpon
thogs med sa gsum pa 'od byed pa brnyes kyang dbyig gnyen 'dul ba'i don du
sems tsam du bstan par gsungs / btsun pa ngo bo nyid med pas chos mchog
la gnas par bshad / dgung lo brgyar (G brgyad) zer yang brgya dang lnga bcu
bzhugs par nges so //

[39] slob dpon dbyig gnyen /

[Z34 (15b6)]; [G (18b3)]; [D28. 20]

gcung dbyig gnyen thog mar bye brag smra ba la zhugs nas theg chen
la mi mos pas gcen la yang /

kye ma thogs med nags su lo //
bcu gnyis bar du ting 'dzin bsgrubs //
ting 'dzin ma grub glang chen gyi //
rgyab khal longs pa'i grub mtha' brtsams //

zhes sogs kyal ka byas kyang phyis su theg chen la dad par gyur nas gcen
las byams chos sogs gsan te / pra (G bra) k'a ra ṅa sde brgyad brtsams / de ltar
byams chos lnga / sa sde lnga / sdom rnam gnyis / pra kā ra ṅa sde brgyad
rnams la byams pa dang 'brel ba'i chos nyi shu zhes grags so //

dbyig gnyen la slob ma rang las mkhas pa bzhi byung ste / tshad ma
rang las mkhas pa slob dpon phyogs kyi glang po / 'dul ba rang las mkhas pa
yon tan 'od / phar phyin rang las mkhas pa 'phags pa grol sde / mngon pa rang
las mkhas pa blo gros brtan pa rnams so //

[40] **sems tsam zhes pa'i don /**

[Z35 (16a4)]; [G (19a1)]; [D29. 11]

de ltar thogs med kyis phyed ba'i shing rta'i srol 'dzin pa'i rjes 'brang (D
'brangs) rnams la sems tsam pa'am rnam (G rnams) rig pa zhes zer te / chos thams
cad sems kyi bdag nyid tsam du smra bas na de ltar grags so //

[41] **sems tsam pa'i dbye ba /**

[Z35 (16a5)]; [G (19a2)]; [D29. 14]

dbye na / dbang shes la rags par snang ba snang ba ltar du grub par
'dod pa dang / de ltar ma grub par 'dod pa'i dbang gis sems tsam rnam bden
pa dang / rnam rdzun pa gnyis yod la / rnam bden pa la / gzung 'dzin grangs
mnyam pa / sgo nga (G sgong) phyed tshal ba (Z pa) / sna tshogs gnyis med pa
gsum yod do //

'di gsum gyi khyad par la mkhas pa rnams bzhed pa mi mthun pas 'dir
ma bkod la / rnam rdzun pa la / sems kyi ngo bo ma rig pa'i bag chags kyi dri
mas bslad par 'dod pas dri bcas pa dang / ma bslad par 'dod pas dri med rnam
rdzun pa gnyis / yang sems tsam pa la lung gi rjes 'brang dang / rigs (ZG rig)

pa'i rjes 'brang gnyis su yang 'byed de / rim pa bzhin sa sde lnga'i rjes 'brang dang / tshad ma sde bdun gyi rjes 'brang rnams so //

de ltar slob dpon (G dben) klu sgrub dang 'phags pa thogs med gnyis kyis dbu sems kyis shing rta'i srol phye (Z bye) ba la brten nas theg pa chen po'i bstan pa dbyar dus kyis chu bo ltar 'phel zhing rgyas par gyur te / mkhas pa dang grub pa'i (G pa') dbang phyug bye ba khrag khrig rim par byon nas sangs rgyas kyis bstan pa nyi ma ltar gsal bar (Z par) mdzad pa yin no //

[42] grub mtha' smra ba bzhi'i lta ba'i bzhed tshul mdo tsam bstan pa /

[Z36 (16b4)]; [G (19b1)]; [D30. 12]

gnyis pa ni / (D omit gnyis pa ni /) rang sde'i grub mtha' de rnams kyis gzhi lam 'bras bu'i rnam gzhas (ZG bzhag) 'dod tshul la mi 'dra ba mang du yod kyang de thams cad zhib tu bkod na yig tshogs che bar 'gyur ba dang / grub mtha'i bstan bcos gzhan rnams las rgya cher bshad pa'i phyir 'dir mi spro la (G sprol) / grub mtha' tha dad par 'jog pa lta ba'i sgo nas yin pas na 'dir so so'i lta ba'i 'dod tshul mdo tsam zhig bshad par bya'o //

'di la gnyis / so so'i lugs kyis dgag bya'i 'dod tshul dang / bdag med phra rags 'jog tshul lo //

[43] grub mtha' smra ba bzhi'i so so'i lugs kyis dgag bya'i 'dod tshul /

[Z36 (16b6)]; [G (19b4)]; [D31. 3]

dang po ni / (D omit dang po ni /) de yang rang sde thams cad kyis rten 'byung (Z 'gyur) khas len pa la khyad par med mod / 'on kyang rang rgyud pa man chad kyis phyi rol pa'i (G ba'i) 'dod pa ltar gyi phung po las don gzhan du grub pa'i bdag mi 'dod kyang phung po nyid bdag tu 'jog par byed de / bye smra'i nang tshan mang bkur ba 'ga' zhig gis phung po (D bo) tshogs pa bdag tu 'jog / kha che bye brag tu smra ba dang / mdo sde pa (G ba) gnyis kyis rnam par shes pa'i rgyun gang zag tu 'jog / sems tsam pas kun gzhi'i rnam shes gang

zag tu 'jog / dbu ma rang rgyud pas yid kyi rnam shes gang zag tu 'jog / thal
'gyur bas ni 'jog tshul de thams cad mi bzhed do //

de yang bye smra nas rang rgyud pa'i bar gyis las 'bras kyi rten du
gyur pa'i bdag 'jog tshul 'di yang gang zag sogs tha snyad du rang ngos nas
grub par 'dod pa'i dbang gis yin te / phung po (G bo) la brten nas nga'o zhe'am /
gang zag go zhes tha snyad btags pa tsam gyis ma tshim par / gang zag de
phung po (G bo) re re ba dang / tshogs pa dang / de las don gzhan pa gang du
grub ces btsal na de dag gang rung zhig gang zag tu rnyed par bsams nas
bzhag pa yin no //

de ltar 'dzin pa la rang ngos nas grub par 'dzin pa dang / de'i yul de la
rang ngos nas grub pa zhes 'dogs par byed cing / 'tshol lugs des btsal nas mi
rnyed na gang zag 'jog mi nus pas chad par thal ba'i skyon du 'gyur ro snyam
du dgongs par snang ngo //

de'i dbang gis dngos smra ba rnams kyis kyang / bden par grub pa /
yang dag par grub pa / don dam par grub pa / de kho na nyid du grub pa /
rang gi mtshan nyid kyis grub pa / rang bzhin gyis grub pa / ngo bo nyid kyis
grub pa / rdzas su grub pa rnams tha snyad du grub par bzhed pa sogs kyi
khyad par yang shes dgos te /

[44] **bye smras rdzas btags 'jog tshul /**

[Z38 (17b1)]; [G (20a6)]; [D32. 7]

de yang bye smras gzugs dang shes pa sogs dpyad mthar rnyed dgos
par bzung zhing / de yang mthar gtugs na rdul phra rab cha med dang / rgyun
gyi thung (D thug) mtha' skad cig cha med cig yod dgos par mthong nas rags pa
rnams la rtsom gzhi rdul cha med dang / rgyun gyi rtsom gzhir skad cig cha
med khas blangs nas cha med dang nam mkha' sogs bcom pa dang gzhi pas
rang 'dzin gyi blo mi 'dor ba rnams rdzas yod dang / don dam bden pa dang /
don dam par yod pa / bcom gzhi gis rang 'dzin gyi blo 'dor ba rnams btags
yod dang / kun rdzob tu yod pa dang / kun rdzob tu bden pa yin la / bden
gnyis kyi dngos po thams cad don byed nus pa'i rdzas su grub par 'dod /

[45] mdo sde pas rang mtshan dang spyi mtshan 'dod tshul /

[Z38 (17b4)]; [G (20b3)]; [D32. 16]

mdo sde pas (GD bas) don dam par 'bras bu skyed nus pa rnam rang
mtshan dang don dam bden pa dang / rang gi mtshan nyid kyis grub pa dang /
don dam par don byed mi nus pa'i chos rnam spyi mtshan dang / rang gi
mtshan nyid kyis ma grub pa dang / kun rdzob bden par 'dod la / rang spyi
gnyis ka yang rang ngos nas ma grub na med dgos par 'dod do //

phra rdul cha med sogs kyang bye smra dang 'dra bar khas len pas /
bdag gi bla ma thams cad mkhyen pa'i lta mgur du / bem po 'dzum ris kyi
rgya stag khra bo zhes gsungs so //

**[46] sems tsam pas rang spyi'i khyad par dang phyi don med par
'dod tshul /**

[Z38 (17b6)]; [G (20b6)]; [D33. 4]

sams tsam pa rnam kyis rtog pas btags pa tsam ma yin par rang ngos
nas grub pa ni rang mtshan dang rang gi mtshan nyid kyis grub pa dang /
bden grub yin la / rtog pas btags tsam du grub pa'i chos ni de las zlog par 'dod
de gzhan dbang yongs grub gnyis dang po dang / kun btags phyi mar 'dod do //

des na kun btags kyi chos rnam sams tsam pa rang lugs kyi rang
mtshan gyis ma grub par 'dod kyang / chos gang yang rang ngos nas ma grub
na med dgos par 'dod pas / thal 'gyur ba ltar gyi rang mtshan gyi (G kyi) don ni
kun btags kyi steng du yang khas len pa yin te / legs bshad snying por / gzhi
'ga' zhis snga ma ltar mi 'dzin kyang phyi ma ltar 'dzin pa ni yod do // zhes so //

'on kyang bye mdo ltar cha med kyis rags pa mi rtsom par ma zad
gzugs sogs 'dus byas kyi chos rnam nang shes pa'i rdzas kyi steng nas skyes
shing / 'dus ma byas rnam kyang rang 'dzin tshad ma dang bdag nyid gcig
tu 'dod pas / gzung 'dzin rdzas gzhan gyis stong zhing phyi don du med par
bzhed do //

shes pa snga ma'i steng gi nus pas shes pa phyi ma yul gyi rnam ldan
du skyes (ZG skyed) pas yul dang yul can dus mnyam par rdzas gcig tu skye la

de 'dra'i nus pa la dmigs rkyen du 'dod do // dmigs rkyen gyis shes pa yul gyi
nam ldan du skyed kyang yul de'o snyam du rtog pas 'dzin pa ni brda sbyor
ba la ltos pas / chos rnam rang 'dzin rtog pa'i zhen gzhir rang mtshan gyis
ma grub par 'dod de / don smra la ltos na dbu ma'i lugs dang shin tu nye'o //

sems tsam pa rang gi 'dod pa ltar gyi phyi don med par grub pas ni
don smra gnyis kyis phyi don khegs kyang / don smra gnyis kyis phyi don
khegs tsam gyis nam rig tsam du grub pa min te / 'di 'dra'i khyad par grub
mtha' gong 'og gi skabs kun tu shes dgos so //

[47] rang rgyud pa'i lugs la bdag 'dzin phra rags dang lhan skyes kun btags kyis khyad par /

[Z40 (18b2)]; [G (21b2)]; [D34. 8]

dbu ma rang rgyud pas rang gi mtshan nyid kyis grub pa sogs gsum
tha snyad du grub par bzhed kyang / bden par grub pa sogs lnga ni (G lngani)
tha snyad du yang mi bzhed do //

rang rgyud pa man chad kyis phyi rol pa (G ba) 'dod pa ltar gyi rtag
gcig rang dbang can gyi bdag tu 'dzin pa gang zag gi bdag 'dzin rags pa dang /
gang zag rang rkyia (ZG skyia) thub pa'i rdzas yod du 'dzin pa / gang zag gi bdag
'dzin phra mor 'dod do //

de yang snga ma de mu stegs kyis sgro btags pa'i kun btags kho na
dang / phyi ma la gnas ma bu pas (GD bas) grub mtha'i dbang gis 'dzin pa lta
bu'i rigs pa ltar snang la brten nas / rang rkyia (ZG skyia) thub pa'i rdzas yod du
'thad snyam du 'dzin pa rnam kun btags dang / grub mthas (Z mtha') sgro btags
pa la ma ltos par ngang ngam shugs kyis 'byung ba ni lhan skyes te / 'di'i zhen
(G 'adi'izhen) yul bkag pa las lhag pa'i phra ba'i bdag med bye mdo gnyis kyis
'jog mi shes so //

des na gang zag dang phung (G pung) po rje khol ltar mtshan nyid mi
mthun pa'i rang rkyia (ZG skyia) bar snang la (Z ba) / snang ba ltar du grub par
'dzin pa ni gang zag rang rkyia (ZG skyia) thub pa'i rdzas yod du 'dzin pa'i 'dzin
tshul yin cing / 'dzin pa de'i zhen yul gang zag phung po la ma ltos pa'i rang

rkyā (ZG skyā) ba de bkag nas / gang zag phung po la brten nas btags pa tsam du bzhed pa la mang bkur ba ma gtogs rang rgyud pa man chad 'dra'o //

phung po la brten nas btags pa tsam gyi tsam sgras ni / phung po las don gzhan pa'i bdag bkag nas gang zag btags yod du bzhed par mthun la / phung po la brten nas btags lugs ni / yid kyi rnam par shes pa dang / kun gzhi'i rnam shes dang / rnam par shes pa'i rgyun ci rigs la brten nas gang zag 'dogs par byed cing / de yang phung po re re ba bdag tu bzhed pa dang / mang bkur ba kha cig gis phung po lnga char la brten nas gang zag 'dogs par byed do //

rang rgyud pa man (G pamn) chad kyis gang zag phung po la brten nas btags pa tsam du bzhed na'ang / phung po gang zag gi gdags gzhi yin na phung po gang zag yin dgos snyam pa dang / phung po gang zag yin par btags pa yin snyam du bsams (D bsam) par 'dug cing / gang zag gi btags don btsal nas kyang rnyed par 'dod (G 'dad) pa'i phyir btags yod kyi don kyang ma tshang bar gsal lo //

[48] **thal 'gyur bas bdag 'dod tshul /**

[Z41 (19a6)]; [G (22b1)]; [D35. 18]

thal 'gyur bas ni / phung po la brten nas btags pa'i bdag 'jig lta lhan skyes kyi dmigs par gsungs la (Z pa) / phung po bdag ma yin par ma zad btags don btsal nas rnyed pa'i chos gcig kyang mi bzhed cing / rang rgyud pa man chad kyis 'dod tshul de lta na rten 'byung khas blangs pa (D insert las) nyams par bzhed de shin tu gnad che yang 'dir zhib tu mi spro'o //

thal rang gnyis ka gang zag rigs pas dpyad mi bzod du grub par bzhed pa mthun mod kyang / ci tsam nas rigs pas dpyad bzod mi bzod kyi mtshams dang / don dam dpyod pa'i mtshams su song ma song sogs la mi mthun te / thal 'gyur bas ni / ngas las 'di bsags 'bras bu 'di myong zhes tha snyad btags pa tsam gyis ma tshim par / tha snyad btags pa'i don de phung po re re ba dang / tshogs pa dang / de las don gzhan gang du grub ces 'tshol ba nas don dam dpyod pa'i mtshams dang / 'tshol lugs des btsal nas dpyad gzhi de rnyed

rgyu (G rgyud) byung na rigs pas dpyad bzod du grub par bzhed / rang rgyud pas de 'dra ba'i rigs pa de tha snyad pa'i tshad ma yin gyi / (ZG omit /) don dam dpyod pa'i rigs pa min la / des btsal nas rnyed na rigs pas dpyad bzod du grub pa'ang ma yin par bzhed de / des btsal ba na yid kyi nam shes gang zag tu rnyed pa'i dbang du byas nas 'jog par snang ngo //

[49] rang rgyud pas don dam dpyod pa'i mtshams /

[Z42 (19b5)]; [G (23a1)]; [D36. 16]

des na rang rgyud pas / chos rnams blo gnod med la snang ba'i dbang gis phar bzhag pa ma yin par don rang gi sdod lugs kyi ngos nas grub ma grub dpyod pa nas don dam dpyod pa'i (G dbyod ba'i) mtshams dang / des btsal nas dpyad gzhi de rnyed rgyu byung na rigs pas dpyad bzod du grub par bzhed do //

dnegos smra ba rnams kyis de tsam (Z cam) yang don dam dpyod (G dpyad) pa'i mtshams dang / rigs pas dpyad bzod du grub par mi 'dod par / rigs pas btsal ba'i ngor 'dus ma byas dang / rdul phran cha med dang / skad cig cha med lta bu gang rung rnyed rgyu byung na rigs pas dpyad bzod du grub par (G bar) 'dod do //

des na grub mtha' gang dang gang gi lugs la yang chos rang rang gi gnas tshul la dpyad pa na kun rdzob dang don dam dpyod par song ma song gi mtshams zin pa 'di shin tu gal che'o //

[50] rang rgyud pas bden 'dzin phra mo dang lhan skyes kun btags 'dod tshul /

[Z43 (20a3)]; [G (23a4)]; [D37. 7]

rang rgyud pas chos rnams blo gnod med la snang ba'i dbang gis phar bzhag pa (G ba) tsam ma yin par yul rang gi ngos nas grub par 'dzin pa ni bden 'dzin phra mo yin la / de la sems tsam pa'i (G ba'i) grub mtha'i dbang gis 'dzin pa lta bu'i kun btags dang / grub mtha' la ma ltos pa'i lhan skyes gnyis yod kyang gnyis ka'i zhen yul la bden par grub pa / yang dag par grub pa / don

dam par grub pa / de kho na nyid du grub pa zhes bya zhing / de bzhir grub pa tha snyad du yang med par bzhed do //

rang gi mtshan nyid kyis grub pa dang / rang bzhin gyis grub pa dang / ngo bo nyid kyis grub pa ni tha snyad du grub par bzhed de / der ma grub na chad ltar 'gro bar 'dod do //

dnegos smra ba rnams de brgyad ka tshad grub tu 'dod mi 'dod kyi khyad par gong du bshad pa ltar ro //

[51] dbu ma'i lugs la dgag bya khegs tshul dang dgag bya de 'gog pa'i rigs pa /

[Z43 (20a6)]; [G (23b2)]; [D37. 17]

dbu ma pas (D bas) / chos rnams blo la snang ba'i dbang gis bzhag pa (G ba) ma yin pa'i sdod lugs med par mthong na dgag bya khegs par bzhed cing de 'dra'i dgag bya dang de 'dzin pa'i rtog pa bden 'dzin du 'dod pa thal rang gnyis ka'i thun mong ba'i lugs so //

dgag bya de 'gog pa'i rigs pa gnad che ba ni nram bdun gyi (D pa'i) dpyad pa dang / de bsdu na gcig du (GD tu) bral gyi dpyad pa gnyis su 'du zhing / de'i sgo nas dpyod tshul ni grags che ba ltar ro // dpyad pa'i stobs kyis mnyam bzhag (ZD gzhag) tu blo de'i (G da'i) dbang gis bzhag pa min pa'i yod pa khegs pa la thal rang gnyis ka (G ka'i) khyad par med kyang rjes thob tu ni rang rgyud pas rang mtshan gyis grub pa'i don chos sgyu ma lta bu zhib 'dod la / thal 'gyur bas ni mnyam bzhag (ZD gzhag) tu bden pa de lta bu bkag shul du lhag ma ci lus bltas pas (G bas) / ming tsam zhib lhag mar lus par bzhed de / 'di ni thun mong ma yin pa'i khyad par ro //

de ltar gang zag rang rkya (ZG skya) thub pa'i rdzas yod du 'dzin pa lhan skyes dang / de'i zhen yul sun (G omit sun) phyung ba (ZG phyungs pa) la brten nas 'khor ba las grol bar (G par) 'dod pa ni rang rgyud pa man chad mthun no //

rang rgyud pas chos dang gang zag gnyis ka blo la snang ba'i (G pa'i) dbang gis bzhag pa (G ba) min par don gyi sdod lugs kyi ngos nas grub par 'dzin pa chos kyi bdag 'dzin phra mo dang shes sgrib tu bzhed cing / shes

sgrib la phra rags dgu dang thog mtha' gnyis la gnyis gnyis phye ba'i bcu gcig sa dang (G ngang) po nas rgyun mtha'i bar gyi sgom lam bcu gcig gis spangs pa'i sgo nas nam mkhyen thob par bzhed do //

[52] thal 'gyur ba'i lugs la bdag 'dzin phra mo gnyis kyi khyad par dang gang zag 'jog tshul /

[Z44 (20b6)]; [G (24a3)]; [D38. 19]

thal 'gyur ba'i (G pa'i) khyad chos kyi dgag bya dang 'gog tshul ni / ming gi tha snyad kyi dbang gis bzhag pa tsam ma yin pa'i yod par 'dzin pa bden 'dzin phra mo dang / de'i zhen yul ming dang tha snyad kyi dbang gis bzhag pa'i yod pa de gang zag gi steng du yod par 'dzin pa gang zag gi bdag 'dzin dang / chos kyi steng du yod par 'dzin pa ni chos kyi bdag 'dzin yin la / de ltar 'dzin pa'i lhan skyes gnyis ka'ang 'khor ba'i rtsa bar gyur pa'i ma rig pa (G ba) dang nyon sgrib tu bzhed do //

de 'dra'i lhan skyes kyis 'dzin pa de nges par byed pa la tha snyad kyi dbang gis bzhag lugs sam / rtog btags 'jog lugs legs par nges pa la rag las par gsungs te gnad shin tu che'o //

lugs 'di'i gang zag 'jog tshul ni / phung po tshogs pa gang zag gi gdags gzhi dang / gang zag de'i btags chos dang / tha snyad du nga'o snyam pa'i blo gang zag 'jog byed kyi blo yin par nges pa'i sgo nas shes dgos shing / phung po tshogs pa la brten nas nga'o snyam pa'i blo de'i yul gyi nga tsam de la bdag gam gang zag ces bya la / de ni tha snyad du yod cing las 'bras kyi rten du gyur pa'i bdag ces bya'o //

[53] thal 'gyur bas de kho na nyid la dpyod pa'i mtshams /

[Z45 (21a5)]; [G (24b2)]; [D39. 15]

de'i lugs kyi de kho na nyid la dpyod mtshams dngos ni / rang rgyud kyi nga'am bdag 'di tha snyad btags pa'i dbang gis bzhag pa tsam gyis ma tshim par gang du grub ces 'tshol ba 'di nas yin la / de'i tshul yang nga 'dir sdod do // ngas mthong ngo // ngas tshor ro // ngas dran no // zhes sogs kyi

tha snyad 'di tsam gyis tshim dgos pa yin gyi / de tsam gyis ma tshim par
 dpyad na / rang gi mig sna sogs re re ba dang tshogs pa yang nga ma yin la /
 de las don gzhan du yang nga med pas de ni nga (D omit nga) rang bzhin gyis
 med pa'i med tshul lo zhes bzhed / rang rgyud pa man chad kyis de 'dra'i rang
 gzhin med pa'i don gtan med du bzung nas / de ltar 'dzin na chad ltar 'phul bar
 byed do //

thal 'gyur bas rang bzhin gyis med pas med go mi chod cing / tha
 snyad du yod pas yod go chod pas / chos thams cad rang (G ngang) bzhin
 gyis med kyang tha snyad du rnam gzhas (ZG bzhag) thams cad 'thad pa'i
 rten 'byung gis mtha' gnyis ka sel bar byed de / lugs 'di'i khyad chos thun
 mong ma yin pa'o // des na thal rang gnyis la dgag bya'i ngos 'dzin mi 'dra
 ba'i khyad par gnyis dang / de'i dbang gis de kho na nyid la dpyod mtshams
 kyang mi 'dra ba gnyis yod la / 'di'i mtshams legs par ma nges na thal rang
 gnyis kyi khyad par phra mo 'byed dka'o //

**[54] thal 'gyur ba'i lugs kyi shes sgrub 'dod tshul / de spong tshul /
 rdzas yod du 'dzin tshul /**

[Z46 (21b5)]; [G (25a2)]; [D40. 13]

thal 'gyur ba'i (G pa'i) lugs kyi shes sgrub 'dod tshul (G tshal) ni / rkyen
 dang phrad kyang nyon mongs dngos su bskyed (D skyed) par mi nus pa'i nyon
 mongs kyi (D pa'i) bag chags dang / de'i 'bras bu gnyis snang 'khrul ba'i (Z pa'i)
 bden snang tsam zhig la bya zhing / 'di la phra rags gsum mam bzahir byas pa
 dag pa sa (D pas) gsum gyis (G gyi sa) spong ba'i (Z spongs pa'i) sgo nas rnam pa
 thams cad mkhyen pa'i ye shes thob par (G bar) bzhed pa yin no //

lugs 'dir gang zag rang rkya (ZG skya) thub pa'i rdzas yod du 'dzin pa
 gang zag gi bdag 'dzin rags par 'dod pa tsam rang rgyud pa sogs dang 'dra
 mod / 'on kyang rang rgyud pa sogs kyis bdag 'dzin phra mor 'dod pa'i rdzas
 yod du 'dzin pa lhan skyes de yang 'di pas (GD bas) kun btags su bzhed de /
 legs bshad snying por / rdzas yod kyi bdag de ni phyi rol pas (G bas) phung po
 las don gzhan du btags pa'i nang gi byed pa'i skyes bu yod par gzung ba'i (G

pa'i) yul yin la zhes so //

des na 'di pa'i (D ba'i) lugs kyi rdzas yod du 'dzin pa lhan skyes ni /
phung po dang mtshan nyid mi mthun par (G bar) 'dzin pa (G ba) ma yin gyi /
tshong dpon tshong pa (GD ba) las zur du mi bkar ba ltar phung po las zur du
mi bkar bar phung po'i rang bzhin gyis phung po (G bo) la dbang bsgyur cing
phung po (G bo) tshur bdag la ltos kyang bdag phar la mi ltos pa tshong dpon
ltar grub par (G bar) 'dzin pa (G ba) zhig la 'jog par gsungs so //

[55] grub mtha' smra ba bzhi so sos bdag med phra rags kyi 'jog tshul /

[Z47 (22a5)]; [G (25b2)]; [D41. 12]

gnyis pa ni / (D omit gnyis pa ni /) bye brag smra bas gzhi grub na chos
bdag yin pas khyab par (G khyad bar) 'dod pas (G bas) / chos kyi bdag med phra
rags kyi rnam gzhas (ZG bzhag) khas mi len la (Z pa) / gang zag rtag gcig rang
dbang can du grub pas stong pa (G ba) gang zag gi bdag med rags pa dang /
gang zag rang rkya (ZG skya) thub pa'i rdzas yod kyi stong pa (G ba) gang zag
gi bdag med phra mor 'jog cing / bdag med phra mo dang gang zag gi bdag
med phra mo don (G modon) gcig tu 'dod do //

sde pa (G ba) bco brgyad kyi nang tshan mang bkur sde lngas rang rkya
(ZG skya) thub pa'i rdzas yod kyi bdag khas len pas / des stong pa (G ba) gang
zag gi bdag med phra mor mi 'dod do //

thal 'gyur ba ma gtogs rang rgyud pa / sems tsam pa / mdo sde pa /
bye brag smra ba (D pa instead of smra ba) bzhi gas (D kas) gang zag gi bdag med
phra rags 'jog tshul 'dra zhing / thal 'gyur ba dang / sems tsam pa / mdo sde pa
(G ba) gsum ga'i (D ka'i) lugs la gang zag gi bdag med phra mo stong (D insert pa)
nyid du 'dod do //

bye smra'i lugs la / mtshan nyid gsum gyi rnam gzhas (ZG bzhag) mi
'jog cing (G ci) / stong nyid med par 'dod do // zhes grags kyang mdzod gnas
brgyad pa las /

mtshan med zhi ba'i rnam pa dang //

stong nyid bdag med stong nyid du //

zhes sogs la dpags na stong (D insert nyid) bdag med gnyis la stong nyid kyi tha snyad yod pa 'dra'o //

mdo sde pas (GD bas) gang zag gi bdag med phra rags 'dod tshul dang / chos kyi bdag med khas mi len pa (G ba) snga ma dang 'dra la / mtshan nyid gsum las / gzhan dbang bden grub dang / kun btags dang yongs grub gnyis bden med du 'dod / yongs grub bden med yin na / gang zag gi bdag med phra mo yongs grub dang stong nyid gnyis ka yin pas / bar chad med lam gyi snang yul du mi rung / des na bar chad med lam gyi dngos gzhal 'jog mi thub par (G bar) 'gyur ro snyam na / 'di'i lugs la gang zag gi bdag med phra mo de theg pa gsum ga'i (D ka'i) bar chad med lam gyi shugs gzhal dang / gang zag gi bdag gis dben pa'i 'du byed de (G omit de) de'i dngos gzhal dang snang yul du 'dod pas (G bas) skyon med do //

bye smra ltar na dmigs pa mi rtag sogs bcu drug ci rigs sems rten bsam gtan bzhi pa'i (G ba'i) rab mtha' dang 'brel bar nyams su blangs pas (G bas) rang rgyal dang byang sems kyi lam phyi ma bzhi bgrod la / dmigs pa mi rtag sogs ci rigs zag med sa dgu ci rigs la brten nas nyams su blangs pas nyan thos kyi dgra bcom 'thob dgos so //

mdo sde pa'i (G ba'i) lugs la theg pa gsum ga'i (D ka'i) lam phyi ma bzhi ga (D ka) bdag gis dben pa'i 'du byed kho na dmigs rnam byas pa'i steng nas gsar du skye dgos sam snyam ste dpyad par bya'o //

sems tsam pa / rang rgyud pa / thal 'gyur ba (G pa) gsum gyis bar chad med lam gyi shugs gzhal med par 'dod cing / sems tsam pa dang / thal 'gyur bas de'i dngos kyi gzhal bya la stong nyid phra mos khyab par bzhed la / rang rgyud pas chos kyi bdag med phra rags dang / gang zag gi bdag med phra mo rnams 'jog go / (G bo //)

[56] sems tsam lugs la bdag med phra rags 'jog tshul /

[Z49 (23a5)]; [G (26b4)]; [D43. 12]

sems tsam pa'i lugs la gang zag gi bdag med phra rags 'jog tshul snga ma gnyis dang mthun la / cung zad mi 'dra ba ni / gang zag gi bdag med phra mo stong nyid du 'dod cing / chos kyi bdag med la / rang 'dzin rtog pa'i zhen gzhir rang gi mtshan nyid kyis grub pas stong pa dang / gzung 'dzin gnyis stong dang phyi rol don stong rnam chos kyi bdag med phra mo dang / rdul phran cha med bsags pa'i phyi rol don (G dod) gyis stong pa de chos kyi bdag med rags par 'jog cing / bdag med phra mo gnyis ka stong nyid du 'dod do //

[57] rnal 'byor spyod pa'i dbu ma pa'i lugs la bdag med phra rags 'jog tshul /

[Z50 (23b1)]; [G (27a1)]; [D43. 20]

rnal 'byor spyod pa'i dbu ma rang rgyud pas kyang (G kya nga) gang zag gi bdag med phra rags 'dod tshul bye smra dang 'dra la / chos kyi bdag med la / gzung 'dzin gnyis stong dang / phyi rol don stong dang / rang 'dzin rtog pa'i zhen gzhir rang gi mtshan nyid kyis grub pas stong pa (G ba) rnam ni chos kyi bdag med rags pa dang / bden grub kyis (ZG kyi) stong pa / bden med / don dam bden pa rnam chos kyi bdag med phra mor 'dod do //

chos thams cad tha snyad du rang gi mtshan nyid du grub par 'dod pas (G bas) / rtog pas btags tsam dang / ming brdas bzhag tsam khas mi len par / chos thams cad blo'am rtog pa la snang ba'i (G pa'i) dbang gis bzhag tsam du 'dod do //

[58] mdo sde spyod pa'i dbu ma rang rgyud pas bdag med phra rags 'jog tshul /

[Z50 (23b4)]; [G (27a4)]; [D44. 9]

mdo sde spyod pa'i dbu ma rang rgyud pas / gang zag gi bdag med phra rags gnyis dang / chos kyi bdag med phra mo 'jog tshul gong dang (D omit gong dang) 'dra la / rags pa 'jog tshul mi 'dra ste / rdul phra rab cha med bsags

pa'i phyi rol med pa chos kyi bdag med rags par 'dod pa sems tsam pa dang
mthun no //

gzhi grub na rang 'dzin rtog pa'i zhen gzhi (ZD gzhir) rang gi mtshan
nyid kyis (G gyis) grub pa dang / phyi rol don du grub pa gnyis ka yin pas
khyab par 'dod do //

[59] thal 'gyur ba'i lugs la bdag med phra rags 'jog tshul /

[Z50 (23b6)]; [G (27a6)]; [D44. 15]

thal 'gyur ba'i lugs la / gang zag rang rkya (ZG skya) thub pa'i rdzas yod
kyi grub pas stong pa gang zag gi bdag med rags pa dang / gang zag rang
bzhin gyis grub pas stong pa gang zag gi bdag med phra mo dang / rdul phran
cha med bsags pa'i rags pa dang / de 'dzin pa'i tshad ma rdzas gzhan gyis
stong pa chos kyi bdag med rags pa dang / gdags gzhi'i phung po bden pas
stong pa (G ba) chos kyi bdag med phra mor bzhed / bdag med phra mo gnyis
dgag bya'i sgo nas ma yin par stong gzhi'i sgo nas 'byed de / gzhi gang zag gi
steng du dgag bya bden grub bkag pa gang zag gi bdag med phra mo dang /
gzhi phung sogs kyi steng du de bkag pa chos kyi bdag med phra mor 'jog pas
so //

gang zag dang chos kyi bdag med phra mo gnyis la phra rags kyi
khyad par med cing gnas lugs mthar thug tu bzhed do (G ngo) //

[60] grub mtha' smra ba bzhis rtag chad kyi mtha' spong tshul /

[Z51 (24a3)]; [G (27b4)]; [D45. 6]

grub mtha' smra ba bzhis rang rang gi lugs kyi rtag chad kyi mtha'
spong tshul ni / bye brag smra ba rnams 'bras bu skye ba'i tshe rgyu 'gag pas
rtag pa'i mtha' spong la / rgyu'i mjug thogs su 'bras bu 'byung bas (G pas) chad
pa'i mtha' spong zhes smra / mdo sde pa (GD ba) dag 'dus (ZG 'du) byas rnams
rgyun ma chad par (G ba ra) 'jug pas chad mtha' spong zhing / skad cig gis 'jig
pas rtag mtha' las grol zhes 'dod / sems tsam pa rnams kun btags bden par
ma grub pas rtag mtha' spong la / gzhan dbang bden par grub pas chad mtha'

spong zhes zer / dbu ma pa (D ba) rnams chos thams cad tha snyad du yod pas chad lta dang don dam du med pas rtag mtha' las grol zhes bzhed par gsungs te / de lta na (G ltar instead of lta na) bye mdo gnyis kyis mi rtag pa rtogs pa'i ye shes dbu ma'i lam mthar thug tu bzhed dgos pa 'dra'o //

'on kyang rang rang gi lugs kyis bdag med phra rags re re'i steng nas kyang mtha' gnyis spong (Z spongs) ba (Z omit ba) nges par dgos pas 'di spyi'am (G spyi ba ma) mtshan gzhi tsam zhig la dgongs par mngon no //

thal 'gyur bas gzhal na rang rgyud pa man chad kyis rang sde mtha' dag rtag chad kyis mtha' gnyis kar lhung yang / rang rang gi lugs la rtag chad kyis mtha' gnyis dang bral ba'i dbus khas len par brlams (ZG rlom) nas dbu ma par (D bar) khas 'che bar byed do //

[61] grub mtha' la mchog dman dang snga ma phyi ma'i thabs su 'gro tshul /

[Z52 (24b3)]; [G (28a4)]; [D46. 3]

des na grub mtha' de dag la mchog dman gyi khyad par yod mod / 'on kyang theg pa chen po'i grub mtha' mchog yin ces theg pa dman pa'i grub mtha' la brnyas pa mi rung ste / de dag kyang sangs rgyas kyis rjes su 'brang ba yin pa'i phyir dang / der ma zad thams cad mkhyen pa dge 'dun rgya mtshos / grub mtha' 'og ma 'og ma'i lta ba gong ma gong ma'i lam stegs su gsungs pa bzhin / so so'i thun mong ma yin pa'i khas len re gnyis ma gtogs rtag gcig rang dbang can gyi bdag gis stong pa dang / rang rkya (ZG skya) thub pa'i rdzas yod kyis (G kyis) stong pa'i bdag med dang / gzung 'dzin gnyis stong gi de kho na nyid dang / chos thams cad rang mtshan gyis yod kyang don dam par ngo bo nyid med pa dang / chos thams cad tha snyad du yang rang mtshan gyis grub pa rdul tsam yang med pa la rgyu 'bras 'ching grol gyi bya byed thams cad bzhag chog pa'i bdag med kyis rim pa rnams phyi ma phyi ma las snga ma snga ma rtogs sla ba dang / snga ma rnams phyi ma la 'jug pa'i thabs su 'gyur ba mdo dang shing rta chen po rnams dang / rje bdag nyid chen po'i legs bshad rnams su gsungs pa ltar yin cing / gang zag 'ga' zhig la grub

mtha' 'og ma'i lta ba bstan nas rim gyis gong mar khrid na don du 'gyur ba (G pa, D omit ba) las (D la) / thog ma nyid nas lta ba mthon po bstan na phan pa las gnod pa che bar 'gyur ba'ang yod pas so //

phyi nang gi grub mtha' so so'i 'dod tshul rnams ni zhib par grub mtha'i bstan bcos rnams su rgyas par 'byung bas 'dir ma spro so //

smras pa /

gang zhig rtogs na rang dang gzhan gyi bstan pa'i khyad par shes //
mkhas pa'i mdun sar ngo mtshar gtam gyi rol mo sgrogs la dbang //
yid 'ong grags pa'i ba dan gzur gnas skye bos sgrenng byed pa //
e ma grub mtha'i de nyid 'byed la su zhig brtson mi byed //
de lta na yang sngon rabs kyi //
mkhas pa du mas gtam 'di nyid //
rgya cher gsal bar mdzad zin phyir //
grub zin bsgrubs la dgos pa ci //
gal te legs bshad gsar pa'i (GD ba'i) rin chen tshogs //
phyur bur spungs kyang tshong dpon phyug po yis (ZD yi) //
dbyig gi snying po dbul po'i (D bo'i) grong khyer gyi //
srang (G srad) bar (ZG par) bkram bzhin su la don du 'gyur //
rgya bod mkhas pa'i legs bshad glegs bam kun //
dngos po'i (Z por) 'du shes tsam gyis khang phug gi /
dpe (G dbe) khri'i rgyan du ngal bso'i dus 'di 'drar //
bdag lta snying las chung ngur gzhol la spro //
de phyir 'dir ni brjod bya'i lus //
kho lag rdzogs pa mtshon pa'i ched //
'phags yul grub mtha'i yan lag mchog /
nyug tsam ston pas chog shes bgyis //
zhes pa'ang bar skabs kyi tshigs su bcaad pa'o //

grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad
shel gyi me long las / 'phags yul du phyi rol pa (G ba) dang rang sde'i grub
mtha' byung tshul bshad zin to // (Z insert sarba dza ga tam //) //

(G insert: bar (par?) 'di mdo smad dgon lung chos grwa che'i //
 thu'u bkwan bla brang bkra shis 'od 'bar nas //
 rkyen sbyar bskrun pa'i rab dkar dge ba'i mthus //
 rgyal bstan snying po phyogs bcur rgyas gyur cig //)

(The End of the First Chapter)

(以下、シヨル寺版の巻頭に存する内容目次・カルチャ)

[Z1] | rje btsun bla ma dam pa thu'u bkwan blo bzang
chos kyi nyi ma dpal bzang po'i gsung 'bum kha pa'i dkar chag bzhugs so //

[Z2.1] | thub pa'i ljags yangs chu 'dzin grol ba las //
brgyad khri bzhi stong chos char bab pa'i rgyun //
gcig tu 'khyil ba'i rgyal bstan ma dros mtsho //
grub mtha' rnam bzhi'i chu bo'i rgyun du [Z2.2] 'bab //
thub bstan mkha' la mkhas grub rgyu skar tshogs //
bzhed srol 'od zer rtse dga' 'khyud pa'i dpal //
ma 'khrul ma 'dres za 'og ri mo ltar //
gsal byed sngon med me long a ho rmad //
dad pa'i chu mtshor dam [Z2.3] pa'i ngo mtshar gyi //
ri dwags rnam bkra rtogs brjod zla ba'i gzugs //
'phos tshe gangg'a'i bye snyed lus sprul nas //
bskal brgyar mchod dang ri mor sgrub pa snyam //

rje btsun bla ma dam pa thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi [Z2.4] ma'am
mtshan gzhan dharma badzra dpal bzang po'i gsung 'bum kha pa la / grub mtha'
thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long las /
rgya gar 'phags pa'i yul du phyi nang gi grub [Z2.5] tha' byung tshul la
grangs / 25

bod yul bstan pa snga phyi dang gsang sngag rmying ma'i grub mtha'
byung tshul / 18

bka' gdams pa'i grub mtha' byung tshul la / 15

bka' brgyud pa'i grub mtha' byung tshul la / 28

zhi byed [Z2.6] pa'i grub mtha' byung tshul la / 9

sa skya pa'i grub mtha' byung tshul la / 20

jo nang pa'i grub mtha' byung tshul la / 13

dge ldan pa'i grub mtha' byung tshul la / 73

bon gyi grub mtha' byung tshul la / 7

mah'a tsi na'i yul [Z3.1] du rig byed dang bon gyi grub mtha' byung tshul la / 15

rgya nag gi yul du nang pa sangs rgyas pa'i grub mtha' byung tshul la / 16

hor li shambha la rnams su grub mtha' byung tshul grub [Z3.2] don bshad pas mjug bsdu pa bcas la / 19

bla chen byang chub sems dpa' dgongs pa rab gsal gyi rnam par thar pa mdo tsam gtam du brjod pa rin po che'i phreng mdzes la / 7

grub pa'i dbang phyug bkra shis rgya mtsho [Z3.3] slob brgyud dang bcas pa'i rnam thar mu tig phreng mdzes la / 8

grub pa'i dbang phyug ngag dbang chos kyi rgya mtsho'i rnam thar dpag bsam ljon bzang la / 37

byang chub sems dpa' chen po gzhon nu nor bzang [Z3.4] gi rtogs pa brjod pa bskal pa bzang po'i gtam rgyal sras kun tu dga' ba'i zlos gar la / 9

bshad sgrub bstan pa'i 'byung gnas chos sde chen po dgon lung byams pa gling gi dkar chag dpyod ldan yid dbang 'gugs [Z3.5] pa'i pho nya la / 71

dben pa'i gnas mchog bde chen chos gling du bzhugs pa'i bsam gtan pa rnams la khirms su bca' ba'i rim pa bstan pa'i pad tshal rgyas pa'i nyin byed dang / bca' yig 'ga' zhig bcas [Z3.6] la / 21

bcom ldan 'das mi 'khrugs pa'i sku brnyan bzhengs pa'i dkar chag dad pa'i padmo bzhad pa'i nyi 'od / sku 'bum byams pa gling gi gzim khang gong du bzhugs pa'i rten gyi dkar chag / lo'u hu'i mchod rten [Z4.1] dkar po'i bskor tshad dang phan yon / sku brnyan mthong ba don ldan gyi dkar chag bskor tshad bcas phyogs bkod la / 17

thar pa chen po'i mdo 'don pa'i cho ga'i 'khrul sel blun po'i kha la
rgyas 'debs la / 3

rten dang mchos rdzas sna tshogs kyi kha [Z4.2] byang gi skor / dge ba
rdzogs byang du bsngo ba'i tshigs su bca'd pa / bka' bsgo 'ga' zhid / bsngo ba /
smon lam thor bu bcas phyogs bkod la / 18

dkar chag la / 2

bcas khyon shog grangs 451 bzhugs // //

(以下、ゴンロン寺版の巻頭に存する内容目次・カルチャ)

༄༅། | nga ba'i dkar chags bzhugs so //

[G1.1] ༄༅།

| thub pa'i ljags yangs chu 'dzin grol ba las //

brgyad khri bzhi stong chos char babs pa'i rgyun //

gcig tu 'khyil ba'i rgyal bstan ma dros mtsho //

grub mtha' mnam [G1.2] bzhi'i chu bo'i rgyun du babs //

rgyal ba'i gsung gi gsang ba gdong lnga'i bcud //

skal dman rdza snod dum bur ci la chags //

legs byas smin pa'i sa le sbram gyi snod //

tshar du dngar bas byang grol [G1.3] bcud len 'dzin //

thub bstan mkha' la mkhas grub rgyu skar tshogs //

bzhed srol 'od zer rtse dgas 'khyud pa'i dpal //

ma 'khrul ma 'dres za 'og ri mo ltar //

gsal byed sngon med me [G1.4] long a ho rmad //

gang gi mkhyen dpyod snying stobs rus sbal gyis //

rgyal bstan sa chen 'degs pa'i khur chen po //

rab bzod grags pa'i springs yig bklags pa na //

khyab 'jug [G1.5] 'jug pa bcu yi rdzu pag 'dzin //

nga ba la /

grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad
shel gyi me long las /

rgya gar 'phags pa'i yul du phyi nang gi grub tha' [G1.6] byung tshul la / 29
bod yul bstan pa snga phyi dang gsang sngags rnying ma'i grub mtha'
byung tshul 21

bka' gdams pa'i grub mtha' byung tshul la 17

bka' brgyud pa'i grub mtha' byung tshul [G2.1] la 34

zhi byed pa'i grub mtha' byung tshul la 11

sa skya ba'i grub mtha' byung tshul la 24

jo nang ba'i grub mtha' byung tshul la 15

dge ldan pa'i grub mtha' [G2.2] byung tshul la 87

bon gyi grub mtha' byung tshul la 8

mah'a tsi na'i yul du rig byed dang bon gyi grub mtha' byung tshul la 18

rgya nag gi yul du nang ba sangs rgyas pa'i chos lugs byung tshul la 17

[G2.3] hor li shambha la rnam su grub mtha' byung tshul grub don

bshad pas mjug bsdus pa bcas pa la 22

khyon shog grangs sum brgya dang drug bzhugs /

チベット語彙索引

トゥカン『一切宗義』序章：「インドの思想と仏教」

Word-Index to Thu'u bkwan Grub mtha':

Chapter 1: The Philosophical Systems and Buddhism in India

以下の語彙索引は、本研究にて使用したテンパギエルツェン師作成の章節科段番号により所在を略語で記した。各版における該当個所の葉数・行数との照合については、チベット語原典3版ページ対照表（本書 pp. 117-120）を利用いただきたい。

- | | |
|--|--|
| ka ma la sh'i la [35] | skad cig cha med [44], [49] |
| ka ma la sh'i la [35] | skal ldan rnam la 'chad pa [32] |
| ku ma ra ta [31] | skye rgu thams cad la khyab pa [20] |
| kun mkhyen [23] | skye 'jig med pa [19] |
| kun mkhyen ma yin pa [25] | skye ba snga phyi [15] |
| kun btags [47], [50], [54], [55] | skye ba snga phyi gang las 'bras gtan nas mi |
| kun btags kyi chos [46] | 'dod pa'i chad smra [15] |
| kun btags bden par ma grub pa [60] | skye ba snga phyi 'dod kyang las 'bras mi |
| kun btags phyi mar 'dod [46] | 'dod pa'i chad smra [15] |
| kun rdzob kyi snang ba [17] | skye ba snga phyi med par 'dod [15] |
| kun rdzob tu bden pa [44] | skye ba snga phyi med par smras [10] |
| kun rdzob tu yod pa [44] | skye ba snga ma [15] |
| kun rdzob dang don dam dpyod pa [49] | skye ba phyi ma [27] |
| kun rdzob bden pa [45] | skye ba'i rgyun chad [24] |
| kun gzhi'i rnam shes [47] | skyes bu [16], [20] |
| kun gzhi'i rnam shes gang zag tu 'jog [43] | kha che 'dus bzang [37] |
| klu sgrub [1], [32], [33] | kha che bye brag tu smra ba [43] |
| klu sgrub kyi rjes 'brang rnam [33] | khams 'dzag pa'i bde ba [23] |
| klu sgrub kyi slob ma [34] | khams 'dzag pa'i sbyin sreg [19] |
| dka' thub kyi spyod pa [25] | khyad chos drug ldan gyi shes bya [16] |
| rkang mig pa [11], [23] | khyad par 'phags bstod [27] |
| rkyen dang phrad [54] | khyab 'jug [23] |
| rkyen sbyar bskrun pa'i rab dkar dge ba'i | khyab 'jug pa [14], [21], [23] |
| mthus [61] | khyab pa'i rang bzhin [24] |

khrus [24]
 mkhas pa [41]
 'khor ba mtha' can [21]
 'khor ba zad mtha' can [21]
 'khor ba las grol ba [25], [51]
 'khor ba' rtsa bar gyur pa'i ma rig pa [52]
 'khor lo bar pa dang tha ma [29]
 'khrig bde'i ye shes skyes pa [23]
 gang zag gi btags don btsal [47]
 gang zag gi gdags gzhi [52]
 gang zag gi bdag gis dben pa'i 'du byed
 [55]
 gang zag gi bdag med phra mo [55], [59]
 gang zag gi bdag med phra rags 'dod tshul
 [55], [56], [57]
 gang zag gi bdag med phra rags gnyis [58]
 gang zag gi bdag med rags pa [55], [59]
 gang zag gi bdag 'dzin [52]
 gang zag gi bdag 'dzin phra mo [47]
 gang zag gi bdag 'dzin rags pa [47]
 gang zag [43]
 gang zag 'jog [43]
 gang zag 'jog byed kyi blo [52]
 gang zag 'jog tshul [52]
 gang zag tu rnyed pa [43]
 gang zag btags yod du bzhed pa [47]
 gang zag rtag gcig rang dbang can du grub
 pas stong pa [55]
 gang zag dang chos kyi bdag med phra mo
 [59]
 gang zag dang phung po [47]
 gang zag 'dogs par byed [47]
 gang zag phung po la brten nas btags pa
 [47]
 gang zag phung po la brten nas btags pa
 tsam [47]

gang zag phung po la ma ltos pa [47]
 gang zag rang rkya [47]
 gang zag rang rkya thub pa [47]
 gang zag rang rkya thub pa'i rdzas yod
 [51]
 gang zag rang rkya thub pa'i rdzas yod kyi
 stong pa [55]
 gang zag rang rkya thub pa'i rdzas yod kyi
 grub pas stong pa [59]
 gang zag rang bzhin gyis grub pas stong pa
 [59]
 gang zag rigs pas dpyad mi bzod du grub pa
 [48]
 gong ma'i lam stegs [61]
 gyes pa bco brgyad [30]
 grangs can pa [8], [14], [16], [26]
 grangs can lha med pa [16]
 grangs can lhar bcas pa [16]
 grub mtha' gong 'og gi skabs [46]
 grub mtha' ngan pa'i gzhung lugs [27]
 grub mtha' tha dad par 'jog pa [42]
 grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod
 tshul ston pa [1], [61]
 grub mtha' smra ba bzhis [60]
 grub mtha' 'og ma [61]
 grub mtha' 'og ma'i lta ba [61]
 grub mtha'i bstan bcos gzhan [42]
 grub mtha'i de nyid [61]
 grub mtha'i dbang gis 'dzin pa [47]
 grub mthas sgro btags pa la ma ltos pa [47]
 grub pa'i dbang phyug bye ba [41]
 grub par 'dzin pa [54]
 grol bar 'gyur [20]
 grol byed kyi lam [21]
 glo bur ba [15]
 dgag bya [51], [52]

dgag bya'i ngos 'dzin mi 'dra ba'i khyad par
 gnyis [53]
 dgag bya'i 'dod tshul [42]
 dga' ldan [38]
 dge 'dun rgya mtsho [61]
 dge ldan [1]
 dge ldan srol 'byed [1]
 dge sdig 'khor 'das [20]
 dge slong bde byed [33]
 dge slong dpal ldan [33]
 dge slong dpal ldan che [33]
 dgra bcom pa med par smra ba [15]
 dgra bcom pa'i 'du shes [15]
 mgon po klu sgrub [33]
 'gog pa'i rigs pa [26]
 'gog byed kyi rigs pa [27]
 'gog tshul [52]
 rgya bod mkhas pa'i legs bshad glegs bam
 [61]
 rgyang 'phen [14], [27]
 rgyang 'phen pa [10], [15]
 rgyal bstan snying po [61]
 rgyal po kri kri' [30]
 rgyal po bde spyod bzang po [33]
 rgyal dpog [22]
 rgyal dpog pa [22]
 rgyal dpog pa'i nang tshan [22]
 rgyal ba nyid dang mtshungs pa [33]
 rgyal ba gnyis pa [1]
 rgyal ba dam pa [25]
 rgyal ba pa [25]
 rgyal ba'i dbang po [1]
 rgyas pa [9]
 rgyu 'bral la skur ba 'debs pa [15]
 rgyu 'bras 'ching grol gyi bya byed [61]
 rgyu med pa [15]

rgyun gyi thung mtha' [44]
 rgyun gyi rtsom gzhi [44]
 rgyun mtha'i bar gyi sgom lam bcu gcig
 [51]
 sgo nga phyed tshal ba [41]
 sgyu ma lta bu zhig [51]
 sgra gcan 'dzin bzang po [33]
 sgro btags pa'i kun btags kho na [47]
 sgron gsal [33]
 nga rgyal [16], [17]
 nga rang bzhin gyis med pa'i med tshul
 [53]
 ngag mi smra ba [25]
 ngang ngam shugs kyis 'byung ba [47]
 ngan song las grol ba [22]
 nges shes lhag par skyes pa [17]
 ngo bo nyid kyis grub pa [43], [50]
 ngo bo nyid med par smra ba [33], [36]
 dngos smra ba rnams [43], [49], [50]
 dngos gzhal [55]
 mngon rjes lung gi tshad ma gsum [23]
 mngon pa [39]
 mngon shes [6]
 mngon shes kyis gtso bo [17]
 mngon shes lnga dang ldan pa [8]
 mngon shes thob pa [7]
 mngon sum tshad ma gcig pu [15]
 rnga bo che'i mdo [33]
 gcig tu bral gyi dpyad pa [51]
 gcig pu'i rang bzhin don dam par gnas pa
 [19]
 gcer bu pa [9], [14], [25]
 bcing grol gyi 'dod tshul [17]
 bco brgyad [30]
 bcom ldan 'das nyid kyi bka' [32]
 cha med kyis rags pa [46]

cha shas med pa zhig [22]
 chad lta dang don dam du med pa [60]
 chad ltar 'gro ba [50]
 chad ltar 'phul ba [53]
 chad mtha' spong [60]
 chad pa'i mtha' spong [60]
 chad par thal ba'i skyon du 'gyur [43]
 chad par smra ba [14], [27]
 chen po [17]
 chen por gyur pa [20]
 chos kyi 'khor lo rim pa gsum bskor [29]
 chos kyi bdag med [56], [57]
 chos kyi bdag med khas mi len pa [55]
 chos kyi bdag med phra mo [56], [57], [59]
 chos kyi bdag med phra mo 'jog tshul [58]
 chos kyi bdag med phra rags kyi rnam gzhag
 [55]
 chos kyi bdag med phra rags [55]
 chos kyi bdag med rags pa [56], [57], [58],
 [59]
 chos kyi bdag 'dzin [52]
 chos kyi bdag 'dzin phra mo [51]
 chos skyob [30]
 chos gang yang [46]
 chos grags [1]
 chos rgyal [1]
 chos rgyun gyi ting nge 'dzin [38]
 chos mchog la gnas pa [38]
 chos thams cad tha snyad du yod pa [60]
 chos thams cad tha snyad du yang rang
 mtshan gyis grub pa [61]
 chos thams cad rang mtshan gyis yod [61]
 chos thams cad rang bzhin gyis med [53]
 chos thams cad sems kyi bdag nyid tsam
 [40]
 chos dang gang zag gnyis ka [51]

chos bdag yin pas khyab pa [55]
 chos rnams blo gnod med la snang ba [50]
 chos dbyings bstod pa [33]
 chos rang rang gi gnas tshul [49]
 mchog dman gyi khyad pa [61]
 mchod sbyin [22], [24]
 'chi ba med pa [20]
 'chi ba med pa'i ngo bo [21]
 'ching grol rnam gzhag smra ba [27]
 jo nang pa'i 'dod tshul [19]
 jo bo chen po d'i paṃ ka ra [1]
 'jam pa'i dbyangs [1]
 'jam dpal rtsa rgyud [33], [37]
 'jig rten 'dus pa [25]
 'jig rten dbang phyug [1]
 'jig lta lhan skyes kyi dmigs pa [48]
 'jug pa [26]
 'jug pa bcu [21]
 rje khol ltar [47]
 rje bdag nyid chen po'i legs bshad rnams
 [61]
 rje bla ma yab sras kyi legs bshad rnams
 [27]
 rje btsun 'od dang bcas pa [38]
 rjes thob [51]
 rjes dpag [15]
 rjes dpag la gsum [23]
 ljon shing [25]
 nyan thos kyi dgra bcom thob [55]
 nyan thos sde gnyis [29], [30]
 nyan thos sde pa [32], [33]
 nyi ma'i mdog can [20]
 nyes dmigs med par ston pa [10]
 nyon sgrib [52]
 nyon mongs kyi bag chags [54]
 nyon mongs dngos su bskyed pa [54]

gnyid log pa las gzhan yin pa [20]
 mnyam nyid du gyur [20]
 mnyam bzhag [51]
 mnyam bzhag tu bden pa [51]
 snyigs ma lnga bdo ba'i tshe [29]
 snying stobs can gyi nga rgyal [17]
 snyoms 'jug pa [15]
 btags chos [52]
 btags don btsal nas rnyed pa'i chos [48]
 btags yod [44]
 btags yod kyi don [47]
 rtag gcig rang dbang can gyi bdag tu 'dzin pa
 [47]
 rtag gcig rang dbang can gyi bdag gis stong
 pa [61]
 rtag chad kyi mtha' gnyis kar lhung [60]
 rtag chad kyi mtha' gnyis dang bral ba'i dbus
 [60]
 rtag chad kyi mtha' spong tshul [60]
 rtag mtha' spong [60]
 rtag mtha' las grol [60]
 rtag pa [27]
 rtag pa'i ngo bo [22]
 rtag pa'i mtha' spong [60]
 rtag par smra ba [14]
 rtags yang dag gsum [23]
 rta'i mchod sbyin [18]
 rten 'byung khas blangs pa [48]
 rten 'byung khas len pa [43]
 rtog ge ba [15]
 rtog ge ba rnams [2]
 rtog ge 'bar ba [13], [26]
 rtog ge la byang ba [7]
 rtog ge'i tshig don bcu drug [16]
 rtog btags 'jog lugs legs par nges pa [52]
 rtog pas btags pa [46]

rtog pas btags tsam dang / ming brdas bzhag
 tsam khas mi len pa [57]
 rtog pas btags tsam du grub pa'i chos [46]
 rtog pas 'dzin pa [46]
 lta ngan gyi grub mtha'i grangs [13]
 lta ngan nyi shu [13]
 lta ngan drug cu re gnyis [13]
 lta ba mthon po [61]
 lta ba'i sgo nas [42]
 lta ba'i dbye ba brgya rtsa bcu [13]
 lta ba'i dbye ba sum brgya [13]
 lta snang gsum [23]
 stong nyid kyi tha snyad [55]
 stong nyid bdag med stong nyid [55]
 stong nyid phra mos khyab pa [55]
 stong nyid med pa [55]
 stong bdag med gnyis [55]
 stong pa'i bdag med [61]
 stong gzhi'i sgo nas [59]
 stong sangs dang bde ba [19]
 ston pa sangs rgyas [25]
 ston par khas 'che [27]
 bstan 'dzin [1]
 tha snyad [47], [52]
 tha snyad kyi dbang gis bzhag lugs [52]
 tha snyad btags pa tsam [48]
 tha snyad btags pa tsam gyis ma tshim pa
 [43]
 tha snyad btags pa'i don [48]
 tha snyad du grub pa [43], [47], [50]
 tha snyad du rnam gzhang thams cad 'thad
 pa'i rten 'byung [53]
 tha snyad du yang med pa [50]
 tha snyad du yod [52]
 tha snyad du yod pa [53]
 tha snyad du rang gi mtshan nyid du grub pa

[57]
tha snyad du rang ngos nas grub pa [43]
tha snyad pa'i tshad ma [48]
thams cad mkhyen pa [22], [61]
thams cad mkhyen pa med pa [15]
thams cad mkhyen pa'i lta mgur [45]
thar pa [19], [25]
thar pa thob pa [17], [21], [24]
thar pa thob byed kyi lam [19], [24]
thar pa dang mtho ris thob byed [7]
thar pa 'dod rnam [27]
thar pa 'dod pa rnam [27]
thar pa ma yin pa [27]
thar pa la skur ba [15]
thar pa'i grong khyer [27]
thal 'gyur [35]
thal 'gyur ba [36], [43], [46], [48], [51],
[52], [53], [55], [60]
thal 'gyur ba ma gtogs [55]
thal 'gyur ba'i thun mong ma yin pa'i rnam
gzhag [34]
thal 'gyur ba'i lugs [34], [54], [59]
thal 'gyur ba'i shing rta'i srol 'byed [35]
thal 'gyur mang po [35]
thal 'gyur tsam gyis phyir [36]
thal rang gi don [36]
thal rang gi phyogs gnyis ka'i spyi la bzhugs
pa [34]
thal rang gnyis [53]
thal rang gnyis ka [48], [51]
thal rang so sor 'grel pa rnam [35]
thabs su 'gyur ba [61]
thub pa'i rdzas yod du 'dzin pa [47]
thub dbang grub mtha'i bdag po [1]
thu'u bkwan bla brang bkra shis 'od 'bar nas
[61]

theg chen [29], [39]
theg chen gyi grub mtha' [29], [32]
theg chen gyi sde snod [32]
theg pa chen po spyi'i shing rta [33]
theg pa chen po'i grub mtha' [61]
theg pa chen po'i bstan pa [33], [41]
theg pa dman pa'i grub mtha' la brnyas pa
[61]
theg pa 'og ma'i grub mtha' smra ba [29]
theg pa gsum ga [55]
theg pa gsum ga'i lam phyi ma bzhi ga [55]
theg dman [29]
thog mtha' gnyis [51]
thog mtha' med pa [20]
thogs med [1], [32], [37], [39]
mtha' gnyis ka sel bar byed [53]
mtha' gnyis dang bral ba'i dbus khas len pa
[36]
mtha' gnyis spong ba [60]
mtho ris dang tshangs pa [18]
'thad snyam du 'dzin pa [47]
dag pa sa gsum gyis spong ba [54]
dam pa min pa'i lta ba nyer brgyad [13]
dus mnyam par rdzas geig [46]
de kho na nyid [61]
de kho na nyid du grub pa [43], [50]
de kho na nyid la dpyod mtshams [53]
de tsam lnga [16]
don gyi sdod lugs kyi ngos nas grub pa
[51]
don dam bden pa [44], [45], [57]
don dam par grub pa [43], [50]
don dam par ngo bo nyid med pa [61]
don dam par don byed mi nus pa'i chos
[45]
don dam par 'bras bu skyed nus pa [45]

don dam par yod pa [44]
 don dam dpyod pa'i mtshams [48], [49]
 don dam dpyod pa'i mtshams su song [48]
 don dam dpyod pa'i rigs pa [48]
 don byed nus pa'i rdzas su grub pa [44]
 don smra gnyis [46]
 don smra la ltos na [46]
 drang nges [32]
 drang nges legs par phye [1]
 drang srong [6]
 drang srong rkang mig [11], [23]
 drang srong rkang mig gis byas pa'i rig pa
 [23]
 drang srong rgyas pa [9]
 drang srong 'jig rten mig [10]
 drang srong mdzes pa [11]
 drang srong 'ug pa [12]
 drang srong ser skya [8]
 dri bcas pa [41]
 dri ma [22]
 dri med rnam rdzun pa [41]
 dri med pa dang mthun pa [35]
 gdags gzhi'i phung po bden pas stong pa [59]
 bdag gi de kho na nyid [24]
 bdag gi bla ma [45]
 bdag gis dben pa'i 'du byed [55]
 bdag nyid [46]
 bdag tu 'jog [43]
 bdag phar la mi ltos pa [54]
 bdag med phra mo [55], [59]
 bdag med phra mo gnyis ka stong nyid
 [56]
 bdag med phra rags [60]
 bdag med phra rags 'jog tshul [42]
 bdag 'dzin phra mo [54]
 bdag shes rig gi skyes bu [16]

bde sdug 'dod sdang [24]
 bde ba can [33]
 bde bar gshegs pa'i bstan pa [27]
 bden grub [46]
 bden grub kyi ngo bo nyid med par smra ba
 [36]
 bden grub kyis stong pa [57]
 bden dngos 'gog par byed pa [36]
 bden gnyis kyi dngos po [44]
 bden snang tsam zhig [54]
 bden pa'i ngag [22]
 bden par grub pa [43], [47], [50]
 bden par 'jug pa [19]
 bden med [55], [57]
 bden 'dzin du 'dod pa [51]
 bden 'dzin phra mo [50], [52]
 bden bzhi'i chos 'khor [29]
 mdo dang rgyud sde'i dgongs 'grel [33]
 mdo dang shing rta chen po rnams [61]
 mdo sde nges don drang ba'i don [37]
 mdo sde pa [31], [35], [43], [45], [55], [60]
 mdo sde pa'i lugs [55]
 mdo sde spyod pa'i dbu ma rang rgyud pa
 [35], [58]
 mdo sde'i rjes su 'brangs nas grub mtha' 'jog
 pa [31]
 mdo smad dgon lung chos grwa che' [61]
 'dul ba [39]
 'dus ma byas [46]
 'dus bzang [30]
 'dod chung chog shes [6]
 rdul cha med [44]
 rdul phra rab cha med [44]
 rdul phra rab cha med bsags pa [58]
 rdul phran cha med [49]
 rdul phran cha med bsags pa'i phyi rol don

gyis stong pa [56]
 rdul phran cha med bsags pa'i rags pa [59]
 rdo rje gdan [33]
 sdug bsngal rgyu med [27]
 sdug bsngal bye bar zhi ba'i thar pa [22]
 sde pa bco brgyad [30]
 sde pa bco brgyad kyi nang tshan [55]
 sdod lugs med pa [51]
 sdom rnam gnyis [38], [39]
 brda sprod pa [19]
 brda sprod pa ba [18]
 brda sbyor ba la ltos pa [46]
 nags su gnas pa [24]
 nang gi byed pa'i skyes bu [54]
 nang shes pa'i rdzas [46]
 nā lendra'i mkhan po [33]
 gnas ma bu pa [47]
 gnas lugs mthar thug [59]
 rnam mkhyen thob pa [51]
 rnam 'gyur rnam [17]
 rnam 'grel nges [26]
 rnam dag grub mtha' [1]
 rnam bdun gyi dpyad pa [51]
 rnam bden pa dang mthun pa [35]
 rnam pa thams cad mkhyen pa'i ye shes
 [54]
 rnam par 'gyur ba can gyi nga rgyal [17]
 rnam par shes pa'i rgyun [47]
 rnam par shes pa'i rgyun gang zag tu 'jog
 [43]
 rnam rdzun dri bcas pa dang mthun pa [35]
 rnam rdzun pa [41]
 rnam rdzun pa dang mthun pa'i dbu ma pa
 [35]
 rnam rig pa [40]
 rnam rig tsam du grub pa [46]

rnal 'byor bsgoms [24]
 rnal 'byor pa'i blo ngo [17]
 rnal 'byor spyod pa [35]
 rnal 'byor spyod pa bzhi brgya pa [34]
 rnal 'byor spyod pa'i dbu ma rang rgyud pa
 [57]
 sna tshogs gnyis med pa [41]
 snang ba ltar du grub par 'dzin pa [47]
 snang ba snang ba ltar du grub pa [41]
 snang yul [55]
 snod bcud sna tshogs pa [19]
 snod bud thams cad [23]
 pra kā ra ṅa sde brgyad [39]
 dpa' bo [1], [33]
 dpal ldan 'bras spungs kyi mchod rten [33]
 dpe nyer 'jal gyi tshad ma [23]
 dpe ston sde pa [31]
 dpe'i sgo nas ston pa [31]
 dpyad gzhi [48], [49]
 dpyod pa ba [14], [22]
 spyi mtshan [15], [45]
 spyi'am mtshan gzhi tsam zhig [60]
 phar phyin [39]
 phar bzhag pa [49]
 phar bzhag pa tsam [50]
 phung po gang zag gi gdags gzhi [47]
 phung po lnga cha [47]
 phung po nyid bdag tu 'jog par byed [43]
 phung po dang mtshan nyid mi mthun par
 'dzin pa [54]
 phung po tshur bdag la ltos [54]
 phung po tshogs pa [43], [52]
 phung po re re ba [43]
 phung po la brten nas nga [43]
 phung po la brten nas btags pa tsam [47]
 phung po la brten nas btags pa'i bdag [48]

phung po la brten nas btags lugs [47]
 phung po las don gzhan du grub pa'i bdag
 [43]
 phung po las don gzhan du btags pa [54]
 phung po las zur du mi bkar ba [54]
 phung po'i rang bzhin gyis phung po la
 dbang bsgyur [54]
 phyi don khegs [46]
 phyi don khegs tsam [46]
 phyi don du med par [46]
 phyi don med par grub pa [46]
 phyi rol grub mtha'i rnam gzhang [27]
 phyi rol don stong [56], [57]
 phyi rol don du grub pa [58]
 phyi rol pa [15], [47], [54]
 phyi rol pa dang rang sde'i grub mtha' [61]
 phyi rol pa'i grub mtha' rnam [14]
 phyi rol pa'i 'dod pa [43]
 phyugs kyi mchod sbyin gyi sbyin sreg
 [19]
 phyogs glang [1]
 phyogs dang dus kyi cha shas [19]
 phyogs 'dzin pa'i dbu ma pa [35]
 phra rdul cha med [45]
 phra rags dgu [51]
 phra rags gsum mam bzhir byas pa [54]
 'phags pa grol sde [35], [39]
 'phags pa thogs med [41]
 'phags pa lha [34]
 'phags pa'i dgongs pa [35]
 'phags yul [61]
 'phags yul grub mtha'i yan lag mchog [61]
 'phags lha [1]
 'phyi rol med pa [58]
 bag chags kyi sa bon [27]
 bag chags 'jog pa [27]

bar skabs kyi tshigs su bcaid pa [61]
 bar chad med lam gyi dngos gzhal 'jog
 [55]
 bar chad med lam gyi snang yul [55]
 bar chad med lam gyi shugs gzhal [55]
 bud med kyi bha ga'i thab [19]
 bud shing zad pa'i me [24]
 bum pa can gyi rlung sbyor [23]
 bem pa ma yin pa [22]
 bem po [16], [45]
 bod du dar ba'i grub mtha' [27]
 byang chub sems 'grel [33]
 byang sems kyi lam phyi ma bzhi [55]
 byams chos [39]
 byams chos lnga [39]
 byams chos sde lnga [38]
 byams pa [38]
 byams pa dang 'brel ba'i chos nyi shu [39]
 byas shugs zhe brgyad [22]
 bye mdo ltar [46]
 bye mdo gnyis [60]
 bye smra [45], [55], [57]
 bye smra nas rang rgyud pa'i bar [43]
 bye smra'i nang tshan [43]
 bye smra'i lugs [55]
 bye smras [44]
 bye brag tu bshad pa chen po [30]
 bye brag pa [12], [14], [23], [26]
 bye brag pa rnam [2]
 bye brag smra ba [30], [39], [55]
 bye brag smra ba rnam [60]
 bye brag smra ba'i slob dpon [30]
 bye brag bshad mtsho [30]
 bla ma'i khyim du gnas pa [24]
 bla ma'i man ngag [24]
 blo gros brtan pa [39]

blo sngon du btang nas byas [23]
 blo brtan [1]
 blo gnod med la snang ba [49]
 blo la snang ba'i dbang gis bzhag pa [51]
 blo'am rtog pa la snang ba [57]
 blo'i ngo bo sems pa can [22]
 blo'i dang po lnga [17]
 dbang bskur ba [24]
 dbang po bcu gcig [16]
 dbang phyug gi lingga'i rtse [23]
 dbang phyug chen po [20]
 dbang phyug pa [14], [23]
 dbu ma rgyan [35]
 dbu ma 'jug pa [35]
 dbu ma snying po rtse 'brel [26]
 dbu ma bden gnyis [35]
 dbu ma snang ba [35]
 dbu ma pa [33], [36], [51]
 dbu ma pa rnams [60]
 dbu ma par khas 'che bar byed [60]
 dbu ma rang rgyud pa [43], [47]
 dbu ma rin chen sgron ma [13]
 dbu ma pa'i shing rta'i srol phye ba [33]
 dbu ma'i lam mthar thug tu bzhed dgos pa
 [60]
 dbu ma'i lugs [46]
 dbu sems kyi shing rta'i srol [41]
 dbu sems gnyis [29]
 dbyig gi snying po [1]
 dbyig gnyen [1], [37], [38], [39]
 dbyig bshes [30]
 'byung ba lnga [16]
 'bras bu gnyis snang 'khrul ba [54]
 sbas pa'i brtul zhugs 'dzin pa [32]
 sbyin pa [24]
 ma rig pa'i bag chags kyi dri ma [41]

ma rig pas bslad pa [19]
 ma bslad pa [41]
 mang bkur sde lnga [55]
 mang bkur ba [47]
 mang bkur ba 'ga' zhig [43]
 mang bkur ba ma gtogs [47]
 mang pos bkur ba'i rgyal po [5]
 mi rtag pa rtogs pa'i ye shes [60]
 mi rtag sogs bcu drug [55]
 mi mthun pa'i rgyu las 'byung ba [27]
 mi pham [1]
 ming gi tha snyad [52]
 ming tsam zhig lhag mar lus pa [51]
 mu stegs [47]
 mu stegs kyi 'dod tshul [26]
 mu stegs kyi rtsod pa [27]
 mu stegs byed kyi grub mtha' [7]
 mu la stegs 'cha' ba [27]
 mun pa can gyi nga rgyal [17]
 mun pa'i dkyil 'khor [20]
 me lnga bsten pa [25]
 med go mi chod [53]
 mai tri'i zhabs [1]
 mya ngan las 'das [20]
 dmigs rkyen [46]
 dmigs rnam byas pa [55]
 dmigs pa [55]
 dmigs pa mi rtag sogs [55]
 smyung bar gnas pa [24]
 tsa'a ra ka pa rnams [22]
 gtso bo [17]
 gtso bo dang chen po [16]
 gtso bo tsam las 'byung ba [16]
 btsun pa ngo bo nyid med pa [38]
 btsun pa ra ta [31]
 rtsa ba shes rab [33]

rtsa ba'i sde bzhi [30]
 rtsa ba'i rang bzhin [16], [17]
 rtsa ba'i rang bzhin gyis sprul ba'i tshul
 [17]
 rtsa bar bshad pa'i rigs pa rnam [35]
 rtsa shes [33]
 rtsa shes 'grel pa buddha pā li ta [35]
 rtsa shes 'grel pa tshig gsal bcas [35]
 tshangs pa lta bu'i mtho ris kyi go 'phang
 [22]
 tshangs pa ba [14], [18], [23]
 tshangs par spyod pa [24]
 tshad grub tu 'dod [50]
 tshad dpag tshad 'bum phrag zhe lnga [25]
 tshad ma [15]
 tshad ma bcu gcig tu 'dod pa [22]
 tshad ma drug 'dod pa [22]
 tshad ma sde bdun [26], [31]
 tshad ma sde bdun gyi rjes 'brang [41]
 tshad ma phyogs kyi glang po [39]
 tshad ma'i skyes bu [27]
 tshad mar gyur pa [20]
 tshad mar 'dzin [34]
 tshig gi don drug gi rang bzhin [24]
 tshig don dgu [25]
 tshig don brgyad [23]
 tshig don drug gi spyi bye brag gi khyad pa
 [23]
 tshig don drug rnyed par rlom pa [12]
 tshig gsal [38]
 tshogs pa [43]
 mtshan nyid mi mthun pa'i rang rkya bar
 snang [47]
 mtshan nyid gsum [55]
 mtshan nyid gsum gyi rnam gzha [55]
 mtshan med zhi ba'i rnam pa [55]

dzin pa'i tshad ma rdzas gzhan gyis stong pa
 [59]
 dze ta ri [35]
 mdzod gnas brgyad pa [55]
 'dzin pa'i lhan skyes gnyis ka [52]
 'dzum ris kyi rgya stag khra bo [45]
 rdzas gzhan gyis stong [46]
 rdzas yod [44]
 rdzas yod kyi bdag [54]
 rdzas yod du 'dzin pa [47]
 rdzas yod du 'dzin pa lhan skyes [54]
 rdzas su grub pa [43]
 rdzu 'phrul [6]
 zha bo mig can lta bu'i skyes bu [17]
 zhi gnas thob [6]
 zhi ba dang ma zhi ba'i ngo bo [21]
 zhi ba 'tsho [35]
 zhi ba'i lam [27]
 zhi 'tsho [35]
 zhi lha [1]
 zhen yul [47], [52]
 zhen yul bkag pa [47]
 zhen yul sun phyung ba [51]
 gzhan dbang bden grub [55]
 gzhan dbang bden par grub pa [60]
 gzhan dbang yongs grub gnyis [46]
 gzhi gang zag gi steng du dgag bya bden
 grub bkag pa [59]
 gzhi grub [58]
 gzhi 'ga' zhig [46]
 gzhi phung sogs kyi steng du de bkag pa
 [59]
 gzhi lam 'bras bu [42]
 gzhi'i rnam gzha gsems tsam pa [35]
 gzhung phyi mo'i dbu ma pa [34]
 gzhon nu nus ldan [33]

bzhag chog pa'i bdag med [61]
 zab rgyas chos yi dga' ston [1]
 zab mo dbu ma'i lam nges don mthar thug pa
 [33]
 zur du mi bkar ba [54]
 zla grags [1]
 zla ba grags pa [33], [35]
 gzugs dang shes pa [44]
 gzugs sogs 'dus byas kyi chos [46]
 gzung 'dzin [46]
 gzung 'dzin grangs mnyam pa [41]
 gzung 'dzin gnyis stong [56], [57], [61]
 gzung 'dzin sna tshogs [19]
 gzezs ma za ba'i drang srong [23]
 gzezs zan pa [23]
 'arya de ba [33]
 'ug pa ba [23]
 'ug pa lhar 'khrul ba [23]
 'og ma'i lta ba [61]
 'od dpag med [1]
 'od srung [29]
 ya mtshan can gyi lta ba dgu bcu rtsa drug
 [13]
 yang dag pa'i lta ba [27]
 yang dag par grub pa [43], [50]
 yan gar ba'i rdzas yod [22]
 yi ge om [19]
 yi ge om bsgom pa [21]
 yid kyi rnam par shes pa [47]
 yid kyi rnam shes [48]
 yid kyi rnam shes gang zag tu 'jog [43]
 yid kyi dbang po [17]
 yum gyi mdo [38]
 yul gyi rnam ldan [46]
 yul gyi rnam ldan du skyes pa [46]
 yul dang yul can [46]

yul rang gi ngos nas grub par 'dzin pa [50]
 ye shes snying po [35]
 yongs grub [55]
 yongs grub dang stong nyid gnyis ka [55]
 yongs grub bden med [55]
 yod go chod pa [53]
 yod par 'dzin pa [52]
 yon tan 'od [39]
 yon sh'aka [1]
 rags pa 'jog tshul [58]
 rags pa rnams [44]
 rang rkya thub pa'i rdzas yod [47], [61]
 rang rkya thub pa'i rdzas yod kyi bdag [55]
 rang rkya ba [47]
 rang gi ngo bo nyid las byung ba [15]
 rang gi mngon shes kyis ma mthong ba'i don
 [15]
 rang gi mtshan nyid kyis grub pa [43], [45],
 [47], [50], [58]
 rang gi mtshan nyid kyis grub pas stong pa
 [56]
 rang gi mtshan nyid kyis grub pas stong pa
 rnams [57]
 rang gi mtshan nyid kyis ma grub pa [45]
 rang gis nyams su len pa [32]
 rang rgyal [55]
 rang rgyud kyi nga'am bdag [53]
 rang rgyud kyi gtan tshigs [35]
 rang rgyud pa [35], [36], [48], [49], [50],
 [51], [55]
 rang rgyud pa man chad [43], [47], [48],
 [51], [53]
 rang rgyud pa man chad kyi rang sde mtha'
 dag [60]
 rang rgyud pa sogs [54]
 rang rgyud pa'i shing rta'i srol 'byed pa

[35]
rang rgyud shar gsum [35]
rang ngos nas grub pa [46]
rang ngos nas grub par 'dzin pa [43]
rang ngos nas ma grub [45], [46]
rang dang gzhan gyi bstan pa'i khyad pa
[61]
rang sde thams cad [43]
rang sde'i grub mtha' [42]
rang spyi gnyis ka [45]
rang mtshan [45]
rang mtshan gyi don [46]
rang mtshan gyis grub pa'i don chos [51]
rang mtshan gyis ma grub pa [46]
rang mtshan dang rang gi mtshan nyid kyois
grub pa [46]
rang 'dzin gyi blo 'dor ba [44]
rang 'dzin gyi blo mi 'dor ba [44]
rang 'dzin rtog pa'i zhen gzhi [46], [56],
[57], [58]
rang 'dzin tshad ma [46]
rang gzhin med pa'i don gtan med du bzung
[53]
rang bzhin gyis grub pa [43], [50]
rang bzhin gyis sprul ba tsam [17]
rang bzhin gyis med pa [53]
rang las mkhas pa bzhi [39]
ratna'i mtshan can [1]
rab tu dga' ba'i sa [33]
ral ba ser skya [8]
ri bya rkang gi phug [38]
rig pa can [23]
rig pa can pa [11], [14], [23], [26]
rig pa'i rgyan zhes bya ba'i gzhung [33]
rig pa'i dbang phyug [13]
rig byed [20]

rig byed kyi sgra [18]
rig byed kyi gzhung [18]
rig byed kho na tshad mar 'dod [18]
rig byed mtha' pa [18], [20], [21]
rig byed tshad mar 'dod tshul [22]
rig spa'i rjes su 'brangs pa [31]
rigs pa ltar snang la brten [47]
rigs pa'i rjes 'brang [31], [41]
rigs pa'i tshogs drug [33]
rigs pas dpyad bzod du grub pa [48], [49]
rigs pas dpyad bzod mi bzod kyi mtshams
[48]
rigs pas btsal ba'i ngor [49]
rim pa lnga pa [33]
rol pa'i rdo rje [1]
rlung bum pa can bsgom pa [21]
bram ze [6]
bram ze chen po sa ra ha [32], [33]
bram ze mchog [20]
lang kar gshegs pa'i mdo [33]
lam dang grol ba yang med [15]
lam du 'dzin pa [27]
las 'bras kyi rten du gyur pa'i bdag [43],
[52]
las 'bras med par smra ba [15]
las gsar pa [24]
li kha ra shing 'phel [33]
lung gi rjes 'brang [31], [41]
lung ma bstan gyi lta ba bcu bzhi [13]
lus kyi bdag nyid du gyur pa [15]
lus kyi dbang po lnga [17]
lus kyi 'bras bur gyur pa [15]
lus kyi yon tan du gyur pa [15]
lus gcer bu [25]
lus sems rdzas gcig pa [15]
legs ldan [1]

legs ldan 'byed [33], [35]
 legs bshad [1]
 legs bshad snying po [54]
 legs bshad shel dkar me long [1]
 legs bshad shel gyi me long [61]
 legs bshad gsar pa'i rin chen tshogs [61]
 lo paṅ [1]
 log rtog 'gag par 'gyur ba [27]
 log lta mtha' dag [27]
 long pa rkang can lta bu'i rang bzhin [17]
 lwa ba pa [35]
 shi ri ra ta [31]
 shing rta chen po [27]
 shing rta chen po gnyis [32]
 shing rta chen po rnams kyi gzhung [27]
 sher phyin 'bum pa [33]
 shes sgrib [51]
 shes sgrib 'dod tshul [54]
 shes pa snga ma'i steng gi nus pa [46]
 shes pa phyi ma [46]
 shes bya mtha' yas pa [22]
 shes rab sgron me [35]
 shes rig gi rang bzhin [22]
 sha'kya thub pa [29]
 sa dgu [55]
 sa dang po [51]
 sa bdun pa bar bshad [33]
 sa sde lnga [38], [39]
 sa sde lnga'i rjes 'brang [41]
 sa Za be sa [33]
 sa la gnas pa'i byang chub sems dpa' [32]
 sa gsum pa 'od byed pa [38]
 sangs rgyas kun dngos [1]
 sangs rgyas kyi rjes su 'brang ba [61]
 sangs rgyas kyi bstan pa [41]
 sangs rgyas bskyangs [1], [33], [35]

sangs rgyas 'khor ba 'jig [29]
 sangs rgyas gnyis pa [32]
 sangs rgyas stong [29]
 sangs rgyas lha [30]
 sa'i bstod 'grel [38]
 seng ge bzang [1]
 seng ge bzang po [35]
 sems kyi ngo bo [41]
 sems rten [55]
 sems tsam du bstan pa [38]
 sems tsam rnam bden pa [41]
 sems tsam pa [40], [43], [55]
 sems tsam pa rnams [46]
 sems tsam pa rnams [60]
 sems tsam pa rang gi 'dod pa [46]
 sems tsam pa rang lugs [46]
 sems tsam pa'i grub mtha [37], [50]
 sems tsam pa'i lugs [56]
 sems tsam pa'i shing rta'i srol phye [38]
 ser skya pa [8], [16]
 so so'i lta ba'i 'dod tshul [42]
 srong gzegs zan [12]
 slob dpon klu sgrub [41]
 gsang sngags kyi skor [33]
 gsang sngags kyi gdams pa [33]
 gsang sngags kyi rnal 'byor pa [32]
 gsang ba pa [18], [20]
 gsal ba'i tshul khirms [37]
 gser thub byon [29]
 bsam gtan [20]
 bsam gtan dang gzugs med [15]
 bsam gtan pa [15]
 bsam gtan bzhi pa'i rab mtha' [55]
 bsalu ba med pa'i 'jug ngogs mchog [27]
 lha chen [11]
 lha chen dbang phyug gis byin gyis brlabs pa

[16]

lha rdzas kyi ngo bo [21]

lhag pa'i phra ba'i bdag med [47]

lhan skyes [47], [51]

lhan skyes kyis 'dzin pa [52]

lhan skyes gnyis [50]

lha'i mig gi mngon shes [17]

u ma [11]

文献一覧 (略語を含む)

一次文献

[] 内は本文訳注において使用した略語を示す。

1) チベット語文献

Blo bzang chos kyi nyi ma

Thu'u bkwan の項参照

Blo bzang bskal bzang rgya mtsho (ダライラマ7世)

brGyud pa gsum ldan gyi dngos brgyud bla ma rnams la gsol ba 'debs shing dngos grub zhu ba'i gdung dbyangs dge legs char 'bebs. 長尾雅人 [1954] 参照

Bu ston Rin chen grub

[*Bu ston Chos 'byung*] *bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed Chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod / History of Buddhism by Bu ston, The Collected Works of Bu ston, Part 24,* ed. Lokesh Chandra, Śāta-Piṭaka Series 64, New Delhi 1971.

Bye brag tu rtogs par byed pa chen po

See *Mahāvvyutpatti*

lCang skya Rol pa'i rdo rje

[*lCang skya Grub mtha'*] *Grub mtha' thub bstan lhun po'i mdzes rgyan* (北京版), *Buddhist Philosophical Systems*, ed. Lokesh Chandra, Śāta-Piṭaka Series 233, New Delhi 1977.

'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo dje Ngag dbang brtson 'grus

[*Grub mtha' chen mo*] *Grub mtha' rnam bshad rang gzhan grub mtha' kun dang yab don mchog tu gsal ba kun bzang zhing gi nyi ma lung rigs rgya mtsho skye dgu'i re ba kun skongs, The Collected Works of 'Jam dbyangs bzhad pa* (bKra shis 'khyil 版), Vol.14, ed. Ngawang Gelek Demo, New Delhi 1973.

dKon mchog 'jigs med dbang po

[*dKon mchog Grub mtha'* = GTRPT (御牧略語)] *Le Grub mtha' rnam bzhag rin chen phreng ba de dKon mchog 'jigs med dbang po*, ed. Mimaki, Katsumi, *Zinbun* 14, Kyoto University 1977.

Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor

[dPag bsam ljon bzang] *Pag Sam Jon Zang*, ed. Chandra Das, Presidency Jail Press, Calcutta 1908 (repr. 1984).

Tāranātha

[Tāranātha] *Tāranātha de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione* (texte tibétain), ed. A. Schiefner, Petropolis 1968; *Tāranāthas Geschichte des Buddhismus in Indien*, tr. A. Schiefner, Suzuki Research Foundation, repr. 1963.

Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma

[Z = TGS-Z (従前の一部の巻にて使用の略語)]

シヨル Zhol 寺版, ガワン・ゲレ刊行本: *Thu'u bkwan grub mtha'*, Zhol ed. in *Collected Works of Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma* (CWT), edited and reprinted by Ngawang Gelek Demo, Geden sungrab minyam Series 2, Delhi 1969 (IASWR. No.R-1224).

[G = TGS-G (従前の一部の巻にて使用の略語)]

東大所蔵本 (ゴンルン寺版): *Grub miha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad zhel gyi me long*, dGong klung ed., Tokyo Univ., No.107.

[D = TGS-D (従前の一部の巻にて使用の略語)]

ウラガ・デルゲ寺版: *Thu'u bkwan grub mtha'* (sDe-dge ed.), 甘肅民族出版社 1984.

Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal

dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad Rigs pa'i rgya mtsho, *The Collected Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa* (bKra shis lhun po 版), ed. Ngawang Gelek Demo, vol.23, New Delhi 1975.

[dGongs pa rab gsal] *rGyal ba thams cad kyi thugs kyi dgongs pa zab mo dbu ma'i de kho na nyid spyi'i ngag gis ston pa nges don rab gsal*, *Ibid.*, vol.24, New Delhi 1979.

Lam rim chen mo, *Ibid.*, Vol.20, New Delhi 1977.

[Legs bshad snying po] *Drang ba dang nges pa'i don rnam par phye ba'i bstan bcos Legs bshad snying po*, *Ibid.*, Vol.21, New Delhi 1979.

2) サンスクリット名の文献 (チベット語訳を含む)

Abhidharmakośa

[AKBh] *L'ABHIDHARMAKŌŚA de Vasubandhu*, ed. L. de La Vallée Poussin, Bruxelles 1971.

Abhidharmakośa-bhāṣya

[AKBh] *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, ed. P. Pradhan, Patna 1975.

Bodhisattvabhūmi

Bodhisattvabhūmi, ed. N. Dutt., Patna 1966.

Laṅkāvatāra-sūtra

Laṅkāvatārasūtra, Sagāthaka, ed. Bunyū Nanjō, Kyoto 1923.

Madhyamaka-hṛdaya-kārikā

[MHK] 川崎 [1992] 参照

Madhyamaka-ratna-pradīpa (チベット語訳による)

[MRP] *dBu ma rin po che'i sgron ma*, (東北 No.3853, 大谷 No.5254)

Madhyamakāvātāra (チベット語訳による)

Madhyamakāvātāra par Candrakīrti, ed. L. de La Vallée Poussin, St. Pétersbourg 1907-1912;
Tokyo, repr. 1977.

Prasannapadā

Prasannapadā, Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā, ed. L. de La Vallée Poussin, St. Pétersbourg 1903-1913.

Mahāvvyutpatti

[Mvyut] *Lo pang mang pos mdzad pa'i bye brag tu rtogs par byed pa chen po*. 『翻訳名義大集 (梵藏漢和四訳対校)』 榊亮三郎編, 鈴木学術財団 1962.

Pañca-krama

Pañcakrama, Sanskrit and Tibetan Texts Critically Edited with Verse Index and Facsimile Edition of the Sanskrit Manuscripts, ed. Mimaki, Katsumi and Tomabechi, Toru, The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco 1994.

Samdhinirmocana-sūtra (チベット語訳による)

Samdhinirmocanasūtra, L'explication des mystères, ed. E. Lamotte, Louvain 1935.

Sarva-darśana-saṃgraha

[SDS] *Sarva-darśana-saṃgraha of Sāyaṇa-Mādhava*, ed. T.G. Mainkar, Government Oriental Series, Class A, No.1, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona 1978.

Sarvasiddhāntapraveśaka

Sarvasiddhāntapraveśaka, ed. Muni Jambuvijayaji, Bombay 1964.

Tarka-jvālā = Madhyamaka-hṛdaya-vṛtti-Tarkajvālā (チベット語訳による)

[TJ] *rTog ge 'bar ba*. 川崎 [1992] 参照

二次文献

Alsdorf, Ludwig

[1938] "Zur Geschichte der Jain Kosmographie und Mythologie." *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*. 92, Kommissionsverlag F. Steiner, Wiesbaden.

Bureau, A.

[1954-1956] "Trois Traités sur les Sectes Bouddhiques Attribués à Vasumitra, Bhavya et Vinītadeva." *Journal Asiatique*, 1954, pp.229-266.; *Journal Asiatique*, 1956, pp.167-200.

Cabezón, José Ignacio

[1992] *A Does of Emptiness. An Annotated Translation of the sTong thun chen mo of mKhas grub dGe legs dpal bzang*. State University of New York Press.

Cabezón, José Ignacio, Jackson, Roger R. (eds.)

[1996] *Tibetan Literature*. Ithaca, Snow Lion Publications.

Chhos je Lama (ed.)

[1963] *Grub mthaḥ thams chad kyi khuñs dan ḥdod tshul ston pa*. Sarnath, Vanarasi.

Das, Sarat Chandra

[1881] "Contributions on the Religion, History etc. of Tibet." *Journal of Asiatic Society of Bengal*, Calcutta, pp.187-205. .

[1882] *Ibid.* pp.58-73; pp.87-114.

[1965] *Indian Pandits in the Land of Snow*. Calcutta.

[1969] *Autobiography, Narrative of Incidents of My Early Life*. *Indian Studies Past & Present*, Calcutta.

江島恵教

[1990] 「Bhāvaviveka/Bhavya/Bhāviveka」『印度学仏教学研究』28-2, pp.846-838.

[2003] 『空と中観』春秋社.

Dreyfus, G., McClintock, S (eds.).

[2003] *The Svātantrika-Prāsaṅgika Distinction, What difference does a difference make?* Wisdom Publications, Boston.

Emeneau, M. B.

[1935] *A Union List of Printed Indic Texts and Translations in American Libraries*. American Oriental Society, New Haven.

藤永伸

[2001] 『ジャイナ教の一切知者論』平楽寺書店.

福田洋一

[1987] 「一卵半塊論について」『日本西藏学会会報』33, pp.1-8.

[2000] 「ツォンカパにおける中観自立派の存在論」『日本西藏学会会報』45, pp.13-27.

[2000] 「自相と rang gi mtshan nyid」『江島恵教博士追悼記念論集 空と実在』春秋社, pp.173-189.

[2003] 「初期チベット論理学における mtshan mtshon gzhi gsum をめぐる議論について」『日本西藏学会会報』49, pp.13-25.

[2006] 「rang gi mtshan nyid kyis grub pa 再論」『印度学仏教学研究』54-2, pp.(1)-(8).

福田洋一・石濱裕美子

[1986] 『西藏仏教宗義研究（第四卷）——トゥカン『一切宗義』モンゴルの章——』STUDIA TIBETICA 4, 東洋文庫.

Jaini, P. S.

[1974] "On the Sarvajñatva (Omniscience) of Mahāvīra and the Buddha." Cousins, L. ed., *Buddhist Studies in Honor of I. B. Horner*. Dordrecht.

羽田野伯猷

[1987] 「アティーシャおほえ書き」『チベット・インド学集成』第3巻、法蔵館.

袴谷憲昭

[1976a] 「中観派におけるチベットの伝承」『三蔵』117, pp.1-10.

[1976b] 「唯識の学系に関するチベット撰述文献」『駒澤大学仏教学部論集』7, pp.256-232.

[1982] 「瑜伽行派の文献」『講座大乘仏教 8 唯識思想』春秋社, pp.53-58.

[1986] 「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」『チベットの仏教と社会』春秋社, pp.235-268.

[1994] 『唯識の解釈学——『解深密経』を読む——』春秋社.

Halbfass, W.

[1988] *India and Europe; An Essay in Understanding*. State University of New York Press.

[1991] *Tradition Reflection; Explorations in Indian Thoughts*. State University of New York Press.

橋本光寶

[1942] 『蒙古の喇嘛教』 佛教公論社

[1940] ジクメ・ナムカ (Jigs med nam mkha') 著・外務省調査部 (橋本光寶) 訳: 『増訂 蒙古喇嘛教史』 生活社.

[1999] 『モンゴル冬の旅』 ノンブル社.

平松敏雄

[1982] 『西藏仏教宗義研究 (第三卷) —— トウカン 『一切宗義』 ニンマ派の章 ——』
STUDIA TIBETICA 5, 東洋文庫.

Hoffman, Helmut

[1950] *Quellen zur Geschichte der tibetischen Bon-Religion*. Wiesbaden.

本多恵

[1980] 『サーンキヤ哲学研究』 上巻, 春秋社.

Hopkins, J.

[1983] *Meditation on Emptiness*. London.

[1987] *Emptiness Yoga*. Ithaca, Snow Lion Publications.

[1996] "The Tibetan Genre of Doxography: Structuring a Worldview." *Tibetan Literature*. Ithaca, Snow Lion Publications, pp.170-186.

一郷正道

[1985] 『中観莊嚴論の研究』 2巻, 文栄堂書店.

池田練太郎

[1979] 「ICang skya 宗義書における Vaibhāṣika 章について」『日本西藏学会々報』 25, pp.(1)-(4).

[1983] 「チベットにおけるアビダルマ仏教の一断面 dus gsum rdzas grub (〈三世実有〉) 説を手掛りとして」『日本西藏学会々報』 29, pp.(10)-(12).

今西順吉

[1968] 「竜樹によって言及されたサーンキヤ思想」『北海道大学文学部紀要』16-2, pp. 37-96.

イ・ポポフ

[1917] (石川喜三郎訳):『西藏蒙古秘密喇嘛教大観』史籍出版再刊, 1980.

梶山雄一

[1982] 「中観思想の歴史と文献」『講座大乘仏教7 中観思想』春秋社.

金倉圓照

[1939] 『印度古代精神史』岩波書店.

Kane, P. V.

[1974] *History of Dharmaśāstra: Ancient and Medieval Religious and Civil Law*. Government Oriental Series, Class B, No.6, Vol. II, Part II, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.

片野道雄・ツルティム・ケサン (Tsultrim Kelsang Khangkar)

[1998] 『ツォンカパ中観哲学の研究Ⅱ レクシェーニンポ中観章和訳』片野道雄, ツルティム・ケサン校訂・共訳, 文永堂.

加藤純章

[1989] 『経量部の研究』春秋社.

川崎信定

[1971] 〈書評〉「レッシング・ウェイマン《ケトプジェ・仏教タントラ概説》」『東洋学報』54-3, 東洋学術協会, pp.124-127.

[1973] 「バヴィヤの伝えるミーマーンサー説」『中村元博士還暦記念論集〈インド思想と仏教〉』春秋社, pp.71-86.

[1975] 「法を知る人は存在するか——*Tattvasamgraha* における仏教・ミーマーンサー論争——」『平川彰博士還暦記念論集〈仏教における法の研究〉』春秋社, pp.267-289.

[1976] "Analysis of Yoga in the *Samdhinirmocana-sūtra*." 『豊山学報』21, pp.155-170.

[1976] "The Concept of the Subtle Body (*Liṅga-śarīra*) in Brahmanism." 『筑波大学哲学・思想学系論集』(*Studies*, Institute of Philosophy, the University of Tsukuba), 昭和50年度, pp.1-14.

[1977] "The *Mīmāṃsā* Chapter of Bhavya's *Madhyamaka-hṛdaya-kārikā* ——Text and

- Translation——(1)." *Ibid.*, 昭和 51 年度, pp.1-16.
- [1977] 「チベットにおける成仏の理解——仏伝十二相をめぐって——」『玉城康四郎博士還暦記念論集〈仏の研究〉』春秋社, pp.269-284.
- [1983] 「『十住毘婆沙論』の難一切智人」壬生台舜編『龍樹教学の研究』大蔵出版社, pp.85-199.
- [1984] 「一切智者の存在論証」平川彰・高崎直道・梶山雄一編『講座・大乘仏教 9 認識論と論理学』春秋社, pp.294-339.
- [1985] 「諸法実相を基盤とした一切智・一切種智」『平川彰博士古稀記念論集〈仏教思想の諸問題〉』春秋社, pp.353-372.
- [1985] 「『中観心論』にみられる一切智 (Sarvajña)」『印度学仏教学研究』34-1, pp.160-167.
- [1986] 「Bhāvaviveka の生類観——草木にころがあるか——」『豊山教学大会紀要』14, 眞言宗豊山派豊山教学振興会, pp.104-118.
- [1986] 「パリ文献にみられる一切智 (Sabbāññū)」『雲井昭善博士古稀記念論集〈仏教と異宗教〉』平楽寺書店, pp.184-203.
- [1987] "The Mīmāṃsā Chapter of Bhavya's *Madhyamaka-hṛdaya-kārikā* ——the Sanskrit and the Tibetan Texts—— (2) Uttara-pakṣa." 『筑波大学哲学・思想学系論集』(*Studies*, Institute of Philosophy, the University of Tsukuba) 12, pp.1-23.
- [1988] "The Mīmāṃsā Chapter of Bhavya's *Madhyamaka-hṛdaya-kārikā* –the Sanskrit and Tibetan Texts 3." *Ibid.* 13, pp.1-42.
- [1988] 「バヴィヤの『中観心論』にみられる一切智説 (1)」『仏教学』仏教思想学会, pp.1-20.
- [1991] 「IDAM SARVAM (この一切) を知るもの——アートマンを知るものとの関係——」『前田専學博士還暦記念 インド学仏教学論集〈我〉の思想』春秋社, pp.5-16.
- [1991] "Discrepancies in the Sanskrit and Tibetan Texts of Bhavya's *Madhyamaka-hṛdaya-Tarkajvālā*: (the IXth and the Xth Chapters)." *The Proceedings of the 5th Seminar of the International Association of Tibetan Studies*, Narita 1989, vol.1, Naritasan Shinshoji, pp.131-143.
- [1992] 『一切智思想の研究』春秋社.
- [1998] 「一切智から薩婆若への展開」松長有慶編著『インド密教の形成と展開』法蔵館, pp.87-102.
- [2000] 「善巧方便と智慧——『中観心論』第十章：一切智品にもとづく考察——」『加藤純章博士還暦記念論集・アビダルマ仏教とインド思想』春秋社, pp.237-250.
- [2003] 「バヴィヤの自然観」『日本仏教学会年報』68, pp.15-30.

岸根敏幸

[2001] 『チャンドラキールティの中観思想』大東出版社.

木村誠司

[2004a] 「ツォンカパの自相説に関する一報告」『駒澤短期大学研究紀要』32, pp.301-310.

[2004b] 「ツォンカパの自相説 (1)」『駒澤短期大学仏教論集』10, pp.(1)-(14).

Kirfel, W.

[1920] *Die Kosmographie der Inder*. Bonn, und Leipzig.

Klein, Anne C.

[1986] *Knowledge and Liberation*. Ithaca, Snow Lion Publications.

[1990] *Knowledge, Naming, and Negation*. Ithaca, Snow Lion Publications.

小林守

[1988] 「形象真実〈一卵半塊〉説について」『印度学仏教学研究』36-2, pp.(101)-(107).

[1994] 「自相成立と自性成立」『印度学仏教学研究』43-1, pp.(187)-(190).

Leumann. E.

[1863] "Das Aupapātika-Sūtra, erstes Upāṅga der Jain, 1. Teil. Einleitung, Text und Glossar."
Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes VIII, 2, Leipzig.

Lindtner, Ch.

[1982] *Nāgarjuniana*. Copenhagen.

[2001] *Madhyamakahrdayam of Bhavya*, The Adyar Library and Research Centre, The Theosophical Society, Adyar, Chennai.

Liu, li qian (劉立千 訳)

[1980] 『宗教流派鏡史』西北民族学院研究室.

[1993] 『土觀宗派源流』仏教慈慧服務中心.

Lopez, D.S.

[1967] *A Study of Svātantrika*. Ithaca, Snow Lion Publications.

Lu, Cheng (呂澂)

[1933] 『西藏佛教原論』上海.

[1942] *Studia Serica*, Series B, No.I, 成都.

前田専學

[1988] 訳『ウパデーシャ・サーハスリー *Upadeśa-sāhasrī* —— 真実の自己の探求』岩波文庫.

Mani, Vettam

[1975] *Purāṇic Encyclopaedia*. Delhi.

丸井浩

[2005] 「六つの哲学体系」『菅沼晃博士古稀記念論文集 インド哲学・仏教学への誘い』大東出版社, pp.24-45.

松本史朗

[1980] 「Ratnākaraśānti の中観派批判 (下)」『東洋学術研究』19-2.

[1981] 「ツォンカパの中観思想について」『東洋学報』62-3/4, pp.174-211

[1981] 「*lTa ba'i khyad par* における中観理解について」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』13, pp.93-124.

[1982] 「チベットのの中観思想——とくに離辺中観説を中心にして——」『東洋学術研究』21-2, pp.161-178.

[1984] 「後期中観派の空思想『瑜伽行中観派』について」『理想』610, pp.140-159.

[1986] 「後期中観思想の解明にむけて」『東洋学術研究』25-2, pp.177-203.

[1989] 「ツォンカパとゲルク派」『岩波講座 東洋思想 11 チベット仏教』pp.224-262
(「ツォンカパと離辺中観説」という題で [1999] pp.321-401 に再録)

[1990] (English version of Matsumoto[1989]) "The Mādhyamika Philosophy of Tsong-kha-pa." *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 48, pp.17-47.

[1999] 『チベット仏教哲学』大蔵出版.

松長有慶

[1965] "On the Characters of the Pradīpodyotana's Sanskrit Manuscript." 『密教文化』71/72
(『大山公淳教授頌寿記念論集 (下)』) pp.175-172.

松濤誠達

[1979] 『ウパニシャッドの哲人』人類の知的遺産 No.2, 講談社.

[2006] 『古代インドの宗教とシンボリズム』大正大学出版部.

御牧克己

[1979] *La Réfutation Bouddhique de la Permanence des Choses (Sthirasiddhidūṣaṇa) et la Preuve*

de la Momentanéité des Choses (Kṣaṇabhāṅgasiddhi), Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, Paris.

- [1980] "Le chapitre du *Blo gsal grub mtha'* sur les Sautrāntika", *Zinbun* 16, Kyoto University, pp.143-172.
- [1982] 「チベットにおける宗義文献（学説綱要書）の問題」『東洋学術研究』21-2, pp.185-192.
- [1982] *Blo gsal grub mtha': Chapitres IX (Vaibhāṣika) et XI (Yogācāra) édités et Chapitre XII (Mādhyamika) édité et traduit*. *Zinbun Kagaku Kenkyūsho*, Kyoto University.
- [1982] 「Blo gsal grub mtha'」*Zinbun*, Kyoto.
- [1984] 「刹那滅論証」『講座大乘仏教 9 認識論と論理学』春秋社, pp.217-254.
- [1996] 『大乘仏典 15 ツォンカパ』御牧克己, 森山清徹, 苜米地等流訳, 中央公論社,

Mittal, Kewal Krishan, ed. with introduction and notes in collaboration with Lama Jamspal

- [1984] *A Tibetan Eye-view of Indian Philosophy, being translation of Grub mtha' Shel Gyi Me Long of Th'U-bwan Blo-bzang Chos-Kyi-Nyi-Ma*. Munshiram Manoharlal, New Delhi,

長尾雅人

- [1954] 『西藏佛教研究』岩波書店.
- [1947] 『蒙古學問寺』全国書房.

長島潤道

- [2006] 「インド後期中観派の分派について」『仏教学』48, pp.(53)-(69).

中村元

- [1967] 『インド思想の諸問題』（中村元選集第10巻）春秋社.
- [1991] 『思想の自由とジャイナ教』（中村元選集・決定版第10巻）春秋社.
- [1988] 『インド人の思惟方法』（中村元選集・決定版第1巻）春秋社。（初版 みすず書房）
- [1992] 『ゴータマ・ブッダ』上（中村元選集・決定版第11巻）春秋社.
- [1994] 『インドの哲学体系 I・全哲学綱要 I』（中村元選集・決定版第28巻）春秋社.
- [1996] 『ヨーガとサーンキヤの思想』（中村元選集・決定版第24巻）春秋社.

西岡祖秀

- [1978] 『西藏仏教宗義研究（第二巻）——トゥカン『一切宗義』シチェ派の章——』
STUDIA TIBETICA 4, 東洋文庫.

Obermiller, E. (tr.)

[1932a] *The History of Buddhism in India and Tibet, I. Part.* Heidelberg.

[1932b] *Ibid., II. Part.* Heidelberg.

小谷信千代

[1995] 『チベット俱舎学の研究——『チムゼー』賢聖品の解説——』文栄堂書店.

沖和史

[1982] 「無相唯識と有相唯識」『講座大乘仏教 8 唯識思想』春秋社, pp.177-209.

Pathak, K.B.

[1931] "Kumārila's Verses Attacking the Jain and Buddhist Notions of an Omniscient Being."
Annal of Bhandarkar Oriental Institute 12-2, Poona, pp.123-130.

Rockhill, W.W.

[1907] *The Life of the Buddha and the Early History of His Order.* K. Paul, Trench, Trubner,
London.

Ruegg, D. Seyfort

[1963] "The Jo nañ pas." *Journal of the American Oriental Society*, No.83, pp.73-91.

[1971] "Le Dharmadhātustava de Nāgārjuna." *Études tibétaines, dédiées à la mémoire de
Marcelle Lalou*, Paris.

[1981] *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India.* Wiesbaden.

[2000] *Three Studies in the History of Indian and Tibetan Madhyamaka Philosophy: Studies in
Indian and Tibetan Madhyamaka Thought, Part 1.* Wien.

[2002] *Two Prolegomena to Madhyamaka Philosophy. Studies in Indian and Tibetan
Madhyamaka Thought, Part 2.* Wien.

[2002] *Two Prolegomena to Madhyamaka Philosophy, Candrakīrti's Prasannapadā
Madhyamakavṛttiḥ on Madhyamakakārikā I.1 and Tsong kha pa Blo bzang grags pa / rGyal
tshab Dar ma rin chen's dKa' gnad / gnas brgyad kyi zin bris.* Wien.

三枝充憲

[1987] 『インド仏教人名辞典』法蔵館.

斎藤明

[2000] 「バウヴィアの規定する Madhyamaka とその解釈をめぐって」『アビダルマ仏教とイ
ンド思想』春秋社, pp.267-279.

[2007] 「*Ita ba'i khyad par* における「経(部)中観」の意味」『印度学仏教学研究』55-2, pp.(111)-(119).

桜部建

[1986] 『俱舎論 (仏典講座 18)』大蔵出版.

桜部建・小谷信千代

[1999] 『俱舎論の原典解明 賢聖品』法蔵館.

桜部建・小谷信千代・本庄良文

[2004] 『俱舎論の原典研究 智品・定品』大蔵出版.

Schrader, Friedrich Otto

[1902] *Über den Stand der indischen Philosophie zur Zeit Mahāvīras und Buddhas*. K.J. Trübner, Strassburg.

Schubring, W.

[1926] *Worte Mahāvīras, Kritische Übersetzungen aus dem Kanon der Jaina*. Göttingen.

[1962] *Doctrine of the Jainas*. Delhi.

Schuh, Dieter

[1973] "Untersuchungen zur Geschichte der tibetischen Kalenderrechnung." *Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland*, Supplement bd. 16, Wiesbaden.

Shi dong chu (釈東初)

[1999] 『中国仏教近代史』静岡.

Singh, Ram Jee

[1974] *The Jaina Concept of Omniscience*. Lalbhai Dalpatbhai Series 43, L. D. Institute of Indology, Ahmedabad.

立川武蔵

[1974] 『西藏仏教宗義研究 (第一卷) ——トゥカン『一切宗義』サキヤ派の章——』STUDIA TIBETICA 3, 東洋文庫.

[1987] 『西藏仏教宗義研究 (第五卷) ——トゥカン『一切宗義』カギユ派の章——』STUDIA TIBETICA 13, 東洋文庫.

立川武蔵・石濱 裕美子・福田 洋一

- [1995] 『西藏仏教宗義研究（第七卷）——トゥカン『一切宗義』ゲルク派の章——』
STUDIA TIBETICA 31, 東洋文庫.

谷口富士夫

- [1993] 『西藏仏教宗義研究（第六卷）——トゥカン『一切宗義』チヨナン派の章——』
STUDIA TIBETICA 26, 東洋文庫.

Tauscher, H.

- [1999] *Phya pa chos kyi seng ge, dBu ma shar gsum gyi stong thun*. Wien.

寺本婉雅

- [1974] 『ターラナータ°印度仏教史』寺本婉雅訳注, 国書刊行会.

寺本婉雅・平松友嗣

- [1974] 『蔵漢和三訳対校 異部宗輪論, 異部宗精釈, 異部説集』寺本婉雅・平松友嗣共編
訳注, 国書刊行会.

ツルティム・ケサン (Tsultim, Kelsang Khangkar)

- [2000] 「形象真実と形象虚偽について」『日本西藏学会会報』45, pp.3-11.
[2002] 「経部行中観派と瑜伽行中観派の学派分類について」『印度学仏教学研究』51-1,
pp.109-113.

Thurman, R.

- [1984] *Tsong kha pa's Speech of Gold in the Essence of True Eloquence*. Princeton.

宇井伯寿

- [1927] 「種々なる道 (Madhusūdana-Sarasvatī: Prasthānabheda 翻訳並びに訳注)」『印度哲
学研究』第四, 甲子社書房. (岩波書店 1940 再刊)
[1953] 「真理の寶環 (Advayavajra: Tattvaratnāvalī の翻訳ならびに訳注)」、『大乘佛典の研
究』岩波書店.
[1965] 『印度哲学研究』第三, 岩波書店.
[1965] 「チャラカ本集に於ける論理説」『印度哲学研究』第二, 岩波書店, pp.425-471.

Vasil'ev, V.P

- [1855] "O nekotorykh knigakh, odnosyashchikhsya k istorii buddhizma, v biblioteke Kazanskovo

universiteta." *Uchenye Zapiski Akademii Nauk*, vol.iii, pt.1 (*On Some Books Relating to the History of Buddhism in the Library of the University of Kazan*).

[1860] Wassiljew, W. (Schiefner, A. tr.): *Der Buddhismus, seine Dogmen, Geschichte und Literatur*. St. Petersburg.

Vostrikov, A.I.

[1862] *Tibetskaya Istoricheskaya Literatura (Bibliotheca Buddhica, v.XXXII)*. Moscow.

[1970] Harish Chandra Gupta tr.: *Tibetan Historical Literature, Indian Studies Past and Present*. Soviet Indology Series, No.4, Calcutta.

山口瑞鳳

[1982] 「チベット史料の年次計算法」『東洋学報』63-3, pp.373-400.

[1992] "The Significance of Intercalary Constants in the Tibetan Calender and Historical Tables of Intercalary Months." *The Proceedings of the 5th Seminar of the International Association of Tibetan Studies*, Narita 1989, Vol.2, Naritasan Shinshoji, pp.873-891.

山口瑞鳳・多田明子

[2005] 『多田等観・チベット大蔵経にかけた生涯』春秋社.

吉水千鶴子

[1988] 「Nāgārjuna 作 *Bodhicittavivarāṇa* について」『印度学仏教学研究』36-2, pp.(80)-(84).

[1992] 「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (I)」『成田山仏教研究所紀要』15, 『仏教文化史論集』II, pp.609-656.

[1993] 「rang gi mtshan nyid kyis grub pa について (II)」宮坂宥勝博士古稀記念論文集『インド学・密教学研究』法蔵館, pp.971-990.

[1993] "On *ran gi mtshan ñid kyis grub pa* III, Introduction and Section I."『成田山仏教研究所紀要』16, pp.91-147.

[1994] "On *ran gi mtshan ñid kyis grub pa* III, Section II and III."『成田山仏教研究所紀要』17, pp.295-354.

[1993] "The Madhyamaka Theories Regarded as False by the dGe lugs pas." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie* 37, pp.201-227.

[1996a] 「Saṃdhinirmocanasūtra X における四種の yukti について」『成田山仏教研究所紀要』19, pp.123-168.

[1996b] *Die Erkenntnislehre des Prāsaṅgika-Madhyamaka nach dem Tshig gsal ston thun gyi tshad ma'i rnam bśad des 'Jam dbyaṅs bžad pa'i rdo rje*. Wien.

[1998] 「ゲルク派による経量部学説理解 (1) 二諦説」『成田山仏教研究所紀要』21,

pp.51-76.

- [1999] "The Development of *sattvānumāna* from the Refutation of a Permanent Existent in the Sautrāntika Tradition." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie* 43, pp. 231-254.
- [2000] 「ゲルク派による経量部学説理解 (2) 普遍実在論」『仏教文化研究論集』4, pp.3-32.
- [2002] (Review) "Yotsuya Kodo, *The Critique of Svatantra Reasoning by Candrakīrti and Tsong-kha-pa, a Study of Philosophical Proof According to Two Prāsaṅgika Madhyamaka Traditions of India and Tibet* (Stuttgart 1999)." *Indo-Iranian Journal* 45, pp.173-178.
- [2003] "Tsong kha pa's Reevaluation of Candrakīrti's Criticism of Autonomous Inference." *The Svātantrika-Prāsaṅgika Distinction, What Difference does a Difference Make?*, Dreyfus, D., and McClintok, S., eds., Wisdom Publications, Boston, pp.257-288.
- [2003] (Review) "Dreyfus, Georges B.J., *Recognizing Reality: Dharmakīrti's Philosophy and Its Tibetan Interpretations* (Albany: State University of New York Press 1997)." *Indo-Iranian Journal* 46, pp.349-368.
- [2004] "Defining and Redefining *Svalakṣaṇa*." *Three Mountains and Seven Rivers, Prof. Musashi Tachikawa's Felicitations Volume*. Delhi, pp.117-133.
- [2006] "A Tibetan Buddhist Text from the Twelfth Century Unknown to Later Tibetans." *Les Cahiers d'Extrême-Asie* 15 (2005), École française d'Extrême-Orient, pp.127-164.
- [2007] 「インド・チベット中観思想史の再構築にむけて」『哲学・思想論集』32 (筑波大学哲学・思想専攻) pp.73-114.

四津谷孝道

- [1999] *The Critique of Svatantra Reasoning by Candrakīrti and Tsong kha pa. Tibetan and Indo-Tibetan Studies* 8, Franz Steiner Verlag, Stuttgart.
- [2004] "Prāsaṅgika Interpretations of the Madhyamaka Theory of Freedom from Twin Extreme Positions." *Three Mountains and Seven Rivers, Prof. Musashi Tachikawa's Felicitations Volume*, Shoun Hino & Toshihiro Wada, eds., Delhi, pp.240-247.
- [2006] 『ツォンカパの中観思想——ことばによることばの否定——』大蔵出版.

あとがき

昭和36(1961)年ロックフェラー財団補助金が東洋文庫に交付され、東洋文庫は、インドからチベット人研究協力者サキヤ派ゴル寺活仏ソナムタルツェ・リンポチェとニンマ派修験僧ケツンサンポ師およびツァロン1族のツェリンドルマ夫人の3名を在インドのダライラマ法王庁の推薦を受けて招聘した。彼ら3名は同年6月に来日、その協力を得てチベットの言語・歴史・宗教の総合的研究が東洋文庫において開始された。これは、世界各国のチベット研究者の協力体制を確立して、チベット民族文化の保全とチベット研究を推進するための国際提携事業であり、わが国の他に、アメリカ合衆国・大英帝国・フランス・西ドイツ・オランダ・イタリア・デンマークの諸国がこれに参画している。この研究はチベット学に関する世界で最初の大規模な国際的協力事業であるばかりでなく、わが国のチベット研究史上画期的意義を持つものであった。すなわち、東洋文庫は、これに遡って、河口慧海師将来蔵外文献他、すでに永らく質量ともに世界有数のチベット文献を収集・所蔵しており、わが国におけるチベット研究の中心的地位を占めてきていたが、この国際提携企画の一翼を担うものとして選出されることによって、従来の文献解読研究に限ることなく、チベット人自身の体験・生きた知識の直接的情報提供と協力を受けて、さらに広く研究者にこれを提供する研究推進センターとしてスタートすることとなり、それが世界規模に認知されることとなったのである。

この度、研究成果報告として刊行するトゥカンの『一切宗義・善説水晶鏡』序章「インド思想と仏教」篇は、上記のソナムタルツェ・リンポチェとケツンサンポ師のチベット人研究協力員が宗教研究班の多田等観指導研究員・金子良太研究員との協同の許に、手掛けた来日初めてのチベット語原典解読研究作業が基礎となっている。京都からは長尾雅人先生・稲葉正就先生・佐藤長先生も遠路をしばしば参加された。現在の東洋文庫チベット研究員である松濤誠達・川崎信定の両人も若年の記録補佐員として当時同席が許され、初めて耳にするネイティブ・チベットのチベット語の発音に緊張で身を固くしていた。

ロックフェラー財団補助金は当初より3年援助期間をもって終了したが、その後は東洋文庫に対する文部省補助金によって「チベット特別調査研究・チベットの歴史と文化の系統」(10年計画)として継続された。フランスから最新のチベット歴史研究の知識を身につけて昭和39(1964)年10月に帰国した山口瑞鳳歴史研究班主任研究員がこれに主導的に参画し、総合的研究の促進に尽力している。さらにこれと平行して昭和45/47年度には文部省科学研究費(海外学術調査)により「インド・シッキム・ブータン・ネパールにおけるチベット文献の調査と収集」として東洋文庫榎一雄研究部長を中心にチベット研究委員会のメンバーが海外チベット文献調査に派遣され、文献の収集およびマイクロフィルム撮影に従事している。文部省補助金による特別調査研究は、その後も「チベット人との協同によるチベットの歴史・言語・宗教・社会の総合的研究」として更新継続され、数年交替で選

ばれて来日する優れたチベット人研究者の協力のもとに、東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献の目録データベースの作成・チベットの伝統的仏教学の基本的文献のデータベース化・チベット文献の収集と整理・研究成果の刊行の形で、成果を蓄積・公表し、平成14年度まで文部科学省補助金によって継続されてきたのである。

既にソナムタルツェ師・多田等観先生・榎一雄先生・長尾雅人先生・稲葉正就先生・金子良太先生、それにツェリンドルマ研究協力員とともにチベット現代語研究を担当してきた言語研究班主任研究員であった北村甫前東洋文庫長は逝去されている。ここに衷心より御冥福をお祈り申し上げたい。

また、現在お元気で御活躍中のケツンサンポ師(在ネパール)・佐藤長先生・山口瑞鳳先生におかれては、末永い御健勝と御長寿を祈念し、今後益々の御活躍と盛んな研究活動をお祈り申し上げ、引き続き暖かい御教導をたまわるとお願い申し上げる次第である。

1961年以來、実に半世紀近くを経過したが、この間に世界規模でチベット文献の収集整備は格段の進歩を遂げ、まさに万卷の貴重書が情報機器の画面にたちどころに映るようになった。わが国においても、チベット人学僧との共同研究によって高度の専門知識を要する研究図書も数多出版されており、例えばツォンカパの『レクシェニンポ(善説心髓)』に限っても数種の訳読研究が刊行されている。各種の現地調査報告や現代チベット口語辞典にも活発な成果刊行がある。また、チベット文化に対する日本社会全般における認知度にも大きな変化があり、チベット文化学習の講習会やタンカ仏画のコレクション展示会、チベット僧による護摩修法やお授けも年々回数を重ねて日本の各地で開催されて、話題を呼んでいる。

今回、古びたノートを見返しながらか、そこに書き込まれたソナムタルツェ・リンポチェの繊細なチベット文字の直筆に眼を奪われてしばし時を忘れ、多田等観先生が読み合わせの度ごとに口にされる「タンゲエ・ナムイエだよ」と「レクシェニンポに書いてある」を当時耳にして夢の国に秘匿される宝石について聴くような思いのしたことを、まさに隔世の感を抱きながら、懐かしく思い起こした。今後のチベットの人たちの幸せを祈りながら擱筆のことばとしたい。

平成19年3月(川崎記)

平成19年3月23日 初版
平成20年9月19日 4版(増訂版)

非売品

西藏仏教宗義研究 (第八卷)

—トウカン『一切宗義』序章「インドの思想と仏教」—

編著者 川崎 信定
吉水 千鶴子

発行者 東京都文京区本駒込2丁目28番21号
財団法人 東洋文庫
横原 稔

印刷者 東京都新宿区新小川町4番24号
中央印刷株式会社
日岐 浩和

発行所 東京都文京区本駒込2丁目28番21号
財団法人 東洋文庫

本書は東洋文庫に対する平成20年度文部科学省助成金の一部により刊行されたものである。